新大和軍記

―青垣の攻防―

杜青甦

晃洋書房

筒井順慶といえば洞ケ峠の日和見で有名であるが、国道一号線枚方バイパスとして開かれる前の状況では、松林や竹藪それに櫨、くぬぎ等の雑木林の中に背丈をこえる薄がおい茂り、相当河内寄りに行き背伸びしても、起伏の中から山崎合戦地域を望む事は無理の様に思えた。したがって山崎、淀、長岡等の戦況を見ようとすれば、矢張り八幡の男山や鳩ケ峰まで出なければならない。
もし、筒井軍が史家の指摘通り万一、一歩も大和を出ていなければ日和見の煙は立たなかった事になるし、身びいきとしてもそういう意味では和州諸将軍伝の著者の表現が正しいと思えるが。

表紙絵　佐々木徽房画伯
装　幀　佐々木泰宏

新大和軍記
―青垣の攻防―

杜青甦

晃洋書房

新大和軍記
―青垣の攻防―
杜青甦
晃洋書房

定価 2000円

ISBN4-7710-0398-X C3093 ¥2000E

新大和軍記

—濠塁の攻防—

杜青魁

晃洋書房

杜　青甦　著

新大和軍記

青垣の攻防

新大和軍記　目次

青垣の攻防

目次

第一章　国衆和平……1
混沌／出会／契り／出郷／入城／貴人／交わり／戦慄／秋冷／敗北／帰郷／一国一揆／秋桜／凱旋／間者／時雨／涙情／布石

第二章　天文法華の乱……147
灰燼／悲嘆／偽神主／快然／新兵器／蟬時雨／比叡山／拳骨／旅枕

第三章　苦　節……235
黙阿弥殿／三好党／反撃／大仏燃ゆ！

第四章　石山合戦……261
信長の版図／並松合戦／捨石／模索／牢人二人／法敵／微笑と恩愛／錯踪／陣中法度／長篠の合戦／伝役

第五章　大和守護職……363
一国安堵／足乳根／信貴山城落城／転戦／罪なき者と愚者／指出／成敗／曲事／天目山／本能寺／逆賊／天王山／新支配者／伊賀再攻／越智氏改易／多忙憂情／小牧長久手の戦い／寿命

参考文献

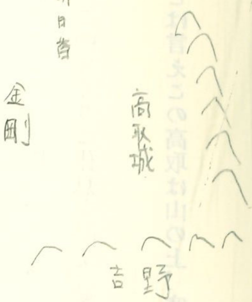
奈良県概略図

和州十五郡衆徒神人郷士

あとがき

表紙絵　佐々木徹房画伯・装幀　佐々木泰宏

第一章　国衆和平



混沌(とん)

(一)

息子、玄蕃頭(げんばのかみ)家教(いえのり)の貝吹城を出た越智弾正忠家令(いえとし)は、高取城へ戻ると石垣の下に拡がる弱い冬の薄陽さす大和盆地を狭間から見下ろしていた。

高取城は大和明日香の東南部の丘にあり、北に大和平野を望み、西は金剛、葛城の山波を浮かべ、東も欝蒼(うっそう)と繁る山々が連なり南は遙か悠揚迫らぬ吉野の山が重なって遠くまで続き山外に山あって山尽きず、ここ高取の標高五百八十三米の自然の要害の頂きに屹立(きつりつ)し四囲は獣達でさえも寄せ付けぬ崖の高台に城はそびえ立つ。時折吹き上げる小雪混じりの風が弾正忠家令の眼を潤ませていたがその日は添下郡の筒井城辺りが雲の切れ間から光が降り注ぎ一ヵ所そこだけが輝いて見える。

「よくもこれまで、幾多の戦いに耐えて来たものだ。」

多くの身内を犠牲にし、この己のみが武運強く生きてきた。あと、もう少し箸尾上野守を抑えさえすれば、筒井も手控えるに違いない。そうすればこの大和一国はわしのものとなろう。盟友の古市氏は既に南山城三郡の郡代。それだけであれは充分すぎる。布施安芸守、十市新次郎は眼目ではない。

「カァッ、チュッ!」と狭間の切目から顔をのぞかせ白髭の口元から、にがにがしげに痰を吐きすてた。あの筒井の糞坊主めが、いつもの仇、敵ながら天晴な奴、それにしても、あれ程の箸尾が小さくなったものだ、とつくづく振返っていた。目は大和盆地を眺めてはいたが、決して見てはいなかった。この年でいつまで戦わねばならぬのか、ほとほと我ながら呆れ、いつか心は戦さに倦んでいた。

「お館様、興福寺御門跡様からのお使者でございます。」

「おゝ、すぐまいる。」弾正忠家令はわれに返ってすぐに城内の客間に戻った。

「……過日からの大乗院様よりの由、日が決まり、……。」

「ハヽ」

「件の通り」使者は書状を両手で戴くと家令に鄭重に下げ渡した。

「委細はご承知致しまする、しかし他にご口上は」

「御口上は別に」翌新年早々に大和の豪族達を和睦さる為の令状であった。

「お役目ご苦労様に存じ上げ奉ります。どうぞ、ごゆっくりご休息を。」と勧めたが、

「いや、この年の瀬、そうもゆかぬ。」

「左様ではございましょうが、この冬は暖かいとは言えこの高取は山の上、寒うございます。まずは

一献、差し上げまする。」

「左様か、では甘えて。」と使者は客となった。

やがて、客は体を暖め、醒めぬ内にと、陽のある中に見送りを受けて馬に跨がり従者に轡を取らせて帰っていった。

永正二年の年が明けてまだ屠蘇(とそ)気分(きぶん)が漂う注連(しめ)の内、例年に比べると、随分暖かな日が続いている。明日は七草だというのに明け方幾分、寒気はあったが陽が昇りはじめ、連なる東の山の端(は)から遠目には一間ばかりに上った丸い赤味を帯びた陽の光が道を行く馬上の若武者とその轡をとる中年の若党の二人を薄紅色に柔らかく包んでいた。

時折武者の太刀がゆれて旭にキラリと耀く。

この辺りは、その頃添上(そふのかみ)郡(ごおり)と言い山辺郡との郡境で大和盆地のやや東に位置する所である。

今主従二人は古(いにしえ)の上つ道に近い石上の村の辺りを左手に見ながら西に向かって急ぎ足であった。

春は人々の心を浮き立たせるものなのだが、この二人はただ黙々と道を進む。余程の事があったのか幾分肩を落とすような若武者の姿が重苦しさを物語っていた。

やがて小さな集落の入口に向かって街道を左手に折れた。樟や、かやの高木が数本一際こんもりと繁げって影をおとす辺りがこの村の真中なのだ。

四、五間の灌漑を兼ねた濠割が此の村を一周りしていたし、環濠集落と呼ばれ小豪族を中心に小さな砦を容っていた。村の入口には太い丸太組の木戸が下り濠には石積みの上にある土蔵や土塀の黒い

屋根瓦や白壁の姿を小波（さざなみ）の上に美しく映し出している。

木戸の前の濠には上向きにやや丸く弧を描いた道幅と同じくらいの木梯が、かけられていた。

蹄の音が止まった時、若武者が声をかける間もなく白毛頭の老爺が木戸の横の番小屋の戸を開けて出てきた。

老爺は二人を見て番小屋の中に声をかけた。

今度は三十過ぎの男が顔を出し、チラッと見て会釈すると直ぐに村の道を奥深く駆けていった。

老爺は木戸をあけて二人を村へ通した。

「御早い御越しに御座居ますな、若！」

と老爺は親しげに若武者に挨拶した。

「おゝ！」と言いながら、ちと急ぎの用向きがあってのゥと大人びた言い方で答え、相好をくずしながら村の中へ消えていった。村の道幅は荷駄類がやっと、すれちがえるだけの広さであり、両側とも土塀や垣根で仕切られ馬上からでも家々の様子は見えない。

道は、所々曲がっていて乱に備えてあるようだ。一丁程もして二叉（ふたまた）になった所を右へ直角に消え入るように曲がると立派な門構えの屋敷があった。若武者は門前で馬から下りると若党に馬を預けて邸内に入った。先に走って行った木戸の男が既に若武者の来意を邸の主に伝えて出てくるのに、その館に続く石畳の上で出会った。

「お通りなされませ」と云いながら頭を下げて立ち止まった。若武者は軽く会釈して正面玄関に向かった。

（二）

玄関の式台には既に女中が二人両手をつかえて控えていた。一人が若武者に両手をさしのべ、お腰のものをといって大刀を預かった。

早朝とはいえ邸内では人々が働いている。若武者は玄関の間を経て深々とした廊下を奥に向かう。折から静寂を破って明烏が一声、カァーと鳴いて西の空高く、流れる様に飛去った。

廊下の右手は大小の部屋が五、六つほど続いている。

広い前栽は手入れが行き届き、所々石を配置した五、六十坪程の池が屋敷の内堀の役目を果たしていた。

一段高くなった敷居の障子の中はこの屋敷の最上の客が通される部屋である。

若武者の前を行く上女中の於松が障子の前に坐って部屋の中へ、

「お越しになられました」と声をかけながら引手に手をかけて作法通りに障子をあけた。

「おお！」と云いながら、顔を見るのももどかしく、

「えらい早いが、余程のことが出来（しゅったい）したな！」部屋の主は若武者にそう言った。

室には円座の敷物がしかれ両手を重ねなければ暖のとれない小さな四、五寸角の手あぶりに火が入り客を待っていた。若者は主の勧める座に足早に進み、

「はあ！」短く答え実は、と事の次第を語りはじめた。

「昨夜遅く、早や寝よう。」とする頃になって筒井家普代の臣、島左門友広様が来宅され若者の父の松蔵左馬助の病状見舞に言寄せて、筒井順盛殿から寄騎として加われとのご要請であった。直ぐに色良い返事をとの事であったが、

「父松蔵左馬助は風邪をこじらせたあと、この半年余り病床にあり腰痛に悩まされ、左程急に仰せ出されても、せめて一両日でもお待ち願い度。」と返事を引き延ばし、

「今、かく小父様のところに参りました。」

父松蔵左馬助は、

「当国中の豪族達が相争いこのまま戦いのつづくかぎり筒井か越智、或は十市、箸尾などの主だった方に組従わねば、独自に自らを守る事など、もう出来ず、永年の経緯や人柄を含め考え併せて見れば、筒井氏に加担するべきだと申します。」

松蔵左馬助の室と島左門友広とは遠い姻族の間柄であった。

とは言え筒井氏に左祖するとは合戦にでると云うことなのだ。並の決断ではない。

松蔵の家でも予てから京の剣の流れを汲む師を招いては身内や郎党のものらに日頃から自衛の為の剣術の鍛錬をさせてきているがしかし、急に今日明日にも戦場に出ることを承知ですぐに返事をと云われても決断しかね筒井に加わるとすればどう云う方法でしかも自分たちの身分や郎党の扱いの事、筒井館への入城の時期などを含めてどうすればよいのか今朝は一番に布留郷から急いで相談に行けと

云う父の意向に従ってやって来たのだった。

松蔵左馬助、弥兵次の父子ら一族は東山中の布留郷の館を根城とし、横田に砦を営み今日まで暮してきた。相談を受けるこの屋敷の主人、森九郎兵衛好武は既に数えてもう四十の歳を過ぎ、髪には白いものが幾筋も混じる初老の身であった。四十を過ぎると随分と体力も衰え、手足や腰肩などにも障害がおきていた。

元気者の弟松蔵左馬助でさえ病気になる。況んや振返って我が身も戦さに加わる、となれば好武も同様に戦さのことに頭を痛めた。松蔵左馬助は森九郎兵衛好武にとってはかけがえのない、最も信頼できる親族だった。

一方、弥兵次はここにくる道すがら馬上で小父貴の腹は既に決まっていて後はどう云う風にするかだけを打合わせる積もりであったのだが意外に事は、はずれた。

と云うのも弥兵次は勿論好武の所にも、おそらく筒井家からの勧めがきているものと、思っていたからだ。その事が判った時、

「筒井の腹が読めぬな！」と森九郎兵衛は云い弥兵次も奇妙に思えてならなかった。

「ハテ？」と云って双方に暫くは言葉もなく静寂が続いた。

「戦」か、ふと溜息が九郎兵衛の口から洩れた。ただでさえ、静かな田舎の朝、如何にもその溜息は大きく聞こえた。

時代の潮が大風と共に押し寄せ、部屋の中に息苦しい嵐の前の静けさがあった。床の間に置かれた

神代杉の台の上には堆朱の香合がおかれ青白磁の香炉からは微かに一条の煙がほのかな香を立ち上がらせている。南宋時代の三尺程の軸には唐人が一杖のつえをもって渓流の小橋の中央にたたずんでいるのを、ぼんやりと九郎兵衛は見るともなく見詰めていた。ほんの一瞬の間であった。

十畳程の板間のこの部屋は上段の間となっており敷物が設（しつら）えてあった。九郎兵衛は脇息に左腕を載せ、

「ウーム」とうなってばかりで、どうすべきか直ぐにはうまく浮かばない。

静寂を破って玄関にざわめきが起こり足早やに廊下を誰かが走って来る。一瞬にして九郎兵衛はキリッとなった。床の間に懸けた太刀に目が飛ぶ。夜中は素より早朝にも野武士の襲ったのを聞いたのは一度ならずだ。悲鳴などが聞こえぬし異常ではあるがしかし、野武士の襲撃などではないと思い返して落ち着き直し九郎兵衛は障子の開くのを待った。

〈身内の誰かの危篤の報せなのだろうか〉

出会

女中の於松が障子を開けるや、

「只今木戸の権助殿が参り、今しがた島左門さまが御一人お遣いで先に、おみえになり間もなく筒井順盛様も御出遊ばすとのことでございます。」

「何ど！」順盛様御自ら御出遊ばすとか九郎兵衛は驚いた。

唐突の訪問容易の事ではない。あり得べからざることであった。越智家令が疎ましく思っていた筒井順盛はこの小さな村に人集めにやってきていた。

愈々順盛様御自ら乗り込んで来る、となると多分有無を云わさず強引に随わせる積もりなのだ。

そうは思ったものの順盛様とは思い切ったことをなさるお方と順盛の腹の一部を覗き見た様でもあり一寸小気味よき事とさえ思えた。時々通りがかりに湯茶の所望に民家へ立ち寄った事などは耳にした事はあるが、順盛が直接乗り込む事など今までに聞いた事がない。此の身一人の為に態々自らここまで出向いて来るとは、わしも男冥利に尽きる。一種の期待と不安とが同時に胸を占めた。

「おお、こうしてはおれぬ。早や出迎えの用意を！」

我に返った九郎兵衛は弥兵次を別の部屋へ下がらせ於松には一同の者へは粗相のないようお出迎え申し上げる様にと命じた。再び玄関先にざわめきがあり女たちが順盛らを出迎えている様子なのだ。

「来た！」九郎兵衛は立って廊下を素早く玄関へ走り出た。

見ると既に石畳の真中に順盛は法態に身を包み威風堂々と気侭につっ立って後には島左門一人を従えているだけだった。

「ようこそお越し賜りまする。さあどうぞ此方へお通り召されませ。」と順盛主従を九郎兵衛は先程迄自分らが坐っていた部屋へ招じいれた。於松が順盛主従を迎える用意を既に終っている。

順盛は正面上座に座し島左門は九郎兵衛の斜め上に座す。

「身はかく高きものではない。ここが好い。」と九郎兵衛の勧めも聞かずに坐った。
「突然のこと、無礼は詫申す。」どっかと坐ると順盛は坊主頭巾のまま軽く頭を下げた。

この大和も応仁の乱以来続いてきた事ではあったが、此頃の順盛は勢力争いの真っ只中に位置して苦しんでいた。箸尾・古市・越智氏などの諸豪族に挟撃され時には聯合して共同の敵に当たり別れては相戦い時にはその都度和合、離反、和睦を繰返していた。山野に野伏が横行し、世は乱れ百鬼夜行の状態である。さて筒井一族らはいっこうにらちの空かぬ時を過ごしていたが大和西山の向こうの河内方面へも少しは勢力を伸ばしてはいるものの常に古市、越智の邪魔するところとなって暇なき戦の最中であり、油断ならぬことばかりだった。

大和の地で古市・越智の両氏は筒井順盛から見て一番五月蠅く越智氏は単独でも、筒井氏より勢力は幾分大きかった。数日前つまりこの永正二年正月四日春日の社頭に於いて宿敵の越智弾正忠らと和睦し一時的に仮の平和が戻ったばかりだったのだ。しばらくの落着きに外ならない。

越智との和が成れば当分の間は人集めにも時がもてる。

四囲には、代表的な大和諸豪の越智弾正忠家令の外に箸尾上野守為国、布施安芸守行国、十市新次郎遠治、吐田修理進遠光、万歳右京進則定、楢原三郎栄遠、岡弥次郎改行、高田当次郎清房等の豪族達十四、五の有力者が犇めいていた。その他の諸豪族とは京師を背景として相変らず抗争が続いていたのである。箸尾上野守の勢力圏と筒井氏の南端とは境界を接し、その箸尾上野守の勢力圏と越智正弾忠とは境界を接している。筒井家は添上、添下南部の一部に平群、生駒、山城の相楽などの小豪族を寄騎や旗下に加えてはいたが、それ以外の小豪族も筒井家に属さずともいずれかの棟梁的立場の者に既に大方は従っていた。筒井の宿敵、越智弾正忠家令は越智の館の本城を拠点に高取、貝吹、玉手山、(御所)の各城に佐田、曽羽の二つの支城の外、壺坂寺をも陣所として大和南部に絶大な勢力を保ち、箸尾上野守は盆地の西南広瀬の箸尾に、十市氏は十市郡を中心に、そして、古市氏は古市城や山城の木津、加茂を抑えて、春日山誓多林の奥に大平尾城を持ち、それぞれ勢力の基盤があった。さて、筒井順盛は近隣の煮えきらぬもの達のある者は潰し或は強制的に傘下に入れていったがしかし、それらの全部が例え配下に入ったとしても筒井家に忠誠心が強いわけではない。常に信頼出来ない者許りであった。そんな中で目をかけ大事にしてやっても、忠誠を装いながら裏切る者が随分といたので片時も油断はならなかった。小心者に限って常に機会を狙っていた。僅かの隙でも見せようものなら、たちまち襲いかかってくる事態を抱えこんでいる。

また身内は云うに及ばず寄騎や旗下を幾ら集めても戦乱の常、旗下は減る一方であった。

筒井順盛も他の豪族同様周囲の動に過敏に対処しなければならなかった。

またぞろ繰返しで今日は宇陀へ走り明日は河内に逃げる。戻って越智、古市の両面の敵を駆逐し一段落しない中に、再び敵は勢力をもりかえして、挟撃に出てくる。一戦、一戦が想像もつかない死闘の連続なのだ。

かつての平和で穏かな頃には春日神社の薪能の催に列することもあったが、今は昔の物語であった。

因に、「注進ノ長川流鏑馬日記」に『春日若宮祭礼に預る大和武士』云々の如く盛んに流鏑馬の行

事も行われた時代もあった。しかし、今は戦国乱世、火中の栗を拾うが如き争乱のただ中、京師での争いは畿内の最も近い地域にある摂津、近江、河内、丹波、大和を否応なくまき込み、一早くその各各与する所に従って豪族達は参戦した。大和国中『国民、衆徒神人』と称し『……文字どおり阿修羅の如き』いくさであった。と史誌に言う。

さて、順盛のみならず国中の衆徒神人らは、おのれの歳を振返って数える余裕さえない慌ただしさであったが、筒井順盛、正しくは明舜房法印順盛と称し、大和興福寺衆徒の身分を後楯にして勢力を張り、父順秀の第二子として長禄元年（西暦一四五七年）五月五日筒井城に生ずという。因にいくつかの資料でみると、没年は各大永四年（西暦一五二四年）四月二日であっているものの、それが六十八歳（和州諸将軍伝、断家譜）とするものと七十三歳（大和郡山市史）のものとがある。

筒井順盛は明応八年（西暦一四九九年）正月に始まった戦いでその年の師走十九日、細川の臣赤沢宗益入道沢蔵軒の大和侵入を迎え討たんとして、逆に攻めこまれ河内に逃れた。

ようやく、去年即ち永正元年の既に桜の頃となってから京での両畠山の和議が成立しやっと筒井城にかえってきた。自らの力で勢力を盛り返したのではなかった。

さて、もとへかえって明舜房法印順盛は、

「今日の訪れは、余の儀ではなく、すでに先刻承知の事かも知れぬ。昨夜左門に遣いをさせ松蔵左馬助弥五郎殿の胆の中が今朝あたり、ここで謀っている頃であろうと思うて。」と云うのである。順盛

は好武や弥兵次の事を見抜いていた。

「お決まりもうしたかのう」

「ハヽッ！」とは、言ったものの、見透かされて好武はかえす言葉もない。

真黒に日焼けした法衣の順盛はしげしげと見詰めて返事を待つ。侵しがたい権威の様な雰囲気としわがれた渋味のある穏やかな話し方は、爽やかで邪気や毒々しさなどは微塵もなかった。

人というものは、案外出会いの時の好き、嫌いの直感的な印象が致命的になったりするものだ。有能な人物同志でも、会えば妙に所謂ソリが合わぬというのであろうか。そういう事もある。

このお方のもとへ、〈そうだ、このお方のそばでなにもかも、お委せ致そう〉好武は、そう腹を決めた。決めると心が広がってゆくようであった。やや落着いてきた好武は、顔に微笑みさえもどってきた。やおら威儀をただし静かに口を開いた。

「委細は仰せのとおり真に有難きお言葉、不肖この森好武ご承知仕りました、以後は御身内にお加え下さりますれば幸甚に存じ上げ奉りまする。」とそこ迄言うと、感動が込み上げて来て後は言葉が出なかった。

「おお！　ご承知とな、ねんのう早き返事を、有難し。」と順盛は破顔して安心した様子である。

卵形の顔に幾筋かの太いしわをきざませ少しばかり腹が丸くつき出ていて笑うと童顔になったが、これが幾多の戦場を往来してきた海千、山千の勇者、順盛の姿なのか。僧形とはいえ大和国中誰知らぬ者なき強者の貫禄は好武らとは、矢張り比較にならぬ程大物であった。おのが保身の為に処世の常

として日頃盆暮の貢物を近隣の諸豪族へ遣いの者に伺候に行かせるので直に順盛などに相見(あいまみ)える機会などは殆どない。

　数代前の先祖の時代から伺候に行くのは慣わしであったが好武も弥五郎の住む所も共に南都興福寺領の中であり広大な領域を支配する南都興福寺の領民らは、直接的には興福寺の寺務である大乗院、一乗院などの出先機関の衆徒の順盛などに抑えられていた。今更好武も弥五郎も筒井氏に楯付く理由など何もない。

　順盛にすれば手近かにまだ探せば少し位は人集めができると考えていた。そんな事の一つに森や松蔵を選んだにすぎない。さらに森、松蔵の両方とも〈ぜいたくなことは云えはしまい〉今が潮時であると考えていたところだった。

「弥兵次をここへ」ややあって好武は次の間に控える於松に弥兵次を呼ぶ様に言った。

「松蔵弥兵次とな」

「いつもながら左門はするどいのう」順盛は小声で左門へささやいた。順盛は次の間からすぐに入ってきて控える弥兵次の方へ眼をやった。好武は自分の息子達も呼びあわせてこれが嫡男好為、同じく次男の好頼にございます。と順盛に引き合わし今後の事を呉れ呉れも宜しくお願い申し上げたいと頼むのであった。

「皆若くたくましそうじゃのう」順盛は頼もしげに眼をほそめた。

弥兵次はいま二十歳で、また長男好為は本年十九で、好頼は十六に相なり、おいおい戦場にて存分

にお鍛え願わしく、と平伏した。

「小父上、申し上げても、よろしゅうございましょうか。」と弥兵次は好武に小声でうしろから何やらささやいた。

「ウム」

「乍恐(おそれながら)」

　頼もしげに眼をほそめて見詰める順盛に、弥兵次はキリッとなって両の手をつかえ、口を開いた。

「おゝなんど？　遠慮は要らぬ」と順盛は促した。

「されば、ご免仕ります。父左馬助弥五郎は、先刻御承知のとおり伏しており御挨拶が、かないませぬが、これからは森一族とともに末長く宜しくお引廻し願い奉りまする。」と短いが、堂々とした挨拶をした。

「おお、弥兵次！　思い違わず、りりしいのう、今朝は早うからご苦労なこと。」さぞや色々心配を致したであろう、といたわり労った。

「明朝はきっと弥兵次が森へ参るはず、十中八、九間違いなし。」島左門が昨夜遅く帰ってきて言った。そこで順盛は今朝、疾駆してきたのであった。

「父者人の具合はどうじゃ」順盛は穏やかな声で弥兵次に尋ねた。今は早や主従の会話であった。

　漢(おとこ)が漢に惚れるというのはこういうお方なのかも知れぬ。好武は一人、主従の会話を聞き乍らそう思った。

士は己を知るものの為に死す、ほのぼのとした想いが走馬灯の如く、頭の中を過ぎていった。
多言は不要であった。
「於松、早や時分刻じゃ。」好武は用意の酒肴を促した。
「ハイッ、只今!」涼やかな一声が即座にかえってきた。
奥向の用を司る上女中は様々の役割を果たしていた。主人の身の回りの世話をはじめ、主人に変わって時には日頃の来客の応接、家事の下女への手配、来信の代筆など多岐にわたっている。
殊にこの屋敷の好武は妻に先だたれ、寡夫暮し。三十を過ぎた於松のような上女中は、あるじの意向を一早く見抜いて決して、手抜かりなどはない。
襖戸一枚隔て、於松は控えていた。

契り

待つまでもなく高く捧げられた主膳が順盛の前に厳かに運ばれた。
於松は静かに膳を置いて一拝して下がる。
続いて於竹、於梅の二人が入れ替わりに島左門や好武、弥兵次、好為、好頼等へも膳を捧げて来て付けられた。
三合も入ろうか三宝には白土の瓶子が土器（からわけ）の杯とともに乗せられていた。

いざって進み好武はその土器の一杯を白木の折敷（おしき）に乗せて順盛に差し出した。
好武の下手に於松が来て白土の瓶子を好武の手に渡し好武はその瓶子で順盛の杯に酒を注いだ。
次に於竹が来て順盛の乾（ほ）した杯を折敷で受取り好武はそれを押し戴いて左門から主従固めの酒を注いでもらうとすぐに乾した。
好武の杯は左門へ手渡され好武が酒を注いだ。
左門が乾せば次には弥兵次に杯は巡り、更に弥兵次から好為、好頼等へ渡りその杯は再び順盛へ戻り三度繰返して滞り無く主従固めの盃の儀は終った。
「お芽出度仕儀でござる」島左門はにこやかに祝して云った。順盛も微笑み上機嫌に和し、好武以下全員も唱和して寿いだ。
名実共に主従打ち解けて俄かに座は明るくなった。
やがて一揃えの膳に瓶子と塗の杯を乗せて於梅が運んできた。
膳に箸が付けられ土器の杯に代わって朱塗りの杯が配られた。
勧められるままに順盛は杯を一つ取り上げ、
「さあ、芽出度き杯じゃ、主従水入らずの酒を皆して呑もうぞ、酒じゃ、酒じゃ。」
次々に杯は巡り、大酒盛りが始まったが、さて、主従は時の経つのも忘れて打ち解け語り合い、およそ二刻半程にも及びふと、見れば坊主頭巾をほうりなげ、日焼けしたピカピカの禿頭を真っ赤に染めて順盛は赤黒坊主になっている。

肴といえば蕗の塔の和えもの、里芋、干かれい、鰻、もろこ等の川魚、雲雀の焼き物、干鱈の煮付け、鶏の実の造り、雉子の汁、するめ烏賊、からすみ、川蝦と豆の煮物、鯉味噌の小鉢等であり素朴ながらその頃の食物である。

酒に飽きれば肴を摘まみ肴に飽きれば酒を汲む。

話題は尽きぬ。

みな豪傑だ。総じて三斗の樽を空けなお辞さず、際限がなかった。

味噌粥が出される頃には、薄寒く弱い早春の陽は既に斜めに傾いていた。

「思いの外の刻を過ごしてしもうた。左門、これにて戻ると致そうか、大層世話になり申したな。喰いも喰いたり、礼を申さねば……」順盛は云いながら立ちかけた。

左門も鄭重に礼を述べながら座りなおして、

「就いては筒井のお館への入城は急なれど五日の中にお願い申す」

「委細は承知仕りました」と平伏して好武は謹んで承った。

「本来ならば一両日の中とも存ずるが、せめて五日くらいはとお願い申し上げましてな、実は外ならぬ越智や古市がいつも策謀を致すので、あゝ、それから大乗院様へは此方から、水呑み以外は総て引き払いの事をお届け申し上げておこうと存ずる。」

大和の三分の二は一乗院が支配していたが、ここの辺りは殆どが大乗院領であった。

「ハハッ、有り難き仕合わせ、さすれば御命令通り十日には両家相揃いまして必ず刻限までにご入城

仕りまする。」

「邪魔を致した」と礼を述べ、左門と共に立ち上がった順盛はキリリッと顔を引き締め、本来の戦国棟梁の武将に戻っていた。一瞬にして緊張が辺りを払う。

順盛には次々にしなければならない事が山積みになっていたし、もう頭の中は戦のあれこれで一杯であった。

名残を惜しみ好武等は村の出口まで見送った。

島左門の外には馬の轡取りさえも居らず、順盛と左門の二騎はゆっくり馬を打たせて手を振りながら去っていった。

只今から戦場にあるのと同じであった。好武の心の中には恐怖と共に戦慄があり、えらいこっちゃな、と云うのが正直な実感であった。

二人の息子と弥兵次の行末、この村の者達等の事、想像を超える戦場の光景が目に浮かぶ様だ。

幾分かの酔いがあったとは云え、頭は冷え冷えとしてきた。

「こんな時、妻の冴がいてくれれば……」

好武の妻は次男の好頼を産んだ直後肥立ちが悪く、若くして逝ってしまった。

それにしても才気換発にして、誰彼の区別無く愛想が良くて総てに行き届き甲斐甲斐しくよく働きすぎた。後妻を奨める者が居たが貰ってそれに子供が出来たりすれば、母の無い幼子が何かの事で辛い思いをさせたりしては却って余計憐れみもますし、気苦労な事。いずれにしても冴が良すぎた事も

あって取り辞めたが堅く朴突な好武とは好対照であったし、釣合いも良かったが今にして居てくれればと所詮どうにもならない事と知りながら順盛らをボンヤリと見送っていた。

これからの準備は、

「ハテ、如何にすれば。」とまだ好武は見送りつつ考えている。

しっかりしているとはいえ於松は矢張り妻ではない。

筒井入城に際して目にみえぬ様々な事が待ち構えているはずであった。

古い事柄が冴の想い出と共に次々と好武の頭に浮かんでは消え消えては浮かんだ。

もう十何年にもなるか、冴がなくなってから心の支えを失い悲しみも深く、またほかにも村同志の争いや飢饉続きで人々の心がすさんで堪えられなくなった時に悩んだ揚げ句に京の禅僧、拓玄老師の教えを乞うた。

「本来人は争う為に生れて来たのではない。相和合するのが人。釈迦や達磨が求めたのは、人を救う事であり、弥陀の願いは人の生老病死に対する恐怖の心を除く抜苦与楽だ。そればかりでもないが、まあその道を説かれたのだ。人の魂本来の霊性を礼拝せよ、さすれば、そこにはえも言われぬ極楽世界がある。死んだ者はかえらぬ。嘆き悲しんでもそなたの妻が帰っては来ぬ。」と仰せられ更に、

「例へ悲しみをまぎらわすとて仏門に入り坐禅と読経三昧を繰返しても無ともうす一言さえ、なかなか悟れるものではない。偉そうに申しても腹が減れば抑える事さえ難しく、三界（欲界、色界、無色界）に生ずる身の何んとおろかしきことよ。慾は慾で好い、人恋しきは人の常、先に逝く者は道標（みちしるべ）

在家に居て静に端坐し実相に迫るもよし、生か死か二つの中の一つを真直に行け。」そう申されながらうまそうに茶をすすられた。

「そうだ人は必ず死ぬ。おそかれ早かれ必ず死は向こうからやってくる。御老師様程のお方にでも死はくる。それ程の悟りはなくとも精一杯やってみる事だ。ままよ！　やるだけやろう。」僅かに残った酔いも手伝ってそう割り切ると心は軽くなった。

ふと気付くと順盛や左門等の姿はとうになく、法隆寺の辺りの山裾のみが薄寒くゆうげの煙を漂わせ、周りの丘陵にはくっきりと青垣が浮かんでいた。

出郷

（一）

「小父上！　これより二、三の事をお詫りいたし、直ぐにも布留へ帰りとう存じまするが。」

「おゝ、そうじゃ、はや家に戻ろうぞ！」

好武は我にかえった。松蔵弥兵次は気が気ではない。若いので気がたっていた。一刻も早くたち帰り準備にかかりたかった。御気楽な御人よ！　弥兵次は心の中でいらいらしながらそうおもった。呑気な所はまた別の味があるにはあるがこんな時ぐらい少しは考えればよいものを。

好武は急ぎ足で振り向きもせず家にかえった。

我が家の門を潜る頃には見違える程うってかわって目の奥には鋭い瞳の輝きが光っている。
一瞬にして緊張がこうも人をかえるものなのか？　驚いたのは松蔵弥兵次だけではない。好武の子等もその形相に尊厳と畏れを抱くほどであった。
日頃はなににつけても小言を言う小五月蠅父親であったが今迄にこれ程張り詰めた父親を好為や好頼等は見たことがない。緊張がみなぎる。三人の若者等は言い表し様のない感動を好武から受けた。信頼と尊厳、指導者らしい貫禄が好武からにじみでた。子を見るに親にしかずとか、しかし、子等もまた親の本姿を瞬間に見抜き肌で感じた。
大和盆地の東西の山々に源を発する、大小の河川が西の大和川に注ぎ、あたかも合流されて行く様に時代のながれに流されながら森、松蔵もついに筒井一族に包含されたのである。
好武は四十という年齢をこえるまでに、それなりに様々な経験もあり、それらの事は今では一つの自信とはなっていたが、とは言え、合戦の経験がない。
だが、武勇ばかりが武士でもない。軍略や輜重の事なら直ぐには覚つかずとも日が経てばおいおい馴れることもあろう。
常日頃馬も乗りまわし戦さにこそ出たことはないものの、一族のものと共に自衛の訓練は早くからたしなみ一通りは松蔵同様してきている。
人並以上に好武は京の剣の師匠さえ舌を巻く程の腕前に到達していた。
勿論、それは幾分か師匠のお追従として棒引きしてもである。何といっても元を質せばその昔、先

祖は清和の帝に源を発する源氏の末裔。
古から勇名を馳せた武門の家柄、血の一滴に価値のあるなしではない。己を支えるまさに誇り以外の何ものでもなかった。
義持より数えて十四代、治にいて乱を忘れず一旦緩急あれば、例え日頃は鋤鍬を握るとも武士の心は片時も忘れるような事はない。
好武は仏壇に香を炊き蠟燭を燈して静かに冥目合掌して先祖の霊にこれからの武運を祈り今まさに戦に出る心構えを誓った。
数多い祖先の霊には武勇に優れる御方もあろう。我に御力を授け給え、とばかり真剣に祈った。
この地は森伊豆守源頼定の由縁の地、嘘か真かは知らぬ。ただそう言い伝えてきた。森伊豆守、若槻の太郎に由来する。伊豆七条、若槻の地名も残る。
好武は静かに仏前で祈りながら我が祖先が住んで以来この方培かってきたこの地を離れるつらさをしみじみと思った。しかし、武勇の血と聞けば潮騒の如く好武の心は昂ぶった。故事来歴など今はどうでもよい。
「王侯将相寧んぞ種あらんや。」好武の覚悟次第であった。
仏前を下がった好武を待ちかねていた松蔵弥兵次は出発に際し隊列の組方、荷駄の扱い武具の備え、女子供の纏め方など細部にわたって指示を仰いだ。
一つ、一つを丹念に松蔵弥兵次は聞きおえた。

「正月十日朝、横田塁にて卯の上刻に遭う事と致そう。」

好武は弥兵次に言った。暫くの間は横田塁や布留にも二、三の者を残し、ことに父左馬助が恢復するまでは布留へは人をおいて行かねばならぬ、と言う事情があった。恢復次第布留を退いて筒井へ入城させよ。

異説はあるが、因に地誌にいう。松蔵は天孫降臨二十五部族横田物部氏の裔と。布留郷から出て、横田氏を襲う。この頃にはまだ、横田と布留の二つを拠点としていた。

弥兵次は聞き終ると直ぐ様布留郷を目指して帰っていった。大鐘を打って好武は家の子郎党をあつめ、

「外は寒い皆、家（うち）に入って上へ。」上がるようにと言った。

縁側を除く内側の襖障子の類は全てとり除かれ大広間が出来上がっている。

りんとした好武の声が響き、咳（しわぶき）一つ聞こえず、邸内は静まりかえっている。

「すでに知っている者たちもあろうが今、改めて云おう。今朝（けさ）より松蔵が来たり或いは筒井順盛殿等が見えたり慌ただしい一日であったが、本日よりは筒井衆の一人として松蔵氏一族と共に筒井家とは主従の間柄に成った。ここ数日の内に、この村を引き払って全員筒井城へ入る事。」

「…………」

「今日まで皆ようやってきてくれた一度（ひとたび）の礼を云わねばならぬがしかし、これからはもっと別の厳しさがあるに違いない。各々それぞれ老幼の者達を抱え大変ではあろうがもうわしの力ではどうにも

ならない時が来た。父祖の地を離れねばならぬ。事ある毎に申し聞かせてきた通りどの様なことになろうとも一族一心一糸乱れず生死を共にと誓った身内その事はこれからも変りはない。」

ここでしばし言葉をきり、

「さり乍ら大和国中のみならず天下は未曽有（みぞう）の長きに渉（わた）る戦さの明暮（あけくれ）治（おさま）る兆（きざし）はさらさら見えず、平安を此処で祈ってみても逃れることは出来はせぬ。」

「…………」

「何の手段（てだて）もない以上、箸尾か越智古市等の諸衆か或いは今日の筒井氏に従うか……」

「…………」

「この地から最も近く、しかも信頼の出来る御方（おんかた）は筒井順盛殿以外にはない。」

「…………」

「京師の動き一つでどこまでどうかわるやら計りしれたものではない。皆のものと相談もせず勝手に筒井殿に決めたのはそう云う事からだ。」

「…………」

「筒井順盛殿は筒井家歴代の中でも殊（こと）に情の厚い御方と噂に聞く。我らの自衛（まもり）も最早限度にきておる。今日は幸い向こうからの所望じゃ。縁は嫁のやりとりと同じ、時機をはずせば行かずの後家、しもうたと思わぬ様にせねば。」

「行かずの後家とは面白い」と一人の男が云ったので皆がわらった。緊張の中の一瞬の潤（うるおい）であった。

好武も少し真顔をくずして鎮まるのをまった。

「後から我らも加えてもらいたいなどと云えば値は下がる」

好武の話にも少しゆとりが出てきた。がしかし、

「笑いごとでは済まぬことがここにはある。男衆は皆戦いに出ねばならぬ。」と真顔に戻って云った。

戦いと云えばこんな事があった。

こそ泥は時々あったが大がかりな、野盗の襲来がこの村を二度ばかり襲った。

ほんの数年前の事になるが秋の採り入れの終る直前で、村人が野に出た留守を狙って押し寄せ殺りく、こそなかったがあちこちの藁葺屋に火を掛けてまわった。立ち昇る煙に気付いて皆が慌てて村へ戻った。勿論、年寄や子供たちは、ただおろおろして泣きわめくばかり。戻った時には既に火もおさまり賊は逃げて一人もいなかった。

穀物類は掠め取られたものの幸い怪我人もなく損害は比較的少なくて済んだが、好武は直ぐに村人を集めて武装し三橋の辺りまで追った。

何かの都合で丁度南都興福寺からの帰り道なのか筒井の臣、喜多重左衛門忠兼ら凡そ五十余人の一行が三橋でこれら野盗の一群と交戦して大半を撃って僅か二、三の賊を残すのみとなった所へ好武等十四、五名の一団が追いついたのであった。お陰で貴重な牛三頭や荷車に積んだ穀物も無事だった。後日筒井家へ酒二樽と肴、それに銀子や米などを添えて儀右衛門らが好武に代わって挨拶に伺候した。

二度目の時は矢張り二年ばかり前であったが、野盗の襲来に懲りて好武は村の周りの濠を深く掘り下

げ土塀には忍返しを取付けて村の二カ所の出入り口を一つにし別に算盤橋を用いて非常時には濠を渡れる様に施し出入口にも前より頑丈な柵をとりつけて備えた。そこへ夜中に東の濠に長梯子をかけて土塀を乗り越え野盗が侵入した。正月を前にして雪の夜に紛れての襲来であった。賊の一人が張り巡らした鳴子に足をひっかけ、好武の邸内はガランガランと時ならぬ音に呼び醒まされた。

(二)

「スワ!」手に手に得物をもって好武らは明かりをつけて広間に集まった。

備えありと野盗の群れは覚って慌てふためき土塀の内にある濠割に墜る者、竹矢来に足を奪われるもの逆茂木(さかもぎ)に胸をさして息たえる者好武らの放った矢に射抜かれて倒れる者等野盗側はさんざんであった。

勿論、敵もじっとしていた分けではなかった。明かりのある所をねらって火矢を撃ち動く物があれば槍を投げる賊がいて好武等も決して気楽に闘っていたのではなかった。好武等側の二、三の者も傷をうけた。

この時は応戦が意外に早く甲具の着付も直ぐにおえて怖気(おじけ)づいた敵を激しく攻めて退散させるのみならず松明(たいまつ)を燈(とも)して一団となって野盗の後を好武等は追った。追いつつ大声で蹴散らし鐘太鼓を打って近隣の村々を通過した。各村々からも手に手に弓矢や槍をもって追撃に加わった。帯解寺の辺り迄きた頃には野盗は或は撃たれ或は降参して一件落着した。

「備えあれば憂いなし」とは真に的をえた言葉であった。

野盗の中には主君を失った浪人者や土一揆(どいつき・つちいっき)の指導者など腕に覚えのある剛の者もいたので決してなめたことは出来なかった。飢饉(ききん)の煽りで地(じ)の百姓を続ける事ができなくなって止むを得ず土一揆に堕ちた見るからに若く大人しそうな百姓らしいものが幾人もおりまた、命を落とした者の中にはまだあどけない顔が混じっていて、好武はこの混乱の世を激しく怨みまた悲しく思って胸が痛んだ。彼等群盗は少ない時には五、六名多い時には十数名を越えていた。

此の度のことは日頃の備えが物を云った。とはいえ好武等は戦場を幾度となく往来してきた専門的軍事集団ではない。

今や筒井家の一員としてこれからは専門的軍人となってゆかねばならぬ。今迄とはおよそかけ離れた戦場でのこと或は日常茶飯事の事として人殺しをしなければ生きて行けない生活だ。戦いと云えば潔(いさぎよ)くは聞こえる。

またそういう人々との交わりがどんなものなのか好武には皆目見当がつかず不安であった。

「明日はどうなる」少々腕に自信があった所でどうにもならぬ。

地獄への道程(みちのり)であった。

「ここに残りたい者は此処に居てもよいぞ」好武は言葉をつづけた。

「此の度の事は並の事とは訳が違う皆よう考えて自分で決めてくれ」

「只、かならず九日中にここを片付け十日の朝には横田塁で松蔵と会い筒井の館へ入らねばならぬ。」

好武は言葉をすすめた。

代々ここに棲みついてまさかこの地を離れることになろうとは夢想だにしなかったことであった。

それにしてもさて、離れるとなるとあまりにも名残おしく祖先が慈しみ築いてきたこの村この屋敷時代の流れとは云え情けなくわびしい事であった。

「もう長々とは申すまいぞ戦乱の時に生れた者の宿命としか云ようのない憐なことではあるがよう見極めて行くみちを決めるように。」と云った。云いながら自分ではどうにもならず止むを得ず引き込まれていく運命の中で自分自身を無理に納得させようとしていた。あたり前のこととは云え迷いがないとは決して云えなかった。

腕を組みながら好武はじっと目を閉じて感慨深気に脳裏をめまぐるしく駆けめぐる様々な複雑な想いを丹念に整理しようと思いつつしかし、頭の中は堂々巡りをしているに過ぎなかった。

この頃の同族的集団は真に強く結束していた。

切っても切れない運命共同体だ。

長幼の序が守られ親兄弟の契り身内の相互扶助或は農作業とその収穫からうける日常の経済的基盤の安定を基準として協同自衛組織の確立の上に成り立っていた。喜怒哀楽を共にして事ある毎に全員で全てに対処してきた。

祭の事、冠婚葬祭出産、取分け火事は最小限度に止める工夫を凝らしていた。野盗以上に火事は恐ろしいできごとであり、代々繰返し受けた被害の大きさを夙に云い伝えてきた。こと細かに様々な取

り極めとおきてがあった。この村から誰もそれを破るもの等は出なかった。纏まっていなければ近隣の村々の者達でさえ隙につけ込もうとする、ずるさがあって決して油断は出来なかった。立場に応じて互いの尊厳が認められ神仏を心から礼拝し天道に感謝を捧げ満月に小女の成長を合掌して悦んだ。

さて、急に突発した大事件を前に一同の者達は好武の説明やこれまでの経緯を聴き乍ら、粛として声もない。

やがて前に席を占めていた歳嵩の儀右衛門が口を開いた。

「わしはどこまでも九郎兵衛様について行く、それしかわしに道はない。」

「応々ー」と一同は異口同音に応じた。

始めから否！　をとなえる者等はいるわけがないことは好武が一番よく知っている。

「与兵衛、それに新助の二人は当分ここに残れ。」

「…………」

静かに目を開けた好武は与兵衛、新助の二人にそう言った。与兵衛には痛風で寝ている老母がいたし、新助には死期に近い老衰の父親があった。二人とも、とても動かせるような老人ではない。

「暫くの間、田を作っておれ。戦いが済めばここへ戻ってもこよう。」

「…………」

与兵衛、新助の二人は眼に一杯の涙をためて膝に置いた手の拳を更につよく握りしめ顔を真紅にして嗚咽をこらえていた。彼等もまた純朴でよく働く真面目な者達であった。皆に置き去りにされる切

なさは堪えられるものではない。今迄通り皆と一緒にいたいのはあたりまえなのだ。戦でも何でも皆と一緒なら死する事も怖くはない。そう思えてくるのであった。病気の親さえいなければ皆と一緒に行けるものをと彼等の心にそんなことばがよぎる。

「親が在って子があるのだ」流石好武は人の長であった。

「…………」

「人の道をはずしてはならぬ」たしなめた。もとより親不孝ものの二人ではない。

「…………」それだけに余計あわれであった。

「来るなと云うておるのではない、最期の看取まで頼むぞ、わしらのぶんまでな。」

「…………」

「与兵衛、真夜中に暗い夜道をただ一人熱が高いとて安堵村の医者の所へお前を背にして母者がつれていったり、虫が出たとて毘沙門様へお百度を踏んだり、お前はいつまでも並の子より手のかかる子であった。その母者の最後ではないか仇やおろそかにしては罰があたるぞ。」と与兵衛等を叱りながら諭した。

別れのための決断をきっぱりと好武はつけておかねばならない。

与兵衛、新助の二人は泣きじゃくっていた。

「どあんだらめ、この村の男で泣き味噌など誰もおらんぞ、男のくせに泣くな！」と好武は二人を声だかに叱った。

二人は泣きながらウンウンと頭を下げてうなづいた。涙でしわくちゃのずず黒い顔が憐である。
「さあ外の者らは明日からの段取りを今からせなあかん。儀右衛門、五郎太、甲助、仁助、源三、治兵衛、皆握りめしやらつまみもってこっちへ来てくれ。」好武は歳嵩の者から順に名を呼んで自分の傍へ集めた。他の者等は明朝まで用がないので、それぞれ自分の家へ帰っていった。
その夜は遅くまで屋敷には明かりが燈っていた。
翌日の払暁から好武の屋敷は上を下への大騒ぎである。命じられるままに、これはここ、あれはあそこへ、揃える物はこれこれと、人々が邸内をあちこち動きまわっている。筒井の城へ入るからには他の武将達から笑われたくはない。そういう思いが好武にはある。とは言えにわかの事とて充分な事は望むべくもない。
「おゝ、そうじゃ皆に今日からは武士(もののふ)らしい名前がいるな。」好武は片付けの手をやすめて回りの者へ笑い乍ら云った。主だったものから呼びよせては一人ずつ新しい苗字と名前をつけ始めた。
「儀右衛門はウームウン。坂口重兵衛源の敬久(たかひさ)いや、筒井氏にならって藤原姓といたそう。ウンそうじゃ坂口重兵衛藤原の敬久。」偉い強そうな名じゃ、と微笑みつつ好武は言った。
「さか、さかぐち、坂口重兵衛、このわしの名が?」
「ウン、儀右衛門はではない、さかぐち、坂口重兵衛じゃ。」
「坂口重兵衛殿! これからも頼みますぞ。」と好武はにやにやしながら新坂口重兵衛藤原の敬久へ言い聞かせた。

てれくさそうに坂口重兵衛藤原の敬久と口でぶつぶつ言いながら新坂口重兵衛は持ち場へ去っていった。
「次は甲助! エーと家がちょっと西になるな、にし、にしか、にしもと、西本伊右衛門藤原の智久、ウーンよい名じゃな、いかにも侍大将のようじゃ明日からは髭でも生すかフッフッフフ……ホッホホ……」好武は面映ゆくて吹き出した。
さっきまでいわばただの甲助であったのが急に西本伊右衛門藤原智久なのだから。小可笑しくてたまらない。
今迄の一族間では苗字を呼ぶ必要はなかったのだ。
甲助はたまに用事で短い太刀を差して他所へつかいにでることがあったが、日頃は野辺(のえ)へ鍬を担いで野良仕事に出るのが常である。
「次は仁助!」
「お前のうちはここから巽の方になるな、巽蔵人藤原の仁久とこれからは呼ぼう。」ときめた。
「源三!」と源三を呼び源三には小石元三郎藤原の和久とつけた。
武運の長久を祈らずにはおれず、好武はすべての者達に久の一字をつけた。
「皆に申しておくぞ。家紋は分銅に丸をつけてつかうのだ。」因に筒井氏は分銅が旗印であり梅鉢が家紋であった。他に丸三引の裏紋を使っている。
「源三! オット……小石元三郎藤原の和久殿であったな、アッハッハハこれはご無礼を。名づけ親

が間違えては相済まぬ、どもならんな。」と云ったので、その場にいた者等はドッと笑ったが沈みがちな皆の気分をほぐすのに役だった。

(三)

「早速だが小石元三郎、これにみな必要な物は書いてある。この書状を持ってこれよりすぐに筒井城へ島左門殿を尋ねた上、衣装や馬十頭並びに陣笠提灯旗指物などを併せて受け取りに行ってきてはくれぬか。」

好武は四、五名の者を連れて行くように元三郎に言いつけた。

「於松！　元三郎に握り飯をこしらえてやってくれ。」

「納屋から、わしの馬を引出して乗って行け。」

「九郎兵衛さま、わしは馬には乗れませぬ。」

「嘘をつけ、わしは知っとる。」日頃時折、元三郎は馬をかってに出しては乗りまわしていたのを知らぬ好武ではなかった。

「御存じでございましたか」元三郎は顔を赤らめて驚いた。そこにいる者たちが〈それ見ろ〉と云わぬばかりにニヤニヤした。何が役立つか世の中判ったものではない。平時にいつも人の馬などを面白半分で黙って乗りまわし単に好きぐらいの程度だったろうが戦時にはかえってその横着さが物を云う。取分け馬の心得があるかどうかは重要な意味をもっている。

「これ笑うでないぞ、これから時には皆も馬に乗らねばならぬかも知れぬのだ。」好武は皆をたしなめた。

好武は片方で元三郎を頼もしくおもっていた。だから重要な衣装などの品物を受け取りに好武は元三郎を遣いに出すのである。

「於梅！　小石元三郎の衣服を出して侍らしくしてやってくれ。」小石元三郎は命令通り身仕度をして筒井へ向かった。

元三郎は日頃から槍や太刀の扱いをさせても群を抜いて巧みであった。

好武が父親から受けついだ御家芸の得意とする槍遣いを直ぐに会得して好武でさえもたじろぐ腕前になっていた。まだ二十歳ばかりの若者であるが、こういう事になった以上一日でも早く彼等を武士社会に馴染ませる必要を好武は感じていた。

元三郎は時には、はみ出しもあったが何事も訓練であった。

好武は次に坂口重兵衛敬久へ十日の出発に際して隊列の組方などの指示を出し、準備を急がせた。

小人数とは言え手抜かりがあってはならぬ。整然としたすがたで筒井へは入城したい。

騎馬、槍組、大張りの弓組、大長巻、薙刀、手槍組、と少ないながら即戦体制での隊列である。

騎馬の士は森九郎兵衛好武を筆頭にその子嘉一郎好為、同甚十郎好頼、坂口重兵衛敬久、西本伊右衛門智久、巽蔵人仁久、小石元三郎和久などである。

西本伊右衛門と巽蔵人とへは輜重の荷駄類の指揮と女子供等の世話や護衛を命じ、また於松に書か

せて隣村へ届書の遣いに人を出したり、好武のしなければならぬことは山ほどに多かった。
「人が足りぬ」好武は一人つぶやいた。忙しい中に色々とあれこれを尋ねに来る者などがいて並大抵でない。
　土蔵の中の蓄えた武器類、例えば大薙刀、長槍、手槍、弓矢、甲具、太刀、大掛矢などの道具をはじめとして代々伝えてきた軸物や儀式に用いる衣裳、什器の類、其の他日常の品々の整理など数えきれない数々の事柄が、入り混っていた。素早く片付けねばならぬ。
「西本伊右衛門を」と呼んで、好武は、まだ出発には日数があるのに、蔵の中から大小の差料などをすべて、大広間に出させた。
　西本伊右衛門はまだ早いのでは、とけげんに思ったが中でも一番に、大小の差料をと、好武は言うのであった。大小の差料をと言っても鈍まで含めると五十や六十組ではきかぬ。
　大広間に出た大刀を好武は一つ、ひとつ吟味してなにやら紙捻に字を書いては一人首肯いている。
　傍で於松が紙捻を受けとると大小の刀の鍔にその紙捻を結びつけた。
　西本伊右衛門には備前の大業物を、坂口重兵衛へはこの関を、巽蔵人仁久と小石元三郎和久には、相州をと選んでいった。配下の者の差料が決まると次は自分達の分であった。仏間の側の鍵の掛かる簞笥のひきだしから五、六組の大小を、出すと一口ずつ抜いては鞘に収め、収めては、抜きして吟味を繰返し、好武親子等は地の大和物で揃えることにした。
「好頼、これを手入れしてはくれぬか。」と一口を好頼に手渡した。地鋼は北国鍛えは大和と言えば

保昌が有名であるが、同じ地域に宇陀一族がいて鎌倉時代には盛んであったと言う。その一人に貞宗がいた。称して宇陀の貞宗と言う。地模様に添って磨きあげると柾目模様が素直に浮き上がり滑らかなその輝きは人切り包丁として真に使い勝手のよい、業物であった。他に貞宗といえば三人ほど知られているが、因みに日本刀の祖は名を天国と称して大宝年間（西暦七〇一～七〇四）に大和の宇陀郡に住したので伝統があった。
　さて、元にかえって、
「好為、於竹にな、夜去に皆が湯を使えるようにしておくように。」と好武は言った。
　屋敷の中は相変わらず女子供に到るまで大勢の者達が、右往左往し、整理におわれていた。
　西本伊右衛門は好武から出される指図に素直に従って一生懸命働いていた。
　村人と好武との調整や近隣の村々との交渉など、女房役には最適の人物であった。
　働く者達の中で、日頃余りみかけぬ者らが混じっている。その彼がこの村を去るらしいと聞いて近隣の村々から手伝いにきている者等だ。
　余程好かれていたに違いなくこんな時には、日頃の行いがものを言った。
　情けは人の為ならずである。

（四）

　彼がものを言うと、いさかいの最中でも事が丸くおさまった。好武は何かあると直ぐ西本伊右衛門

を当てにして解決を依頼することにしていたし、彼には人を説得する不思議な人徳があり時にはズケズケ好武にも平気でものをいったが、それが少しも嫌味ではなく、大抵は伊右衛門の言う事の方がいつも理にかなっていた。

　そんな事がいつの間にか近隣の人々にも知られるようになっていた。名残を惜しみながら伊右衛門に頼まれるままに彼らは手伝っている。此処で別れれば二度と会えぬかも知れぬ、そんな思いが手伝う人々にはあった。

　好武はそれらを見ながら人の徳という物の大切さをしみじみと味わっていた。

　誠意と温情、真心とでも言うのであろうか。それとも人を扱う技術なのだろうか。或はその人の持って生まれた知恵なのか好武には理解出来なかった。

　そうこうする中に八つ起きの昼もすぎ、やがて陽も傾いてきた。

「於竹！　於竹はどこじゃ。」と好武は於竹を探して呼んだ。

　仏壇の整理を好武は於竹に命じた。

「於竹、この三幅の軸は筒井殿へのご挨拶に持って行く品物じゃ。」

「これはこの家で一番大切なお品と於松様からお聞き致しておるものでは御座居ませぬか」

　於竹はこんな大切なお品をと言わぬばかりの顔をした。

「おゝ、その通りじゃ。」好武はあたり前という風にこたえて、

「われらにすればこれ程と思うても相手はもっと御立派なお宝を山とお持ちのはずじゃ」

「我等にすればこれが精一杯であることを見て頂かねばのう」

　一幅は彩色の恵心僧都の来迎図であり、阿弥陀如来図である。もう一幅は毘沙門天像図でいずれもかなり古い物とされていたし、三幅とも名宝であった。

　恵心僧都の来迎図は彼の母が逝ってその回向(えこう)の為に七日毎に一幅ずつ七幅の軸を描いたのだという。のちに好武が筒井入城のみぎりに流石、森氏と順盛も賞めた。

「好為！　はや陽も暮れた手のあいた者から湯をつかへ。」と好武は言い、何か考えている風だった。

　伊右衛門を慕って来ていた者達は、すでに奨められるままに湯をつかい身体を洗って夕餉(ゆうげ)についていた。遠い村からの者もいて早く切り揚げさせねばと伊右衛門が取計らい、礼をのべては酒をついでやっていた。

　そろそろ寒気が戻り、じっとしてはいられない。

　こんな時に酒が最も身体を暖めてくれる。

　やがて村のもの達も手を洗い次々と広間に集まり出した頃には、よその村の者たちは明日も亦、来ると言いながら食事の礼を述べて帰っていった。

　火桶の回りに三々五々と人々が肩を寄せあっては、ぼそぼそと小声でささやいていた。

「小石元三郎和久只今、お遣いより戻りましてござりまする。」

「念のう早かったのう、して首尾のほどは如何に。」

　好武は聞いた。

「お申しつけ通りに島様御家中の松本主膳様より全て頂いて参りました。」
「ご苦労な事であった。したが元三郎お主(ぬし)その顔の擦りきずは、いかがいたした？」
「落馬したか？」
「辱しながら……」
「ちょっと、歩いてみい。」
案の定びっこをひいている。衣服の所々に土塵芥がついて灯に映えていた。
そばにいて見ている者等が、また叱られてはと妙な顔をしていたが、元三郎も、てれかくしにニタリとした。
大した傷ではなかった。
「馬くらいなどと侮るなよ」元三郎を見て言った。
それはともかく元三郎は一応大役を立派に果たして帰ってきた。今迄この様な外交的な交渉に元三郎が当ったこと等一度もなかった。この度のことで彼は大人の仲間入りをし、しかも可成りの自信がついた。
「於梅、小石元三郎和久殿のお世話をして、さしあげてくれ。」好武は皮肉たっぷりに於梅にいいつけた。元三郎と於梅は、そう悪い雰囲気ではなさそうな事くらい好武は知っていた。
元三郎はなにかと話題の多い男であった。顔が引き締まると元三郎も苦み走る、惚れ惚れするほどの男であったし、於梅は於松や於竹よりずっーと若い娘で、於梅は於梅で、おぼろ月の様な丸い顔立

ちに白桃のような柔らかい頬にほんのりと薄紅色が漂い、微笑むと愛くるしく、大きな笑窪(えくぼ)ができた。
さて、好武は三人の上女中等に手伝いをさせながら主だった者から順番に、今借りてきたばかりの筒井家の衣装を身につけさせ大小を、はかせて居住まいを正させた。厳粛な雰囲気が醸(かも)し出され髪を結(ゆい)なおし威儀を正すと日頃の百姓達が皆そうそうたる侍姿になった。貧弱な軀付の者もいたが口を閉じ肩をいからせ、どっかりと座らせると如何にも戦場を往来(ゆきき)してきたどれも皆ひとかどの武士達の様になり頼もしく見えてくる。
馬子にも衣裳とは良く言ったものだ。
ほどなく一同の者らが落ち着くのを待って好武は、
「これより筒井家随身の前祝の事と他にも一つやらねばならぬ」
一同の者らはいつになく両手をつかえ好武が次になにを言うのか続く言葉をまつ。
「一日中働きたおして皆疲れてもいようが今宵より我等は筒井家の侍ぞ、心して聞いてくれよ、皆の命はこの好武が預かった。もうないものと、あきらめてくれ。筒井家に敵するものが、それと知ってすぐにも攻めてくるやも知れぬ。がしかし、今宵は出陣の前祝、心置きなく飲み食いする事に致そう、後に悔いを残さぬよう思い切り飲もうぞ、折角これだけ集まったのを機にちと好いことを一つ思いついた。」
少し間を置いて好武はニヤリとした。
「小石元三郎和久！」と元三郎和久を好武は呼んだ。

何が始まるのか一座の者が振返って元三郎の方を見た。
「これより小石元三郎和久と於梅との嫁取りの儀を行う。一同の者も祝ってやっては、くれぬか。」
「応！」
俄にヤンヤの拍手をおくるもの、冷かすものなど一座は華やいだ。
小石元三郎和久はと見ると緊張とも嬉しいともつかずぽかんとしている。元三郎は何がなんだか判らなくなった。
「これ小石元三郎和久！　何をポカンと致しておる、お主のことぞ、於梅が嫌か？」
そう言われても予告もなにもなしで余りに突然の事で吃驚（びっくり）するのも無理からぬ事である。
咄嗟の元三郎は我にかえって顔を赤らめ、またすぐ青くなった。
「九郎兵衛様わしが嫁取りでございますか？」
「そうじゃ、於梅をお前とめあわすのじゃ気に入らぬのか。」
「於梅殿をわしが、わしの嫁にあの、有難う存じます。」
「さぁ二つの祝いじゃ西本伊右衛門、お主が小石元三郎和久の父親がわりじゃ、於梅！　於梅ここへ。」
二人を並べ、於松に酌をさせて好武が高砂の一節を謡った。
「四海波静かに……」
謡いながら明日をも知れぬ、この者達の行方がどうなるものかと心の片隅に過（よぎ）るものがあった。

謡曲が終ると再び拍手と喝采が座を賑わせた。
好武は一座の者に盃を与え出陣の乾杯をなし、嫁取りの乾杯を行った。
「さあ！　おおいに飲もうぞ、皆無礼講ぞ！」
「飲めぬ者らは餅でも肴でも手当たり次第勝手次第じゃ遠慮をするまいぞ」
好武の声が終るとそれぞれが盃をとり皆扱いなれぬ大小を部屋の床に置いて酒宴となった。

(五)

緊張の中に好武が元三郎と於梅の嫁取りの事で皆の気をまぎらわしたことは、その場にあった緊張を解し、和みを持たせた。暫くは小石元三郎と於梅の話題で持ちきりであったが、一頻（ひとしきり）過ぎると、やがて人々は本来の筒井家への入城の事に話が変わっていった。自然に気のあう歳の近い者同志が、あちこちの火桶の側に一固まりになって話込む。
好武の前には年輩の者らがいつの間にか寄ってきて先ほどの賑わいは、どこへやら好武の声が普通に話しているのに部屋の隅々まで聞こえるほどの静けさになっている。
ふと好武はそれに気付いて、これではならじと一人ずつ呼びつけては酒をついでやり自分でも大いに呑んだ。
嘉一郎好為や甚十郎好頼ら我が息子二人にも瓶子を持たせて次々についで、まわらせた。彼等が行くと暫くはその周りがにぎやかになった。

「岡田清兵衛！」一番隅の一固まりの中の一人を好武は呼んだ。
「ハッ」岡田清兵衛は呼ばれて好武の側へやってきた。
「お主、顔が青いが、なぜ酒を呑まぬ。」
「エッ、いや十分に頂きおりまする。」
「おゝ侍言葉がなかなか、うまいではないか。」
「ハッ、有難きお言葉。」
　岡田清兵衛正久は青いどころか頸筋まで真赤になって、すでに相当呑んでいた。
　彼が若い者の中では一番酒が強いと言う村中での評判であった。好武は座興にからかったのだ。
　次にまた吉田金助を呼んだ。少し細身の小さな男であった。病み上がりでいかにもひよわそうで座っているのでさえ気の毒に見えた。三十過ぎなのに眼に力がなく、やせた皮膚がたるんで顔に老人のような、こじわが幾筋か走っていた。日焼けではない顔のどす黒さに病の後の影がのこり、出す声さえも小さくひ弱く聞こえた。
「吉田金助！」好武はこの小男に何が出来ようかと心配していた。
「ハハ！」精一杯の返事であった。
「お主、暫く静養してから来てはどうか！」
「ハイ！」
「酒はどうじゃ、呑めるかな。」

「ハイ。本日は二つも、おめでたき事がかさなりましたれば少しばかり頂戴いたしまする。」
「おゝそうか、それではさあ一つ！」
「呑んだら家に帰れ遠慮は要らぬ誰もとやかくもうすまい。病み上がりは、つらかろう、さあさあ。」
「ハイッ」吉田金助は素直に頭を下げて皆に別れを告げて帰っていった。
　貰ったばかりの大小の差料がいかにも重たそうに見えた。
　然し、その吉田金助克久でさえも武家言葉を一生懸命使い仕草にも、それらしくしようとしていた。
　好武が忙しい最中に皆に無理をして出させた大小の差料と、更に筒井家の衣裳を付けさせた事は威厳と意識を自然の中に皆が武士として、身に付けようと努力する効果は狙ったように十分であった。
「さぁ、もっともっと呑め！」好武は大声で叫びながら自ら立ちあがり瓶子を持ってついでまわった。
　昼間の疲れがきて既に眼をこすっている者も酒をつがれると坐りなおして呑んだ。
　これが最後の宴かも知れぬ。つぎまわりながら思う。微笑ながら口では、はしゃぎつつも心の底には一層不安と動揺が充満していた。心の中を誰も気付いてはくれなかったが然し、おくびにも、そんな事を口に出してはならない。
「小石元三郎！　婿殿はどこじゃ！」好武は元三郎を呼んで木椀の大きいのに酒をついだ。
「目出たいのう、婿殿！　ここだけの内緒の話やがな、昼間おらん間に、わしは於梅に聞いてみたら、於梅はお前の事、嫌いとは言わなんだ。エゝとこあるぜ、婿殿。」回りで聞いていた者等が、またひ

やかした。

「於松、於竹、於梅こっちへこい祝酒を呑もう、さあさあ、女ごが呑んだらあかんちゅう事もない今日は特別じゃわしが、つごう。」と飯盛用の木椀に波々と酒をつぎ、順に手渡す。

「こんなには呑めませぬ」於松が三人の女を代表して好武に言った。

「余れば花婿殿が、いよる。」そんな事を言いながら好武はもう相当の酒をのんでいた。

それでもなお、やめようとはせず与兵衛、新助と言いつつ酒をついでまわった。

「足元はヨロヨロと……酔にふしたる枕の夢の……」謡いながら好武はヨロついて、あっちへふらり、こっちへよろりと動きまわった。

一廻りすると、またしても花婿殿といっては元三郎を呼び、呼んでは酒をついだ。

「もうよい頃じゃ花婿殿は於梅さんに、かえさねば。」と言って元三郎を於梅の方へ押しやる振りをした。

「早よ、はよ。」と無理やり周囲も新居へうながした。新居といっても別に新しい所ではない。

母一人子一人の元三郎の家へ二人は、はにかみながら帰って行った。

「さぁ勝ちどきじゃ」

好武は残った者に盃を持たせ、またしても勝ちどきを、あげさせた。

「オヽ！」真夜中の村の静寂を破って時ならぬ勝ちどきが木霊(こだま)した。

しばらくたつと一人、二人と挨拶にきて、ぼちぼち帰り出し、邸内は静かになりはじめた。

好武は、まだぐずぐず言いながら残りの者らと呑んだ。

もうぶっつぶれて寝込む者がいる。

於松、於竹の二人が皆が食いちらかし呑み残した片付けに掛かると好武は明日にせよと制止して他の下女等と共に休むように言った。

そんな事を言うか言わぬ間に好武は大いびきで寝てしまった。酔いつぶれた者等に於松、於竹の二人が夜具をかけてまわった。火の気がなくなり人の活気がなくなると早春の夜は冷々として寒さが余計に増した。

於松、於竹の二人は宴の後始末をして最後には好武を抱くようにして小部屋に続く七丈の間の敷物の上に好武を運び静かに寝かしつけた。最後に於松が夜具をかけかけると寝ていたはずの好武の手がスーとのびた。寝かしつけたあと於竹は直ぐに立って火の気を見に出てしまって、生憎その場にはいなかった。あっと声が出るのを於松は、やっとこらえた。

好武の手は、しっかりと於松の手首をつかんでいる。

酔っているとはいえ男の力は於松には、どうにもならない。手を引こうにも微動だにせぬ。

更に強く引かれると於松の軀は前のめりに崩れた。

於松の白い手首からは彼女の全身からくる震えが小刻みに脈打っている。

息が大きく、しかも激しくはずんで隣の部屋にいる者にまで胸の轟が聞こえそうであった。咽喉(のど)がカラカラに渇き今にも息が詰まりそうになった。

好武は泥酔していて、ほのかな女の香りに忘れていた何かを無意識の記憶の中に想い出し、思わず知らず、きき腕が伸びたのだ。
於松の腰が伸びきるほど好武は引きよせた。
酔うと人は大胆になる。
於松もまた少し酔いがあったが、呑みつけぬ僅かの酒が頭の中の血を大きく掻き乱し何がどうなのか解らず、神経が麻痺し、ボーと、しびれてしまっていた。
細い身の於松の体は余りにも軽かった。心地よいしびれが抵抗する力を失わせた。
漸くして於松は次に何が起きるのかと、空恐ろしい様な出来事に身震いして
「おっ、お戯れを。」と途切れ、途切れに小声で於松は必死に訴えた。
好武にすれば抱いているのは於冴でしかなかった。
於松の声とほとんど同時に稲妻にも似た閃光と一瞬に落ちるあの雷の轟音の如き音を耳にし、同時に腰のあたりにズキンと衝撃を好武はうけた。嫌って於松がはずみで蹴ったのではなかった。人には判らぬ不思議な出来事であった。勿論雷など鳴ってもいなかった。
「おッー」と好武は我に返って醒めた。
日頃好武は性に対して潔癖であった。今の衝撃は亡妻からの警告か或は好武が性に対する日頃の彼の理性によるものか、何にしても情慾の心は失せ、於松を抱いた手の力が抜けた。
「済まぬ。於松つい酔うてしもうた、失態じゃ。許せ。」

見ると於松は、いえいえと言わぬばかりに首を縦に振り乍ら目尻(まなじり)から二つ、三つ涙がこぼれて灯かりに輝いているのが見えた。
好武は、その於松を余計いとおしく、思えたが、もう手が伸びたりはしなかった。
朝がきた。好武は起きると口を濯ぎ髪を結いなおして、新助、与兵衛それに吉田金助らを見舞に出掛けた。
「具合はどうじゃ」
「わざわざのお見舞有難うございます」
「起きる事はない。そのままで。」
「勿体無い事を、このままでは、罰が当たります。」
「いや無理をするな。勿体無い事などはない。罰などが当たりはせぬ。」
「有難うございます」与兵衛の母は勿体無い事とまた言いながら涙ながらにつぶやく様に細々とした声で礼を述べた。
昔は気の強い女であったのに、と好武は余計哀れに思えた。
帰り道二、三人の童らが走りながら好武を追い抜いて去った。いつの世も子供らは無邪気であった。

入城

(一)

慌ただしい中に数日は早や過ぎて永正二年（西暦一五〇五）正月十日の早朝を好武らは迎えていた。

各々の隊列を始め輜重（しちょう）や身重な女や子供の乗る牛牽きの車などが細い道一杯に所せましと並び幼子らは怖れおののき、何が起ころうとしているのか判らぬままに騒ぎの中に泣きわめいていた。

もの心ついた子等は緊張して顔を引きつらせ親の云い付けを聞いては手伝うのがありありとみえ、いじらしく人の目に映った。

「健気（けなげ）な事よ」好武は目頭が熱くなった。

「ご用意は全て整いまして御座居まする」

「おゝ、ご苦労。」好武は西本伊右衛門から出発準備完了の報告を聞いて生まれてこの方棲みついた此の家を後にしようとして村の出口に待つ隊列の先頭を行く馬の方へ向かって歩いた。

ざわつく様子をみながら狭い隊列の側をもうすぐ出口というところへ来たとき、けたたましい若い女の金切り声が聞こえた。

松蔵の郎党竹内小次郎が馬の首にもたれかかり数本の矢を受け打物傷からどす黒い血を吹き出させてドサッ、と落馬した。人垣を掻き分け好武は走り寄った。

「小次郎！　どうした、何があったのだ。」

「古市狛九郎の一隊が布留の館を襲いました……、すぐにご援軍を、ご援軍をお願い、も、申し……」

そこまでだった。それで小次郎は事切れた。

「小次郎！　小次郎！」

「小次郎！」再び小次郎は口を開かなかった。野盗ではなく奈良の古市播磨守澄胤の一族古市狛九郎が島左門が予測した様に松蔵一族の筒井に入ることを知って布留村を襲撃したのだ。

「おい、好為、重兵衛、元三郎、わしと一緒に来い、伊右衛門、好頼を助けて弓に絃を張り敵に備えろ、わしらが帰るまでここを守れ、巽蔵人、お主は直ぐに筒井へ走りこの事を使いせい、後は向こうで考えてくれる。」たかぶりを抑えながら好武は何が何でも救援が第一と焦った。

そうだ、横田塁の者も連れて行こう。幸いなことに鎧兜は着けている。大身の槍をひっ掴（つか）み、好為、重兵衛、元三郎を連れて馬に跨がると一鞭当てた。

ここから布留迄は一里余り、間に合ってくれればと心に祈り乍ら馬も人も汗びっしょりになりながら横田塁で人を募り東の小丘を越え駈けに駈けた。

まもなく布留村と思う所で見ると整然とこちらを指した一隊があった。好武は一瞬ぎょっとしたが見れば筒井の紋所。十名余りが一斉に馬を下りて待った。

まさかこんな所で何故にと思ったが間もなく筒井の一隊三百余りがやって来た。

「某（それがし）は添上郡（そふのかみごおり）柳生村の森九郎兵衛好武でござる。今日（こんにち）、筒井家へ同心の為ここの松蔵一統と筒井

のお館へ参る予定の所、松蔵の異変を知りここへ参った次第でござるが、失礼ながら貴方様はどなた様でござるのか。」好武は手短に素性を述べ相手に尋ねた。

「先刻承知。某は順盛様の部将、矢負三郎清房である。古市の動きに異状があり小人数で東山伝に移動中の旨知らせをうけ、昨夜よりの索敵でようやく見つけた時には既に未明より松蔵を襲う最中であった。」

「それで……如何相成りましたか。」

「おゝ、悉く敵は追ったが、松蔵の大半が討たれた。間にあわず誠に残念であった。邸内は焼かれ辺り構わず血が飛び散りそこ、ここに手や脚が転がり目を覆うばかりに悲惨であった。」

「エゝ、大半が……」好武は目の前が真っ暗になった。

古市狛九郎等百余りに討たれた者のうち既に息の無いものは葬って片付けたが一人、二人がこの隊の最後に戸板で担がれているぞと、矢負三郎は云ってくれた。

「では、御免。取り急ぎ後ろへ。」好武は挨拶もそこそこに馬を牽き動きだした一隊のうしろへ急いで廻った。

激戦に奮戦したのか松蔵弥兵次が血に染まり戸板に乗せられ担がれていた。

「弥兵次！　弥兵次！」声を掛けると幽かに薄目を開けた。

「ああ、小父貴、残念！」と目に一杯涙を浮かべた。

「しっかりしろ！」

「あゝ……」鎧したの衣は破れ手足に無数の傷を受けて血が吹き出たらしく草摺りは緒についた鎖まで切られ半ばから垂れ下がっていた。

「おい、しっかりしろ！」また呼び掛けたが気を失ってしまった。他に助かった者は老婆と女の乳飲み子だけであった。弟左馬之助の姿は無かった。

「おのれ、ど古市め！」好武は腸が煮えくりかえった。

好武は馬に乗り、子等を率いて隊の先頭へ出た。

矢負三郎が今我が旗下の騎馬隊二十騎が横田へ先発した、貴殿も急がれよと云ってくれた。

またしても不安が胸を過り思い切り馬腹を蹴って二十騎のあとを追い駈け下った。横田には筒井家の部将菅田備前等の一隊二百が守備を固めておりまた我が村にも同じく八木近江守の二百余りが旗やのぼりを風になびかせ帰りを待って居てくれ矢負三郎清房の三百の到着でこれと合流し、ようやくの事で夕刻筒井城へ入った。

(二)

「大変な事でござったな」到着した一行に島左門等は労いきいてくれたがこれからの多難がもう始まっていた。

城門を潜る頃には筒井家の重臣等が整列し鄭重に迎えいれてくれたが心は晴れず古市への恨みを募らせるばかりであった。深傷を受けた弥兵次はすぐに手当を受け静かに宿舎の間に休ませたが、森九

郎兵衛好武等は湯を使って衣服を改め子等や主だった者を従えて入城の挨拶に島左門に伴われて土産ものの太刀や巻絹、三巻の軸物等を三つの三宝に乗せ城中一番の大広間の筒井順盛等の前に出た。

「えらいこっちゃったな、心配していた事が起きよった。」順盛は開口一番そう云った。

「ハハッ」平伏して好武等は殷勤に返事したが、言いようが無かった。

「左門が心配して申しておったが、動きが掴めず悪いことをした。」

「ハハッ、いや、しかしながらお陰様で某共は無事でございました。有難い事で御座いまする。」左門がちらっと好武の方を見た。松蔵が奇襲を受けた事で歓迎の宴は取りやめになったが、前にでると順盛は数日前の森氏の屋敷に来た時とは全く別人のように大きく一段高い間から見下し、好武等には仰ぎ見る程に大きく映った。

正面の板襖を背に筒井順盛がドッカと座り左一段下には筒井の同族、筒井与左衛門、同大炊（おおい）道秀、同内蔵助、同善印房、同大順、同大膳元順、同五郎、同宗伯、同甚左衛門等、右一段下座には島左門友広、同友久、辻上野（こうずけ）、八木近江守近俊、赤松義実、柏木甲斐、北岡三郎、奥田右門等がずらりと並び好武の後には大方三百七、八十程か物頭や組頭等が静かに控えていた。落ち着いて見るとそんな中に筒井の臣とは少し座を変え、親族の脇に異形の人がいた。

別に目をこらさずとも異形の人は和服ながら自分等と容貌や背丈は変わらないものの頭髪が変わっていた。明らかに支那の人であり始めは奇異に思ったものの云い知れぬ何かがその人から漂ってくる。そうこうするうちに順盛が喋べり出した。

「それにしてもよう、来てくれた。一同の者、これより後は森、松蔵の者等は我が一統と相成った。よく見知っておくように、よいな。」森、松蔵の者等は武器は扱えても実戦は知らぬ。しかし、知らぬとて侮ってはならぬ。こなたらと同様懸けがえのない者達じゃ。また、新参者とて遠慮には及ばぬ。旧来の者と何等変わりはせぬ。皆良いものばかりじゃ。と云いつつ、

「我等は畠山尚順様に合力し一日でも早く皇国（みくに）を鎮め、帝を安んじ奉る事、それがこの大和を守る事になる。外に正しい方法はない。しかし、畠山尚順様のお力だけではそれが出来ぬ。そのため尚順様に合力しながら、せめてこの大和一国だけでも節操の無い者達に侵されてはならぬ。守が抜ければ敵はそこを突くそうすれば永年の戦いでひえいしている民百姓の塗炭の苦しみは更に増す。一日も早く救ってやらねばならぬ。どんな事があっても大和の国を守り、我が手で我が身を守るしかない世の中なのだ。一統の者ら心して決して忘れるでないぞ。必ず守ってくれ、他国者に侵されまいぞ。後生である頼み置くぞ。」

酒が出て顔つなぎが行なわれた。時が過ぎ宿舎へ下がる廊下で島左門が呼び止めた。

「森殿、申しておかねばならぬ事が。」と脇へ招いた。

「なんど不都合な事でも……」

「いや、外でもないが、お館様がお話しの時には間に言葉を挟んではなりませぬ。」先程順盛が喋っている時にちらりと左門がこちらを見たのはその事だったのだ。

「承知致しました。知らぬ事とてご無礼を。」

わびながらその日は下がった。

自分らの片付けも済まぬ中から物頭の下で今日は小荷駄類の受渡の扱い、明日は兵糧渡し、明後日はかがり火の焼き方、薪木の揃え方、狼煙の火のつけ方、夜番の交替、夜廻りの事、合言葉や陣触れ、物見の仕方。更には出陣前夜の準備の事、攻め太鼓、引き鉦の打ち方。組頭の使い方と命令用語、隊列は先に弓組が戦いを仕掛け続いて槍組が行く、戦い最中の騎馬の走り方、実戦さながらに槍の稽古や太刀使い、と大将の事から足軽の事、果ては逃げ方まで手取り足取り訓練が繰返し行なわれた。知っていた積もりの馬でさえ手綱から両手を離して脚で馬を自由に乗りこなさなければ武器は扱えない事を知った。みるみる腕の筋肉は盛り上がりこの歳にしてまだ若い者には負けぬ、と自負出来ると好武は思った。

もう早や二カ月も過ぎようとしている。

若い松蔵弥兵次は回復が早く太刀傷が癒えると亡骸もない両親や親族、配下の者等の四十九日の法要を済まし訓練に励んだ。

貴人

そんな頃花見の宴が持たれた。遅ればせながら歓迎の事も兼ねている。

なみなみと注がれた大杯が順盛から下げられ一族一統は廻し呑みして騒いだ。

城内の庭にむしろを敷き、幕を張りらんまんの宴の中に二脚の唐風の卓とそれぞれ椅子があり、一つの卓には順盛等の親族が腰掛け、もう一つには予てから気になっていた支那の人とその娘らしい若い女性がおり島左門が側にいて親しげに語り合っていた。

「森殿、この御方は明の御人で御座る。」そう云えば最初の時に名前だけは聞いていた。確か劉とか云った筈であった。

今は当家の客人であるが元は明の皇帝に仕え兵武尚書の高官であったが潔癖過ぎて蒙古族出身の臣が幅を利かせまた、宦官(かんがん)達が横暴を極めて漢族出身の真面目で有能な官僚達が云われ無き讒言(ざんげん)に合って宮廷を去って行った。

その為皇帝へ身命を賭けて進言したが要れられず却って疎まれ最後には官宦の張欽や劉謹等と争い、我が漢族の誇り高き血が許さず遂に追捕(ついぶ)の手に迫られて出奔した。初めは南下して越を頼ったが船は嵐に遭って難破し、漂流中に倭船に救助されて九州に上陸した。明の弘治帝の崩御で正徳帝の践祚(せんそ)を機に帰国を考えたがまだ張欽や劉謹等の事が判らずしばらく日本に留まる中、瀬戸内を抜け摂津に入り河内を経て大和に来たと云う事であった。彼にとって不幸な事は生憎、都を始め日本中が争乱の真只中である、と云う事であった。

上品な良家の出身らしくどことなく二人とも誠実な人柄がしのばれた。明国の人といえどもこれ程親しみが湧くのが好武には不思議であったが黙って立って側にいた息子の好為だけでなく回復して間もない弥兵次も琵琶を抱えた小柄なその娘らしい女性に魅せられた。

これからその琵琶を弾くと云うのだ。劉氏の娘ではなく出奔する時に親友から頼まれ預かった大事な人であり施文素（シーウエンスー）と云う十七、八歳にみえる女性であった。

桜花の下、文素（ウエンスー）はきらびやかな濃紺の衣装に身を包み、椅子に座って脚を揃え琵琶を右膝の上に立てたまま絃に指をたて、順盛の方へ姿体を向けて白く細い手から絃ははじかれた。

正面からその顔を見ると有り触れた顔立ちだが、細身のしなやかさとその伏し目がちな容貌をななめから覗くと人をして胸を絞めつけ振り付きたくなるような表情が心を捉え、騒がせた。どことなく亡き母の面影が好為にはたまらぬ様に映った。ジャジャーン、と響くと花見の宴は一瞬にして静かになった。

奇妙な音楽であり順盛も初めてらしく、弾く手許と顔を凝視していた。所々高低がはげしく時には腰が砕けそうになる響きが何とも不可思議でありこそばかゆい心地がした。

ついで劉氏が懐から縦笛を出して琵琶に合わせた。今度は静かな曲であった。大和の笛とは全然音色が変わっている。

好為は心を弄ばれ是非彼等と親しく話してみたい衝動にかられていった。

順盛は客人として鄭重に扱っている。

その演奏が終るまでしばらく好武、好為、弥兵次の三人は左門の側に立っていた。

左門は終ると拍手し何やら喋った。

好武はそっと左門に聞いてみた。

「大和の言葉が判られるのでござるか」

「相当にの」

「ほーう」

「何でもよう知ってござって愈々判らぬ時には字を書くのでござる」

「字で書くと判りまするのか、便利なもので、……ほーう」

「我等は劉杜漢（りゅうとかん）殿とお呼び申しておるが、お国ではリョウ・トゥハン先生（シエンセン）と申されておるそうな。」

「割合に似た読み方でござりまするな」

「さようとばかりは、云えぬようで御座る。」

「ほーう」劉杜漢氏は二人の会話をにこやかに聞いていた。左門は好武や劉氏に酒をつぎながら、時折わけの判らぬ言葉で二言、三言喋るので左門が特別偉い人物の様に見えてくる。

「小生有礼了（シャオセンヨーリーラ）。我是劉杜漢（ウオースウリヨウトウハン）。」聞いた事のない言葉。

「なんとで御座る」左門に尋ねた。劉氏の挨拶であった。

「左門様は大変なお方でござりまするな」

「否々なんの難解で御座って、どうにもなり申さぬ。」

「難しゅう御座りまするのか」好武等は段々引き込まれていった。

ふと気付くと順盛が卓を前に交わりの謡を歌うと云いだした。主従の縁（えにし）の為にである。

《寿ナレヤコノ契リ、天長ク、地久シクテ尽クル時モアルマジー……》皇帝の一節であった。一同か

ら喝采があがり、超昇寺が鶴亀を、島左門が羽衣をと次々に歌う。誰かが鉢の木を歌った。いずれ指名されるのではと好武は何か厭な予感がした。そう思うと酒が苦くなってきた。と云うのもこの場に相応しい都合の良い謡を他の人々が順に歌っていくからであった。

案の定、是非と島左門が指名してきた。

「ハハッ、さすれば。」下手ながらと遠慮しがちに立ち上がり、

《長き命を汲みて知る。……朝夕馴るゝ玉の井乃。深き契りは頼もしや……》と玉の井の一節を歌った。

あまりうまくはなかったが、恥を掻くほど下手でもなかった。順盛の大叔父の筒井与左衛門が時は過ぎたりと頃合いをみて猩々を歌った。もう春の陽は傾き、かがり火が炊かれ風が吹きはなびらが舞った。

《夜も尽きじ……傾くまでの竹の葉の酒……酔いに伏したる枕の夢の……》この謡が締め括りになってその日は終り好武等は他の家臣達とともに順盛に挨拶して散会した。

城外に宿舎を宛てがわれていたのでほろ酔い気分で好為、同居の弥兵次等と好武は帰る途中、劉氏等に出会い軽く会釈を交わした。彼等も意外な事に城外の一角の邸宅におり、好武等の宿舎とは数軒先に住んでいた。

交わり

別れてから何とも不思議な音曲であったなと、話しあった。森好為はもう心が漫ろになっていて、とぼけた生返事をしていた。

「これ！　生じっかな事を考えるではないぞ。」父は子の事をすぐ悟って叱った。びっくりした好為は滅相もない事と否定したがそれでも顔は紅に染まっていた。

翌日、登城すると順盛は、森氏は源姓を藤原氏に改め、松蔵は松倉氏にせよ、と云った。

「当分の間、森は戦いに馴れるまで超昇寺藤左衛門儀永、久保三津左衛門尉兼安、矢負次郎、豆越良秀等に就き、松倉には石上主水、布留織部勝時、筑紫兵部、市本掃部等の部将の側で戦さの事を身につけろ。」と所属が決まった。

さて、第百五代、後柏原帝の御世の日の本の国を眺めると永正二年のこの頃は戦国時代に屢々登場する後の斎藤道三でさえ、まだ十歳くらいであり、信長の父の信秀が生まれるまでにあと、五年の歳月を要した。

この地大和結崎に生まれた能楽は小次郎信光全盛の時代であり、奈良称名寺の茶の祖、村田珠光は既に茶を将軍家に点じていた。

小競り合いがあっても森、松倉等には出陣に関係なくただ、出陣していく将兵を見送るばかりで相

変らず訓練に励んでいた。
そんな頃、劉杜漠氏に出会うといつでもお遊びに見えられよ、と片言で誘いがあった。
むげに断る事も出来ず後学の為にと好武は好為と松倉弥兵次を連れ訪問した。施文素（シーウェンスー）がこしらえた手料理が出された。
何か鳥の卵の様な物であったが、実に旨い。聞いた所では、彼等がこの大和の筒井家に来てからでも大分時が経つのにどうして今まで保存出来たのか不思議であったが、この城下で作ったと云うことだった。
酒を呑み、油でいためた野菜も塩味が利いてうまい。変わった食べ方だと思いながら酒を汲み交わし、そんな物を出され色々話す中、成程島左門が云う様に豊富な知識が湧き出る様に劉氏は語り、通じない時には見事な筆を捌（さば）いて話し合った。酒が進む程劉氏は能弁になり膨大な歴史が語られていった。
若い二人は話しも話しだが文素が気になって仕方が無い。
初めて訪れて長居は無礼と礼もそこそこにその日は辞したが、若い二人はどうやら虜になった様だった。
その後に誘いがあっても好武だけが出かけたが知らぬ間に人目をしのんで二人が交替で訪れているらしいし、まだ筒井家中の他の若者も居るらしい。おまけに文素から弥兵次に小片に書かれた便りがあるらしく両方の思いをより深くしている。二人は競って支那の言葉を覚えた。「あなた様のお心は

うれしく思いますが、私には李森豪という青年と言い交わし、いつまでもいつまでも私を待つと故郷を去る時に云ってくれ、今も待っておりまする。」文素はやっと会えた弥兵次にそうもらした。そんな恋仇があるならより情はしたう方へはげしく弥兵次の心は傾いていった。
劉氏に仕える下女のおかねを通じ充分な心付をして弥兵次は文を送ったがその後はつれなかった。いくら文を届けても色よい返事は来ない。弥兵次はもしあなたに多少とも人の心があるならば、この血の通いを真実とみて、会って欲しいと左手の小指に小柄をあて、ふき出た血潮に右手の拇指をあてて、文の終りを結んだ。こうまでする弥兵次の熱情に若い文素も流石に心が大きく動き、ついに人目をはばかり逢瀬を重ねていった。「指が痛くはありませぬか？」そっと柔い文素の手が弥兵次の小指をつかみやさしく唇に運んで舐めた。互いに深いおもいやりが通う。一重八重の桜も過ぎ春宵はおぼろ月に花の香を添え、庭には早咲きの丹精が込められた紅白の牡丹が露を含み梨花が散る下にひそと語らう男女の姿があった。何かを云おうとして劉氏は文素を二度呼んだ。
「小文（シャオウエン）！」ようやく文素の耳は聞こえた。二度目の声は大きかった。ハッ、として文素は唇に右の人指ゆびを当てると目で別れを惜しみながら後ろ髪を引かれる思いで庭から劉氏の方へ去った。
「ハイッ」
「在做些什広（ツァイツオシエシエンマ）？」何をしていたのだ、と劉はとがめた。うつむき加減に文素は返事した。春風の心地良さに誘われて庭に居たのだと。そんな事が小雨の夜にもあり、ある夜不審に思った劉氏は逢い引きの現場をそっとつけ垣間見た。「不行（ブシン）！」《これはいかん》とみてそっと部屋に戻った。

劉氏もたまりかねたらしく、訪れた好武に折りいってと話しがあった。
そう云えば近頃息子好為は食事の時に一箸、二箸つけると気分が悪いと云って箸を置き、部屋へ入って出てこないばかりか日増しに頬はこけ幼い頃の懐かしい母への慕情と恋心が交錯し好為はついに寝言にまで支那の言葉を喋った。病こうこうであったが、弥兵次は先頃父母弟妹を古市氏の為に同時に失い、その上心の傷が癒えようとする頃になって出会ったから一入強烈であった。彼女の優しい容貌が狂おしいまでに恋焦がれ全く心を奪われてしまった。遊び心などはなかった。
島左門に劉氏の申し出を詳しく取り次いで貰い城中の屋敷へ転居する許しが順盛からようやく出され彼等は移っていった。弥兵次や息子等の気持は判らぬでもないが万一の間違いが起こる前に手を打って置かねばならなかった。第一劉氏の子女ではなく預かりものの大切な人である。城中では息子等も他の者達もうかつな事は出来ぬ。
元々好為にはかねて奈良小北路城主飯田の一族で許婚者があったが、この度の筒井家入城で沙汰止みとなりまた筒井と飯田は反発する間柄でもあり好武も云いそびれていた。
止むをえず又してもこの際できる事ならと島左門へそれとなく申し出ると戦いは戦い、それはそれでと順盛に取り次ぎ、許しが貰えたので極秘の内に事を運び一月余りの後、芽出たくどさくさの中に嫌がる好為を結婚させてしまった。

戦　慄

管領細川右大夫政元の臣赤沢宗益沢蔵軒は、去る永正元年山城の宇治の山奥へ大和衆に破れて逃れたが、再び勢力を結集して大和へ攻め込む兆しがあるとの情報が順盛のもとに届けられたが、噂だけで二年はそれ程の事もなく順盛は戦備に明け暮れた。三年の春も過ぎた頃、大和国中の箸尾、越智、片岡、十市、布施、小田切、明山等から赤沢宗益の動きを知らせてきた。
知らせは異口同音であった。
順盛は四方へ使いを出し、国衆神人、衆徒に連合して赤沢を撃つべし、と説いた。誰にも否はなかった。あれ程手酷い目に合いながらたった中一年で京軍を立て直してくるとは流石であった。
赤沢宗益は大和のあちこちに乱波を放ち、京軍こわしと流布させていたが大和国衆は待ち構えていた。
秋七月、遂に現実の事となって赤沢宗益沢蔵軒は大和国衆の分裂の裂け目を見出せないまま京軍を出発させた。
山城相楽の市坂に到着したのはその月の半ばであった。
沢蔵軒は大和国衆へ使者を送り降伏を勧告した。
島左門は届いた勧告状を順盛に差し出したが、読み終ると使者を前にしてその勧告状を破り捨て烈

火の如く怒り、
「早々にたち帰って沢蔵軒に云え、再び憂き目を見たくば大和へ来い！　素っ首を叩き切って大織冠に献じて曝してくれん！」
沢蔵軒の使者は順盛のあまりの剣幕に縮み上がってほうほうの体で逃げ帰って行った。
一方箸尾、十市、越智等からも沢蔵軒の使者が来た事を順盛に知らせてきたので互いに使者を往来させ連絡を密にして戦いに備えた。
筒井の物見が帰って来て沢蔵軒の動きを逐一手に取るように報告した。
既に、歌姫街道は沢蔵軒の軍勢で溢れ針の穴程の隙間もない有様であるとの事であった。
順盛と合流のため箸尾は広瀬郡を発し、十市もその居城を出たし、越智氏も南都を目指して高取城を出て迎撃を整えた。

秋冷

森九郎兵衛好武、松倉弥兵次らは入城以来今日まで随分訓練を重ね様々な事を身につけた。好武は吾が歳でと考えていたが、毎日続ける中、決して老いてはいない湧きでる様な体力が不思議な程自信となってついてきていた。血のにじむ努力が背後にあった。
好武、弥兵次らには初めての戦さとなった。陸続と箸尾、十市、越智氏等の諸軍が大和盆地のやや

西の郡山の東へ集結し、順盛等は箸尾、十市、越智氏等と軍議を開き軍を郡山の北へ移して布陣した。
赤沢宗益沢蔵軒の軍は噂では凡そ五千余、越智についで筒井、箸尾、十市を併せてもこちらは総勢四千余り。
先陣は越智玄蕃頭のおよそ千五百余人、中軍に十市長直、島左門らの八百余り、左翼に箸尾宮内と筒井の一族の一部を加えて七百、後詰めは筒井順盛等の郎党を始め小豪族の掻き集めの兵千足らず、まことに頼りない後詰めの本陣であった。
どうしても越智玄蕃頭が先陣をと言うので筒井順盛は譲ったが、この辺りは謂わば順盛の庭内での戦場であり田圃の畦道まで判っている所であった。しかしながらこの折角の申し出を言下に断るのは、この際得策でなかった。
京軍、歌姫を越ゆる！　物見からの知らせであった。
永正三年八月二日早朝、西大寺の陣から沢蔵軒の軍は一機に潰滅せんとして矢を射かけて戦いの戦端を開いた。ソレッと見て越智軍は一斉にこれを迎え矢戦さに応じた。一仕切り済ませると越智玄蕃頭が先頭を切って強兵の騎兵凡そ五十騎余りを指揮して敵本陣と覚しきあたりへ豪胆にも突込んだ。
日頃の玄蕃とも見えず、一世一代の突撃であった。
沢蔵軒は越智玄蕃頭の旗印を見て、せせら笑い、一隊へ下知して迎撃に向かわせた。
直ぐにも叩きつぶされようにと沢蔵軒は待っていたが沢蔵軒の一隊は凄まじい越智軍に蹴散らされてもろくも崩れ去った。

「敵！　沢蔵軒を撃て！」越智玄蕃頭の声が南風に乗って沢蔵軒の耳元まで聞こえてくる。
「敵は僅か五十騎足らず何するものぞ！」沢蔵軒は怒鳴りつけたが波濤を疾風の舟が越えてくるように京軍は越智軍に道を開いている。怒濤の勢いを制止する事は出来なかった。
機、熟せり中軍の十市、島らは時を移さず越智軍に続いて道を開けて待ってくれている京軍のど真中へ突き進んだ。勢いとは怖いもの、京軍は一挙に三百余人が撃たれ総崩れとなって後退を余儀なくされた。
筒井順盛らの陣からは絵巻物を見るが如く手に取る様にわかる。
順盛らも今ぞとばかり追撃に加わった。
「行け！　行け！」順盛は遮二無二馬に鞭をくれた。
総軍四千の軍勢は崩れたった京軍へ雪崩をうって突撃した。
「あゝ、しまった。遅かったか！」
敵味方入り混じっての戦いが続いていた。後、一息の所で島らはまだ敵中に奮戦中にもかかわらず、先陣の越智軍が戻ってきたのでは素早く敵中の自軍を纏めてひかねばならぬ。態勢はどうにもならず、やむなく大和側は退鐘を打って引き上げた。
「もう少しの所であったのに」戻ってきた島左門は順盛にそっと耳打ちして悔しがった。
順盛らも同様に思ったが既に仕方なき事也と諦めた。あとすこし一押しすればほんの少し押せば或は潰滅出来たかも知れぬ。自軍だけなら、こんな事はあるまいになまじ連合軍であるばかりにと順盛

は思うとくやしかった。連合軍の常である。
とは言え今日のところは悔やんでも、もう済んだこと致し方はない。明日にかけよう。諦めは早かった。
しかしまた一方で出鼻をくじいただけでもそれなりの効果は充分であった。
取り敢えず全軍をまとめて筒井城までその日は引いた。
調べてみると秋篠氏と宝来氏ら百余りが沢蔵軒の餌食になった以外には取り立てて言う程の将兵の損害はなかった。幸いな事であった。敵の態勢が整うまで数日はかかるであろう。順盛はそう踏んだ。皆も同様の意見であった。
明日は全軍まとめて一団となって攻めよう。一団となって各棟梁が先頭をきれば優劣がはっきりするし、誰に力があるかも解る。軍議はそうなった。
順盛もそうであるが越智、箸尾、十市の各氏にしても皆一匹狼である。自己の判断は絶対であった。
最もやりにくく大きな弱点は連合軍である事だった。
森好武等は今日が最後かと思ってみたりしていたが案外旨くいったのを見てホッとしていた。遠目にといえども流石実戦のもの凄さには息を呑んだ。戦の怯怖があって軀を抑える事が出来ず、時に体はコチコチになっていた。空威張りして小股を開き観戦していたが、もし目前に敵が迫っていたとしてもポカンとしていて無抵抗の中に騎兵の槍の一刺しに、阿弥陀仏になっていたかも知れぬ。思い出すと空恐ろしくなった。勝ち戦とは言え手負いの将兵が血を流し泥まみれになって槍にしがみつくよ

うにして帰陣する姿は痛ましかった。自分を置きかえてみると現実の戦の悲惨さが身に染みてやりきれぬおもいがした。冷汗が背筋を走る。

「どうであった」順盛は床机に座って好武に夕闇の迫る軍議の後の陣幕の中で聞いた。好武は幾分物に耽る癖があった。

「ハッ、ええあのまことに越智殿の御働き流石に歴戦のご勇姿お見事でございました。」と慌てて答えた。

今日は越智氏を賞讃して各将はそれぞれの宿舎にひいた。

その夜中、筒井の物見が帰ってきて赤沢宗益の動きを順盛に伝えた。

「秋篠寺の脇を通り中山村をへて押熊を抜け山城の山田まで引いてござりまする」

「ウーム、山田までな。」余程の引き方である。

報告を聞いて順盛は寝られぬまま考えた。赤沢宗益は強者（つわもの）案外今日の手は作戦の内かもしれぬ。など考えている中に昼間の疲れがでて眠ってしまった。

明けて八月三日、油断なく軍を纏めて態勢を整えた。

越智氏は昨日の事で勢いは盛んであった。

敵の動きは今の所、何もない。

暫くは陣を郡山の北、凡そ一里程の所へ置き、更にその数丁先に順盛は島右馬介友久に五百をさずけ先陣にして置く事にした。

敗北

新入りは何事でも一日緊張の中にあったが、軍中にある事で共通の意識が連帯感を身につけさせ、見知らぬ将兵にも親しく、好武は挨拶が出来た。しかし、想像以上に戦いの怖さを眼の当りにして、前線にでる前の僅かの時間に古株の左門友広にそっと聞いてみた。

「左門殿は怖くはございませぬか」

「何がでござる。戦さの事でござるか、怖い。ございませぬかどころか、ウーム、ヨシと自分でうなってからでないと胆は決まらず、とても出来はせぬ。」

「左門殿でも怖ろしいので」

「当り前でござる。身も人の子。」と云い、お館さまとて越智、箸尾の諸将等と顔を会わせられる時には押しも押されもせぬ貫禄十分の堂々たる御大将でござるが一人になるとからきしで戦わぬ前から取り越し苦労が多く、内緒の話じゃが寝所の柱には春日大明神のお札は元より柱の至る所隙間もなくあちこちのお札が一杯貼ってあり勝ち戦さの時は鬼神も怖れをなすくらいじゃが、毎年そっと山城の弓矢八幡大菩薩の石清水八幡宮にまで人をやり武運長久のご祈祷をしてもらいその上お札を頂いてある。戦に破れでもすれば敗走する馬上から鳥居が見えれば頭を深々と下げて走られる。負けん気は人一倍強いが負けたと決まれば南無、弓矢八幡大菩薩とわしらを置いて一目散に逃げてそこらに居られ

ぬぞ。

「左様でござるか、お館様や左門殿程のお人でも、安心致しました。某が臆病者かと存じましたが。」

「馴れれば幾分かは、ましというだけでござる。身も人の子、左様、人の子。」だといった。

そこへ、順盛が何を喋っているといった風に側へきた。聞かれたかと左門も好武もぞーっとした。

「好武さいをもらわんか」良かった。二人とも胸を撫でた。

「さい？　でございまするか。」

「妻をもらわんか、と申しておる。」この戦陣で突拍子もないことを、と好武は耳を疑った。

「寡夫はいかん、一人は一人じゃと申しておる。不便であろうに。」

「丁度よい、左門にいちにん妹がある。あれにせい。左門は武骨じゃが、妹はきれいじゃ、歳が二十五、六似合いじゃ」順盛はもう決めていた。骨肉相争う時代。当てになって、ならなかった。守りは内より、壊される。殷漢の時代より紐解くまでもなく、獅子身中の虫は筒井の祖順覚、順永以来最も注意しなければ、ならない事の一つであったが、とはいえ、血は水よりも濃い。

「どうぞ、よしなに。」好武は応えた。

「東山の山裾づたいに怪しき者の往来しきり」と物見が帰って、告げた。

敵は南都西北部を中心にして、東にも策があるやも知れぬ。矢張り思ったより早い敵の動きだ。

覚られぬ様に態勢の立て直しをしたのか。

敵の動静を物見の報告に基づき早速軍議を開き、策を練った。

同様の情報は越智にも届いていたし、又、大挙して敵は西大寺に戻りつつある様子であった。

「昨日の半分位は西大寺にいるとの噂でござる」

「外からも一つ、更に都より後続部隊も既に木津あたりに到着の由でござる。」

「後続の数は……？　如何程でござる。」

「数は凡そ、五千とも、六千とも。」

「ナニ、六千とも。」

「いかにも」

「えらい数でござるな」

「河内の動きはなんと」

「西にはなんの動きもござらぬが」

「遊佐長直殿にはお頼みしてござるのだな、筒井殿。」

「勿論の事、お頼みしてござる。」

「ならば西は安全と見て様ござるか」

「多分大丈夫であろう。河内守長直殿が抑えてくれよう。」

「正面、西大寺にいる敵と東はそれぞれどなたが当るか決める事といたそう。いかがでござるな。」

「…………」

「しからば西大寺にいる敵には昨日にならい、先陣は越智殿千五百、十市殿らは御身の手勢四百に吉

備、赤垣、出雲、黒崎、金谷殿らと併せて千百が中軍、三陣は箸尾、明山、片岡、小田切、伊谷、小和泉、関戸、小山、筒井で千四、五百でござる。この策では如何がかのう、ご異存はござるまいか。」

「承知仕った」ここまで来るのに軍議が一刻を要した。

「島殿らの家中はどうなされた」誰かがきいた。

「藤王丸及び島らは、郎党をあわせて東へ五百。」

「御嫡男の事か、筒井藤王丸殿は。」

「いかにも」

「おお、これは頼もしい。」

「外に、井戸、中ノ坊、清須美、三橋、奥田、山辺、沢、稲治、今井兵衛殿これらを入れて千八百。」

「両日の夜に井戸、中ノ坊、清須美、三橋殿らが参陣なされた。」

「おお、いかにも、誠に心強く有り難し。」

情勢を大和側に有利と見て参陣した者がいた。

しかし、この新手は確かに貴重な存在であった。陣中はたちまち、活気に溢れ、意気軒昂たり。

翌八月四日、払焼戦端を開いて間もなく案に相違し、正面越智軍に指揮の乱れが禍して、脆くも崩れ去った。敵は油断なく、崩れの機を逃さず、屈辱を雪（そそ）がんものと、必死で迫る。これ程迄に立てた作戦も、呆気なく乱れに乱れて、僅か一刻ばかりで、散々に総軍散りじりに破れ去った。こうなると、日頃の武者魂はどこへやら。我れがちに逃げて、叱咤督戦する武将の声を聞かばこそ、後詰めも、前

後左右も、何れも、どうにもなりはしなかった。各武将達も皆思い思いを当てにして、落ちた。

「最早、これまで。」と筒井順盛は自軍を纏めて、筒井を指して、命からがら逃げ帰った。逃げ帰ってみると、多くの将兵がもどっておらず、帰ってきた者も多くは、負傷していたり、間もなく、死んだりした者らがいた。筒井与三衛門、同大炊道秀、同善印房らが行方不明、一族の外、辻上野介、北岡三郎らが討ち死にであった。馴れているとは言え、辛い事である。

亦馴れぬ中でそれらしい武装をして従軍していた坂口重兵衛、西本伊右衛門、巽蔵人等もそれぞれ討ち死にに松倉弥兵次が矢張り流矢を受けながら本隊にようやく付いて来ていたが、小石元三郎が行方不明など、はじめて加わった、彼等の中にも犠牲者がいた。

好武等は省みるどころかただ、つき従うだけでおのれが精一杯であった。

「敵が近づきます」鎧を脱がず、湯漬け飯をかき込む順盛の耳に、声がきこえた。

「続け敵が来るぞ」順盛は叫んで馬に跨がった。迎え討とうにも、自軍の数は凡そ四、五百しか、残っていない。ここは逃げの一手であった。遙か彼方に敵軍の旗指物が見える。順盛は南を指して振返らずに、どこをどう走ったか、駈けに駈けた。田の畦を越え、佐保川を渡り、まだ、取り残されたままの金色の稲穂の波も踏みわけて、気が付けば、十市の東辺りまで来ていた。箸尾、明山、片岡、小田切、小和泉、井戸、中ノ坊、清須美、三橋等の主だった、武将らは無事らしいと、道々出会った十市氏らの残党は消息を伝えた。越智氏は一番初めに崩れて逃げており、順盛は越智の高市へ向かおうとしたが、島左門は滅多な事は無いものの万一越智が寝返り順盛の首を捧げて京軍に降ればと懸念

し東山中を勧めた。東山中に辿りついた頃、箸尾らは一旦戒重城へ逃れたが、沢蔵軒は疾駆し来たって、戒重に迫った。箸尾らは、堪えられず、棄て走った。東山中奥深く逃れた順盛の手勢も三百に満たず、登り道ばかりで将兵も馬もつかれきっていた。しかし、沢蔵軒の追撃の手は、暫く闇夜の明けるのを、待つのも、もどかしく、明け切らぬ中から、兵を繰り出し、馬のいいなきも声高らかに攻め登り山裾にはおびただしい兵馬が、ひしめいているのが、遙か山の上からさえも望めた。

帰郷

「宇陀へ、参りましょう。」島左門は言った。山伝いに順盛の手勢は宇陀へ入った。追撃の手が緩むを幸い、散り散りの兵も順盛の消息を聞きつけて、懐かしい顔が幾人もその間に宇陀に着き、少時して傷ついた不明の小石元三郎等はどこをどう旨く逃れたのか判らなかったが機敏な男だけに要領よく帰ってきたが新入りの森好武の残りの兵は殆ど打ち死にし遺骸さえも捨て置かれてどこで眠っているかさえ判らなかった。しかし、勢力は八百余人程に恢復し箸尾氏ら一族と宇陀で合流し、双方の残党を集めつつ、永正四年初春まで、筒井の居城は破られたまま鳥にも心を驚かせつつ何等大きな反撃も出来ず、村の長らに命じて矢の製作を頼むくらいで宇陀で無為に過ごすこと、凡そ一年。

情勢は以外な事から変化した。細川政元には、実子がなく、関白九条政基の子、澄之を養子としていたが、政元はその澄之に殺された。そんな事から丹波から京に戻った沢蔵軒は捕らわれ永正四年六

月二十七日に京で生害された。

以前、成身院順盛は細川政元に与力していた。しかし、組しきれず、国衆に合し、国衆と行を共にした。それにしても、国衆は、全てなんの手もうてなかった。国衆の手で撃ちたかった沢蔵軒ではあったが、生害を残念に思ったものの、一応に悦んで、それぞれ帰郷した。大和から汐の引く様に、京師の軍が引き揚げたのは、言うまでもない。細川勝元の子政元は、はじめ畠山政長を推していたのだが、後畠山義就と和し、政長を河内正覚寺で自殺させ、義就の子基家を補任した。政長の子尚順は、遊佐河内守長直や大和の筒井順盛の応援を得て基家を破り高屋城に在った。もう一人いた政元の養子、一族成之の孫澄元は一月後、澄之を攻めて之を殺し、義父政元の仇を討った。細川と畠山両家の家督争いに、大和、河内、摂津、紀伊らの豪族達は、巻き込まれ、いつまで続くかも知れぬ、戦いを強いられた。永正四年七月初め、順盛もやっと、筒井城へ帰りついた。はや、黄金の波が田に打ち、空は晴れて秋風が心地よく、頬を撫でていた。

宇陀にいる時、箸尾氏とは、同病相憐れみ、より親しくする中に再起の日を誓って語りあったが、打ち続く戦いの内に、将兵の武具の傷みは、京師軍に比し、格段の劣りがある事を痛感した。順盛らは、古巣に戻り急ぎ戦いに参加出来る将兵の数の掌握と、更に武具や輜重の調達などの戦備に余念なく、明け暮れた。

新たな気配が迫る。

赤沢宗益に代って、座の温もりも知らぬ間に、永正四年九月十六日に赤沢長経と内堀新次郎らが京

を発った。同十八日には、東大寺に入り、陣を敷いた。
「彼等は飽きる事を知らぬ」
大和諸将は苦々しく、罵った。
が、来れば戦わねばならぬ。国衆諸将は、恐怖を心の底に忘れ、亦連合して当るしか道はない。
筒井勢は凡そ千五、六百。後に残ったのは、皆傷を持ち病んでいる者ばかり、四、五百人。赤沢長経と内堀新次郎らは、新手の者。永正四年九月の終り、十市氏、箸尾氏、楢原氏らと組んで筒井勢は南都へ向かって進撃を開始。
細川の先棒を担いで、北大和の古市氏が、長経の前衛を守り、国衆諸将は、嫌が上にも、
「おのれ、古市めが、今に見ておれ！」とほぞを噛んだ。緒戦は、思い切りよく、討ち負かし、後は野となれ、勝負にならず、と退却の余儀無く、その上大乗院へも危険は及び、時に戦い利あらず、この一戦を捨てた。
西から攻めた十市氏、箸尾氏、楢原氏らと組んだ筒井勢は、東の方から攻めた越智、片岡氏らの惨敗をいまさら、悔む事さえしなかった。国衆二軍は敗走に次ぐ敗走を重ね、南都は赤沢長経の手に完全に屈伏した。敗残兵を追手は、容赦なく、追撃し、十月郡山に迫った。
内堀新次郎らは、観音寺に入り、赤沢長経は遂に郡山城に、古市めは、憎々しくも、大安寺に陣取り、三好越後守は、薬師寺に在って、国中に号令した。敗走の中にありながら、筒井勢は、法隆寺に集結を呼び掛け、順盛は法隆寺に入った。

古市のみならず此の度は多くの者が赤沢長経の軍門に下り国衆らの内部にかなりの動揺をもたらし、戦意は極端に低下しこれを見た内堀新次郎は大和国衆の脆さに京師軍の半分の五千を引き連れ口程もない大和衆よ、とあざけりながら京へ引き揚げていった。
順盛は、十市、越智、片岡、楢原等の敗残の兵を纏め、我等は大和の国衆ぞ、これくらいでへこたれるな、と将兵を檄した。葛下郡の楢原は主を失い、同族楢原監物俊高は悲嘆にくれながらも、周防守俊時の仇を討たんと、北の空をにらんだ。
しかし、河内の高屋城の畠山尚順などへの連絡は断たれ、大和の国衆は大和盆地の袋の鼠であった。

一国一揆

(一)

筒井城に危機が迫って以来、劉杜漢氏も法隆寺の陣中にあった。
片言で話す劉氏に相当の親しみをもって、時折語り合ってきた森九兵衛は、素人ではあるが、陣中で何か役に立つ事はないものか、と考えている折もおり、劉氏に会った。この頃から九郎兵衛は名を九兵衛と変えていた。
「おお、劉殿。」九兵衛は、ひょっとして、劉氏が名案を持っておるかも知れぬ。丁度よい。と考えて、

「折入って、劉殿にお知恵を拝借願えぬかと存じまして。」
「ヨロシイ森殿、ナンノ、オハナシデゴザルカ。」
「されば、ご覧の通り、何時もの負け戦さ、何か良いお考えは御座るまいかと思案致しておりました。」
「ナンノハナシカトオモヘバ戦サノコトデゴザルカ、ダメデゴザル。」
「何として駄目なのでござる」
「戦サノコトハ、駄目ナノデゴザル……日本ノ、戦サノコトハ、スコシチガイマスノデ。島殿ハ昔キキマシタ、ウマクユカズ、シッパイアリマシタ。マタ、ソレガシハ、日本戦サノヒト、チガイマス。」
「それにしても、国は違えどいにしえから孫子の兵法など。」
「…………」劉氏はうなずきながら、考え込んでいた。
「何とかならぬものかと……」
「オコマリノコト、ヨクワカリマシタ。ヤッテミルノ、スコシ方法アルカモ知レマセヌ。……」
「ありまするか、方法が。」九兵衛は、ささやきの声が大きくなった。
「スコシデゴザル」
「この際、できるものは、致さねば。何でも結構でござる。お教え願えれば誠に有難く、是非是非。」にとすがる様に懇願した。
「天ノ時、地ノ利、人ノ和……」昔から言われてきた事ではあろうが、人の和とは、大将、将兵の者

ばかりを指すのではなく、もっと、民衆の力を味方に付けねばいくさの常勝は、おぼつかず、
「ホウイン殿（順盛）ハ、リッパノオヒトデ、タイセツニシテイタダイテオリマスガ、……」島左門でさえ、劉氏を敬してはいるものの、その時以来軍略を尋ねる事はしていなかった。順盛や左門には、百戦の勇士である自信がある。
「ミドモハ漢ノヒト、アナタヲ、オシエマス。」少々言葉のクセなど気にせずに、九兵衛は、聞いていた。漢族の誇り高く義に篤い劉氏の姿がそこにあった。
神官、僧侶は言うに及ばず、百姓工商人乞食に到るまで、国中の全てを味方につけろ、と言うのだ。今までにも既に多くの百姓商人達らも幾度となく、巻き込み京師軍と戦ってきた。
しかし、考えるまでもなく、国衆とは言っても、それらは、事実、皆身勝手な各豪族達の事でしかないし利害のある一部大百姓、商人らは、成程、戦いには協力的であったが、それらは、決して全てではなかった。
折にふれ、劉氏は、永い支那の史実を九兵衛に、語って聞かせていたしどうするかを理解した九兵衛はうなずき礼を劉氏に述べて後、左門に会い、劉氏から聞いた要諦を伝えた。勿論劉氏から聞いたなどとは、言わなかった。左門は順盛に事の次第を述べ、順盛は考えてみると、言って、秘かに今の窮状を打開すべく、改めて策を練った。法隆寺の陣中深く、筒井の少数の主だった者等を集め、別の動きがあるまで、鋭気を養い、二十日余りの間、じっと、このまま、ここにいて待つ事を決めた。

(二)

順盛は、左門を改めて呼び、これを誰にやらせるか、を問い、ためらわず即座に九兵衛と応えた。

「ウーム、あの九兵衛か。」

「如何にも森九兵衛でございますが。」

「九兵衛に出来るかのう」

「多分大丈夫でござりましょう」

「ヨウシ、物は試しと行くか、出来るかのう。」まだ、心配していた。

島左門は、順盛の意向を九兵衛に伝え、抜かりなきようと注意を与え、用意の程を打合わせた。

陣中から森九兵衛ら数名の者がその夜の中に、時を移さず何所へともなく、姿を消した。

四、五日すると手近かな、村から妙な噂が流れ出て、陣中にも、伝わってきた。将兵らは不安を隠せず、怖れおののき、斯くの如きでと物頭へ報告してきた。

《北の星の動きに異常あり》天地は雷鳴を轟かせ鳴動し、大地震が起こり、大雨が降り続き果てはこの大和の国は、いつかのような、大海原のように、大洪水となり、飢餓が襲うなどと言うものから、蔵王権現の行者の噂では、猿沢池に赤い水が湧き、血の様な濁りあり、騒動の始めなりとか、大火が、国中を焼き払い阿修羅の如き、生地獄が現出し、水を逃れたる者は、火に依って焼けただれ、火を逃れたる者は亦、余りの大水に身を寄せる流木さえ見つけえず、揚げ句の果てに溺れて、悉く阿弥陀仏になる、という噂だった。

大和盆地は佐保川をはじめ、富雄川、長谷川など中小の七つの河川が全て西の大和川へ注ぎ、大雨があると直ぐに大洪水となり、民衆の誰もが、その恐ろしさをよく知っていた。

それからまた、十日もすると、南都からの噂によれば、として悪逆非道の京軍の無謀が春日明神を怒らせ、三輪明神の神が呼応し奉り、慈悲深き大仏様も、見るに見かねて、とうとう国中の全ての神仏が、到る所から、お怒りである、との御告げであるなどと村から村へ伝わって来るのであった。

一日も早く京軍の無謀を止めさせ、追い払わんが為に十市氏は、直ぐに大三輪神社に馳せて、悲願をたて、大織冠に祈願を奉り、箸尾氏は、信貴山の多聞天に人を遣わせ、越智氏は、吉野神宮へ、とそれぞれ災害の無からん事を乞い願った。

その為各神社、仏閣は祈願をする老若を問わず、人々の集まる処となって、引きも切らず、漸く京軍を怨む声が国中に充ち溢れ、更に噂は一人歩きをして、噂は、噂をよび、法隆寺の鐘が、悲し気に鳴るの、鼠が多数群れをなして、東へ走ったのと、噂に事欠かず、わしも聞いた、今日もみた。とうるさい事であった。

赤沢長経らは、噂などどうせ根も葉もない事とはじめはせせら笑っていたが、かなりの動揺が将兵の中にあることを知って、否定すれば却って、それは脹れ上がり、配下のまともな武将までが本気になって、恐怖をあからさまに申し出て来るのであった。

夕べの風が冷たく、人々の心細さが最高潮に達した、十一月の初め、森好武らが、法隆寺へ戻って来た。

頃はよし、と順盛は、十市氏、箸尾氏、越智氏などに人を遣わし、十一月の中旬を目途に、再度京軍を攻める旨を伝えた。十日が過ぎると、二人、三人と鋤や鍬を担いだ百姓風の男達が、法隆寺の辺りから去っていった。その五百余人の中には、帰って間もない森好武らが他の同勢と共に混じっていた。

南都の巷の京軍の手薄い街のあちこちに、一かたまりの百姓風の男達が来ては、大声を上げて、

《たたりが怖い！　京軍は帰れ》と叫び、京師の兵をからかって追われれば、逃げた。

物見高いは人の常、あそこでも、ここでも、人が群れば、

《たたりが怖い！　京軍は帰れ》といつとは無く、人々は、はやしたてた。京師軍は、見つけ次第捕らえては、鞭打って、主謀者を捜したが、捕らえ甲斐のなき、只の町人であった。

十一月十二日の夕方には、小商人や百姓達らが、南都に木魂して、騒ぎ出し、一層警護の兵は、増加した。

一方、同じころ、南都を目指し順盛は法隆寺を発した。南都の街中の到る処に職人や小商人や百姓達らが、群がり、手にする、物が変わってきていた。竹竿の先が削られて尖がり、刀を腰にする者さえ出て不穏な空気が市中を取り巻き、警備の兵が近づくと、くもの子を散らす様に逃げ去った。逃げながら、振返って、石つぶてを投げつけた。不幸にして捕らえられた者の中には、斬首され、曝された者の頸を見て民衆はなお騒ぎを大きくしていった。

(三)

十一月十三日奈良周辺部に寄っていた国衆連合軍は、大挙して、南都の民衆と呼応し、戦いを挑んだ。京師軍は、備えおさおさ怠りなく、防戦に努め、二手に兵を分け国衆連合軍と戦ったが、民衆には、殊の外手を焼いた。

どれが敵やら、皆目見当もつかず、手あたり次第に痛め付けた。それが悪かった。燎原の火の如く、消えかけた火が、そこ、ここで、再び燃えはじめ、消えては、燃えた。燃える度に、京師軍に牲犠者が出た。しかし、結局民衆は、南都に潜り込んだ、筒井の手の無いところから崩れ、奈良の街は、混乱し、遂には収拾がとれず、国衆連合軍も、破れ敗退し、順盛は姉の嫁ぐ遊佐河内守長直を頼って河内に逃がれた。戦いは相変らず国衆の負け戦であったが、この度は、一国一揆として、貴重な一戦となった。戦いは悲惨ではあったが、戦えば、戦える事を知り、奈良の町衆も戦う事の意義を知った。

赤沢長経らは、この一戦に勝ちはしたものの、手痛い打撃を蒙り、年を迎える事が出来ず、京へ引き揚げた。

町衆は、己らの勝利として、祝い、翌永正五年の春をむかえた。

順盛は、河内から戻り、戦備に明け暮れた。

またしても、赤沢長経南都に迫るの報に接したのは、七月の初めであった。

《飽く事を知らぬ、奴ばらめが》同月十七日赤沢長経は、南都に入り、陣を敷いた。

筒井藤王丸この時十五歳にして、一方の将として、順盛の傍らにあった。後の良舜房順興である。

筒井衆だけの軍議が持たれ、永々となった。
　左門へ順盛は、眼をむけた。何か無いか、と言わんばかりである。
「されば、愚見を。」と左門は口を開いた。順盛の知恵袋なのだ。
「お怒り召されませぬ様に、よろしゅうございましょうか。」
「…………」順盛は黙していた。
「陣中見舞を致します」
「誰に」
「勿論赤沢長経様に」
「ど阿呆」
「ですからお怒り召されませぬ様に、申し上げましたのに。」
「まあ、よいわい。」
「左門、それはよいとして、この頃時折、妙な事を言うではないか。」
「なにをでございますか。」
「なにをではない。お主の策じゃが、今迄とは、ちと、違うようじゃが。」
「…………」左門は順盛には応えず知らん顔を決め込んで、
「陣中見舞の事でござるが、酒肴を山程荷車に積んでお届けいたします。」
「それで」

「それで、お仕舞い。」
「…………？」
「後は仕上げを待つ許りでござる」左門は、百姓姿の手の者が陣中見舞と称して、酒肴を届け、敵の本陣はもとより、各々の警備の要所へも同様、しこたま酒肴を届けて、彼等に飲ませて酔わせ、頃合いを計って、寝込みを襲撃すると言うものであった。
「それで、旨くゆくのか？」
「多分」
「ウーム？」順盛にはそううまく、ゆくとは、思えず、ためらっていた。
「それは、おもしろいのでは。」藤王丸が口を挟んだ。
「黙れ！」誰が口を挟んだかを知って、子供のくせに、と順盛は藤王丸を叱った。
　藤王丸は、才気換発の聞こえ高く、順盛も非常に可愛がっていたが、戦いには日も浅い藤王丸をきつく叱った。
　百姓姿と言えばこの仕事はまたしても、森九兵衛らに、となって森九兵衛らは、すぐさま、順盛の命を受けて、南都を指して、奈良に入り、去年の経験を生かし、町衆の商家の主を尋ね、酒肴をはじめ、米、麦の外、布地や雨具に到るまで、三十を越える荷駄類を整えて、十三日の夜に、手分けして、かがり火のある各陣処へ配ってあるいた。
「お武家様方には、夜廻りご苦労様でございまする。」

「ウーム？　むさい奴」何要じゃと言わぬばかりの警備の兵へ去年の無礼をと言って、

「去年は、無法な町の人の為にお武家様方には、ご無礼を申し上げ、申し分けございませなんだ。これは、そのほんのお詫びの志しでございます。どうぞお気をお鎮め願いとう存じます。その様なわけで、こうして、町の主だった者らが、それぞれのご陣処へご挨拶に上がっております。」

「ウーム？　それは殊勝な心掛け、よしなにしてやろう。」赤沢長経の将兵らは、悪い心地もせず、顔に似あわず、ほくそ微笑んで、酒肴を受け取った。今は警備中で飲めぬ、と言うのを百姓や町衆の長たちは、自分らの腰に吊るした、瓢を取出して、まあそう仰言らずに、と丁重に酒を奨め、将兵らを取り囲み愛想よく、然も親しげに、酒をついで廻った。何所も彼処の陣営も、したたかに酒を呑み皆酔って、立ってもおれずかがり火の下にうずくまり、眼をしばたたかせていた。

秋桜

(一)

然し、敵にも備えがあり、警備を見回りに来た者らが、気付いて次々に本陣に告げ、慌ただしく警備兵を交替させ、夜討ちがあるかも知れぬ、怠るなと戒めていた。だが酒は、大勢の兵に行き渡り、大半の者は、白河夜舟の高いびきであった。前衛から、きつい登り坂の上にある本陣まではおよそ、五丁余り。七、八ヵ所の要所要所に大きなかがり火を炊き、屯する兵士の影が遠眼にも望めた。物見

の報告通り、相変らずの物々しさであった。三条村を守るは、赤沢長経のお気に入りで柏木近江守忠光と言う士であったが、兵士の顔に見覚えのない者ばかりで、腑におちぬ。妙だなと気付いた時には、棒で殴られ、藻掻いても、声も出ず、縛られた上に、猿轡を嚙まされていた。そこへ、三条村をはじめ紀寺の辺りにも、大きな炎が夜空を焦がし、外にも、数ヵ所に合図の火が朱々と南都を照らした。時こそ来たれりとばかり、それを好武等の合図とみて、順盛は、旗下を激励して、警備兵を除いては、静まりかえる南都の赤沢長経の本陣を目指し、遊佐河内守長直から借り受けた、凡そ二千の兵に筒井衆二千五百、箸尾、井戸、明山、楢原、越智、片岡、十市の各氏ら、凡そ三千五百、今宵が最後と兜の緒と腹帯を締め直し、三条村から討ちかかり、攻撃した。夥しい数の兵馬が三条村に押し寄せ、甲具足の触れる中を馬がいななき、矢が飛びかかった。三条村には森九兵衛好武、松倉弥兵次らの手の者が、火籠を蹴飛ばし、松明に火を付けて、駆けながら本陣目がけて投げつつ、先方の島左門らを先導した。松明は油がにじみ、近づけるとすぐに火が点った。幾らでも、其所、ここに、束にした薪の山がある。辻々の角は、真昼の様に明るくなった。

赤沢長経の本陣は時ならぬ、戦いに上を下への大騒ぎになり、混乱の最中手に手に得物を取って、防戦したが、北からの攻め込みが狂った様に激しく、〈馬、馬〉と長経は小者が手綱を渡すのも、もどかしく、馬に乗ると薄手は南とばかり、南を指して、鞭打った。振り落とされんばかりに馬にしがみついて駆けた。大将が鞭を打ち続け一目散に逃げては、たまらない。将卒が我先に先を争って、跡を追った。

「赤沢新兵衛長経殿！　見参」と誰かが、追う声には耳も貸さず、
「南無さん」とばかり逃げ去った。目指すは古市城へ、であった。
「赤沢新兵衛殿は！　古市城へ」報らせが、順盛に届く、
「者共行け赤沢新兵衛は！　古市城ぞ！」順盛も、長経の跡を追った。
「古市も赤沢新兵衛と一緒に葬れ！　目指すは古市城ぞ！」

勝ち戦に国衆の勢いは盛んで、脱兎の如き、長経の跡を追う。逃げる長経の背後から、追い矢が迫る。振り向く余裕があらばこそ、必死でにげた。追い迫る声々の中に、

「古市殿が寝返った、目指すは、長経殿一人ぞ！」

長経は驚いた。今更何所へ落ちなん、南無さんと盲滅法駈けに、駈けた。

京終（きょうばて）から取って帰し、神殿、今市、帯解へとわずかにつき従う敗残の将兵らと共に、敗走を続けた。

「あれ程、大和が治まれば古市によい思いをさせてやると言って置いたのに。」長経は悔いた。長経は馬だけではなく、敵の口車にも同時に乗せられた。しかし、この時は知らず、悔し涙が頬を滴り落ちた。二千や三千の敵兵が一度に来ても、或はそれが四、五千でも互角に戦え、装備も京軍の方が数段よく優れている。矢にしても大和側は敵の放つのを拾って射返す始末。慌てさえしなければ崩れる京師の軍ではなかったはずである。時に古市播磨守澄胤は実際には、長経の後を追って、従っていたが、折あしく、同じく河内から援軍に来ていた畠山尚順の軍に執拗に追われ、はかなくなった。

古市播磨守澄胤が討たれ旗下は総て春日山奥の大平尾城へ走った。澄胤は南都で初めて、銭湯を設

けた男だ。

それはさておき、田の畦や溝に足を捕られ、倒れる者を馬が踏みこえ、逃げに逃げたが、ふと振返ると敵らしきは、遥か彼方、踏み留まれと、太刀を抜いて、制止したが、最早ひと度敗残となれば、命令を聞く者の数は知れていた。我が跨がる馬にさえ、体ごとぶつかる兵がいて長経は、はずみで馬が驚き竿立ちになって落馬した。止め様もない。

再度び跨がったが、鎧の袖は綻び、背中には、一本の矢が突き刺さり、半ばから折れて垂れ下がっていた。

やっとの事で布留川の堤に出た。夜は白々として、将兵には力なく、旗を巻いて東に向かい、柳本（楊本）城へ行く事に決めた。続々と敗残の将兵が長経のもとに集まって来たが、まともに戦える者はほとんどいなかった。柳本城に入った長経は、一息ついたが、長経敗北の報は一日にして、国中を巡り、また、敗戦の報は早くも京師に届いた。攻守の立場は完全に変って、一歩も外には出られず、内堀新次郎を待ったが、援軍は直ぐには来なかった。

柳本城の副将柳本範堯は、予てから沢蔵軒の手となって大和国衆と対立し、長経は、それを当てにしてはいたものの、何せ小さな城で京師の軍を全員収容出来はしなかった。今ここにいるだけでも四、五千を越える大兵力が何で夜襲くらいで破れ去ったものか合点がいかず食糧の調達に明け暮れた。城外に居た京軍は捨て置かれ散り散りとなって何所へともなく落ちていった。

はや、大和国衆の軍が遠巻きに周囲を囲み、蟻の這出る針の穴程の逃れる余地もない有様であった。

柳本範堯は、厳重な囲みを破り、釜口新左衛門、喜島藤五郎など近隣の土豪に遣いさせ、国衆軍を迎え撃つべく、手配りに怠りなく、態勢を固めていた。数日は、敗軍の将、兵を語らずと言うが、長経は、黙して語らず、目に力なく、虚ろな日を送っていた。恐怖を噛み締め、夜も充分な睡眠が取れず、矢傷の腕を擦りつつ、京軍の立て直しを考えもしないで手をこまねく許りの日々であった。

側近達が気をもんだが、漸くの事京師へ当てて密書を認め、側近から、柳本範堯へ手渡された。この城の主は幼く、全てはこの範堯が、取りしきっている。

京からの密偵と共に密書が思わぬ所で国衆の網にかかった。越智衆の手の者が、奈良で捕らえた。情勢や如何に、何時でも発つ、という短いが長経を敬すべく内堀新次郎の書状で丁重なものであったが、何度も長経からの降伏状を突き付けられていた、国衆は、長経の字に真似て、未だびくともせず、ご心配辱なく、さりながら、改めて出軍をお願いするまでご無用にて、またこれ予定の進軍と認め、範堯の臣の何某として替玉を京師へ遣いさせた。一方、長経へは、この度の敗北責任如何にと、詰文の書状にして、直ぐに、大和を平すべし、と認め、京からの遣いとして、これも替玉を送り込み、即刻、返答をと迫った。ここは長居は無用と、露顕せぬ中に、偽の遣いが国衆の元へ帰ってきた。中身は旬日の中に必ず攻撃し、平定す、と認めた紛れもなき虚勢を張った長経の書状であった。目上の命令には素直に従う事が出来ても同格の者には素直にはなれぬ癖があった。京師の内堀新次郎らの方では、聞いていた程の事は無く何時もの長経殿のごうまんさよと案ずるに足りずとして、あっさり、片付けた。

(二)

足の踏みばもない城内は食糧の乏しい京軍の長経と柳本範堯以下釜口新左衛門、江堤喜兵衛、大西源治郎、吉備安武、池内五郎兵衛、安部之高、喜島藤五郎など凡そ六千余人がいた。

一方大和国衆軍は勝利近し、とみた雑軍を含めて、八千余人、釜口新左衛門、喜島らの手から国衆軍へ逃げ込む者もいて、国衆軍は更に増加した。国衆軍の覇気は軒昂で、長経をはじめ刻一刻京軍全体にその危機が身に迫った。

七月二十三日、態勢の整った、国衆軍は今にも、総攻撃に移るかに見えたが、しかし、攻撃はしなかった。

寄騎で柳本城の和田義員の弟、和田の某は旗下を連れて、国衆の中に入った。

「胡散（うさん）な奴」顔色もなんとなくどす黒く、眼の奥に一物ありそうな薄気味がわるく誰もが喋りたがらない男であった。

「何かある」手だれた者なら直ぐ、それと気が付いた。

案の定、その日の軍議が明朝総攻撃と決まると、不審な動きが和田に見られ、左門は、順盛に諮って、手を打った。

その日の暮れ方、そっと一人、陣を離れる者がいた。

誰も咎めるものとてない。あちこちの萱場の影を隠れ乍ら待つ者がいるとも知らず、のこのこやって来た。

二条の藁縄が、上げた足に絡まり付いて、もんどりうって男は倒れた。すかさず、数名の将兵が、組伏せ、がんじ絡めに縛り揚げ、懐の文を取りあげた。

矢張り、中身は、明朝総攻撃と、認めてあった。巧みに半弓を射る、左門の手の者が、今夕総攻撃と、認めた矢文で、柳本城の和田義員宛に射込んだ。

程なく、城方に慌ただしく、夜襲に備える気配がして、まんまと策は成功した。あかあかと、篝火で小さな城が夜空に映し出され策が功をそうする事に左門は好武に信頼を寄せた。

食糧の乏しくなった、柳本城の長経は虚勢で一旦は強がりを云ってみたものの、一日でも早く決戦を敢行して、血路を開き、京表への援軍を要請して、反撃したい意向を持っていた。

一方国衆軍は陣を三里の外へさげ、たった三百五十の兵に二本ずつ、松明を持たせ、夜中七度に及ぶ攻撃を装って銅羅や鐘、太鼓で、嚇し、嚇しては、引き揚げた。城方は馬鹿にされ眠気と苛立ちとで焦燥にかられ明け方を迎えた。

「最早来るまい」城方は一様にそう思ったが、またしても、明けて早々に銅羅や鐘、太鼓が嚇しにきた。

「馬鹿な奴」また来たは、と見ていると、いつのまに来たのか、城の周囲は、夥しい国衆軍が取り囲み、はや、城門で矢戦が、始まり櫓の上から、歩哨が、敵ッと一声叫ぶのと、落ちて来るのが、同時であった。

「敵襲、敵が来たぞっー。」

俄かに馬のいななき、武具甲冑の触れる音、矢弾がひっきりなしに城中へ飛んでくる。

城門の扉を打ち壊すのか、轟音がその度ごとに響き、阿鼻叫喚が、あたりにけたたましく、柳本城将範堯は、自ら鎗をしごいて、城門へ駈けた。

火矢が高き城門を飛越えて、無数に射込まれ、守る兵士の上から、落ちてくる。城門の扉には、幾筋かの火矢から炎と煙が立ち昇り、くすぶりはじめていた。

範堯は、督戦しながら、駈けつけた京軍の将兵数名等とともに、甲斐甲斐しく、内から扉を開いて、二、三百人を率いて討って出た。範堯は、おのれ雑兵そこをどけ！　とあたるを幸い蹴散らせて、寄手の騎馬の士を目指して突き進む。見れば立派な青糸威しに、兜の頂にとんぼを設え、威風堂々の若武者と覚ゆる、一騎、健気にも範堯を今日の手柄の敵にと長柄の鎗を振りあげて向かって来る。味方から射かける矢をものともせず、しころを下げて、既に範堯にぴたりと鎗がつけられた。

「猪口才な、痴れ者！」範堯は叫んで名を問うた。

「戦場の習いも知らぬ愚もの、人の名より先に名乗れッ！」

「口達者の青二才！　知らねば教えてくれん！」我こそは柳本範堯なり、と名乗りの最中に又一騎、その敵をお渡し候えとばかり、若武者が割り込んできた。

「国衆には手練の将はなきものと見たり！　二人揃って冥途へ行け。」と範堯は二人に鎗をつけた。

「青糸の名は、なんと！」

「おのれ無礼なへなちょこ範堯、筒井の浄明以来の法印順盛嫡男藤王丸とは、わが事なり！」と叫ぶ

細川家略

……頼春―(2)頼之
　―(3)頼元―(4)満元―(5)持之―(6)勝元―(7)政元―(8)澄之（九条）
　―詮春―義之―満久―持常―(9)成之（澄元）

畠山家略

………(3)満家―(4)・(6)持国―(7)・(9)義就―(11)基家―(12)義央（在氏）
　―(5)持永
　―持富―(8)・(10)政長―尚順―稙長（傘下河内遊佐氏、大和筒井氏等）

＊(7)・(9)義就は(4)・(6)持国の妾腹の子であり、持国の晩年に家臣が二派に別れ家督争いが起きた。やがて応仁の乱の元となる。と言われている。

筒井家　系譜　右大臣内麿十男筒井順武後胤

筒井与太夫順武
　順快
筒井順覚―順弘
　―成身院光宣法印
　―尊覚
　―大東
　―順永（舜良房）―順秀（隆舜房）
　　―順尊（順良房）
　　―身成院順盛（姉は遊佐河内守長直室）
　　―安楽房
　　―順賢（良舜房）
　　―順興（藤王）―女子（順興長女小田切春次室）
　　　―順昭（栄舜房）
　　　―女子（飯田頼直室）―頼能
　　　―女子（森志摩守好之室）―縫殿佐好高
　　　―順国（慈明寺養子）―定次
　　　―順弘（福須美養子）―定慶
　　　―女子（十市遠忠室）―遠勝
　　　―女子（明山直国室）
　　―女子
　　―女子（順国室）
　　―女子（順弘室）
　　―順慶陽舜房法印―定次（羽柴侍従伊賀守）順国の子
　　―女子（箸尾為春室）
　　―女子（片岡春利室）
　　―女子（山田順武室）
　　―女子（小泉四郎左衛門室）

や範堯の胸元眼がけて鎗を突きだした。

「藤(ふじ)ボン！　鎗は未だ早い、そなたの母者(はわ)の乳首でもシャブッテ来んかい！　下手糞、鎗はこうして使うもの！」範堯は交して、逆に突きかえす。

「御曹子、ここはこの好頼が！」ハッシ、と横から受けた森好頼は、持っていた鎗を範堯に投げつけ、怯む隙へ太刀を抜き払って、馬腹を蹴(け)って飛び込み様、範堯の肩先へ斬り付けた。

切られる範堯ではない。

「味な事を！」打ちつ、返しつ、する内に京軍将兵が殺到し、国衆も此所が先途と、両軍あい乱れ、一刻ばかり、もみあった。おりしも、続々と国衆軍は、寄せ来たり、城門を挟んで押し返し、城側は引き鐘を合図に城門を閉じようとするが、そうはさせじ、とおいすがる。その中国衆軍も、今はここまでと、引きを鳴らして、ひきあげた。双方に四、五十の犠牲者がでた。そのあと妙な太鼓と鐘の響きがして、大手門に眼を向けたが、さしたる、寄せ手ではない。五月蝿奴めどうせ大したことはない。

騒ぎは、大手門でより大きく、再び太い丸太を抱えた二組の雑兵の一団が、扉に向かって砕けよとぶち当った。

「よし、来たれものども、鎗の錆に。」してくれんと城の将兵は威きりたった。

（三）

時ならぬ声があらぬ方角からきこえ、範堯は気付いた。まさかと思う、からめ手からであった。

「スワッ、敵は後ろにも。」縄梯子が土塀に幾筋にも、絡みつき、戦いは表とは、打ってかわった物凄さ、島右馬助友久率いる無数の敵が土塀を越えて各々得物を取って踊りこみ、そこは修羅場と化していた。範堯はあまりの事に呆然とし、すぐさま下知して、味方を呼んだ。両軍でひしめく城内は、やがて、国衆軍の勢が徐々に、城方を押しはじめた。範堯はひるまず得意の鎗をしごいて、蹴散らした。およそ半刻、寄せ手は、狭い城内でこれ以上攻めても、同志討ちになり、利あらずと引き鐘を合

図に、引き揚げた。

ややあって、城門に大声で叫ぶ者がある。

「それがしは、筒井の衆、島左門友広である。柳本範堯殿に物申す。」貴殿らは最早風前の灯しみである。時に利らず、赤沢長経、ただ一人の為にあたら将兵の命を無駄にせず、長経一人を引き換えに、その他の全将兵の命は、無事とする。故に投降をすべきだとして、降伏を勧めた。

「筒井の糞坊主めらが、物の理を弁(わきま)えず己(おの)が生命(いのち)の為に、人を売る程この柳本範堯、堕ちてはおらぬ。我等一族、恥を知る。一兵に至るまで、死すとも、投降はせぬ。我等が浄箭受けて見よ。」と、怒鳴りかえし言い終らぬ中に目にも止まらぬ早業で左門目掛けて弓に矢をつがえてサッと射た。一閃を払って、左門は矢を避け、

「ハハハ、既に骸骨(むくろ)となった者の矢がこの左門に当ってたまるものか、よーく聞け、国中至る所、畏き御手の届かぬはなき、この御世に、この乱暴誰が許しておくものか、いざ出て、この左門の鎗を受けて見よ！」

「おゝ」と応えて、範堯は、鎧袖一触(がいしゅういっしょく)、蹴散らしてくれんとばかりに単騎、左右に城門を開いて、これに応じ、

「エィッ」オウ、と遣り合ったが、もとより左門の敵ではない。二、三合の暇もあらばこそ、跳ね揚げられた鎗が、宙に舞い、見上げた範堯はいつ現われたか三、四騎に網を掛けられ呆気なく無念の一言、言う間もなしに猿轡を噛まされて縄を打たれ囚われた。捕らえると範堯を抱えた一群は、有無を

云わさずサアッと引き揚げた。範堯は悔し涙で頬を濡らし憐れ、国衆軍の虜となった。見ていた、城方は、それっと討って出たが、勢いのついた国衆軍に阻まれどうにもならなかった。

引き揚げる城方へ越智石見守が一軍を率いて追撃し五十余人を討った。城方からも、一軍が出て、暫くは戦ったものの、双方引きを合図に二つに別れ、その日はそれで暮れた。夜に入って十市兵部大輔遠定が夜襲をかけ代って、箸尾兵部輔時兼が再び攻めた。楢原、片岡、明山等の諸将が、これに続き城方は朝まで一睡も出来なかった。大手、からめ手の橋は既に焼け落ち、文字通り城方は孤立無援になった。今や勝手知った柳本範堯はおらず城方は八方塞がりとなって、朝をむかえ翌朝は雨になった。下級の将兵は宿る場所もない。肌寒いその日は京軍に幸いであった。国衆軍は雨の戦いを避けて城から距離を置いて陣を張った。この間にと焼け落ちた橋を城方は寄木で大手に俄造りの橋を架けた。

猿轡を嚙まされた範堯は、大きな民家の土間に胡坐をかいて座らされ、入れ替わり立ち替わり、説きに来る大将達をにらみつけ、降る風もなかった。

順盛は、床几に坐し、範堯にも座を与え、

「今更降伏せよとは、言わぬ。」しかし、同国の者同志が相争わねばならぬなどと言う事は、世を怨みても、余りある。

「貴殿は覚悟の程としてよいが、ただ、命のまま、従う将兵は、かわいそうではないか、ここは一つ皆の者を説得して、無事それぞれの親の元へ帰してはやれぬのか。」

それまで、あらぬ方角を見ていた、範堯は親の元と聞いて項垂れた。既に範堯は親もなく、ふと脳

裏に父母の事が想い出され、心が動いた。順盛の馬鹿丁寧なもてなしも、それまでわざとらしく思えたのに深い情が有難く思えてきた。

「この国衆も全ては他人、とは言えお互いの家の子郎党が憎かろうはずもなく。」ここで討ち死にしたとて、誰に悦びが残る。京は京、大和は大和、未だかつて国衆がこれ程の結束をした事がない。長経の命運は最早尽きた。無駄に郎党を死なせて何の棟梁ぞ、柳本範堯の名が泣きはせぬか、順々として説いた。項垂れて範堯は聞いていた。順盛は床几を離れた。

置き去りにされた範堯は眼を血走らせ一点を仰いで凝視していた。幼き主の顔が泣き崩れ、右往左往する郎党の姿が脳裏に浮かんだ。

風邪に冒され、高熱を発し、うなされて、気付いた時には、農家の板間の蒲団に深々と範堯は寝かされていた。捕縛は解かれ、枕元には、具足が我が身の太刀と共に静かに置かれていた。とっさに太刀を握り蒲団に起き上がって、敵はと見れば、女が一人、髪を振り乱し仁王立ちになった形相の物凄い範堯を見て震え上がっていた。

「し、しばしお待ちを！」女はそう叫ぶと、土間を目指してころげ落ちるように去った。

知らせを聞いた順盛が、島左門を一人連れて丸腰でやってきた。

「陣中故ご不便をかけて、済まぬ。加減はどうか。」と尋ねた。範堯は見構えたおのれを恥じた。

「辱く、御礼申す。」

「なんの礼など」申されずとも、お互いじゃ、と順盛はにこやかに言い、まだしばらくは寝ているよ

うにと付け加えた。

「有難うござる。御礼申し上げる。」と繰返しながら坐り直して、範堯は改めて礼を言った。粥の膳が運ばれ、範堯はその心配りに感泣した。その様に何はなくとも、温かい持てなしを受けたのは、幼き日、母がいた頃以来の事。粥をすすりながら、しみじみと範堯は涙ながらに、真心を謝した。それでなくとも親のことを云われて慕情が湧き何と無く人とは憐れなものよ、等と思っている所へ大体粥を出すときに順盛は一切の塩気を抜け、と命じてあった。興奮と空腹の中に範堯は食事していて気付かなかったが塩気のないものを数日食すと無気力になり、気弱になる。

「かさね重ね有難うござる。」借りてきた猫のようになり心を開いた、範堯は国衆に降り落城まで筒井の陣中に客として、しばし留まった。降れば賓客のもてなし、下へも置かぬ扱いであった。

(四)

「敵は範堯を失い、兵の勢いは、低下するばかりです。範堯なき今、敵長経は再起を期して逃亡いたしましょう。」

「ウーム」

「敵をどこへ、遣るか、こちらで逃げやすくしてやらねば、なりませぬが。」島左門が問う様に云った。

「ウン」

「明日の首尾は如何が、成りました。」

「明二十五日総攻めと相成ったは。左門の言う通り逃げやすくする事とはなったが。東山へとなろう。とは決まったが、もう一度今宵に再び、軍議だ。」と順盛は左門に言った。

「…………」

「和田は始末したが、未だ策が洩れておる。」

「油断がなりませぬな、策が洩れては。」

「今宵は越智、箸尾、十市、とわしだけじゃ。」主だった者だけで袋の鼠を退治する策を計るのだと順盛は言った。

「南は越智、西は箸尾、十市、北が、我等となろうな。」

「無理にでも東へ行ってもらわねば、なりませぬ。」

「お呼びでございましたか」順盛と左門だけがいた。

「呼んだのは外でもない」これから、松倉らと共に二百余りを率いて、都祁(つげ)へ発てと森好武へ順盛は命じた。

「既に龍王山へは、十市の中尾兵部らが三百余りを率い、山辺へは越智の萩原右近が、福住へは、筒井道秀が二百余りと。」発つ事になっていた。

「赤沢長経の出る前に先兵が出ようと存ずる」

「左様、多分長経の出る前に先兵が出よう。」

「柳本城の三方は既に囲んだ」

「城の三方から攻めに攻めて鼠を追い出す手とするしか、方法はない。」

「遮二無二攻めて追い出すか」

「先兵が出たら、しばらく間を置き、長経らしき者が出れば、とことん南の越智殿と北の我らとで、無二無三に両側から攻める。」

合図は大太鼓三つ、順盛は言った。

「よーし、明払暁を期して。」

夜は一晩中あかあかと火を炊き、嫌が上にも国衆軍の勢いは盛んであった。柳本城の一方の南は越智玄蕃頭家教及び同石見守外に寄騎の穴師、箸中、東田ら、西は箸尾兵部、十市民部大輔遠定に沢、海知、檜垣、北は筒井順盛らを後方にして前軍は島左門が騎兵凡そ三百五十騎、筒井藤王丸ら五百余人が、長兵寺に陣し、近き社のあたりから、三昧田萱生の林の中まで兵を隠し、払暁を待った。

たまらなくなった、赤沢長経は、明け方を待たず、道案内を申し出た喜島藤五郎が指揮する三百余りが、決死の突撃を以って、城門を開き、国衆軍を突破したのを見てこの機を逃すなと勇み立ち、赤沢長経は、無駄死にするな、後の者は、ここに残れ、いずれ十日の内には再び大和を恢復す、と残る大半の将兵に告げて、馬に打ち跨がり、まだ明けきらぬ闇の中を一千余りの将兵と共に喜島の跡を追った。国衆軍はこの様な事もあろうかと、喚発を入れず、喜島の通った道の両側に赤々と松明を灯し、城から飛び出した一千余りの将兵に撃って掛かり、長経と将兵の間に割って入り、分断した。大混乱

に陥いる両軍の凄絶な戦いがくりひろげられた。長経はその間に難を逃れて、東山中に取り付き、必死で逃げた。一千余りの将兵の一部は血路を開いて落ち、或は討たれて屍を晒し、更には城に引き帰して果てる者がおびただしく、見るも無惨であった。長経も兵を棄て、一昨日の雨のぬかるみに馬を放ちボロボロになって、登り道を馳せた。谷沢の水をくらい、青柿の実をしがんで吐きすて、腹をこわし無精髭の裏成りの青顔はひずんで、苦痛が全身を被った。和田義員や喜島藤五郎に離れて一人となり、龍王山で十市の将、中尾兵部らの兵を見て、迂回し、どこへともなく、潜伏した。

国衆軍は草の根を分けても捜さんものと、秋草の野くれ山くれ露を分け八方に兵を出して追ったが長経の行方は知れず、大がかりな捜索にもなんの消息もないままであった。七月二十八日、赤沢新兵衛長経は漸く初瀬に近い、和田村へ出た。食もなく、髪を振り乱し、太刀さえも金色に輝く金具のついた鞘だけが辛うじて腰にぶら下がっていた。和田村に落武者が一人とだけ報らせが入り、山岳の嶺々にいた国衆軍はこれを聞いて色めき立ち、農家に潜んでいた宿敵赤沢新兵衛長経を漸くの事で捕らえた。

弱々しく知らぬと応える赤沢新兵衛長経を高手小手に縛り上げ、国衆諸将は永正五年の八朔の初瀬に集まり二日宿敵赤沢長経を切った。季節外れの秋桜が一ひら風に散った。一方柳本城はそのまま範堯に預け、国衆諸将は以後の盟約を誓い勝利を祝って、全て居城へ引き揚げた。

凱旋

(一)

筒井に帰城した順盛は、全家中の将兵を集め飽食し、ようやくの事に赤沢長経を討った祝盃をあげて、労ったが悦びに引き換え多大の将兵を失った悲しみは惜しみても余りある事であった。折角、生きながらえても戦いに受けた傷の為その妻子の顔を見る間もそこそこに、果つる者がいた。

暫くは京師もその戦いは、大和を忘れ小康を得た。

神仏の加護の元、主家の弥栄を祈り子の好為、好頼や松倉弥兵次の事、そのほか郎党の行方を頼みながら永正七年正月、森九兵衛好武は馴れぬ戦いに従軍の揚句病を得て、世を去った。順盛より七、八つも若い好武の死は、殊の外辛い事であった。順盛は時折、床に伏した。戦いにも飽いて体力も優れず、幾分無気力になっていた。

十七になった子の藤王丸に順盛は期待を寄せ、折にふれて、戦のあれこれを教えた。興福寺一乗院へ伺候したり、春日社へ詣でて、国の平和と身の安泰を祈りつつ日を過ごした。

「永正八年辛未冬十二月十六日……興福寺維摩会始マル……」しばらく中断していた維摩会が勅使を迎え、とり行なわれる程静かであった。

永正八年（西暦一五一一年）と言えば、順盛は五十五の歳を数え老いるのも当り前であった。

成身院に寄った後、奈良の筒井の館の近くにある、棉と酒屋を営む豪商棉庄の岸庄左衛門宅の離れ屋で順盛は島左門の子友武や父森好武の跡を継いだ森嘉一郎改め九郎尉好為、松倉弥兵次ら若いわずかの供を連れ酒肴のもてなしを受けて寛いでいた。

愛想好く迎える娘のタミの酌が気に入り主人の庄左衛門に何か歌えなどと言いながら、酒屋や味噌屋は何所にでもあるが、奈良を引き払い、筒井へ来ぬかと庄左衛門を誘った。

武骨ものばかりでは、味気ない。

「……げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる……」羽衣の一節を見覚えたタミが舞い、酔眼もうろうの順盛は天女を見詰める様に眺めていた。

「筒井へは来ぬか、これ天女……」順盛はそれこそ妙な節を付けてタミへ、そう呼びかけると、すかさずタミは、

「あ〜らうれしやな、我が君の……」と返して一同打ち解けた。

「我が君はせがれじゃ、わしに似てがんおうびちょく。」

「エッ！　がんおうびちょく？　……」

「アハハハ……」

「つまりはな、眼横鼻直とは、目は横に二つ、鼻は真直に顔の真中に一つ……」

「オッホホ……」当たり前の話で二人は笑っていた。

大声をあげて、足早に長い廊下を店の番頭が走ってきた。

ただ事ではない。突っさに廊下に出た若武者四人が離座敷の戸口の刀掛けに手を伸ばし、順盛の周りに、集まった。

「待て、慌てるな。」順盛は抑えた。藤王丸らの三百余りが興福寺内成身院にいるが、直ぐには時の間に合わぬ。若武者の中でも年嵩の松倉弥兵次へ、

「見て来い」順盛は命じ、松倉弥兵次は急ぎ足で去った。簾から店先の土間の様子を覗いて見ると、武士らしい酒に酔った、ふたりずれが、平伏して、断わる庄左衛門へ

「娘のタミを出せ」と息巻いている。古市の郎党らしい。いつの日か、酒を買付けに来てちらっと見た、その男が、一目惚れしたらしい。ここでタミに酌をさせろ、ここへ出せ、としつこく、グタグタ繰返す。

「どちらの衆か存ぜぬが、娘のタミを出せ、とはお門違い。」店へ顔を出すと、松倉弥兵次はたまらなくなって、主人があの様に勘弁を申し出ておる、許してやってもらえないか、と鄭重にそう言ったが、二人の武士は急に現われた、弥兵次を見て尚いきり立った。

「わけの知らぬお主に関わりのない事、下がってもらいたい。余計な口出しは無用！　怪我のせぬ間に下がっておれ、下がらねば、お主を切る。」とすごんだ。

「貴殿の方で無用でも、こちらはそうはゆかぬ。」静かに弥兵次は対応しながら、どう諭しても、

「やかましいわい、引っ込め。」と大声で喚き、庄左衛門はただおろおろするばかりで、どうぞあなた様は関係がない故あちらでお休みをと弥兵次に勧めたが、一人の武士はわが朋輩の為になにがなん

でも、と勢いあらく、もう一方は刀に掛けても、と土足のまま、今にも上へあがりそうな勢いであった。これ程穏やかに申しても判らぬか、愚かな奴め、

「表で人が大勢見ておる、エエ加減にせぬか。」一喝した、堪忍袋の緒を切った、弥兵次は遂に、あがろうとした、二人の衿がみを両手で掴み、表通りへほうりなげた。

大通りで砂を被った二人は立ち上がって太刀をぬき、

「よくもこの、俺をかくまで馬鹿に。」それがし一人で充分だと、いつの間にか傍に来ていた九郎尉好為に太刀を預けた弥兵次は、側にあった、店の天秤棒を借受け、にこりとして、久しぶりに腕がなると、表へ出た。

「下種ども、覚悟致せ、少しは痛いぞ！　馬鹿者共めが。」

「怖気づいたか、かかってこい、この鰯侍！」

「おおきなお世話、今この俺様が、片付けてやる！」キラキラだんびらを振りまわし、真赤になって、怒鳴る二人に弥兵次は、群がる見物の人垣に危ないからと、遠避けて、ゆっくり二人に近づいた。勢込んだ一人がやにわに太刀を振りかざし、弥兵次に討って掛かった。ゴンと鈍い音がして、天秤がその頭を打った。

「グフェッ！」刀を落として、前にのめり込みばったり手をついてそのままグッタリとして起き上がらず、

「ギァオッ！」と奇妙な叫び声をあげながらもう一人がその隙を突いて打ち掛かる。

「心得たり！」と弥兵次はその小手をハッシと、これまたしこたま叩きつけた。わずかにその間、またたくあいだの出来事であった。群衆が諸手をあげて拍手喝采し、あっけない始末であった。小手を打たれたその男は、痛さに渋顔をひきつらせながら健気にも、小刀を抜き振り向き様に再び打って来た。サッと交わした弥兵次は泳いだ所をうしろから、またしても、天秤棒で腰のあたりを横に払った。「ウーン」と一声うなるとそのまま気絶した。

「頼りない奴らめが！」弥兵次は狼藉者を退治して興奮さえもしていなかった。店に戻ると庄左衛門に水を求め二つの桶の水をくたばっている二人の頭に浴びせ掛けた。気がついた二人は弥兵次に名を問われ、怖くなって止むを得ず、震えながら恐る恐るようやく名を告げた。

「古市丹波の子、狛三郎。」もう一人は、都築甚左衛門某と言って、名を告げると戦う気力もなく、覚えていろと悪たれをつきながら、だらしない同輩と刀を納めそそくさと人垣にまぎれ込んで逃げた。

何事もなかった様に弥兵次は順盛の居る部屋へ戻ってきたが、盃を傾けながら子細を聞いていた順盛は庄左衛門にこのままでは済まず、奈良を引き払い、筒井へ越せと勧めた。棉庄の番頭が、事の子細を成身院に居る藤王丸に知らせに走った。狛三郎と都築甚左衛門は奈良市中にいた古市の郎党十数名を掻き集め、再び庄左衛門の店先へやってきた。順盛はどれどれと、まるで何かおもしろいものでも見る様に店の土間にある台を椅子にして、どっかりと懸けて高見の見物と洒落込んだ。松倉弥兵次、島友武や九郎尉好為、矢追敏勝らが、太刀をたばさんで表通りへ出ていった。

「しっかり致せよ！」これ位の敵にやられる様では、見込みがないぞ、と順盛はニコリとして友武や

九郎尉に云った。弥兵次は嶺打ちにして、ついでにこいつらを生け捕りにし、一緒に、筒井への土産にしようと、小声で、ささやいた。皆首肯いて、よおしそれはおもしろいとばかり合槌を打ち、

「天秤の方がよい！」九郎尉好為が店に取ってかえし、

「それがしも」島友武までが、得物を天秤に替えた。

「何をしている、用意は出来たか。」狛三郎らは罵った。

「どつかれるのに、慌てるな。」弥兵次は応えて、

「ソレッ」四人は敵に向かって散らばった。

「敵は四人ぬかるな、ソレッ」双方で乱闘となったが、口程でもない、狛三郎らは弥兵次ら四人になんなく、たちまちにして、手際よく、片付けられた。都築甚左衛門はそれと見て慌てて逃げ腰になった。

「逃げるか卑怯者」そうは、させじと九郎尉好為が甚左衛門の肩先目がけて天秤棒を打ちつけた。

「グッア！　イタッ」声にならず、立ち上がれずにへなへなと座りこみ、しばらく小刻みに動いていたが、気絶した。砂ほこりも立てずに、逃げた一、二を除いて十一、二の者が、既に気を失っていた。

「らちもない事」棉庄の番頭が、藁縄を持ってきてニコニコしながら、高手小手に縛り上げ、店の土間一杯に背併せに坐らした。

「どうだ、懲りたか、ふ抜けどもが。」順盛は台の上で、そう言ってから、岸庄左衛門に直ぐ仕度し

て、我等と共に筒井へ行こうと急きたてて、十数名の番頭手代らに用意をさせ、二、三十台の車を牛に牽かせて摑まえた古市の者らもそれに積み込んだ。えらい事になったと渋る庄左衛門に家屋敷を棄てさせた。そうこうする中に成身院から藤王丸らも駆けつけ、筒井の城へその夜中に帰りついた。

一方、春日山奥の大平尾城の古市では、古市丹波守の子や郎党が三日を過ぎても帰らず行方が判らない。奈良に使いを出して消息を調べて見ると馬鹿息子共らの連れ去られた事が判り啞然とした。取り返そうにも、播磨守澄胤なき跡、兵力は恢復せず、しばらくは手の施し様もない。

一月（ひとつき）余りもして、頭を丸められた狛三郎、都築甚左衛門ら全員が帰ってきた。

（二）

順盛の命ずるままに岸庄左衛門らは、娘タミが紀代と名を改め藤王丸の側近く仕え、為にしばらく商いも出来ず、城棲まいをしていたが、のち城外へ移った。

順盛は筒井城の濠を浚い土塀の改修をした。また、均衡を崩さぬ様近隣と和し、越智、箸尾、十市、片岡、布施、高田らの諸将と往来を密にし、また近郊の砦や、村落を目立たぬ様に要塞化して、情報を集め、いつ始まるか判らぬ戦いの準備に心懸けた。

近頃、越智氏が、盛んに都との間を往復して、その都度将軍家の祝事、或は今日は東大寺や春日詣でにと事寄せて、古市氏と誼を交わしているらしいと判ったのはそれから間もない事であった。再び雲行きが怪しく。

父家令の喪が明けて半年、永正十三年十月の六日越智氏が、盟約を破って、古市氏と攻めてきた。

事の起こりは、越智が箸尾と境界の接する僅かの水路をめぐって十市、高田らを巻きこみ箸尾が順盛の風下に立ち、強くなびく有様に危険を覚え、古市も遺恨を晴らす好機到来と、連合して、攻めて来たのであった。

筒井蔵人、同大炊、同内蔵助、同善印房、同伊豆、同七郎、同宗扨、同勘解由など一族を筆頭に島左門友広、同友久、同友満、森九郎尉好為、同好頼、松倉弥兵次改め右近重利、同弥七、柏木甲斐、八木近江近俊、山田大和、矢負河内助敏宗、同敏勝、楢原監物、同山城、赤松義実、同浄快、大安寺兵三郎、津田兵衛、番条嘉門、穂積壱岐、中上淡路、岡村摂津、麻田日向、吉村和泉、佐々木兵庫、安堵左近、今村飛弾、喜多二郎兵衛などおよそ、城内三千五百、城外に柵を設けて、二千八百余人が、《いざござんなれ》と待っていた。

柵外の先鋒は家中一番、勇猛果敢な島左門友広を筆頭に松倉右近重利、森九郎尉好為ら五百余人が戦端の開かれるのを今やおそしと手ぐすね引き待構えている。

敵、越智の先陣奥田丹後守景高率いる五百余りと島左門友広、松倉右近、森九郎尉ら五百余人がまともにぶつかった。右近重利は一丁余りに迫った敵陣目掛けて馬に一鞭当てた。

（三）

松倉右近重利に続いて一軍が付き従い奥田丹後に迫って、鎗を交わし、たちまちに丹後の頸をあげ

た。それと見て、丹後の弟信行が、右近重利を仇と狙って挑んできた。得たりと右近はあっさり鎗を叩きつけたが、数名が右近に矢を向け一斉に射た。矢を受けた右近は、我が身は避けたが、馬の首に一矢が刺さり棒立ちになった拍子に落馬した。六、七名の将兵が一度に飛びかかり、右近重利は切られて気を失った。危急を見て、右近に続いていた、森九郎尉好為兄弟が、信行を撃ち、丹後の頸を拾って、馬を寄せて重利の腰帯を摑むと我馬の背に乗せて、尚も怯まず、敵陣深く縦横無尽に突き進んだ。

城外の柵にいた、柏木甲斐、佐々木兵庫らが島左門に率いられ九郎尉を撃たすな、とばかり討って出た。九郎尉らは、越智石見守を目聡く見つけ、戦いを挑み、兄弟が左右から攻めに攻めた。たまらずと知って、石見守は騎首を返し、駆けた。なんの逃してなるものか、

「卑怯者！　返せ、石見殿！」九郎尉らは叫びながら追いすがる。石見守が

「そこをどけ！」と自軍の道を開けさせて逃れる。真後ろから九郎尉らが人垣の切れた道に続いて飛び込む。

それまで逃げていた石見守はくるりと向きを変え様、素早く横へ大きく一閃、鎗を振るった。続く九郎尉との距離は一間余り、まさに九郎尉は一閃を食らうかに見えたが、間一髪さけかくあるや知れぬ、と覚って今こそその時、

「エイッ！」懸け声諸共その一閃の手許を槍でしこたま打ち叩いた。

「ウワッ！」打ち据えられた右手を石見守は吻に持っていった。九郎尉の後にいた弟好頼が石見守の馬に体当たりを喰らわせ、すかさずひるむ石見に組付き重なって、二人は地面に落ちた。

九郎尉も右近をのせた馬を下り、石見の頭の鉢に力まかせに鉈で、ぶん殴った。周囲は敵の雑兵が十重二十重にとり囲み、右左に九郎尉と弟好頼の隙を突こうとする。雑兵にかまってはいられないが、多勢に無勢、目をまわした石見守を奪い返した数名の雑兵が担いで逃げ出した。そうはさせじと争う中にようやく旗下が囲みを破って、兄弟の周りに駆けつけた。兄弟は再び馬に乗り、味方に右近を預け

「好頼！　ぬかるな」兄弟は石見守の跡をまたしても追った。

石見守の片方の足を担う雑兵の脚の関節の裏側を槍の穂先で馬上からついた。後ろが倒れると、前に進めず引きずられて前も倒れる。担っていた雑兵を払い退け、好頼の馬に素早く括りつけて、

「森九郎尉同じく弟好頼！」兄弟で越智石見守を生け捕ったり、大音声で叫ぶとくびすを返し、味方と共に戻り始めた。

「森兄弟待て！」と越智軍から声があり、振り向くと一騎が背後に迫っていた。

「九郎尉殿！」その敵は引き受けたと味方の柏木甲斐から声があり、宜しくと会釈して、その敵を預け好頼らと引き揚げた。越智石見守を生け捕られたと知った越智軍は、総勢三千が一度に攻め来たった。城方からも諸将が出て激烈な戦いに及んだが勝敗はつかずその日は分けた。

奥田丹後の首と縄目を受けた越智石見守を見据えた順盛らは松倉右近の屍の様な姿に悲喜の思いは複雑であった。

翌日は夜明けと共に銅羅を打ち貝を鳴らして、双方が攻め合ったが、人質を取った筒井軍に利があり、敵には身の入らぬ、戦いとなった。島左門が七百余人を率いて先陣を努め、先駆けの一団には、

昨日に続き森九郎尉好為兄弟、八木近江、今村飛弾、番条嘉門、吉村和泉らがしたがい、越智に攻め込んだ。

「あの紫威は誰でござろう！」

「古市周防守では」

「御免！　古市殿はそれがしが」言うが早いか森九郎尉好為兄弟が群を離れ、馬をせめた。

「待てまて！」無理をするなと島左門が止めたが、その跡を番条嘉門、八木近江らが続けて駆け抜けた。

「古市周防守殿！　見参！」番条嘉門、八木近江らが周防守に近づいた時には周防守は防戦に必死であった。そこへ新手が加わり四方から攻められた。

「四人がかりとは卑怯なり！」

「ぐだぐだ言うな！」

「おゝい生け捕りだ！」生け捕りにしろ、

「それ！　肩だ！」肩を狙え、

「それ！　右だ！」右を狙え、口々に叫んで敵の隙を突いた。たちまち打ち込まれた周防守はなされるままに捕らわれた。

「それ！　引け！」唖然とする敵を尻目に島左門は味方を引かせた。

敵の越智家教、同玄蕃、同家全と古市胤継、同丹波守ら一族の連合軍は数日の間、遠巻きにして攻めて来ず、敢えて筒井軍も深追いせぬ中に、遂に引き揚げた。

筒井順盛は涙の中に深傷の為に屍の如き右近重利の姿を憂えた。松倉右近重利には娘があり、これを機に筒井家から婿を入れ右近政秀とし、跡目を継がせた。森九郎尉好為は軍功赫々で縫殿佐を名乗り順盛の一字を授けて好順と称し、島左門を左近に改めさせ賞すると共に以後代々左近と称して戦国の世を生きた。筒井三老の曽祖達であった。森縫殿佐好順は父好武に比べ、早々と戦場に出て実戦を踏み越え戦史を修め取分け好武がかつて慕っていた劉杜漢氏から受けた軍学や史略を修め武勇にも優れ一門の筒井家には掛けがえなき武将に育っていた。そう言えば、大和にいてもどうにもならず劉杜漢氏と施文素の二人は永正五年の秋、支那の商人林文華を頼り堺へ去ったと言う事であったが、その後の消息は遙として判らなくなっていた。

間者

(一)

永正十四年秋八月、順盛とその子の順興らは昨年来の越智家教、古市丹波の両氏に対し深傷を受けて、生きた屍の如き松倉右近重利の仇討ちと称し、出兵の準備をしていたが遂に意を決して弔い合戦の為出陣に際し策を謀った。

「因みに右近が倒れて一年になる。その犠牲を無駄にしてはならぬ、この際徹底して、討砕くべし、

半月後に越智を攻めるが、どうだ。」不具戴天の敵、断じて許すまじ、と順興に言わしめ、順興は語気を荒くした。順盛の子藤王丸は順興と称し今やこの時二十四歳になっていた。

「如何なる策やある」順興の声に大安寺兵三郎は末席で順興の目を追っていた。云おうか、云おうまいか、粛として、咳わぶき一つとしてない、静寂の大広間である。二十歳にも満たぬ若い兵三郎は自分の意見など誰も馬鹿にして耳を貸しはせぬ。否！　しかし、この策は必ず敵をつぶすはずだ。とつおいつ、ためらっていた。地勢、敵の布陣、駆け引きの全てに熟考を重ね、ようやくこの策なら間違いはない、これしかないと予てから練っていた。云おうかと思うだけで、胸の高鳴りを覚える。

順興は俊敏で利発であった。人を見抜く事に長けた順興はその末席の兵三郎武範の様子を目覚とくみつけたが、言葉は

「左近！」と呼んでいた。真先に声を掛けて万一、兵三郎がとんでもない事を述べ、恥をかかせてはと云う配慮が順興にはあった。

「あかんか」

「今一つ、まとまりませぬ。」推敲中である、と云うのだ。

「箸尾殿には何か！」この時箸尾宮内少輔と兵部輔時兼が来ていて眼を向けたが、二人とも黙して眼を伏せた。元はと云えば箸尾から出た戦いであった。

箸尾氏と云えば長川党の盟主であり、大和永享の乱で筒井に攻められ後、箸尾宗信の時代から筒井の寄騎とはなってきたが、かつては大和最大の豪族の一つであり順興の室は箸尾氏であった。

筒井の長老、蔵人が宇陀の芳野氏の一族らと呼応して、敵を挟打ちにすれば、と述べた。

「誠に良いお話し考えてみましょう。外に誰ぞ、ないか。」

「…………」仕方がない。

「兵三郎、何かあるようだな、遠慮なく述べてみよ。」

「それがし如きに何の策など、ございましょうや。」

「いやいや、幼少の頃より、そなたの癖はようく、知っておる。何か名案があろう。」

何度も順興は、間違ってもよいのだと促し、彼は意を決した。

「左程までに仰せとあらば」と重々許しを得て愚見を詫び兵三郎は自分の策するところを述べた。

古市氏には、いにしえ程の勢いはなく、勇将の数も少ない。取るに足りない相手ではあるが越智氏には攻める虚を覗かせ虚構の為に箸尾城には日頃に過ぐる旗幟（きし）をはためかし、城外には幾重にも柵々を巡らしてその間に、古市氏を徹底的に攻め亡ぼし、返す勢いで越智を屠うるのだ、と云う策である。

「黙れ！」云い終らぬ中であった。大声が、空を飛んだ。森縫殿佐好順であった。

「お許しがあったとて！」といは言え愚見も愚見黙って聞いておれば一人前の口きき、その様な愚見は聞いて呆れる狂人のたわ言！　と形相も恐ろしく、普段には滅多に見られぬ、想像もつかない怒り様であった。

「何を騒ぐ、お縫！」順盛は撫然として、縫殿佐を叱った。座はざわめき、どうした事か、と口々に戸惑っている。

左程変わった意見ではなかったし、一同の者らはむしろ正論の様に思えてならなかった。

「ならば、縫殿佐には名案があっての事でござろうな！」

それ程言うからには複案があっての事であろうと、筒井大炊が縫殿佐を詰問した。この男は一徹の真正直者であり、武勇も知恵も持ち、一族の中では、信頼の厚い男であった。その男が真赤になって怒っている。

「愚かなものは、愚かでござる！」

「兵三郎のどこが愚かなものか、聞きたいものだ！」

事の成り行きに当の兵三郎はドギマギしていた。兵三郎は自分を庇ってくれる筒井大炊介を有難く思ったが、えらい事になったものだと当惑した。重臣達を巻きこみ、双方の融通がきかぬ。しばらく黙っていた順盛父子は不機嫌になって、縫殿佐の意見も聞かず、誰に云うともなく考えておけ、と一言云って奥へ入ってしまった。

島左近が立ちあがり、お館のおられぬのでは、軍議にはならぬ、明日と云う事に致そうと、取り持って解散した。

「兵三郎、明日までにまた好い手だてがあれば、その時に。」左近が慰め静めた。兵三郎は優しく諭され、帰っていった。

皆が去って、筒井順撰、同蔵人、同大炊介、島左近、右近政秀、森縫殿佐ら極少数の者が、残っていた。

「先程は一体どうした事なのか」と筒井順撰は縫殿佐に尋ねた。他の者も同様にそのいぶかしさを腹に据えかねた。

「いや、申し訳ない、実は箸尾兵部輔時兼の臣と十市民部太輔遠定の臣に、元、喜島藤五郎の残党が二、三人混じり越智へ一早く我等の策がもれてございます。」

「真か、それは」箸尾兵部輔殿はそれをご存知ない。野村義長と言って箸尾殿には厚く処遇され、表向きは才のきく男だ。もう二、三年になるか、近頃殊に重用されている。

「何故今まで黙って見逃してきたのだ」

「気付いた時に直ぐにお館には申し上げたが、黙っておれ、との事。」

「我等にまで黙っておれとの事か」

「それで今日まで黙ってました」が兵三郎の奴、まともにお館のお考えを述べよったは、と左近が言った。

「ではお館は兵三郎の話は危ないと思われたであろう。道理で今日のお館のご様子が妙な事。」と、筒井大炊介は合点したが、しかし、それにしても皆、狂言がうまいではないか、そう言って納得するやら腹がたつやら複雑であった。

だが、その頃越智氏へ筒井の攻撃は半月後と野村の手の者が走っていた。

箸尾兵部と十市民部、片岡和泉守等へは筒井の手のもの二、三人が一組となり下男や下女として、潜り来み情勢に応じて大切な情報を決められた者へ知らせた。

(二)

「越智へ向けて、野村から使いが出ましたぞ。箸尾の屋敷にいるスエが使いをここへ寄越しました。」
縫殿佐は言った。
「予定通りだ」
「扨、箸尾のその野村はどうするのだ。」
「もう一人十市遠定殿の臣にもおります」
「その、もう一人の間者とは。」
「元、釜口の臣明日香(あすか)四郎とか云う者でござる。」
「ウーム、それらは今何所におる。」十市遠定の屋敷はこの筒井にはないので、
「今二人とも筒井城下の箸尾兵部殿の屋敷におります」
「兵三郎は知らぬが既に箸尾の城へは手が打てております」
「どんな手が」
「全てでございますが」縫殿佐は言った。
「全てとはなにが」
「二人をお館に目通りさせるとおびき寄せてあります」
「ウーム、それで。」
「ほかには、箸尾の城ではもう濠も深く掘り直し済みで、何時敵がきても備えは大丈夫、充分でございます。」

「左近様の弟友久殿と、某の弟好頼の二人が五百の兵と共にお館の命で箸尾の城におります。」
「ウーム、そう言えば暫く二人を見ぬな。」
「竹矢来を組み、幾重にも柵を巡らし、いくつもの落とし穴がありすべて菰を被せ終り、例え越智がきても容易に城は落ちはしませぬ。備えは万全でございます。」
「野村と、明日香を捉え明朝切りますか。」
「明朝切るのか」
「これで十日はまず大丈夫でございましょう」
「箸尾の城がか」
「如何にも」左近と縫殿佐は代わる代わる答えて言った。
「おゝすでにそこまで」
「尚明早朝は出陣でございます」
「この度は若殿順興様が総指揮をお取りで、お館は一千余りを率いて祝園、稲八妻の古市の郡代、井上近江守九郎を攻めなさる。一千の中三百五十は騎兵で残り六百五十は歌姫で待機。」
「ご出陣のお布令はなしと言う事か」
「いつもの通り、明早朝の早鐘五つ三度打ちが合図。」
「何時決まった？」

「先程の軍議の前でございます」
「まず、箸尾の城を目指して、二千の中お館の一千余りは柏木村から二階堂までそのまま進み、二階堂から反転して、歌姫へ向かわれる。同じく、二階堂で三千の主力軍も急に向きを変え古市へ向かう。この筒井城には筒井順撰殿が一千足らずで残り筒井大炊介殿の一千余りは松倉政秀に箸尾宮内少輔、十市遠定殿と片岡、楢原等を加えて箸尾城へ、また主力軍の三千には順興様に箸尾兵部輔時兼殿と我等の外、柏木、番条、八木、矢負、菅田殿等で軽装の騎兵三百を主に急進して機を逃がさず春日山裾野の古市城を攻める。」と言う手筈である。
「早い事そこまで」
「各々お抜かりなき様に」城内役宅に下る者、宿直（とのい）をする者、とそれぞれ明日に備え別れた。
直ぐ側まで左近と一緒であったが、別れて間もなく、縫殿佐は人の気配を覚って、足を留めた。
「この城内で、何者ぞ！」縫殿佐は言った。相手は白刃を月影に燦めかせている。
「大安寺兵三郎武範でござる！」
「兵三郎か」
「何用だ」
「お命頂戴仕る」
「このわしを切ると言うのか」
「如何にも」

「面白い。切れるかな。」
「何故あれ程の恥を某にかかされましたか」
「恥じをか」
「…………」
「気に入らぬのか」
「理由（わけ）をお聞かせ願いたい」
「理由などない」
「理由などない？」
「如何にも、理由などない。」縫殿佐は言った。
「ない？　許せませぬ、矢張りお命は頂戴仕る。」
「怪我をするぞ、止めておけ。」
「最早これまで、ご免！　お覚悟！　エイッ！」言うが早いか相手は白刃を振るった。
扇子一本油断なく構えもあらばこそ、ヒラリと態を交わして、飛びのき様ハッシと手許を打ち据えた。秋の月の宵にすだく、虫が音もその気合いに少時らく細く鳴き声を静めた。
「何事じゃ、この騒ぎ何とした、待て。」側の島左近の屋敷へはまる聞こえであった。左近が慌てて出てきて止めた。
「双方引け、縫殿に、兵三郎ではないか、はやまるな。」となおも白刃を振る兵三郎を制止して、左

近が分け入った。

「城内刃傷事はご法度、引け、ただでは済むまいぞ、やるなら、城外の敵にではないか。」と左近が収めた。左近が割って入ったのでは、兵三郎も引くしかなかった。

「我が家へ来い」縫殿佐へは、また明日にでも、と左近は言って兵三郎を連れて、自分の屋敷へ入っていった。

「早鐘五つ三度打ち！　おいっ戦だ。」睡気が残る、早朝の早鐘に将兵は叩き起こされた。早くも、馬の威な鳴き、具足の音、

「未だ軍議のないまま」不思議に思いながらも、城内外から将兵が群がり、配属が島左近から発表されていった。

一方、箸尾の野村と明日香某は直ちに囚われ、牢獄に繋がれた。だが、間者は外にも潜り込み、古市胤継の旧臣、北の市英寿が片岡の旗下につき従がっていた。越智攻めとばかり思い込み筒井大炊介が指揮する一千の兵の中にその日の情勢を古市に伝える事が出来ずそのまま留められていた。

永正十四年八月三日払暁、順興指揮する、総勢五千余人は一路、ひと度箸尾城へ向いた。順興は出陣に先だち、大安寺兵三郎武範を呼び森縫殿佐好順の下で働けと命じ、また今日より後は馬を許すと言って栗毛の用意の一頭を与えた。寝不足顔の兵三郎に縫殿佐は、微笑み、今日の戦さを見よ、と何のこだわりもなくニコリとして云った。兵三郎には何も聞かされず、なんとなく、空々しい、腹立だたしく思われたが昨夜の事は腹の底へ収めて従軍した。

(三)

順興は分銅の旗印に紺地に白抜きの梅鉢紋の吹き流しをなびかせ、さっそうと軍を進め、途中池沢、額田部の間を抜け、柏木村と来て二階堂で兵を分け、急拠反転し、三千を率いて南柳生村から、北柳生村、横田の各村々を通り櫟枝、池田を経て、東へ細い道を取り今市に到り、更に北上し古市城をめざした。今日一日越智が箸尾に気を取られ動かなければ、古市を落とせる。只管、越智を牽制出来ればと主だった者は念じた。

筒井順盛の一千余人の中の三百五十の騎兵は二階堂から反転して、僅か一刻余りばかりで歌姫を越え山田川を疾駆して先に稲八妻の井上近江守九郎を攻めこれを屠り昼過ぎには城を焼いて全滅させた。一部敗走した井上近江守の残党が、古市城と大平尾城へ逃げたが、古市城は既に分銅の旗印と梅鉢紋の吹き流しが埋め尽し敗残兵は散りじりに別れて逃げた。曽て狛の城は筒井の手の大北杉十郎が守っていたが、文明四年十月十六日古市に奪われたままになっていた遺恨の場所であった。

一方、守将古市安房守胤継は、筒井氏不穏の動きを全く知らぬわけではなかったが、物見から箸尾へ向かうと報告があり、実の所少し注意はしていたものの、まさかと思っていた。そこへ突然の攻撃であった。春日山奥の大平尾城の同播州胤重へ使いを出し、応援を求めようとしたが、既に城は取り囲まれ、鼠の這い出る隙間もなく、攻められるに任せていた。

「スワッ！」大平尾城も例外ではなく、井上近江守を破った反す刀で筒井順盛の歌姫で待機していた六百五十を併せた一千余人の軍勢が、恐ろしい勢いで攻めたてていた。

古市城の古市安房守胤継は土塀が打ち破られ城門に火が掛けられ討たれる者数知れず、最早これまでと覚悟を決め、全軍一弾となって攻める順興へ討って出た。
流石に俄かの攻撃にも往年の古市一族、一方の血路を開いて、大平尾城へ走る。後続の者程犠牲が大きく、殿軍を務めた中村刑部、森下十郎、津路時蔵らは悉く討ち死にした。
ようやく、大平尾城の近くまで来ると、とても近寄るどころではない。ついに加茂へ落ちた。安房守胤継は自分一人逃がれるのが精一杯で加茂まで辛うじて従って来たのは百余人であった。
古市城に入った、順興は島左近に手配させ、筒井勘解由、同内蔵助、沢蔵人、明山右近等に三百を残して慌ただしく大平尾城へ兵馬を向けた。
大平尾城の付近には城を出て戦った古市の兵の屍が累々として重なり今や城内には、五百に満たぬ軍勢が播州胤重の下知に従い防戦に努めていた。
夕闇迫る頃まで攻めたが、頑として落ちず、これ以上攻めれば窮鼠猫を噛むの例、筒井順盛は全軍を順興に纒めさせ、一応の大勝利として、直ちに筒井城へ向かい帰陣した。
帰ると直ぐに軍を解き、将兵に幾分充分とは言えぬ休養を与え、明日に備えた。将兵一般の誰もが翌日も戦があるとは思わなかった。
勝ち戦の後には何時も祝酒が配ばられるが、今日はご苦労の一言で終いであった。
翌永正十四年八月四日は再び勇躍して、全軍朝もやをついて、城内所せましと早鐘五つ三度打ちの呼集で集結した。

時雨

(一)

一夜の休息を取っただけで筒井軍は出陣した。
勝利の戦いの機はそう多くない。将兵に弛緩を与えず、すぐ筒井を後にした。
一方、越智氏は古市氏の大敗を知り、箸尾城を手始めに筒井攻めに進軍を開始。
四日の昼下がり玄番頭家教は家全、利元、利之等三千余人を率いて八木にあと、半里の所までせまり双方今日こそ乾坤一擲と勢込んでいた。
「八木から動きませぬ」物見から順興の許への報告であった。昨夜の中に十市遠定、森好頼等は佐保、百済方面に伏兵として潜み、柳本範堯は味間で順興の本隊を待つ。
箸尾城には八百余人が、これも戦備を整え今や遅し、と待ち構えていた。
例え敵に備えがあろうとも、順興は前進を続けた。
竹田から島左近に五百の兵を授け、先を急がせた。
暫く軍を休ませ、筒井順撰、同主膳、同大炊介、同勘解由、同宗択、同覚仙、箸尾宮内、滋明寺主殿、森好順、松倉政秀、布施掃部、沢蔵人、明山右近、楢原監物、八木近俊、番条嘉門、清須美、片岡らを傍に集め敵のいぶかしい動きについて謀った。

「敵は八木から動かぬぞ」と、順興は旗下へ情況を語り、何かありそうだ、とつけ加えた。
「…………」
「敵には我々の知らぬ策があるのでは」各将は意見を述べた。
「迂回して筒井の城へ別動隊が、向いているのでは。」
「ウーム、かも知れぬ。」
「森好頼殿から、伝令が、参ります。」
「ナニ、伝令が、か。」
「あれは確かに森殿の百虫（むかで）の旗印、間違いありません。」
「火急の知らせだな」
「ハハ」
「伝令を急ぎこれへ」
「申し上げます、森好頼の旗下、小石元三郎和久火急のお使いで参りました。」
「おゝ、ご苦労、して使者の赴きは、なんと。」
「ハッ、越智家重の一隊が佐味村を通過し筒井城目指し進軍中、敵はおよそ一千四、五百。内、騎兵約二百程と見受けられました。十市遠定殿、豆越、超昇寺、久保、矢負、それに我が森好頼の旗下、同勢六百余りと交戦中、豆越将監殿は既に討ち死に、久保三津衛門尉殿が負傷でございます。」
「おゝ、して戦況は。」

「各将方々獅子奮迅のお働きながら多勢に無勢、苦戦のご様子、大至急ご援軍を！」
「おゝ、間に合うか。」
「ハゝ、今なら。」
「ヨーシッ！　森好順、弟が危ない松倉政秀、布施掃部、石上隼人、布留織部！　騎兵二百を率いて直ちに援けに行け。」
「ハゝ」
「勘解由、宮の森付近にいる島左近に伝令を一人出せ。」
「ハッ」
「死に者狂いに攻めまくり直ぐに引き揚げろと」
「ハッ」
「大炊介、滋明寺主殿等八百を連れて筒井の城へすぐに戻れ。」
「ハッ」
「島左近殿から伝令」
「ヨシッ」
「玄蕃頭家教、家全ら敵二千余りに強襲し、二百余りを討ち果たしました。只今から引き揚げます。」
「ヨシッ、損傷はいかほど。」
「足軽二、三十ほどでございます。」

「島左近殿から再び使番が到着！」
「おッ」
「柳本範堯殿が味間から島殿を追う家教、家全ら敵二千余りに強襲の模様ッ、敵味方の間に割って入り追撃中、敵は猛進する柳本殿に道を開け、通しており、間もなく、島隊に追いつきます！」
「ヤー」
「十市遠定殿からッ」次々に伝令が各前線から到着した。
「御援軍有難く、森縫殿佐好順殿が奮戦の上、逃げる越智家重殿の御首頂戴ッ、将を失った敵はバラバラに敗走中……」
「ヨシッ、でかした。全軍に伝えよ、筒井に向かった、佐味の敵越智家重は潰滅、島、柳本範堯が到着次第箸尾へ入る。」腹背に敵を受け四五百を討たれた越智軍は柳本範堯の通る道を開け、筒井軍は合流して、箸尾へ移動完了した。一度バラけた越智軍は直ぐ軍を立て直し、箸尾城へ迫る。
「箸尾兵部、勢三百を率いて予定通り敵にあたれ。」
「箸尾兵部の、兵が出ます。」越智軍は今日の事は今日に決着と敗北を挽回するべく一機に攻め始めた。
「よーしっ、あれを討て。」玉手山城主越智家全は箸尾兵部を餌食にと勇み立ち、一千余りを率いて突進した。
体裁程度に矢を射た箸尾軍は、敵にくるりと背を向け、まっしぐらに全隊が退却を開始した。

「ソレッ、のがすな、追え。」越智軍は追撃する。
「もう一息、一もみに踏み潰せ。」
箸尾軍は城へは入らず、先頭の兵部が城の右脇へそれた。時をゆるらず、島左近が七百を率いて、越智軍の先へ打って出た。
暫く混戦が続いて、これからが勝負になる頃となって、また左近も兵を引き城へは入らず、左脇へそれて退却した。勢いのついた、越智軍の先はあと城まで三、四丁に迫っている。家全が見ると城方は正面の城門を八の字に開いて、脇に武将を従え、りゅうりゅうと旗幡をなびかせた、今こそ決戦の総大将と覚しき、立派な一騎の姿が目に入った。
「あれこそ、筒井順興ぞ、ソレッ。」
その時ドドッと大太鼓の響き、銅羅の音がこだまして、左右の葦の繁みから突き進む越智軍の半を狙い幾百の矢弾が豪雨の如く襲い、進軍半の三百余りが打撃を受けた。
と、再び大太鼓の轟き、銅羅が鳴り、城門から四、五百の将兵が、越智軍の先頭にぶち当たっていく。激しい戦といなった。
清須美慶次の一隊であった。
みたび大太鼓の轟き、愈々総大将筒井順興は軍を進め、清須美の一隊を追抜いて、敵軍深く突き進む。
後に続いていたはずの越智の中軍が相当討たれた事に気がついて流石の越智家全も周囲を全部筒井

順興の軍に囲まれて、立ち往生となり、最早これまでと云う所まで危機が迫っていた。我が子のこの危機を見知った越智家教は貝吹城主越智利之に一千を授けて急派し、ようやく、これを助けた。

新手に筒井順興は押され、退却を徐々に開始して城へ入った。猶もしつこく、越智利之はこれを討たんと城近くに迫れば、片岡和泉守直元が三百余りを率いて、城から討って出てまたしても、乱戦になった。そこへしばらく、左右に引いていた、島左近の七百と箸尾兵部の率いる三百の将兵が、越智利之に強襲した。

越智利之はかなわじ、とみて総軍を纏めて引きかけた。引きかかると筒井順興は利之の後尾を叩いた。

幾度かの乱戦を繰返し双方に二千余りの犠牲が出たが、七、三で越智の分が悪かった。

追撃に出た筒井の総軍が、ここで、越智を全滅させせん、と遮二無二、攻めた。

ついに、それまで整然と戦っていた、越智軍は乱れて統率を失い、追い詰められて道無き葦原へ足を踏み入れた。

道筋を逃げたものは、概ね負傷しながらも、命からがら逃げおおせたが、道無き葦原へ足を踏み入れた将兵は、予てから設らえてあった、逆茂木や落し穴にはまり、揚句に、新たに三百余人が怪我を蒙り捕虜となって、辱めを受けた。

筒井順興が、引くと無傷の箸尾宮内の八百が、越智軍にしつこく追いせまり、また二百余りを討ち漸く城へ戻って来た。今日一日の戦いで、越智軍諸将の中、越智の同族、米田甲斐守之靖、子島常陸

守俊高、越智吉兵衛、中村真介、下次郎、吉岡新七郎、弓場志摩守、吉川彦助、池田嘉市、稲生新十郎、葦井伝三、岸田四郎左衛門、坂田九郎、小槻兵衛、田中亦重郎、御園伊織等を含む二千近くを討たれ佐味で敗走した越智家重を主将とする一軍を合わすと三千近くの将兵を一挙に失った。

(二)

その日の全てが終った頃、月が光々として、中天に近く、久し振りに笠を冠むっていた。

翌八月五日、越智家教は筒井順興に一族の利之を使者として送り、予て虜となっていた、佐田城主、越智石見守家秋の身柄を申し受ければ再び筒井家には抗せず、と和を乞うた。古市周防守胤実の事は処分を順興に任すと素気なかった。

「よし」とした、順興は越智家教の誓詞を容れ、六日、ついに越智家教は陣を払い高取へ引き揚げた。

敗北の憂き目を象徴するが如く去って行く、越智軍の兜をしとしとと雨が濡らしていた。

悔しさに泣かずとも、兜から滴る小雨が家教の頰を伝い馬上からは一度も筒井の方を振返りはしなかった。

八日まで箸尾城にいた順興は千余りを残し、筒井城を目指し堂々と凱旋した。父順盛へ戦勝の全てを詳しく報告し順興は城内外挙げての祝典を開いたのは言うまでもない。

永年にわたる宿敵越智氏を討ち今日までの屈辱を雪いだ。

越智石見守家秋は虜の身ではあったが、城内の一邸宅の中では何不自由なく過ごしていた。
同じ虜の身ではあったが、古市周防守胤実に比べれば、格段の処遇であった。
朝夕の食事も鄭重に扱われ、夕食には必ず、肴に酒が添えられた。鬱々として楽しまぬ日々に彩りが気遣われている。
床の飾りは時の華や、掛け軸にも心配りが施され、時には、筒井の重臣らが、来て四方八方の話をしたり都の動きにも知らぬ事は無い程であった。

涙情

何を言ってるのか、はっきり、聞き取る事が出来ないまでも、城内の小路を行きかう将兵のそれぞれの声が弾み、いかにもはしゃぐ勝利の賑わいが、幽閉された越智石見守家秋の屋敷の塀を越えて聞こえてくる。筒井軍が勝利を修め凱旋したらしい。
その夕がた、島左近が訪れて、数日前に古市の二城を攻め、引き続き越智氏とも戦い筒井軍が圧倒的勝利を占めて凱旋した事を家秋に語った。
左近は自分にも膳を出させ、今日は存分に召されよ、と酒を勧めた。しばらくすると、森縫殿佐と松倉政秀が連れだってきて、代わる代わる酒を奨めた。
石見守家秋は筒井の重臣達が個別に来た事があっても、一度に三人も揃って来る事はなかったので、

愈々来るべきものが来たと領解(りょうげ)した。
ハッとして、家秋は座をただし、
「先程より懇ろなる重臣のお持てなし、今迄のご厚情、筒井殿はもとより、貴殿らにも充分な、お情を心から謝しまする。おさらばでござる。」
「急に何を申されるかと思へば」
「否、判っており申す。最早お別れでござろう。」
「お別れには違いないが、何か勘違いなさっており申す。」
「いや、いや、我等が行き届かず悪うござった。御免下され、実は我等が若殿順興様からのご命令で、明朝石見守殿には、愈々越智のお館へ鄭重に御送申す所存と相成ったのでござる。」
「何、真に帰れるのでござるか。」
「如何にも」
「左様でござったか、重ね重ねお情のあるなされ様、辱なき事でござる。」
「御礼には及びますまい。たまたま立場がこうなっただけで、変われば我等もまた、何時そうなるやら、常なき世の習い。」
「我が筒井家に知恵がなく、真に遅れ申し、申し訳なき仕儀でござるが、貴殿は敵とは言え、曽ては赤沢宗益入道沢蔵軒や長経攻めでは、共に戦かった、由縁りのお味方同志ではござらぬか。ご遠慮には及びますまい。」

「辱のうござる」本来ならあの戦いで、死んでいても致し方がなき我身、と酔う程に身に泌みて家秋は情に泣いた。

翌朝、かつての戦の時にはいていた、国俊の名刀を順興に献じ、越智石見守家秋は厚情を述べながら、深く心に一つの事を秘め、筒井の護衛に守られて、越智へ帰っていった。

同じころ古市周防守も解き放ったが、こちらは護衛もなく曽ての赤沢長経攻めの折、大和国衆を敵として、古市氏は長経に与した事や、度重なる過去の遺恨などもあり、筒井をして彼を一人にして放逐せしめた。長く牢屋に繋がれ、やつれた姿はいかにもわびしげに肩を落とし白い目の中をうつむき加減に去っていった。

一方越智玄蕃頭家教は両日を置かず、家老子嶋掃部守に名刀三口や巻絹、銀子等の礼物と口上を添え筒井順盛、順興へ使いとして向かわせた。

古市氏も数日後、貢ぎ物を持ち、白々しい和を乞いに来たが、筒井順興は横柄に可として、再び斯くの如き事があれば、許さじと念を押し使者の古市但馬守を帰した。

永正十四年も暮れ翌十五年春筒井城中重臣控の間に、三人の密かな会話がかわされていた。

「このままでは済み申すまい。越智、古市の事は。」

「あのように詫てはおるが、どうしても潰させなければ、また争いの種となるは必定。」

「…………」

「隣国河内高屋城の畠山尚順様が、定まりさえすれば遊佐河内守様も安泰、我が筒井も、もっと越智

を攻める事ができるのだが。」島左近は松倉政秀の言う通りではあるが、外に、河内を将来安定させる方法を捜す事が先決であると思った。

「河内に小さな出城でもこしらえては」と森縫殿佐がいう。

「出城か、それが出来ればのう。」と左近。

「平群の椿井の砦は出城になりませぬか」と縫殿佐。

「考えぬでもなかったが」

「元来椿井の砦は左近様のご祖先が造られた所」

「いや、今は廃城同然だ。」

「手を入れましては」

「あれ一つでは賄いを貯蔵する位で手を入れても、大した、意味はない。」

「如何にも、しかし二百や三百なら兵を隠す事位は出来ましょうに。」右近政秀が云った。

「ならばついでにもう一つ山を越えて平野（ひらの）へ出ましては」

「平野か、よいかも知れぬ。いずれも要害の地だ。」

「しかし、いつに役立つか、また立たぬ事になりまするか。」

「立たなくともよい」

「備えあればでございますか」

「ウーム……」

「しかし、今でも兵が不足しておるし、また二百も三百もでは目立って却って具合が悪い。」
「各二城とも百でも百五十ずつでも、よいのでは。」
「ウーム……各二城とも百五十ずつでもよいと云うならば、話は違う兵も賄もなんとかなかろう。」
「では、今宵の宿直（とのい）の時に若殿へ、左近様から。」
「いや、若は気が早い、明日にでもとなっては手がまわらぬ。」
「では、もう少し詰めてからと致しましょうか。」と右近政秀。
「ウーム、さらば今宵はこの辺でと致そうか、政秀殿。」
「いや、まだ早い、もう少しゆっくりして、アッ、所で、大安寺兵三郎はその後如何が致しておる？」
「事の次第を話して以来真面目に致してございます。」
「それは何より。お縫殿が平野を仕上げたら、あれに任せては？」
「またまた話が永ごうなります。明日の事と致しましょう。」
「では、一番囲碁など。如何がかな。」
「今日は某の誕生日、家の子郎党共が祝ってくれますので。」
「それはおめでたき事、某も一杯差し上げようでは。」
「辱い事。しかし、滅多な事はござるまいが、左近様が召し上がって宿直のご用に差し支えたのでは。」

「では、お政殿は如何がかな。」
「政秀殿は、女房殿がこわくてな。のう政秀殿。」
政秀は、この中では一番年が若くニヤリとして首肯いた。
「皆頼り甲斐なき朋輩殿かな仕方なし、今宵は諦めようか。」
「いや、いや、明晩は某が宿直、今宵は諦め明晩に致しましょうぞ。」
「明晩では遅すぎじゃが」
「申し訳ございませぬがでは明晩、お先に失礼致しまする。」
「では気をつけてな」寂し気であった。
「御免」左程この所、皆多忙ではない。ようやくの事で森縫殿佐好順と松倉右近が連れだって左近と別れ各の家へ帰った。道すがら島左近様はお年の精か近頃何時も宿直の夜は何やかやと云っては引き留められる、などと云いながら縫殿佐はあの方は結構淋しがりやだ、と思った。
「シマッタ、なんと言う事だ。」左近付の小者が知らせに来た時とっさに縫殿佐と右近の二人は悔やんだ。左近様の虫が知らせていたのだ。
夜中最後の筒井順盛、順興の静かに休む寝息を確めた左近は椿井の砦と平野の出城の素案を認め終り、小さな机に前屈みにうつ伏したまま、息絶えていた。縫殿佐と右近の二人は左近にすがりついて泣いた。
往年の豪勇の士、島左近友広は逝った。五十五歳であった。父なき後の縫殿佐には父とも頼む人で

あった。弱冠十九歳の砌、筒井順盛と共にはじめて出会った武人の一人、また、左近も縫殿佐や弟好頼を自分の手許に於いて、我子友武同様可愛がってくれた。囲碁の一番位の一時がなんで惜しまれたか、悔やんでも、悔みきれなかった。ほんの昨夜まであれ程和やかに語りあっていた達者なお人が。縫殿佐は女々しく泣いた。余りの泣き方に人々は貰い泣き、女々しいぞと叱る順興も重臣を失いその悲しみは縫殿佐の悲し気な泣き声にまた誘われる様に目頭を抑え、心ある筒井一族は悉く目蓋を赤く泣きはらした。

数日置いて奈良や近隣の多数の僧形を招き七七日にわたる読経を施し筒井順盛、同順興以下、全将兵の見守る中、葬儀を取り行い領下の長安寺に手厚く葬った。

またしても順盛は自分より年の若い一人の重臣を失い多くの悲しい出来事に長命の故に出会うならば、長生きもいい加減な事と、深く嘆いた。

さて、死のギリギリまで、筒井の行方を慮り、絶筆の左近の意思を無駄にするなと順興は森縫殿佐や松倉右近に実施に付いて厳命した。郡山や近郷近在にいる筒井同族の不審の多い者に比べれば、故島左近友広が育てた数少ない子飼の縫殿佐や右近は筒井氏の中で大きく信頼を得て、時には筒井同族以上の子飼の値打ちを大いに、発揮した。左近友広の弟友久にさえ云わぬ事も、縫殿佐や右近に洩らし、常に敵対関係にあった越智、古市の事は元より、順興の岳父箸尾氏や郡山辰巳をはじめそれらに志を通じる者の全てを調べ上げ、日頃から注意すべしとして、云い残していた。

森縫殿佐らと歳のかわらぬ、友武が亡父の左近を襲い、島左近友武として、後その子、友之、清興や、その子新吉政勝は関ヶ原にその勇名を馳せた。

布石

夏草が生い繁る頃、森の木蔭深くひっそりと小さな砦二つが平群の丘の椿井と河内の平野に出来上がり、父の意思を継いだ島左近と森縫殿佐がそれぞれ相前後して、筒井へかえって来た。出城は大小の石を巧みに組合わせ、各々が独立した、二十尺の壁を構成する石垣を三段に積み上げ小さいながらも要害を誇る仕掛けを敷設した。一兵も置かず、当初の計画を幾分かは変更したが、取り敢えず完成した。

永正十七年四月、慌ただしき動きあり。同二十六日細川政春の子高国が近江守山一帯を抑え洛中に於いても、七万余騎を有し、五月六日順興は京の動きに併せ森縫殿佐に兵一千余りを授け、古市城を攻めた。後方には森好頼ら二百が、数千の虚旗をなびかせ大軍来ると見せかけ、超昇寺周辺の古市の手を討ち破り、七日祝井川を遡り攻めた。古市らは怖気づき、油山に陣取っていたが、悉く逃げ去った。森縫殿佐は鹿野園郷に潜む古市勢も攻め、鹿野園内記が降伏し、井上九郎らも筒井に寝がえり、古市城へ攻め掛かり散々に討ち砕き、長居は無用と大勝利を収め早々と引き揚げた。二十三日代わって、中坊美作守が、千四百を率いて、古市を攻略したが、宿院で夜討ちを受け敗退した。降ったはずの鹿野園内記が美作守の余りのやり方に腹を立て、古市を手引きした。破った、古市は奈良市中に出

て、宿院郷を焼き払い、民家に侵入して娘を犯し財物を欲しいままに掠め剰え筒井被官の屋敷へ押入ると悉くの財物を持ち去った。あるべからざる行儀の悪さは、続南行雑録をして、……種々ノ悪逆言語同断、……先代未聞也。と云わしめている。六月二日、この間の敗北の名誉恢復を機さん、と中坊美作守は順興に願出て法蓮郷に着陣した。順興は中坊美作守を大将としたが、前回の失敗に懲りて同三日同族蔵人の外森縫殿佐、松倉右近らをつけ不空院一野院の美作へ二千の軍勢を出陣させた。再度森縫殿佐、松倉右近らが来ると知った古市は春日山奥の太平尾城へ悉く引き揚げ筒井勢はカマトキの上までこれを追撃し敵は逃げるばかりで戦にはならなかった。

美作は勝利に気をよくし六月十日自軍全軍を今市に入れ治まったかに見えたが三条郷に折角置いた櫓は古市の手によって破壊され奈良に出た古市は乱暴を働いた。曽って大敗北して快く思っていなかった越智玄蕃頭家教らは興福寺大乗院に画策して一乗院に手を廻し筒井の同族や与力や旗下等を分裂させる事を密かに考え元々大乗院衆徒の国元を明け京都に出ていた十市氏を筒井から離す事に成功した。ついに止むを得ず筒井は八月十市氏を義絶した。以後しこりを残さぬ様にと遊佐河内守から越智玄蕃頭と筒井との仲を取り持ち順興を約定で包囲した。

森縫殿佐に子が授った。永正十七年九月九日、男の子であった。久しく待ち望んだ揚げ句の児であった。幼名を重陽と名付けた。母は飯田氏から来ていた。筒井家にとりまた同様に我が森家にとっても将来期待出来る様な子に育って欲しいものだと心から願わずにはいられなかった。日が経つにつれてそれとなく見ているとどことなく品位もよく、りりしく骨格や顔立ちも余所の児に比べると自慢出

来る児であった。明けても暮れても役向きの間でも思い出すと一人でに自分の顔がほころんだ。まだあどけない幼な児を乳母が時折見せに来る。見えているのか見えぬのか見詰めていると澄んだ瞳の奥からじっと見返して来る。これはひょっとするとかなりの大物かも知れぬ。縫殿佐は嬉しくて人が尋ねてくれるのを待ち切れずに自ら吾児の事をああだこうだと頼もし気にふれた。余程嬉しかったに違いなかったが、いつの世も親馬鹿振りはかわらない。その子はすくすくと育っていった。

数年を経て大永四甲申年二月十五日、また新たな生命が産声をあげた。筒井順興の第二子にして山田城主民部少輔順貞の妹が母であった。後の順昭の誕生である。

城内は祝賀で沸いたがしかしその喜びも束の間二ヵ月もせぬ、同年四月二日筒井成身院法印順盛が大往生を遂げた。

享年六十八歳にして筒井城内に於いてその波乱に充ちた生涯であった。父順秀の跡を受けて五十九年の長きにわたる筒井の棟梁としてこれまでに領地三万五千石を領し、旗下六万五千石を併せ十万余石を領するまでに成し遂げた。

良舜房法印順興は領下円証寺に順盛を葬むり盛大に弔った。名実共に筒井の棟梁として愈々順興の時代が大きく動き始めた。はや、三十歳になっていた。冬十一月の半ば過ぎ畠山尚順の遺子稙長から出兵の要請が筒井順興の元に届き河内へ出陣した。小競合いの上、怪我もせず十二月十三日無事帰着した。冬は枯れて茜さす夕日が荒漠とした大和平野に高くそびえる筒井の城の白壁を紅色に染めていた。戦乱の世にあっても自然の移ろいは相変わらず永々と営まれている。順興は戦のない合間をぬっ

て馬司、番条、伊豆七条、安堵村、菅田、二階堂等筒井の城の周辺の村々を要害化し、また家中には戦備おさおさ怠りなく将兵には治にいて乱を忘れず用兵の計を学ばせ重臣達には軍略を一族には結束を呼びかけ隙を作らぬ様心掛け着々と基礎を固めていった。

島左近、森縫殿佐、松倉右近らは郎党の特訓に励み時として都の情勢をにらみつつ京、河内、和泉等の近隣の動きを的確に摑み万一に備えた。

非番の時には森縫殿佐は子の重陽の教育に力を注ぎ鎗や刀、馬にも早くから親しませた。

この年、子は五つを数え屋敷の中だけでは治まらず腕白の限りを尽し小さいながら戦場の夢の中に飛び廻り育ち盛りであった。それでなくとも長い物が好きで庭に出ては裸足のまま上にかけ上がる。女中達がついて廻り邸内は掃除に追われていた。

第二章　天文法華の乱

灰燼

(一)

大永五年正月、縫殿佐は子の重陽を連れ初めて順興に目通りを乞うた。

「そなたは、何が欲しいな、甘い菓子か。」

「何でも宜しいのでございまするか」

「出来る事なら何でも、やるぞ。」

「では、父者人を。」

「何、父は有るではないか、なのになぜ。」

「はい、でも父者人は何時も戦ばかりで家には居りませぬ。」

「ウーム、確かに。しかし、今は居るのでうれしかろう。」

「はい、いつか、何時でも居られる為にお館様が戦に勝たれれば嬉しゅうございまする。」
「そなたも早う大きくなって頑張ってくれよ」
「はい。お館様もな。」
「これ、何を云うか。」父は慌てて叱った。
「よいよい、いやぁ、しかし、これは参ったな、そなたの云う通りじゃ、あははは……わしも頑張るぞ。」

利発な子として馬一頭、差し料一口銀子五貫を褒美として与え出仕を仰せ仕かり以後幼少ながら忠勤に励んだ。

大永六丙年四月七日筒井の願望であった乱の静まりを待たれずに大乱のさかな後柏原院崩御遊ばされ順興は自ら悼ミ奉ルと伴を連れ上洛した。この時縫殿佐は伴し、都の情況は四条五条の橋は焼けただれ落ち河原には蓆で屋根を覆いまた群がる子供らには食もなく京の都は有り合せの木々で家を建て垢にまみれ、異臭が立ち籠め、乞食の列はその数を知らず公家屋敷は云うに及ばず畏き辺りもまた土塀がくずれ聖域とは言難き有様であった。それに比し各武門の輩は警護も厳重に威を放ち堂々の門構えを誇り道行く人々を怖れさせている。

鴨川の流れの中に只一つ、清楚な白鷺が二羽頸（くび）を傾げ（かしげ）白々しく、川面に浮かびのんびりと餌をついばむ姿は平和そのものであった。荒廃振りは目を被い人々の数のみ都らしく帝の崩御を一層哀れな事とした。

同月二十九日、後奈良帝の践祚（せんそ）の儀あり、再度順興は島左近、松倉右近を伴い上洛し賀し奉り数々の品々を献上の上帰郷した。

(二)

所で戦乱にあえぐ人々の心は仏に向けられ慈悲にすがる志しは一つと、法華宗と一向宗とへ向けられた。そんな頃、興福寺は事もなげに市座に口銭を掛けまた民家にも容赦なく次々と口実を設けては賦課を徴収していった。

春日田楽頭役方の為、三軒に五間分一間に付き、三十文、かささぎ町で三十軒に五十四間四尺分、公納堂町には、二十三軒に五十二間三尺分一間に付き、三十文等の様な調子の賦課金であった。その他臨時の名目で、魚座、絹座、小柚座など三十座に地子銭、夫役、小五月会の問別銭と勝手に取りまくり、繰返し何百貫の銭を集め一貫文が田地米十石と云うから、その量たるや推して知るべしであった。

憎々しきは糞坊主共となって、天文元壬辰年七月十日早朝、興福寺六方衆を嫉み、大和一向衆が一揆となって起こった。河内に興る一揆に和して椿井町にいた橘屋主殿等が百姓、町衆と密かに謀り一万に満つる者等が興福寺を襲った。京では勢い盛んな法華宗を背後から細川晴元が一向宗の抑えにそそのかし《毒を以って毒を制す》と煽り立てた。予て赤沢長経の大和攻め以来大和の民は一揆の値打ちを知っている。様々な悪行の本家は興福寺とこの機を逃がさず興福寺支配を叩きつぶさんものと彼

等一揆は蔵屋兵衛、雁金屋民部などと併せ橘屋主殿等と合流し興福寺へ攻撃を敢行した。少し前から興福寺の周辺に秘かに太い竹筒などに刀や薙刀等の武器を隠し置き時を機して一斉蜂起した。

たまたま月番で成身院にいた森好頼の養子好信は危急の一報を筒井へ送った。筒井家では時を移さず大太鼓を打って将兵を募り陣容を整え奈良へ向かった。動静は既に一揆が菩提院、恵心院、阿弥陀院に火を掛け成身院の森好信は二百余りの兵を督戦し防戦中に深傷を負いながら援軍を待った。河内にこの六月十五日一揆が蜂起してから、およそ一ヵ月河内では、この為に畠山義高が追われ自害して果てた。これが飛び火の形となり公家寺社武家二つの一揆が絡みややこしい『天文法華の乱』が始まった。筒井軍は一刻を争い先を急ぐ、

「行ケッ！　行ケ！　遅れるな！」と叱咤激励駈けに駈けた。

先発隊筒井家中六百余人順興は鞭をはげしく打って馬をせめ漸く到着するや興福寺を取り囲む一揆の群がる中へ飛び込んだ。続々として筒井城から将兵が発ち総勢五千五百が忽ちにして一揆を蹴散らせたが橘屋主殿等が指揮する中には多数の浪人者が紛れ込み、当初四五千余りと思われた数はどんどん脹れ上がり一万に達し一揆の勢いは盛んであった。先陣の森縫殿佐は一千余りを率いて成身院に迫り森好信を救い島左近は六百を率いて火消しを努め松倉右近は順興の傍にあって一揆の主力軍の橘屋主殿等を攻めた。既に焼け落ちた門の軒瓦やくすぶり続ける倒れた柱が、そこ、ここに、ころがり奈良の町中到る所で戦が続けられ彼方此方の寺院から紅蓮の炎が立ち昇りごうごうと音を立てて燃えていた。最早此れ迄と荒法師の一群が炎と共に崩れ行く寺院の中から薙刀をかいこみ門外に赤々と燃え

盛る火に照らし出されて飛び出して来た。中には衣の袖をくすぶらせ、ほうほうの体の僧門もいた。

森縫殿佐は父母を呼び泣き叫ぶ子等を収容し大安寺兵三郎に一ヵ所に集めて筒井の保護の下に置いた。これらの子等はあちこちにいてどうやら一揆の仕組んだ戦の邪魔は味方の利とうす汚ない遣り口を使った。

少時下火となって戦を仕掛けると勝手が違い怪我人が多く不利になり順興も軍を纏め陣を少し下げた。

一時、戦は興福寺の諸衆に有利かにみえたが相手の大半が民衆の為、順興も手を焼いた。

しばらく雨があり時折小競り合いをするに留め様子を見ている中に疲労と共に民衆の形相はやがて怒りが極度に達し瞳は血走りさながら地獄絵に見る邪鬼の如くであった。

奈良の町々は亡骸が死臭を発し犬がその肉を喰らうのを追払う者さえいなかった。興福寺の僧等は一揆の静まりを待って小康状態と知るや余程一揆が恐かったのか高取の越智を頼り走った。それと見て一揆が跡を追った。順興は一度筒井に戻り態勢を建て直す為筒井城にいた時であった。

八月一日、興福寺から逃げ来たった僧等は越智家教に救助を求め一日でも早く一揆を討破ってもらいたいと泣きついたが、一揆は筒井には目もくれず一挙に越智周辺に群がり寄せ来たった。越智家教は長谷口で迎え討ったが七千の一揆に敗退した。

一揆が越智を攻略中、援軍を乞う、と越智家教は筒井に救援を求めた。同様に十市氏にも家教は救援を求め連合して一揆に当ってもらいたいし、と懇願要請してきた。

八月二日、筒井順興は軍を三手に分け一軍は十市、片岡、楢原、それに柳本を加へ島左近を連れ自ら指揮を取り一軍は、筒井の城に守備として幼少九歳の一子順昭を主将として、松倉右近を付けて十四歳になる重陽等を留め置き、残りの一軍は山田民部、森縫殿佐等が南都を目指して進軍を開始し郡山口に陣取った。だんだん手練になって戦が巧みになった一揆は蔵屋兵衛、雁金屋民部などに率いられ手強く戦は一進一退を繰返し捗らなかった。

(三)

筒井順興は二千八百余りを率いて、久し振りに十市遠定に会い図らずも、この様な再会ではあったが、懐かしく旧交を温めた。越智家教の策謀で、義絶はしたものの、その家教が、筒井、十市の両方に援軍のために頭を下げてきたとは、皮肉であった。大和国内に絶大な勢力を誇った、越智氏ではあったが、その家教がすっかり老いてきていた。家教の長男家栄、二男家全等は後継者として、越智本城、貝吹、玉手山、高取、興田等五つの城と支城の佐田城、曽羽城、他の砦や壺坂寺などの全勢力のこれらを旨く纏めるには能力に幅がなかった。

越智家教は常に自ら攻撃の先陣に立ち、縦横に指揮を取ったが、城内から口であれこれと命令を出しはしたものの、家栄、家全等の尻は重かった。おまけに相手は一揆、勝って、元もとである。

筒井順興は十市遠定と謀り、最も弱い一揆の集団を狙い、石上に陣取る油屋宗兵衛等七百を霧に紛れて、夜襲を掛け、悉く打ち叩いた。

彼等は胡散霧消（うさんむしょう）して、筒井順興が夜襲と叫びながら逃げ、一揆の陣所へ散っていった。

順興は動きを見て、虚々実々を取り混ぜ、夜襲と見せて、かがり火を焚いたが、それを外し一揆の動揺を煽り過去からの戦術のあらゆる手を使って、攪乱させ、三日三晩にわたる攻撃を繰返した。柳本範尭とも連絡の取れた、順興は一揆の展開する地域を次々に攻め、貝吹城周辺は完全に快復した。こうなると俄然越智本城、貝吹、玉手山、高取の各城々からの勢いが盛り返し、ようやく、守から攻撃に移れる様になった。

訓練された正規の軍事衆団に比べ、なんと云っても、敵は一揆、破れ出すとキリがなく、散りじりになって敗走した。日を追って越智本城を中心に高取周辺は興福寺衆徒の勢力が強まり、八月八日払暁より息も継がず順興は十市遠定と八木から帯解へ廻った、一揆の領袖橘屋主殿豊冬の陣を攻め、勝敗この一戦に掛ける意気込みを示し、小田切の郎党高田又太郎清之が島左近友武の下にあって、一騎打ちの末、橘屋豊冬と刺し違えついに、橘屋主殿豊冬以下二千五百を完膚なきまでに悉皆討ち果たした。

橘屋主殿が討たれると、中市雁金屋民部国之、蔵屋兵衛正共らの勢力も郡山口で森縫殿佐好順らと対峙していたが、ようやく一人減り二人減りして陰りが見え始め一戦ずつ勝利を重ね追い落としにかかり元赤沢長経の臣でスネに傷持つ牢人の首領市橋助兵衛を森縫殿佐は一刺し鎗錆にするとこれが崩れたつ。猶怯まず中村図書、カササギの三郎、発志院又七、入道覚三らを次々に倒しついに一揆の千百余りが奈良へ逃げた。森縫殿佐の活躍は獅子奮迅の働きであった。

またこの戦の終末に近く柳生氏が加わり小功があったが八月十五日本願寺はこれ以上戦えば全一揆

は絶滅すると考え興福寺を通じて和議を申し出て一揆は解散消滅した。しかし、この戦は一カ月以上を要し興福寺衆徒にもおびただしい被害を既に出していた。

それにつけても、越智衆の不様（ぶざま）な対応は双方に多大の犠牲者を出し、あれ程の越智衆も最早昔の面影なしと筒井順興をして見切らせて微笑ませ、また、興福寺は頼り甲斐なき越智衆よと越智に不審を抱いた。

筒井順興は此の度の双方の犠牲者の為として春日神社で祈祷を行い供養の法要を営んだ。本願寺はその後春日神社や興福寺と不仲の間柄となり、長くしこりが残ったと俗諺に云う。

悲嘆

(一)

天文法華の乱の後、最大の目標であった永年の宿敵である越智家教が逝き順興は急に肩すかしを喰った。もうどうでもよいわい、とふとそんな気になり目標を失い急に戦意が衰え戦に倦み順興は酒を友とし酔っては森縫殿佐好順らと囲碁を楽しみ夜ふかしが続いた。やがて体の調子が思わしくなくなり腹部に鈍痛が漂った。

(二)

今迄から嫌いではなかった女色にも人並みはずれた気を注ぎそれらが禍し痛めば酒をあおり飲んではフラフラと潤いを求めた。周囲の重臣達は異様な順興の体の状態を憂い強くたしなめたが痛みに堪えかねた順興は煎じ薬も服用したが酒や女色を断とうとはしなかった。

「縫殿佐！　左近と重利を呼べ。」順興は三人を集め、

「気付いていようが、……もういかん。」

「なにを申されます。お気の弱い事を。」三人は口を揃えて云った。ただならぬ順興の顔は少しの赤味さえ残ってはいなかった。酒の気がない日はよくふらついて倒れ何時も誰かが付いていて一人では放って置けなかった。

「藤松（順昭）は未だ、あどけなく、いといけない……わしの瞳の黒い中に、授戒を受け、法印の位を頂かねばならぬ……」途切れ途切れ順興の口からついて出た。

「……………」

「わしは、もう嫌じゃ、戦は……これ以上の殺生はせぬ。」

「何をお情けない事を仰せられます、お館様はまだ、お若こうございます。」

声を詰らせ乍ら、重臣達は口々に云った。

「いや、いかん……頼む、必ず、法印の位を一乗院様へ願い出て、そうじゃ、口ききの一人は北円堂の観壽殿がよい、もう一人は、執行職律師のなんと言うたか、あのあれじゃ。」

「執行様なら、恵心院の真道様では……」
「ウーム、その真道様じゃ、二人にお礼をたっぷりとしてな。」
「ハヽ……」
「勿論ご門跡様には桁はずれにして……、急がねば、わしが死ねば、時がかかる。法号は仲々くれぬ。都合でわしもご門跡様に直にお願い申し上げ、……」
　順興は咳込み、しばらく黙った。
「大丈夫でございますか」重臣達は皆心配してお互いの顔を見合わせた。
「まだ、大丈夫だ、心配せずともよい、直ぐに死にはせぬ。」少しニコリとしたが、痛みに途中から顔が歪んだ。
「ささじゃ、酒をもて。」順興は側室紀代の方へそう云ってから体を横たえ寝ながら話を続けた。
　一口酒を含むと順興はすぐ元気になった。
「お前達も少し飲め、酒は百薬の長よ。」
「…………」
「順昭を法印にしておかねば、ご先祖様に相済まぬ……」
「…………」
「順永様以来この筒井の嫡流が全てが法印とは行かなんだ」
「…………」

「しかし、今の筒井にして、連綿と続いた家の子が律師どまりではどもならん。」病みながらも生根は腐ってはいなかった。
「そうじゃ、五大院と妙喜院へも手を打て、もう一つ、明王院も、忘れるなよ。」
　これらは全て大和諸豪族達の作外（いえもと）であった。明王院は十市氏の作外である。順昭を法印にしておかねば興福寺での顔がきかぬし、横槍の入らぬ様にせねばならぬ。
　こんな時大明国から、嵐に煽られ漂着した、という数名の舞姫らが、永正の砌、厚遇され帰国した同国人がいた事を人の噂に聞き、縁しを頼りに筒井の城外に来た旨、かつての戦いに瀕死の重傷を負い不具にはなっていたが戦さは養子政秀に任かせて戦には出ぬものの当月の輪番の松倉重利に知らせがあった。
「歓迎你們来到日本（ファンインニイメンライタアオリイベン）。請問従何方来啊（チンウエンツオンフオファンライア）？」
（ようこそ日本へ、尋ねるがどこから？）
「先生（シエンセン）、知道大明国話嗎（チイタオタイミングオフオアマ）？　您的中国話説得很好（ニンダツウングオアフオアシヨワダヘンハオ）！」
（貴方は支那語が解るのですか？　大変お上手ですね。）
　後は双方片言であったが松倉重利の昔に覚えた怪しげな支那語が通じた。彼女等は吃驚して一様にこの方は善い人だと勝手に思い込み微笑んで感動した。不自由な脚を引きずり重利は城外の庄屋、茂右衛門宅で会うと彼女等は全て男装であったが笠を深く冠らせ客の態にして鄭重に城へ入れた。
　病む主君順興に一日、舞踊を見せようと思いたち三日の間城中で踊る事を彼女等に交渉し彼女等は

すぐ応じてくれた。一日目の昼下がり病む順興は殊の外、喜び華やかな舞踏に心が和みいつも主役を演じる李美麗にすっかり心を奪われて今宵の夕食に招け重利世話をしろ、と何時に無く喜色満面に笑みをたたえ酒を呑んだ。

「あれはうるさい。女房払いだ紀代に旨く言えよ、重利！」

「それはご無理でございます。あんな音を出せばどこに居ても聞こえます。」

「いや、今宵は歌舞音曲の類はなし酒と肴のみじゃ、重利、まず紀代には兎に角、西の櫓へ子守りに行かせ、こちらは静かに酒を楽しむのだ。なんなら宿下りでもよいぞ。」

「なんとうまい事をお考えになりまする」

「もう、わしの寿命そう永くはない。最期の遊びじゃ。」

「これは、しもうた事、余計な事を仕出かしました。後で某がきつく叱られましょうに。」

「忠義の士松倉重利様、後世名があがろうと言うものじゃ。」

「忠義の士とはつろうございますな」

「そうでもない。戦場で死したと思えば、なんでもない。」

腹心の松倉重利と島左近、それに森縫殿佐の外は誰もいなかったが、とうとう、順興は宵には李美麗を側に侍らせ、盛んなこびに惑され、しっくりなった。

「そなたは何と無く懐かしい顔をしておる」

「オ館様モ松倉様モ日本ハ皆我ガ漢族ノ子孫ノ流レ……」

「真か」

「……今ハドチラデモ、宜シイノデハ……」

「ウンそうじゃが」

「不好啦（ブハオラ）、不行（ブシン）、不行啊（ブシンア）、救命喔（チヤオミンオ）、救命喔（チヤオミンオ）、我快死了（ウオクアイスラ）」

（嫌い駄目助けて、死にそう。）

「喧しいな分けの判らぬ事ばっかり、ちと黙らんかいな。」仲なか、順興は元気であった。三日の予定が一日伸びたが順興はよい夢を見た。

李美麗らが城を去る時、五人の舞姫が揃って松倉重利の所へ挨拶に来た。一同の者たちへは謝礼として金銀の外に都の扇子や護身用の懐剣、日持ちする餅菓子や乾し飯等を贈った。それぞれ喜び厚く礼を述べて何度も鄭重に頭を下げ別れを惜しみ振り返りつつ重利の見送りを受け城門の方へ行ったが一人李美麗だけが足早に戻ってきた。

何かを忘れたものか、松倉重利は待っていた。

「何か……」彼女は目に一杯の涙を浮かべていた。

「もう……もうこれで此の世では二度とおめもじは適いませぬ。お会い出来てうれしゅうございました。お、お父様……」流暢な大和の言葉であった。

「エッ、いまなんと、なんと申した。」

「母は文素でございます。養父李森豪はすべて承知で母と私を引き取り育ててくれました。」

「エェッ、まことか、施文素の子か、では美麗はわしの子。」

重利は若き日のあの懐かしく狂いそうにまでなった文素の想い出と、込み上げる複雑な感情で頭から血の気が引いていくようであった。これが真の事なら何という運命のいたずらか、本当なら皮肉な事だ。

「許せ、この父を、美麗、……して母は。」我子とは知らずえらい事をしてしまった。

「目をわずらい盲いとなりお父様を思いつつ大和の地を懐かしみ、最後にもう一度あのお優しいお父様にお会いしたいと申しながら……五年前に世を去りました。」

「ああっ、何故、何故ここへ来た時、すぐに云ってくれなかったのだ。」よく見れば、はっきりと目や唇に確かに懐かしいあの文素の面影が美麗に残る。

「ここへ参ります道々人づてにお噂を聞きました。今やお父様はこのお城のご重役。ご迷惑をおかけしてはと存知まして……」泣きながら美麗がむせび語る。父も涙。

「何が迷惑などと……」

「今頃になって妾等（わたくしなど）が出て参りましては、ご心痛を煩わせます。やっとの事で今までこらえにこらえておりました。でも、でも、どうしても辛抱が出来なくなりました……お許し下さいませ……」

「おおっ……」胸にこみあげる思いを重利は抑える事ができず、慟こくして父は悶えた。

「……桜の下に琵琶を抱き……と母は……」後は言葉にならず母の昔の想い出を美麗は途切れ途切れに語った。間違い無く我子。

「あー」流石の重利も泣き崩れそうになり人目もはばからずしっかりと父娘は抱きあった。

「有難うございました。これで母の墓前に報告が出来まする。では、これにてもう、お最後でございます。どうぞ、お達者でお暮らしな……」され、とまでは云えず後は涙で声が詰まった。美麗の目も真っ赤に泣きはらしている。

「許してくれ、許し……せめて城外の宅へ寄り一日ゆっくりしてから帰れば……母の事をもっと聞かせて……」重利の手はしっかりと美麗の手を握り締めその手へぽろぽろと涙がこぼれ落ちている。

「いえ、私の目的はただ一つ、お父様に会えれば死んでも良いのです。生死も不明のこの乱世の事、よくおすこやかにいて下されました。始めは黙って、このお方がお父様かと目蓋の裏にお姿を焼き付けて帰る積もりでございましたのに、こうして父娘が互いに名乗り合えたのでございます。もう何もこの地に思い残す事はありませぬ。」彼女の母と同様美麗も謙虚であった。余計に思いは募った。

「ああ、それにしても懐かしき……」美麗の心根を思うと胸は締め付けられた。

「…………」

「じゃが、せめて、もう一日。」父はなおもすがるが、

「故郷の養父が心配して待っております。用が済めば一刻も早く帰れと我子のように申して。」幸に暮らしているのか。

「ならぬのか、一日が。」どうせ一日伸ばしても別れは更につらくなると、美麗は割りきって聞かなかった。理性の強いこの性格、この声は文素とそっくりであり余計別れつらいものになった。

わしからの土産として懐から巾着を取り出し殿中用の短い脇差を形見として涙を払いつつ与えた。
苦衷の中に茜色の夕陽さす城門の方へすでに美麗は足早に歩き出している。

彼女等は法没子（メイファズ）と云う諦めの言葉を持っていた。美麗は他の四人と何事かを話しながら恐らく父よりも別離を悲しんでいたに違いないが、きっぱりと深く傘を冠りもう振り向きもせず城門から去っていった。松倉重利は胸も袖も袴も足元までも頬から滴り落ちる涙にぬらし最早二度と会えぬ今は姿無き娘の後ろ姿を何時までも呆然と肩を落として見送っていた。

(三)

さて、一族の努力が稔り念願の望みが適い天文三年八月十一歳にして順昭は戒師愛染院により得度を受け一乗院門跡から法印に叙せられた。時を同じくして森縫殿佐の子重陽は字を九兵衛、名を好之と名乗った。この年二月十二日に降って以来雨がなく雨乞いを各地で催したが効き目はなく百姓は植える事なく従って刈採る必要もなかった。大飢饉であった。民心は餓えた。重臣達は額を集めて金策を図り近国から種籾を掻き集め翌年に備えた。

一時快復するかにみえた順興の容態が日増しに衰弱してきた。各一族老臣をはじめ諸将が毎夜交替で見守る中、天文四乙未年七月良舜房法印順興は自分の誕生日を前に五日戌刻享年四十二歳にして筒井城内に於いて卒した。藤松順昭は数えて十二歳で跡を継いだ。

七月十日、鄭重に円証寺に葬り四十九日の間供養をした。良舜房法印順興の死去の後、森縫殿佐の

子の九兵衛好之は十五にして幼君順昭に新たに仕える積もりで厳粛に威儀を正した。

「若様それがしらがおります。ご祖父の順盛様は十でお跡を御継ぎになられました。お泣きになってはなりませぬ。」主従のきずなを深め順興の遺言に基づき森九兵衛藤原好之は順興の三女千代姫を室に迎えた。

因に順興には子女多く、時代は幾分相前後するが、次の通りである。長女は郡山の城主小田切宮内春次の室、男は幼君順昭、二女は奈良北小路城主飯田出羽守頼直の室、二男順国は滋明寺左門、三男順弘は福住の城主福須美兵衛、四女は十市兵部大輔遠忠の室、五女は明山右近直国の室となった。

そんな中で松倉重利が苦悩の中に突然逝った。

娘美麗に出会ってからは塞ぎ込み大切な幼君のお役には立てぬとして隠居を願い出てすぐの事であった。

扨て大きな柱がなくなり松倉重利が逝っても直ぐに越智氏や古市氏に狙われたりはしなかった。順興が築き上げた筒井は万全とは言い難き情勢ではあったが天文法華の乱のあと戦のない日が続き筒井は新たな勢力拡張に心を砕いた。筒井一族、森縫殿佐、好之父子、島左近、松倉政秀等は余程しっかりしなければ容易の事では維持できぬ、と結束を更に深め毎夜の如くその対策を謀った。これからは近隣諸豪と縁故を結びその子女を人質に捕っても政略を図らなければならぬ。

郡山の小田切、北小路城主飯田、十市、明山等順に片付ける事と決しまず、小田切宮内春次を幼君

順昭の誕生日に事寄せて招きその父刑部高春を留めて春次に順興の長女と妻合わせた。天文法華の乱のとき島左近の手にあって小田切は活躍したし筒井には協力的であった。

北小路城主飯田直基入道春宗へは春日大社の帰途と称して森好頼が過日順興の葬送に際しての礼にと鄭重なる挨拶に及び一日の迷惑を掛けさせ、また森縫殿佐の妻が飯田の一族であったので礼物を同時に届けさせ後日には主君順昭から改めてお招きす、と述べさせてもどって来た。飯田氏へは徐々に近づき手なづける事としたが古くから大和源氏の一流にして律儀者一族として通っていた。それだけに時には手の打ちかたがあった。堅い者は義理には弱かった。

偽神主

(一)

筒井の招きで飯田直基の子の若い頼直は父の代理として筒井順昭の下へ来た。筒井の一族、姻族箸尾民部、小田切春次、筒井旗下の飯田の親族森縫殿佐やその子九兵衛好之更には、好頼とその子好信らの他に、島左近、松倉右近らの出迎に飯田頼直は快くし、城内に入ってからは大勢の者達が入れ替わり立ち替り接待に明けくれた。

「飯田頼直の一統は酒に目が無く、一族には仇名を夜明の太郎と申す者が出るほど酒を汲み……」森縫殿佐から申し出て、二十余人の腰元衆に大奥で琴弦の演奏をさせまた、茶の湯や能狂言の催しや、

ふんだんに酒、肴を宛てがった。酒好きの頼直にすれば、それが何よりの楽しみであった。取り分け元もと一族であった、森縫殿佐らに久し振りに会って気を好くし、目元涼しく、眉高き頼直の見るからに律儀な容貌に、順昭のご機嫌斜めならず、気に入り、双方の心は開いて《筒井は好い》そんな思いの中に数日を過ごした頼直は南都北小路城へ帰っていった。

天文五年、河内の畠山在氏（義央）の被官、木沢長政が信貴山城を築き、更に二上山にも山城を整えて、大和支配に乗り出した。天文法華の乱が静まりはしたものの、乱の時には、高畑以外は総て南都は灰になった程であるから、興福寺の復興は捗々しくなく、この機会を逃がすなとばかり畠山在氏は大和支配を命じた。

天文の乱の時、一向衆門徒の一部が吉野へ走ったが、……大和吉野上市、同下市還住之儀モ此時木沢へ申シ……とあり、畠山在氏方、木沢長政の勢力が若江城、高屋城から吉野に落居し、願行寺、本善寺の名が見え本願寺光教がこれらに拠ったものと思われ何れにしても筒井に比べて桁外れの大勢力であった。木沢長政の侵入に早々とその軍門に降る者があり、大和での戦がはじまった。因に古くは高安城に始まり、また信貴山城は金剛山、二上山と共に南北朝の砌、千早赤坂村に拠った、楠木正成が目をつけた所で信貴山城は大和河内の稜線を分ける接点の標高四百三十七米の丘にあり、二上山とともにこれらの丘からは両国が丸見えで眼下に大和川を見下す大和の西の最重要の地点である。勢力を回復した長政は飯盛山城を本拠に若江、高屋、天王寺、八尾を背景に本格的な山城として信貴山を築き上げ後の逆臣松永弾正忠がこれに拠った事は周知の事であるが、木沢長政は王寺、くらがり街道、

竹の内街道を完全に抑えた。幼君筒井順昭は大和国衆にこれを迎え撃つべく、国中に回状を巡らせ、越智氏を始め諸将が集いあちこちで始まった戦況を分析し、筒井の一統を総呼集した。

予てから置いていた平野の砦と平群の丘の砦が俄然その意味を持ち出した。近頃では河内をにらみつつ此の所両方の砦に少々将兵を置いていた。

敵は知らないが平群谷を挟み対峙する形となり順昭は平群谷南の口の守としてこの平野の砦と平群の砦をいざ最後の一戦の時まで兵を隠置く事にした。

「あの様な所で頑張られては、どうにもなりませぬ。」

森縫殿佐は順昭にそう云った。

「……ウームどう致そうぞ、どうにもならぬな。」

親族や重臣達にも直ぐに好い策がなかった。長々と繰り言が続く。昨日は越智が、今日は秋篠が、又、続いて楢原が、そして十市、箸尾がと次々に破れ棟梁の筒井にしても出陣する者の総てが、何度か破れ去って万策、悉く尽き果てていた。この間は十市遠定と共に敗残し、引き下がったが、敗残の将兵を纏めて木沢と再び戦った。

この戦が始まり既にもう五年になる。

木沢長政は厳然として、河内から大和支配を働きかけていた。

「……某が河内へ向かいます」お縫がか？　そう云われた森縫殿佐はもう五十の半ばをこえていた。

天文十一年桃の花がつぼみをつけた如月の半ば、北小路城へ飯田頼直を尋ね、春日社人の衣裳を借

りうけ直ぐに馬を走らせ、木津川を密かに下り石清水八幡宮下に向かい、鹿野左近衛督の屋敷に一泊して、樟葉に入り交野の磐船神社による様に見せた。木沢の飯盛城下では多くの将兵達がうろついていたが、誰に、とがめられるでもなく事なきを得た。更に高野街道を通り、平野の砦に居た大安寺兵三郎武範、豆越永弘、永良善助らにあって、伴をしてきた坂口重兵衛の子清七と巽蔵人の子の時二郎の二人を加え、乱波の策を授けた。

森縫殿佐はすぐに立って遊佐河内守に会い来る三月十日払暁大和、河内の両方から同日に時刻を示しあわせ勢力を結集して、信貴山城と二上山城を総攻撃する旨の手筈を整え平野の砦に帰ってきた。

「将兵の数が少ないではないか」縫殿佐は大安寺兵三郎武範に尋ねた。

「兵の数が少ないのはこの下の近辺の民家に皆潜んでおりますので」

「なに、民家にか。」昨日には慌ただしくて気が付かなかったが、成る程と縫殿佐は驚いた。

「流石、兵三郎武範だけの事はあるな。」

「恐れ入ります」

「恐れ入る事はない」

「今の兵の数は」

「凡そ三百余人」

「三百余人、とは偉く増えているな。」

「ハヽ、筒井になびく者とここで子が増えたものが。」

「増えたとは卵を生んだのか、生物とは不思議な物だ。」
「兵三郎、巽時二郎の衣裳を借りて従いて来い、これより木沢攻めまでにこの付近の状況を見てお
く。」
「どう見ても神主に見えますな、殿。」
「殿はよせ」
「ではなんと」
「神官様とか、なんとか。」
「では春日様と」
「おゝ、春日様とか、それで好い。」
「行くぞ兵三郎」
「ハゝ」
二人は、丘を下っていった。
二月堂のダッタン帽が行方不明になり、二月堂は各方面へ探索の依頼を出してそれを探す偽の書状が数葉、縫殿佐の懐にあった。
ダッタン帽が多分どうせやたらな所へは売り物にはならず、しかるべき神社か寺にあるはずだ。
その行方の噂を便りに河内へ来た神主の体であった。
四条畷の神に参り、出て来ると武士の一団に出あった。

「待て、そこの神主!」ハッとして二人は立ち止まった。
「何か御用でござるか」縫殿佐は落着いて静かに云った。
「ここの神主ではないな」
「如何にも、左様でござる。」
「怪しい奴」
「神社に神主が居て何が怪しい事でござる。坊主がいても不思議ではござらぬ場合も有りましょうに。」
「ますます怪しいぞ、敵の廻し者かも知れぬ、皆油断すな。」
「決して怪しい者ではありませぬ」
「いや、では尋ねるが第一その目付きが鋭すぎるし、体が並みの骨組とは違い過ぎ、どう見ても武士の腕節だが。」
「これは生まれつきの目付きと体……で」
「黙れ、では神主である証拠を見せろ。」
「神主は神主、その様な証拠の品などござらぬ。」
「では名を名乗れ」
「手前は春日大明神の神官、権禰宜御蔵掛、名は鹿野次郎左衛門頭頼篤でござる。」
「何要があって、南都春日大明神の神主が、この様な所へ、それにしてもその名字八幡で聞いたが、

南都春日にもあるのか。」
「如何にも、鹿野の家元は春日が本家筋。」
「真か、しかしこの餓鬼等矢張り油断のならない奴等じゃ。」手下の一人が云った。
「餓鬼等とはなんだ」鹿野次郎左衛門はムッとした。
「しばらく、黙っておれ。」頭が手下を叱って云った。
「では、尋ぬるが、祝詞を読めような。」
「祝詞を読めとでござるのか」
「大丈夫で」と小声で兵三郎は心配して私語(ささや)いた。
「大丈夫だ」
「これ勝手に喋るな」また頭が云った。
「然らば祝詞を読めばそれにて放免して下されや」
「ウーム、まずは先に祝詞を読め。」
「さすれば、仕方ない。大神が臨まれる。あのお宮の方を向かいて、二拝、二拍手、一揖、云うた通りになされい。」
「…………」
「高天(たかま)の原(はら)に神留(かむづまり)ます皇(すめら)が親神漏岐(むつかむろぎ)神漏美(かむろみ)の命(みこと)……日高見(ひだかみ)の国を安国と定めまつりて……」朗々と厳かに唱じた。

「えーい、長たらしい、もう好いわい。」
「では、これにて。」
「いや、ならぬ、その物腰如何にも手練(てだれ)の武家と見た。」
「確かに幾らかは武芸をたしなみは致しますが」
「武芸をたしなむ程度ではないぞ」
「貴殿は執っこいお方でござるな、余り申されますと、畏き辺りからおとがめがござるぞ。」
「畏きとは、どなたの事か。」
「春日大明神をなんと心得おるぞ、無礼が重なれば、唯では済むまいぞ、無礼者め。」鹿野次郎左衛門の森縫殿佐好順は怒りをあらわに怒鳴った。
「なにが無礼ものだ、ついに本性表わしたか。」
「黙れ！　将軍家と云えども神畏きは御帝の御守り、場合に依ってはその方のみならず、支配方全員におとがめが及ぶが好いか。」流石の武士の一団も、鹿野次郎左衛門頭頼篤の剣幕に恐れてたじろいだ。
「ハハッ、ご無礼を、ご免下さりませ。」
「お頭ッ、これはインチキかも。」
「馬鹿、インチキでもなんでも頭を下げろ。」
「ヘエッ、インチキでも。」

「ばか、くどい早く。」
「ハッ」武士の一団はみな平伏して畏まった。
「この度はこなたから、ちと尋ねるが、貴殿らの長の姓名並びに官職を詳（つまびらか）に申せ、有体に申さねば、ただでは済まぬぞ。」
「ハッ、ただ今までのご無礼誠に申し訳無く存知上、どうぞご容赦御願い申し上げます。我が主は木沢長政、某はこの辺りの警備を受け持つ稲谷十兵衛秋種と申す者、此処に居ります者どもは某の手のものにて、どうぞ我らが仕事は警備が役目のこと故、平にご容赦願い奉る。」
「お役目とあらば、止むを得ず委細相判ったが、今後余り無礼のなき様に、よろしいか。」
「ハハッ、この事は何分にもご内密に、どうぞご機嫌をお直し下さいます様、平に平に、各の如く。」
「よーし、承知いたした。では、これにて御免。」

（二）

「うまく、参りましたな、殿。」
「いや、油断はならぬ。」
「祝詞は堂に入っておりました。いつあの様なご勉強をなさいましたやら。」
「あれか、あれは度々お館様のご代参の中に春日様で覚えたものよ。」
「はあぅ、それぐらいであれほどまでに。」

「最後までいけばバレておろうか」
「えっ、それは偉い事で。」
「まあしかし、あそこまでいけば後はなんとかなるぞ。」
そうこうするうちに陽も暮れかかり、今からでも、平野の砦へ戻れなくはないが、木沢の警備がきつく、石切の民家に一夜の宿を頼み、二人は泊まった。
夜中に荒々しい人の気配に、森縫殿佐好順が気付き、大安寺兵三郎をそっと、起こして様子を窺ったが、矢張り昼間の稲谷十兵衛の一隊が、周囲を囲み、大声をあげてこの家の主人と話しているのが聞こえてくる。
「ぬかるな、兵三郎っ、敵はどうせ十余人、可哀想だが、皆の息の根を止めねばならぬ。峰打ちとはゆかぬぞ。」
「ハッ、ではどう致しましょうか。」
「兵三郎っ、お主、下へ行き、敵を引き付けていろ。」
「ハッ」
「わしは、二階から、この戸を蹴破って表の敵を背後から襲う、よいな、わしが下へ降りるまで愚だ愚だ云っておれ。」
「ハッ」
「いざ！」

「ハッ」森縫殿佐が戸を少し開けると、月光があり、静かに裏の路地へ飛び下りざま太刀を抜き、真下に居た間抜けた一人の手下をバッサリやった。素早く小走りに走って、四、五歩先のもう一人を、と瞬く間に四、五人が声も無く阿弥陀仏。
「お改めである。某（それがし）は木沢様の家中稲谷十兵衛である。速やかに戸を開けて中の神主風情の二人をここへ出せ。」
「はい、はい。ただ今ッ、そう無茶に戸をお叩きになっては、戸が壊れます。しばし、お待を。」
此の間に稲谷十兵衛は、
「お前等三人は万一に備えバラバラに少し離れて待っていろ、何かあれば隣村の警備の篠原殿へ知らせるのだ。判ったか。」と命じた。
云われた男等は走ってそっとそれぞれ物陰に隠れた。
「グッフェッ」一人の若い雑兵がやられ時ならぬ叫びに稲谷十兵衛は振り向いた。
「あっ、昼間の神主メ」と槍を縫殿佐に向ける。
「愚かもの、神主なんぞであるものか、このヘナ猪口稲谷メ、気付くのが遅いわい。」下で待つ兵三郎が宿の主人を押し退け、飛び出し様、前の一人に斬り付けた。
「グアッ」縫殿佐が稲谷十兵衛の槍をはたいて、素首をはねる。
「グアッ」挟打ちにあった、三人の捕り方は、呆気なく、その場に血を吹いて果てた。
宿の主人に迷惑だがと頼み、藁むしろを借りて兵三郎も手伝い死体を草々に裏庭へ片付けたが、如

何に人数が多くとも大分時がたつのに主人が帰ってこないので不思議に思い、
「兵三郎、主人が遅いな、一端の礼を申さねば。」
「主人は遅くは、ありません、もう逝っています。」
「なに、主人がもう逝ったとは、お前あの人の好い主人を、まさか。」
「今ごろは三途の川のあたりを夫婦そろって仲好く手に手を取って」
「えげつない事を、あぁ、済んだ事はまあ仕方がないが。」縫殿佐は呆気にとられた。
「どうせつかまれば、二人は吐きます。仕方がありませぬ。」
「それはそうだが……」
「チャンと懇ろに、念仏も唱えました……」
「チャンとか、怪しいもんだ。いざ、平野へ戻ろうぞ。」
「ハッ」
「いや、待てウーム、鍬を一つとそれにこの屋の主人の着物も。」
「ハッ、何に使われます。」
「兵三郎が着るのだ」
「ウヘッ、何やら臭くて。」
「行くぞ、早く致せ。」
「ハッ」

「どうも一人二人足らぬ様な気がするが」
「エッ、いまの手下がでございますか。」
「ウーム」
「まずわしが一人言を云って先に行く、しばらくじっと待っていろ、誰か残っているかも知れぬ。」
「ハッ」森縫殿佐は如何にも誰かと話している様に一人喋って出ていった。案の定人影が二つ、草むらから飛び出した。
「居ましたッ、」大声で叫びながら兵三郎がその一つの影に袈裟がけに斬りつけた。
「グアッ」もう一人が脱兎の如く走り出した。余程足が早いと見えて、兵三郎の脚では追い着かない。
「殿ッ」兵三郎は叫んだ。
「オッ、よしきた。」縫殿佐は素早く小柄を抜いてさっと逃げる残る一人のみぎ脚のふくらはぎに投げつけた。狙い違わず、脚に深く突き刺さり、あっさり倒れた。二人は駈け寄り何故偽神主の事が露見したかを吐かせた。先の神社に確かめた所誰も尋ねて来てはいないとの返事で判ったのだと云った。そのうち誰かが助けに来るまで待っていろとがんじがらめに縛り付け民家に放り込んだ。
「間も無く夜明け、急げ。」
「危ないところで御座居ました」二人は急いだ。
「あの森の木陰に人影が」かがり火がくすぶり十四、五名の将兵が屯していた。

「警備が厳重だな」二人は緩やかに歩き出した。
「待て、かかる時刻に何処へ参る。」三、四名の雑兵がパラパラと駈けて来た。
「手前は春日大明神の神官、権禰宜御蔵掛、名は鹿野次郎左衛門頭頼篤でござる。」
「春日大明神の神官様が、かかる時刻に何処へ参られる。この辺りは戦の最中のいくさ場であるをご存知ないのか。」
「待って下されや、実は二月堂のダッタン帽の行方を探索の途中にて昨夜山越の所道に踏み迷い狼の一群に襲われ、その狼の四、五匹を執り斯様な返り血を浴びましたのじゃ、ほん其所でこのお百姓に会い、事情を語った所案内をこうて下されてな。」
「それはご難でござったな、しかし、よくご無事で。」
「有り難いおことば、かたじけなく。」先の稲谷とは大分違う。鄭重な尋ね方であった。
「我等は遊佐河内守直教の配下であるが、ちとお尋ねの事がござる。」チラッと脇を見ると、二、三の雑兵が頭目の顔を見た。明らかに嘘を云っている。
「なんなりと、お尋ね下され、もう大分某も落着きました。」
「ぶしつけ乍、どちらへ、参られまする。」
「恩智神社でございます」
「お寺社の事ならご鄭重なお文か何かをご持参では御座るまいか」
「かかる物を、ご覧下さいませ。」油紙に幾重にも包まれた、書状を鹿野頼篤は差し出した。

「今頃山犬なら兎も角狼など全くの嘘付き、者共、偽神主を討ち取れ。」
「なにを仰せられますのじゃ、怖い狼でござった。」
「黙れ、先程稲谷の手の者が知らせに参った、十に余る者等が簡単に討ち取られたと。」あの時まだ稲谷の手下がいたのが廻り道を駈けてここへ知らせたのだ。
「それは人違いでございましょう」
「まだぬかすか、それ絡め捕れ。」
「兵三郎！　お前の太刀だっ、抜かるな。」森縫殿佐は野良着姿の兵三郎へ叫びながら太刀を投げた。
「ハッ」と短く答えて兵三郎は受け取り様一閃キラリと光らせるが早いか正面の雑兵を唐竹割に真二つに叩き切った。
「ソレ」チャンチャンバラバラ砂ぼこり、
「アイャッ」掛け声が出る度に何人かが血を吐いて倒れる。
「エイッ、者共引け、お前等の相手でない、わしがやる。」
「エイッ、ヤッ。」森縫殿佐が構えた。
「某は飯盛山の城主、木沢の家臣、篠原和泉盛直。」
「応！　相承知した、名は忘れまいぞ、某は鹿野次郎左衛門頭頼篤でござる。篠原和泉盛直殿いざ、勝負。」
「まだ嘘を抜かすか、この偽神主メ。」

「ソレ、エイッ。」五、六合渡り合ったが、元より縫殿佐の対手ではない。
「シュパッ」奇妙な音がしたとたん篠原和泉の頸が空を飛んだ。
「プシュア、グチュアッ。」この間兵三郎も当たるを幸い、凪ぎ倒し、もう敵の一団は殆ど残っていなかった。余りの事に呆然としていた雑兵が恐ろしさに思わず、口から、
「わあぅ」たった一人残っていたのが、そう云ったから、悪かった。縫殿佐に背中を割られあえない最後であった。
「兵三郎、その書状をこれへ、さあ急がねば。」
「死体をこの杜へ隠せ、わしも手伝おう。」二人は急いで、十四、五の死体を隠した。
「昨夜からこれ迄戦さ並みにやりましたなあ」そう云い午二人はその場を去った。

(三)

枚岡の社を脇に見て遠目に伏し拝み、急いだので水越で昼になったが、どの街道筋も木沢の警戒がきびしく、茅場の小道を抜けると大きな百姓家が目の前にあった。
門を潜り中へ入ったが、けだるそうな目の牛が一匹胡散くさそうになま欠伸をこちらにむけた。邸内に人影はなく、ガランとしている。やがてお母屋の裏庭から腰を曲げた老婆が一人ゆっくりとなんでございましょうかと出てきた。
その後を追うように此の屋の主らしい、四十過ぎの男が就いてきた。

「母は惚けております」その男はそう云って、情け無さそうに老婆の顔を見た。まことに申し訳ないが、牛と荷車を貸してもらえまいか、と森縫殿佐は頼んだが、男はそれは困ると突っぱねた。牛小屋の様子からしてもう一、二頭牛はいるはずであった。
「牛二頭と馬が一頭おりましたが馬は畠山様の徴発に会い、もう一頭の牛は只今作男が牽いており、この牛はもうお役には立ちませぬ。」
「役には立たずとも、空の荷車なら牽けまいか。」
「空なら牽けましょう」ならばと云って森縫殿佐は此の金で、と銀子を与えて、牛一頭と荷車を手に入れ、太い孟宗竹の節を抜き、大小をいれて藁を乗せ握り飯とおまけに野良着まで分けて貰い大安寺兵三郎武範を作男らしく髪も結い直して、手拭いで頬冠させ縫殿佐もその主人という態にして百姓に化け堂々と街道を過ぎて平野の丘へ向かった。流石に百姓姿には木沢の手も甘かった。平野の丘に近くまで来たところ、商人風のにやけた男が一人、こちらへ向かって手をふっている。見れば永良善助であった。この十幾年彼はこの姿でこの辺りと平群の丘、それに大和までをも大手を振って往復し、河内での情報収集と食料の調達に励み、木沢の兵ですら、時折見掛ける山奥の小商人とみなしていた。
はや三月の声に、俄かに暖かく、一夜森縫殿佐はこの平野の将兵を集めた。半刻程の間に続々と皆が揃った。
どの顔も皆一騎盛んな大和武士の懐かしい臭いがした。
大安寺兵三郎武範はここでの武術の訓練は並みの働きではならじとして、身に十貫の石袋を負い、

槍は全身鉄製で、闇の夜でさえも丘を駈け上り、この辺り一帯は目を閉じていても人の通る道と獣道を踏み分けて区別さえ簡単に判るほどに鍛錬を積み重ね、今身に着けている鎧が軽く感じると云うのであった。
「これをご覧下さいませ」
「おゝこれはようやった必ずきっとお役に立つぞ」其所には木沢の旗指物が三十余りも積まれていた。
「これより全軍平群へ行くぞ、用意は良いか。」
「おゝ」三百余りの全軍が平群へ向けて静かに進軍を開始した。全軍が平群城へ入ると狭い城内は人息きれでむんむんした。
「滅多な事は無いと思うが戦いの日迄絶対ここを出るな全員良いな」森縫殿佐は厳命した。
「はゝ」
「万一の事が出来れば此の縫殿佐が必ず救援に来る」
再び森縫殿佐は永良善助を伴い筒井へ無事に帰ってきた。筒井では早速軍議が開かれた。
「情勢は必ずしも御味方に有利では御座いませぬが……」筒井親族、重臣等の前で森縫殿佐は状況を報告した。
「…………」
「畠山稙長様を初め、遊佐河内守長直様等は殊の外、ご一党様にはこの度の一戦に並々ならぬ、ご決

意にてお心強く召されませ。」
「はばかりながらそれは、何時ものことではないのか。」
「いえ、遊佐河内守様直々にお目文字致し、お言葉が違いました。」
「どのように……」
「京の情勢からしてとても木沢殿への援軍が動けないとの御判断の外、この度は三好修理太夫長慶様が愈々最後の詰めを……」
「誠か」
「その事で、詳しいことは申されませんでしたが。」三月五日は変更になり十日とはなったが払暁には必ず約束する。必ずだ。語気を強められ先ず大和側から一刻早くうしの下刻に信貴山を攻めその時刻にはこの遊佐長直が二上山城を初め木沢の河内軍全軍に対して総勢三万余りと共に三好、畠山様と攻める。筒井が先に信貴山を攻めれば敵は河内の手配が遅れる。今迄の様にバラバラに攻めていても敵は屁（へ）でもない。二上山城へは後、刻を遅らして大和側から攻めてくれ。

信貴山城攻めは総大将筒井順昭が指揮して当たり筒井順和、同藤三、滋明寺左門、森九兵衛、松倉右近等一万余人。遊撃の将は森縫殿佐の旗下等二千、二上山城へは総大将清須美兵衛、島左近友武、箸尾少輔、越智家頼等八千余人、三月十日の未明に出陣と決定した。

法螺貝を吹き銅羅を鳴らし大太鼓をうって信貴山城攻めは始まった。一の砦に打ち掛かる筒井勢はこの度こそはと討って出たが、一方、一早くこれを知った木沢勢も一隊を生駒南の丘から筒井勢の背

後を打つべく二千余りが超えて大和の平群谷（ヘグリダニ）へ入った。二千余りが平群谷へ降りきるのを見て大安寺等五百余人は今が待ちに待ったその機会、と木沢の旗指物を背負い平群谷へ雪崩を打ってこれを追尾した。態勢の整わぬ、敵は味方の援軍かと思う敵に出会い慌てて混乱し敗走した。敗走した一千七、八百余りの敵は猛攻する筒井勢と交戦し危なしとみて引返し再び大安寺等に矛先を向け大乱戦になった。多勢に無勢大安寺等は押され瀕死であった。乱戦の中をかい潜り使番が到着した。

筒井順昭は森縫殿佐好順、超昇寺等二千余りを急派したが、時既に遅く十数名が、残るばかりにまで撃たれ僅かに大安寺兵三郎、永原善助らが奮戦中であった。先頭切って真っ先駆けた森縫殿佐好順は約束通り救援に来たぞ、と駈けにかけた。付き従うもの僅かに小石元三郎父子、坂口、西本等の五、六名。双方三千五、六百の軍勢が相争う激戦の最中敵軍に向かい、まるで疾風の渡るが如く、荒波を蹴立てて走る戦船。群がる敵の波を蹴散らせ蹴散らせようやく大安寺兵三郎、永原善助等にであったが、彼等は満身創痍で戦っていた。

森縫殿佐好順らの旗下軍は猶も随分遅れていて忽好順は群がる敵に取り巻かれ十数名の敵の弓組が一斉に狙って放つ矢に射貫かれ、愛馬諸共大地に打ち倒れるところを無数に突き出す槍襖を全身に受けた。

かすみゆくまぶたに映る敵の一方の大将と覚しき一将に無念と、叫びつつ最後の力を振り絞って我が槍を投げ付けたが、それが好順の壮烈な最期であった。

そこへようやく旗下らの筒井軍が大挙して押し寄せたが永原善助等は既に事切れていた。

だが、辛うじて息のあった大安寺兵三郎は倒れてはいたが体を西に向け最早傷の痛みもなく筒井軍の救援を心から喜び、顔には微笑を残しつつ、合掌しようと手を動かしかけたがちょっと動いただけで逝ってしまった。

平群谷での双方の戦いは縫殿佐好順らが討たれたにもかかわらず、弔い合戦とばかりに筒井勢は奮戦し残余の木沢勢の一千数百を撃ち残りの殆どを壊滅させた。

更に逃げる敵を追い、敵は信貴山の裾に取り付いたがその数は知れていた。

一方これとは別に筒井順昭率いる本隊が決死の突撃を敢行していた。

(四)

険しい谷を登り、沢を経て幾重にも重なる敵の柵を破り、周囲から一斉に火矢を放ち、息も注がせず攻め続け山の上はその為火の海となった。

飯盛山城にいた木沢長政の勢は信貴山城と二上山城の戦いに若江、八尾、高屋城から軍を出し、防戦に努めたが二上山城には早くも畠山稙長、遊佐河内守長直等の軍勢が押し寄せ攻防は熾烈（しれつ）を極めた。

木沢長政の勢は二手に分かれて凌がねばならず手薄を突いた三好勢に追われ勢力を削がれた木沢長政は一千余りを率いて作戦の展開移動中、河州太子の太平寺で遂に息の根を止められた。この知らせは、すぐに信貴山城と二上山城で戦う両方の将兵に知れわたり木沢勢は総崩れになって両城は落ちた。

十一日の未明にまで両城はくすぶり続け双方の死者の屍が累々として折り重なり見るも無残で壮烈な戦いが終った。

森縫殿佐好順やその他以下与力衆を合わせ三千の犠牲者を出した戦いであったが順昭は河内に赴き、三好修理太夫長慶、畠山稙長、遊佐河内守長直等に会って共に祝杯をあげ多くの旗下を失った悲しみと勝利の喜びと云う複雑な中に筒井城へ帰陣した。

快　然

(一)

古市氏は勢力が回復すると筒井の属領をすぐに侵食した。

天文十二年四月十五日、夜中に筒井大膳、滋明寺左門、福須美兵衛、森九兵衛改め志摩守藤原好之、島左近友武、松倉右近政秀、小田切春次、十市遠忠らを集めた筒井順昭は六千余騎を率いて南都北小路の飯田一族頼近の手勢六百と合流し、背に分銅文の旗印を負い須川城へ朝霧を払い出陣した。進軍する払暁の道の草むらから、きじが《ゲゲーン》と濁った声で一声鳴いて羽音をきしませ、これから攻める敵の方角へ向かって飛び去った。

「幸先（さいさき）ヨシ、我等の勝利は目前なり。」順昭は縁起を担いだ。多勢の攻撃を受けた古市方須川城主須川藤八は先陣の森志摩守好之が率いる千五百余りの軍勢にあっけなく果てた。

一方、島左近が指揮した一隊が、春日山奥の大平尾城に迫り糧道を断って対峙し、筒井順昭指揮す

る本軍三千は古市本城へ向けて攻め掛けていた。そこへ筒井から後続の山田民部が向井掃部、小和泉四郎左衛門、番条嘉門、八木近長、中坊美作守等の三千余りを率いて参陣し総勢九千余りに達した筒井軍は各街道筋の奈良坂や紀寺、大安寺、神殿、帯解、窪ノ庄、八島、今市等を抑えて古市城を完全に包囲し松倉右近には一隊八百を授けて柳生街道へ向かわせ、誓多林を抜け忍辱山に到り柳生氏の動きを封じた。河内の遊佐河内守長教が二千五百を以って加勢に来て愈々筒井軍は脹れ上がった。また一方、最早越智氏が救援に駈けて来る事はなかった。越智石見守が筒井軍との戦を強行に反対していた。越智氏には往年の勢いなく更に筒井に居た時の扱いに甚だしく感動を抱き、いま此所で古市に援軍を出す事は得策ではない。《筒井は信用ならじ》と強く拒む者があったが筒井氏は応仁以来この方、一貫して東軍から動かず、操を保ち古市氏とは律義さに於いて根本的に義を異にする。筒井の考えは常に大和国内のみが最重要としている。これからの越智氏はむしろ筒井氏との連合に於いてこそ大和の平和の招来を図る事が出来、従来からそうであったが長い目で見れば古市とではより好い結果とはなり得ず、ここで援軍を出せば却って大和の諸将から越智氏の信用を落とし、その上場合に依っては我等一族が筒井の攻撃に屈し、将来に於いて必ず破滅を招く事になると越智一族を説いていたからだ。

須川落城後、森志摩守好之が率いる千五百余りの軍勢が古市城の攻撃に加わり全勢力を傾け総攻撃を掛けた。城門に火を付け大掛矢で打ち破り一騎当千の猛者どもが先を争い雪崩を打って鎗襖を飛びこえ三の丸二の丸や四方の櫓の石垣に取りついて松明を投込み各櫓からは炎が立昇りたちまちにして燃え上がった。既に筒井軍が本丸に迫る。古市の将兵に比し筒井の勢いが強過ぎた。

直ぐに残の軍をまとめて順昭は島左近友武、松倉右近政秀らが攻める春日山奥の大平尾城に向かった。

《最早これまで》古市播磨守胤重、胤継らはその猛攻についに白旗を出して降伏し和を願い出た。順昭は容れて両人の頭を剃り放逐した。筒井大膳、滋明寺左門に二千を授け又降将、古市九郎兵衛の旗下二千余り等と共に城を預けた。

「島左近様からお使番到着！」使番は沓掛を経て到着した。

「よーし、これへ！」

「只今苦戦、直ぐにご援軍を！」

「これより全軍向かう所、すぐさま立帰って左近にそう伝えろ！」

「ハッ、有難うございます。」

「者ども行くぞ、これより大平尾城へッ、進め！」

入違いに誓多林村から使いが到着した。島左近からの使番とは道が異なっていた。

「森志摩守好之様からもお使い」

「志州は何所へ行っておる」

「ハッ、主、森好之一足先に駈けッ、只今誓多林村を通過、そうお館様に申し上げよ、と。」

「ナニ、誓多林村通過だと、もう行きおったのか、気の早い。」少し不機嫌に言った様だが、決して怒っているのではなかった。最早安全と看れば直ぐに次の行動に移り適宜連絡を怠る事なく機転を利

かす好之や島友武、松倉政秀らを順昭は最も高く買っていた。

「尚、総勢ご出陣には及びませぬとも。」念の入った事を、もうぼちぼち落城の頃か。

「志州らしい事を、まあこうなれば筒井の祭じゃ、行くぞ。」

「島左近様から再びお使い」進軍途中の馬上の順昭は再び左近の報を受けた。さては落城したな。

「忍辱山へ志州様ご到着により古市周防守胤実殿の御頸（みしるし）頂戴、その後、敵将相継いでぞくぞく降っており。」

「さもあらん、して、降将らの名は。」馬を留めて馬上から順昭はニコリとして聞いた。

「ハッ、古市民部少輔胤慶殿を初めとして、同彦三郎、同七太郎、同左近丞学高、同新発意（しばい）、森五平次入道一斎、家老の花田喜太郎の他、西村与左衛門、国波弥八郎、中弥兵衛、花防外記、吉岡仁兵衛、邑地（むらち）源内、小俣越中……」

「あぁ、もういらん。」順昭は欠伸（あくび）が出そうであった。

「ハッ」使番の萩原作兵衛も喋り疲れた。

「合計いかほどだッ」

「ハッ、上下合わせて二千七、八百かとッ。」

「ヨッシ、大儀、全軍休憩じゃ。」

「また、島様から、お使い。」

「おッ」

「弟の島右馬之亮友高様らに生駒刑部（ぎょうぶ）、桜井宗四郎、戒重（かいじゅう）多門の他、総勢千余名を残し、これより全軍引き揚げます。」

「よッシ、判った。」

こうして、山城南三郡守護代まで勤めた古市澄胤なきあとの古市氏は没落した。澄胤は馬借一揆を裏から煽りたて、土倉（高利貸）や酒屋に赴いてこれを守り、銭一千貫の守備代の暴利を貪り莫大な収入にするなどしたが、悪銭身に付かず、子孫の代にはこうして筒井に攻め亡ぼされた。

それに引き換え打ち続く長き戦乱の世に、ここまで筒井がこれたのも高曽父筒井順永以来人をして……国中無為無事モ一円筒井計略故也、……〔天に口なく、人を以って云わしむ〕の例え通りであった。南都の町びとは上下の区別なく予てから横暴を極めた古市氏の敗北を知り筒井氏の大勝利を心から祝福したのであった。

大した損傷もなく、順昭は筒井城へ凱旋した。

因に、古市、越智両氏は畠山義就から同基家に続く同義英（在氏）を領袖と仰いで西軍に属し、筒井氏は畠山政長―尚順―稙長らと続く東軍に属していた。だが全てが一貫していたわけではない。越智家令の娘が筒井に嫁し箸尾の女の外、順興の室には亦越智家令の孫娘（家全の娘）がきていて筒井と越智がこれでまあ本当に真面目に戦ったのであろうか、それらの女にも子女が沢山いただろうしと信じられない程だ。越智、古市両氏は常に連合して筒井と戦って来たのであるから越智古市両氏の関係はもっと密接であったに違いないが、その点は判らない。これら一連の戦国時代の混乱の基は、

応仁元年正月、畠山持国の庶子畠山義就軍に持富の子政長とが京都上霊社境内で戦い応仁の乱が始まったのだが当初政長を応援していた細川政元が、これを見限り義就に加担し義就の子基家と組んで明応二年四月（明応の政変）将軍義材の廃立を強行した事から都は云うに及ばず近畿、北陸、中部、四国、北九州に到るまでを巻込み戦の経緯が混乱の上にも混乱を招いた。その後細川晴元が畠山義英（在氏、義央）との戦に本願寺光教の応援を得た事から更に天文法華の乱と展開していくが戦乱はなおも続く。

（二）

天文十三甲辰年三月郡山城主小田切宮内春次、興福寺慈尊院、徳蔵院らを飯田へ向け、順盛時代の遺恨を水に流し入道春宗の子頼直等は予てからの説得に応じ、順昭妹玄子との婚約が成立し納采のあとその後筒井家森志摩守、島左近、松倉右近ら三老が何度か往復し小田切宮内媒酌人となって同年九月十六日婚礼を執り行い、執ような松永の勧めや脅迫を斥けついに飯田氏も筒井の旗下に入った。飯田には父子を初め西岡宗兵衛、中村孫左衛門、石井又太郎、鷹問式部時顕、北市主殿らの豪傑の外二千余りの精兵がいた。

越智本城の城主、越智民部少輔家元が子の家頼を伴い家老子嶋掃部、鹿野安兵衛、下忠左衛門、吉岡新九郎氏高等を引き連れて筒井順昭の下に参向した。

大和一国今や筒井に刃向かう者は誰もなくなった。

様々な接待を受けて越智民部少輔等はかえっていった。

一日、筒井順昭は歴代の夢の実現をここに寿ぎ一族郎党を挙って引き連れ菩提寺の円証寺に参籠して祖霊の供養と幾多の将兵の鎮魂の為に僧侶を集め三百貫文を寄贈して大法要を行い大和一国支配の報告を墓前に額づいて行った。思えば此所まで永い道程であった。

天文十三年七月二十七日　去年古市大平尾城攻めの時に不穏であった大和の北北東にある柳生一族を飯田頼直に命じて降伏を説かせたが肯ぜず筒井順昭は総軍一万余りを率いて再び忍辱山（にんにくせん）に陣し、元より赤子の手を捩じる様なものであったが、お高く止まっていた柳生氏の小柳生城を同二十八日なんなく陥落させた。まるで象が蟻を踏みつける様な有様であったが同二十八日和を乞うた柳生因幡守は大柳生城を開き順昭は鷹揚にこれを赦した。

ある時は筒井と同格であった十市遠忠が矢張り子供の遠勝を連れ筒井順昭の下に来た。

「某等の時代は最早、終り申した、跡の事を宜しく。」と云うのであった。

各権門の権威が徐々に失われて筒井氏の勢力範囲が拡大され大和に比ぶべき者なき時代の到来を象徴していた。

十市遠忠の子、遠勝は遠忠程の器ではなかった。

天文十四年正月、例年以上の祝賀の賑わいをみせ筒井城内はその華やぎに充ち溢れた。歴代に仕えてきた家臣達はその苦労を大いに酬われた。

三月半ばに遠忠が逝くと十市氏は悉く筒井の旗下に入る。

十市氏に楠木正成三男の系流ありと云うが、こうして大和国内は筒井の息の懸からないものは一人としてなく十市遠勝の弟十市備後守遠政、十市信濃守遠秀や重臣の中原善右衛門遠成、吉備越前守等が筒井の城内に役宅を得て留め置かれ十市の勢力を裂いて実権は筒井の下に総括された。

筒井の城内は手狭になり小一年を懸けて逐次拡張し、その要請に応えた。

越智石見守家秋が逝き、又一族の中で意見が分かれ、ついに越智玄蕃頭家全が、曾て越智氏の縁の地であった竜田郷で河内の畠山在氏と組んだらしく不穏であった。この度は箸尾も唆された。

筒井順昭は森志摩守好之、島左近友武らに三千余騎を授けこれを討った。天文十五年九月二十四日菅原郷を悉く焼き払い玄蕃頭家全は河内へ落ちた。森志摩守好之、島左近友武らは素知らぬ顔をして箸尾城を通過し突如として筒井順昭五千余騎と八木で合流し九月二十五日高取の貝吹城、興田城を囲み引続き佐田城、玉手山城と攻めて壺坂寺をも攻めたが糧道を断っても各城は要塞堅固にして中なか落ちなかったが十月一日順昭へ森好之が願い出た。

新兵器

「三百の兵と旬日の猶予を某に給り……」真剣な表情であった。

「ウーム、旬日の間に何とする。」

「源九郎の真似ではありませぬが……」

「ヒョ鳥の義経か」順昭は高取城の地形を知らなかった。

「少し違います。しかし、ご承知の通りそびえたつ高取城は天険、周囲の山と高取城にはかなりの隔たりがございますが、それだけに安心して敵には油断がございます。桜井を経て栗原、音羽山、津、西谷、佐々羅、河原屋、上市に到り真っ直ぐ山の道無き谷沢を登り中増、手股を越え尾根を高取の南に出て密かに裏山に潜み時を合わせて攻め登る積もりでございます。」

「ウーム、ようし、やってみるか。」かくして好之は発った。十月九日筒井全軍は家頼の貝吹城を一つに絞って攻めに攻めた。

一方十日の早朝に森好之らはやっと高取の南についた。

大竹を割り幾つもの長い梯子をつくりまた、小石を包んで棉に油をにじませ大弩（ど）をこしらえて城壁の下に潜んで戦いが始まるのを待った。

遠くで銅羅の音、大太鼓の響き、戦う鯨波（とき）の声。愈々戦いがはじまった。弩を放って城内に射込むが高すぎて思うように届かない。しかし、めげずに森好之等の軽装三百の兵は胸を突く切り落した様な急坂を長い梯子に噛り付くようにして登り城壁に必至で取り付き天主台に踊り込んだ。

天主台にいた敵の見張りの将兵等は貝吹城の戦いに目を奪われ忍び寄った森好之等に全く、気が付いていない。忽占領すればこちらのもの。付近の櫓に火矢を射込み火の手が上がる。慌てふためく下の各櫓に向けて順昭から授けられたこの時まだ非常に珍らしかった、一挺千八百両もする鉄砲二挺を好之は始めて盲撃ちに何度か撃たせてみた。

和州諸将軍伝には〔此歳種子島……主兵部丞時尭ヨリ二十挺島子嶋ノ住松下五郎三郎定之ヲシテ順昭ニ送リ来レリ……〕云々(そうそう)とあるが、現地の種子島でさえ一挺千両もしていて二十挺と大袈裟に書かれているがとてもそれ程の数は無い。

がしかし、寄せ手の好之の部下もその音に驚いたが高取城の将兵はもっと驚かされた。時折《パン、パン》と妙な音とともに守る将が倒れる。兵卒なら未だしも一門の将があっけない最期を遂げるので城方はたまらない。

音がすれば誰かが必ず倒れるとは限らないが、この新手の武器は大いにその威力を発揮した。

守将子島掃部が、僅か三百の森好之に攻め込まれ、不覚にも首級(しるし)を揚げられた。

高取城の下の砦や櫓に居た将兵が逃げ来たるのをみて、こだまする山の手の高取城から鯨波の声に寝返りと錯覚した家頼は貝吹城を開いて降伏した。家頼の降伏で最早一族は否応無く全て帰服した。

反筒井の急先鋒で、河内から帰っていた越智家全の頸をはね、順昭は家頼の子の家高を質として取った。

残る大きな曲者は箸尾一族となった。

こんな時三好修理大夫長慶の祐筆から身を興して、近侍となり三好家の執権にまでなり人を人とも思わず出世の道具としか考えない男がいた。

逆臣松永弾正忠久秀であった。

美濃の斎藤道三と互角に勝負の出来る戦国期きっての逆臣の筆頭である。

摂津にその基盤を置き、やがてこの後筒井順慶が人生の大半をこの男の為に戦を余儀無くされる悲惨な時代が始まるのであった。

蟬時雨

(一)

古市、十市、越智とくれば、次は当然この身が危ない、其れに去秋はまずかった。越智家全の誘いに乗せられたのが、身の破滅か。越智でさえあの始末、この間の筒井からの呼び出しには、仮病で胡麻化しはしたものの、そう再々嘘もつけはしまい。あれから半年、この正月に伺候して以来その後に一度筒井城へは行ったきりで、後は殆ど家老の服部大炊助が用事を済ませていたのだ。如何が致したものであろう。正直に吐露して、詫を入れようか、否！　露顕すれば《子女の事は、問わず》として例え今までは知らぬ顔をしていたとしても許されるはずもなく、身の切腹はまぬがれはせぬ。と、とつおいつ箸尾宮内は一人苦しみを増していた。

筒井家中では気があい親しい郡山の乾五郎に頼ってみようか、ついに意を決して、密かに箸尾宮内は乾五郎の館に向かった。

「折入って、お会い申し上げたき、筋……」案内を乞うた箸尾宮内にまずはお通りをと乾五郎は部屋に通して、

「いや、幾分お噂にてお聞き致しており申すご要件の程は。」と乾五郎は箸尾宮内の顔をしげしげと見て云った。

短刀直入なその言葉は箸尾宮内の心臓を一突にし、

「アッ……」と息を呑んだ。

「驚かれずとも、蛇の道はへび、お聞き致しており申す。」

「……どなたに……」

「いや、それはどなたとも申されませぬが、其れなりに貴殿だけの問題でもござらぬし、我等と同様筒井の同族の辰巳も不穏でござる。」次々に空恐ろしい言葉が続いた。筒井に間者の網が張られているが如く、我等にも裏の道がござる。幾分かは皆筒抜けだ。日頃は上部だけの付き合いでそれ故に筒井順昭とその郎党は今は素知らぬ顔を致しておるが、いずれは我等も潰されるやも知れぬ。

「まさか、真にそう御想いなのか。」箸尾宮内は一瞬たじろいだ。ここまで言うのなら腹は決まっているのか、生唾を飲み乍ら眼は五郎に張り付いた。

「嘘ではない、某は、嫡流ではない故……」

「嫡流でなくとも」

「否、母者が下賤の身故と勝手に僻(ひが)んだ癖の成せる身の憐さよ、あほな話、今この歳にして、己の愚さに呆れており申す。」

「…………」

「それにしても、一族もさるもこと乍らあの森、島、松倉の三人が殊の外の結束、亦三人ともスコのよい者共でござる……」

「…………」そうだ、怨みがましいが順昭も一族が僻む程三人を大切にしている。

「絶対隙は見せぬし、知略武略に長けて、度胸もある……」

「…………」

「普段は滅多に腹は立てぬし、愛想がよくて始末にわるい……」

「…………」非の打ち所がない。うなずきながら聞いていた。

「あの三人の中一人でも筒井が譲れば、某にしても、城の二つや三つ、簡単に取ってくれようものを……」箸尾宮内大輔為政は黙然と聞いていた。矢張り誰の思いも同じだ。聞く所によれば、時流に旨く乗った事もあろうが、子飼の一統の結束が古市、十市、越智等の比ではない。日頃見ていても、何事も、手抜かりがなく主従の動きが、まるで水が流るる如くに、物事が運ばれ、付随う以下の将兵達も水に遊ぶ魚の群れに似て、ここ数年の戦いで、負け知らずである。十市から来た兵すらも近頃ではすっかり同化して、今では筒井の将兵と見分けが付かぬ、と云う。そう云えばこのわしとて、心の底から一度と云えども筒井の臣の積もりはなかった。あくまでも、有力な筒井の客将だった。いつか再び大和一国我が手中に治めて先祖の無念を晴すその時迄じっと堪えるのが良策と辛抱してきたのだ。

滅多に当方の腹を見せた事がない積もりでも先刻相手は承知か、上から見れば丸見えなのか。

元は当国並びなき、長川党の盟主曽祖父宗信の代までは大和西南部の大半を領したきっての名家の

誇りが、この乾五郎とは違った僻みとなって時代の行方を見誤ったのだ。今更仕方がない。《一か、八かこうなれば戦うか》乾五郎の話を聞き乍ら、宮内大輔は考えた。

然し、ここまで言いながら乾五郎はそれ以上宮内大輔には言葉を進めなかった。《共に立とう立って筒井に戦を挑み、積年の冷飯の苦しみを筒井に味合わせよう》とまでは決して云わず、心の底にある本音は秘めている。幾ら何でもうかつには乾の吻からもし洩れたとなれば、宮内大輔以前に乾五郎の方の首が危なかった。宮内大輔は聞くだけに留めた。郡山にいた筒井一族の事を筒井城からみて乾（北々西）の方角にありこれを一族間では乾と呼んでいた。辰巳も同様であった。

「……突然お伺い申し上げてご無礼致した。」

「いや、何の、何かお役に立ちましたかな、ご無礼な事でも申し上げましたやら。」突然の辞退にけげんであった。

「お伺い申し上げてようござった、少し気が治まり申した。辱い。」礼もそこそこに宮内大輔は辞した。帰途ふと一つ思いついた。そうだ、あの森、島、松倉三人の中、誰か一人を殺(や)れば、箍(た)がはずれる。そうしておいて、筒井と戦いだ。場合に依っては郡山辰巳やこの乾を誘い込んでと宮内大輔はとんでもない事を考え始めていた。

それから、半月も経ぬ頃何の音沙汰も無い天文十六年の春の終り松倉右近政秀がわずか二人の伴を連れ突然箸尾宮内大輔為政を訪ずれた。

その日は雨であった。蓑(み)の笠も馬もずぶ濡れの三人は一時の雨宿りをすると直ぐ真新しい蓑の笠を

喜んで受け取り、そそくさと帰っていった。ドキッとした箸尾宮内大輔ではあったが、所用の帰途なのでと言う右近政秀の言葉を真に受けて土産を与えて別に何の事もなかったが、予てからの策謀も思い出さぬ間に帰らせた。

《シマッタ》其れなりに彼等の腹の中の様子を少しでも探ってみればよかったのに、と無念に思い、また右近政秀を殺れば、と心の底を揺った。思いながら、髪の毛が逆立った。機会はそうあるわけがない。千載一遇の機会を失しておのれの愚ろかさをなじった。いや、これで良かったのだ何事もなく無事でとも思ったが、心中は定かではなかった。

《所用とは何であったのか》

実はそれとなく雨を幸い詰めの下調べであったのだ。

筒井城中、一番の重臣等の詰め所の中で筒井の親族乾五郎は上に座し、森、島、松倉の三人を前に対座していた。

だが、乾五郎は上座に席を占めながらその顔は真赤に染めて、苦渋に満ちていた。

「折入って、申し上げたき、議が……」

「お珍しき事何なりと、お館様の大伯父御様(おおおじご)に何のご遠慮が要りましょうや、……さぁどうぞ。」促されてその重い唇を筒井将監乾五郎はやっと開いた。

「実は先日、箸尾宮内大輔為政殿が密かに某を突然訪れられ申したが、事が事だけに某も苦悩致しおり今日になり申した。」

「なんと、重大な事でございましたのか。」
「如何にも重大な事でござる……」
「おゝ……」
「為政殿が取り成しを申し出られました」
「なんの取り成しを申し出られましたのじゃ」
「常日頃我等はご承知の通り、あの御方とは取り分け親しく致しおり申す。」
「…………」
「為政殿は少し気のお弱いお所がござって……」
「如何にもお優しいお方でござる、で。」
「それで、去年の事でお気をもんでござる。」
「何のお気のお弱い事、去年の事とは龍田郷の戦の事でお気をもんでござるのか。」
「如何にも」
「今やあの事は既に越智殿の事までも済んだこと」
「否、其れ故に悩み苦しんでおられ申す。事の次は為政殿に向けられるのではと。」
「いやいや、何のそんな事がございましょうやこの筒井家にとって大切なお人滅多にその様なご心配はござりませぬ。」
「おゝ左様か、ならばご安心でござろう、急ぎこなたからその旨使いを出しましょう程に。」

「日頃から、何かとご心労の事有難く存知上げ申します。」
「左程の事でもござらぬ。ではこの事ご内聞に。」
　乾五郎は順昭に挨拶する事もなく、いずれまたと云って帰って行った。
　一方見送りも形こそ鄭重に乾五郎を送り出したものの、重臣の詰め所に戻った三人の心の中は穏やかではなかった。
「箸尾宮内大輔殿が乾に来て早や何日になる。如何に仲が良いとは云え今日まで放って置き、またなぜその時ふらちな箸尾宮内大輔為政殿をその場で切らなかったのか、怪しいからぬのは箸尾も乾五郎も同罪だ。」と煮えくりかえった。今直ぐお館へと事は運びすぐ様順昭へと森、島、松倉の三人が揃って即刻乾五郎の追手の議を願い出た。事は急を要した。
「手近の乾五郎を某がこれより直ぐ討(うち)に出ます」
　順昭に森志摩守好之が申し出るとよし直ぐに行け、と順昭はこれを許した。好之は鎧具足も着けず、五名の騎馬武者と共に城内から疾駆して、乾五郎が郡山の館に到着する寸前にこれを捉えて討伐し、主従の首を五つ揃えてその日の暮れ方森志摩守は難なく帰りこの度の事、どうせやらねばならなかった一件の一つは済んだ。
　乾五郎の郎党は事の成り行きに驚き館に火を懸け、二百は霧散し、三百は筒井に泣きついて三老に各百ずつ振り分けて預かった。
　扨て、箸尾宮内大輔為政から始まった不穏な動きは郡山辰巳にも、飛火したが、数日を経ぬ中に五

百の兵を出してこれを潰滅し降るものは全て許したのは言うまでもないが、只残念ながら肝心の辰巳藤七郎は一早く逃散して行方不明であった。

　箸尾城に潜んでいた者から知らせがあった。

《箸尾氏不穏》既に乾五郎の始末の翌日ではあったが対応のその早さが妙であった。それもそのはず、その日乾五郎は筒井の城を出るが早いか、直ぐ様箸尾へ事の詳細を認め一人使いを出していた。文末には、共に立つとあったのだ。

「殿、筒井から森志州様がお越しで……」

「なに、馬鹿を申せそんな筈は……」既にそばまで一人志州がにこやかに現われ即座にその大広間に座し鄭重に頭を下げた。

「おゝ、これは大輔様、随分のご無沙汰にてご無礼の程、ご息災にて何よりと存知上げます……」

「ぷはぁ……」と箸尾宮内大輔は呆れ却って眼を白黒させた。

「筒井のお館様は、ご心配の余り大輔様ご病気のご様子その方、直ぐに看て参れとこの志州がお使いに詣りました次第この様にお元気ならばご心配はございませぬな、早速たちかえりご様子有りの儘伝えましょう程に。いや、結構々々……」と余裕たっぷりに箸尾宮内大輔に挨拶した。慌てて箸尾宮内大輔は、

「遠路よう参られた、さあ、なにもないが酒は充分にござる。どうぞごゆっくりなされい。大炊助等を呼べ。」宮内大輔は数名の重臣を集め酒、肴で志州をもてなし、下へも置かぬ鄭重な扱いであった。

(二)

「有難う存ずる」

　その間に宮内大輔は箸尾城内奥深く密かに同族又三郎盛秀、寺田甲斐等の重臣を別室に呼び集め深刻に事を謀っていた。この機会にこの志州を、やる。あやめて、それから筒井と一戦だ。

　だが、この志州をいつやるかが、今は一番大事なはかり事であった。いくら何でも城内では森好之を切るわけにはゆかぬ。城外は筒井の将兵が静かに占領した事も知らず、只筒井の三老の一人森志摩守好之の謀殺のみに城内は心を取り乱していた。程なく酒盛りは終り、箸尾家の家老服部大炊助時秀の城外屋敷と称する処へ森志摩守好之を伴い下って行った。二人のそれぞれの鎗持ち以外彼等のほかに何一つ動く影はない。月のない漆黒の外は無気味な程の静けさであった。定紋の入った暗い提灯だけが頼りの灯かりでおまけに今宵も小雨が降り、提灯の蠟燭が何とも頼りない。風が吹くとその頼りない蠟燭の火は大きく揺れた。暫く並んで歩いて行くと鎗持ちの外に後ろに幾人かの人の気配がしてならぬと森志摩守好之は気付いたが振返りはしなかった。大炊助時秀の動きはしかし、微塵の迷いもなく、足並みは乱れない。流石この箸尾城きっての切者であり、また腕も人一倍優れ、筒井家中でもこれ程腹の坐った男はそうざらにはいない。小路を曲がり然るべきその屋敷に着いた。明らかにそれは大きいが百姓家であった。《ここで、やるつもりだな》やがて門番が出てきてその門が内側へ開かれ門番の手燭の明かりが洩れた。大炊助時秀の手から殆ど同時に持っていた提灯が地に落ちパッと燃え始めて俄かに辺りが明るくなった。瞬間換発を入れずに大炊助時秀の腰が動き、提灯の火にキラリ

と一閃、光が走った。
元より油断のある森好之ではない。
「おゝッ」
「エイッ」お互いの気合いが声を押しころした静かな、しかし、希に見る剛勇の対決であった。伴に変装して、鎗持ちになっていた小石元三郎の子の永久は好之の危急にすかさず大炊助時秀の伴の鎗持ちを切って、後に迫る数人の敵の影に身構えた。一方森好之と大炊助時秀との切りあいは十数合あってまだ暫く勝負が付かぬかと見えたが、一瞬にして森好之の太刀が、大炊助時秀の左脇へ食い込んで、二太刀目には、怯む大炊助時秀の脳天から顎までを切り裂いた。
「ガァッー」と短く時秀は叫びを残して息絶えた。小石清三郎永久は落ちて燃え尽きた提灯の明かりが消えボゥーと霞む様な門番の手燭だけが頼りの中で丁々発止と切り結び、三、四名を相手に多勢に無勢防戦に必至であった。手の空いた森好之が清三郎永久の助に入り四人の敵を斬り伏せたが、またしても新たな数人の人影がバラバラと駈けてきた。
「アッ、敵かと思いました。」とそれらの人影は立ち止まり、ここに居られましたか、城を出られたご様子と承りずうっとお捜しておりました。ご無事で何よりと云った。森好之旗下の大安寺孫七等の一隊であった。
「全軍この城下の配置は終り各侍屋敷は最早蟻一匹這出る隙間もございません、残るはこの城ただ一つでございます。森家家中の八百を初め慈明寺様、島左近様ら三千余りも総てご到着予定通り首尾は

運び終りました。」
「ウーム」夕刻森好之がこの箸尾城へ入った頃、筒井軍が箸尾の周辺を初めこの一帯を抑えていつでも攻め入る態勢は素早くかためられていた。
「どうぞ、こうお出下され、皆が待っております。」
「待てまて、この屋敷も調べておけ。」
「ハッ」
「この門番以外誰もおりませぬ」
「ヨーシ、ではこの屍体をこの門の中へでも入れろ。」
「おい、門番お前も手伝え、手分けしてこの門内へ屍体を入れろ。」びくびくしながら門番は云われるままに手伝ったが、この者を切っても仕方なし、と森好之は棄て置き、直ぐ様そこを去って表通りへ出て、とある大きな侍屋敷へ入っていった。
そこは城の中との連絡や交替要員の入る城内外の侍が日頃の往復や火急の時に使う武者留まりの場所らしく、多勢の将兵がしゅうろ縄で括られている。先ほど夜中の交替で城下へ下ってきた処を捕縛されたのだ。
「おい、夜勤の交替だ、御門内へ通る。」
これがどこでも使われる日常勤番要員の交替要語だ。平時ではないのでこの城内の将兵も常に武具を着用している。

城内へ交替に入った者は全て武装した筒井旗下ばかり、全然目立つ事などはない。百五十余りの交替する五倍もの森好之の旗下八百余りが入城していた。

「おゝみな揃っているな、では行こう、各々抜かるなよ。」

「おお、……」武者留まりの周囲に待機していた一千余りがしずしずと箸尾城へ入った。元より静まりかえる城内仕切の門前の要所には然るべき森氏の武将がいて内から扉は開かれ、難なく通り、先程まで森好之等が呑んでいた、城中深く押入り、箸尾宮内大輔為政が眠る寝所近くまで進んで、宿直武者控えの間で勤番を襲い高手小手に三名を縛り揚げて猿轡をかませ、宮内大輔為政が眠る寝所へ入り、これを起こした。

「お、何事だぁ！……」

「箸尾宮内大輔為政殿、どうぞお目覚めを！」箸尾宮内大輔為政はまだねぼけていた。

「宿直、宿直は誰だ！」

「宿直ではござらぬ。某はお馴染みの森好之、こなたは貴殿もようようご存知の島左近様だ。我があるじ筒井順昭様のご命令によりこれより筒井城までご同道願い申す！」

「ウヘェッ！」と奇声を揚げながら、まだ蒲団に潜りこもうとするのを雑兵共が両脇を抱えて一早く衣服を着せ替え、連れ出した。流石に箸尾宮内大輔為政は育ちも家柄も並みの者とはわけが違い、醒めると最早腹を決めた様子で殊の外平静になっていた。箸尾信濃守為栄、同宗為、同為元宗信、上野守為次、民部時兼と続いた箸尾城の最期の城主大輔為政の命数は最早風前の灯しみであった。

はや、夜は白々と明けて馬上の大輔為政は縛を受ける事なく筒井城へ入り、更に奈良へ向かい筒井の外館の庭で夏の蒸し暑い最中蟬時雨を背に従容として腹を切った。この大輔為政以外には多くの犠牲もなく殆ど無血開城であった。残された箸尾宮内少輔高春ら箸尾一族は郎党の布施、万財、南郷、寺田、唐院等と共に悉く筒井の各重臣等の配下に属した。筒井順昭は松倉右近政秀に命じ箸尾城の跡形もなく、これを取り壊した。

天文十六年の五月の事であった。

比叡山

(一)

天文十七年三月上旬畠山左京太夫義忠は南禅寺の僧虎首座をして朝鮮を経て大明の世宗粛帝へ黄金五百両を持たせて豊心丹の謝礼に向かわせたという、その年の静かな秋、月の夜、順昭の正室は腹にやや子を妊んでいた。

順昭はなんとなく、こそばがゆく思い妙であった。

飽なき戦を繰り返す戦国の武将とは云え順昭は近頃流行の茶の湯とも親しめず、まして能狂言の類や歌の道、戦がなければ、朝夕の勤めの読経の事も白々しい。父順興譲りで酒豪の方であり、毎夜酔ってはみたものの、さして面白くもなかったし酔って寝ると必ずと云ってよい程戦の夢を見た。

子供の頃から習い覚えた読経を夢中でさえ読み唱えたが、《敵が迫まる》、《敵が迫まる》と油汗をかいた。

勿論幾多の敵がいて京や河内和泉摂津は必ずしも平穏ではないがしかし、現実には今や敵はこの大和には一人としていなかった。

大和には無数の寺があるが、死ぬまでに自分も僧形の人間らしく、後の世までその人ありとは云われずとも、せめて今迄数限りなく人をあやめてきたし、真心で敵味方の区別なく充分な供養が出来る程の修養を積みたいと仏心が湧いてきた。

なんと云っても順昭は今で言うぼっちゃん育ちである。

二十六歳にもなって何を今更とも冷静に考えては見たものの矢張り心は楽しまぬ。

(二)

「志州を呼べ！」順昭は森志摩守を呼んだ。

「何か御用でございましたか」

「碁の相手を！」

「ハッ、碁のお相手をでございますか。」と時折はやっては見ても負ければ腹がたつし、勝っても一時の面白さである。女性も生人形、誰も拒みはしなかった。胸の時めきさえ最早ない。

書を習っても到底書家には程遠い、弓矢の事も弓組の者には及びもつかぬ。

何事も優劣があり、上手下手があり、勝ちまけがあった。

だが、曾て天文九年の夏四月、大和の盆地は大洪水に見舞われ木沢長政との戦の最中ではあったが、一早く順昭は戦をほうり出し、身分の上下に関係なく、有らん限りの小舟や、田舟を出し、危険を省みず、小船にみずから乗り込み陣頭指揮して救助に当り食を与え、濡れた衣服を新しい物に取替えてやり、病むものには薬の外に銭まで施し上は将軍家から感状を賜り、民百姓からは時の氏神の如しと衆目を集めその後の大和の人々の自分を見詰める眼の輝きを肌に覚えてみずからもどれ程喜びが我が胸に溢れた事か。

人の役に立つ事がいくさの勝ち負けとは桁違いの感動があった。

また、その後木沢長政との戦でもどれ程の人々が支援してくれた事か、それであの苦しい戦に勝つ事が出来たのだ。涙溢れる思いがする。

《そうだ、この身は父や家臣らが折角苦労して頂戴した法印の位である。法印の位は人の役に立たねば何の為の法印ぞ》

そう思うと心は大きく御仏の方へ向けられた。

民衆の役に立つ為に私利私慾を捨て御仏に仕えよう。

天文十七年そんな事を考えている間にその年も暮れ瞬くうちに春を迎え、天文十八年三月三日男児の誕生を見た。

順昭の悦びは一通りではなかったが、家中一同も勿論同様に世継の誕生を心から寿いだのは言う迄

もなかった。
しかし、暫く経つと心はまたしても真剣に仏道に身を委ねる事を考え始めていて順昭は落ち着かなかった。
この子の誕生も唯、この筒井の家と多勢の家臣の為でしかなかった。
子の名を藤勝と名づけた。後の信長から大和一国安堵を許された陽舜房法印順慶であった。
筒井家始まって以来の大業を為し遂げ領邑四十万とも五十万石とも云われた大大名になったのである。

(三)

南都には掃いて捨てる程の大小の寺があるが、どれもなまぐい私利私慾に満ちた悪徳の匂いが立ち籠め、口とおこないの合わぬ寺ばかりでこの寺と選べる様な魅力のある僧門はなかった。それに比べると京に赴く度事に見た崇高なあの比叡山の姿には其れだけでも順昭の心は動かされた。
夏の夕立の後空は晴れて、雲の上にくっきりとそびえる比叡山のその雄姿を思い浮かべるとたまらなく、順昭を手招きしている様であった。
《そうだ、あの比叡山で修業しよう。》この事こそがこの身の法印の値打ちである。順昭は密かに心に記する所があった。俗里を離れて静かに山門の脇に立つ我が身の姿がほうふつと浮かぶ。
「右近！」と男盛りの松倉右近を呼び、順昭はさかなつりがしたいがと持ちかけた。

「エッ、魚釣りとでございますか。」右近は驚いた。
大体今の今迄順昭がさかなつりをするなど聞いた事がない。
「魚釣りの用意をしてくれるか」右近はボンさんまたとんでもない事をと思ったが、たのうだお方に逆らう事はない。
「何所で魚釣りを為されますので」
「誰にも邪魔はされとうない。何所とは云えぬ。」
「ここのお城のお濠にも鯉や鮒もたんとおります」
「いや、のんびりと大公望を楽しむのじゃ。しかし、この姿ではどうも具合が悪い。」そこで頼むのだが、手配をしてくれ、まず、駅風の馬借の衣装に短い竹の竿、馬も駅の手綱で、竹筒に酒とそれに銭を少々多いめに、それに飯は二食分じゃ、
「銭が要るとは、またどこ迄行かれますので。」
「詮索不要じゃ、よいか誰にも云うなよ、そうそう日傘も忘れるな、万一の事があっても困る、父が使っていたあの鎧通と……明日の朝暗い中に行く。」
「魚釣りはここのお濠では」右近は危ぶみ心配気味に止めにかかったが、順昭が一度云出すとそう簡単には曲げない事を右近は知っていたから、それ以上は止めなかった。
順昭の眼はキラキラと輝き子供の様に嬉しそうな顔をして幼児がその母に甘える様に右近に頼み込んだ。

《魚釣りくらいがそんなにお楽しいのか》右近は不思議に思えてならなかったが、翌天文十八年四月二十六日の早朝、夜の明けきらぬ頃、向井治部を連れ城門迄来ると馬借姿の順昭はさっと馬に一鞭くれ、蹄の音も軽ろやかに、城外遙か彼方へ砂煙を挙げて走り去ってしまった。

　後には仏前にいとも簡単な一葉、暫く遁世、宜しく頼むと一筆供えてあり親族重臣等が極秘に捜したが遙として行方は判らなかった。

　一方順昭は歌姫街道を越え山城に入り、木津川堤を走り抜け祝園の辺りで、馬に水をやり一息入れて早昼を済ませ再び馬に跨り浅瀬を選んで木津川を渡り久世に出て京へは入らず、宇治道から醍醐に道を取って山科の山裾沿に、大津へ出て長等、柳ヶ崎、二本松を経て唐崎から一路坂本へまっしぐらに駈けた。日は薄暮となり松林の向こうに見える滋賀の湖は群青の漣を岸に寄せていた。

　坂本に着いた頃には宿も締まり途方に暮れたが、民家の戸を叩くとろくだま相手にされず近くに土倉があるからと教えられ、幸い土倉が一軒起きていて漸く馬を質に一夜の宿を頼み、野宿はまぬがれた。

　翌朝旨くもない麦混じりの飯もそこそこに済ませて一夜の礼を述べ主人に尋ねると幸い比叡山の僧が質草にした衣が一嵩ねあり高い馬を宿代の外、今日の昼の握り飯代などを差し引き何某かの銭をくれた。

　馬がなくなって松倉右近が用意してくれた二貫文もある銭と主人がくれた銭だけで相当な重味になったが、戦に比べれば、鎧も太刀も着けていないし、何となく気分は爽快であった。比叡山への登り

道はそれにつけてもこれ位の道なら馬さえあれば何でもない。いやいや、これも仏門に入る修業と思い直して、折柄照付ける初夏の陽を受けて長い坂道を天台宗総本山延暦寺の大比叡の霊峰を目指して法印の位を持ち乍筒井順昭は苦労を好んで登っていった。

(四)

　南都興福寺は南嶺、ここは北嶺延暦寺、立派な学僧達が仰山(ぎょうさん)いて深い杉木立に囲まれ日夜の勤行怠らずその真剣な眼ざしが、流石に修業第一の重々しさと、その厳粛さに取り巻かれた風情が順昭を魅了し矢張り来て良かったと思わせた。

　宗務の役僧に大和の田舎の寺の修業中の僧、宇覚と名乗り漸く憧れの延暦寺の僧となったが、気が付いて見ると知らぬ事ではなかったが、随分と分けの判らぬ荒法師も大勢いる事が判った。第一修養勉学どころではない。朝は日の出前から夜は寝るギリギリまで水汲み掃除洗濯食事の事迄、時には自分の繕い物もやらねばならなかった。得物を取っては腕に覚えは有るものの生まれてからこのかた一度もした事が無いもの許りで、大体庭掃き炊事等した事がないから《掃き目がどうの、木の葉が残っているの、木椀の洗い方が悪いの》と、朝から晩迄怒鳴られっぱなしであった。凡そ勉学修養等とは程遠い。段々順昭の宇覚は嫌気がさしてきた。あまつさえ、先輩坊主の横暴さには呆れ返る事ばかり。ここへ来て幾日か過ぎて漸くたまには勤行にも出る日があったが、馴れぬ中で日毎に疲れが出て一日中眠くてしょうがない。毎日がフラフラであった。

《こらっ宇覚、又居寝っておるのか。》こちらは良い気分なのにいつも先輩坊主の眼がいくつも光っていた。

又、夕食の当番にでも当たれば、酷いものだ。用意は当番がして皆が食事を済ますまで何も食べる事は許されず、かたづけの後には一切れの野菜も残っておらず、一粒の米もない薄い粥を呑み寝床で空腹の為に朝まで寝付く事さえ出来ぬ日もあった。時にはかわやへ行く様な顔をして水を腹一杯にのんで寝た。にも関わらず翌朝は今日は開祖山家大師の月命日とかで順昭はそれこそ大変の大安売りをしたかった。

よくもこれだけ命日があるものだ。

明日は義真……、明後日は円澄、いついつは円仁、次は円珍とやら毎日の様に歴代高僧のご命日がやってくるのであった。それでもえらいもので半年余りもすると、どうにか順昭の体も馴れてきた。

順昭より後からこんな糞寺へ来る馬鹿者が絶えず、世のなか旨く出来たものだ。

その中の一人にどうやら何所かの浪人崩れの様な眼の鋭い男が先拓と名乗り純粋に仏門に憧れて入ってきて順昭と同室になり、親しくなった。

年はやや順昭より上か、言葉からして、河内辺りのなまりがあり、素姓は判然としないが、悪い奴ではない。

順昭は万一の事を慮り、大和の言葉が出ぬ様に言葉使いには充分気を付けた。

先輩の僧の中に円彰と云うのがいた。順昭にもこっぴどく、当たったが、やる事が陰険であった。

先拓（せんたく）、先拓と呼び付けては先拓の鼻先に自分の垢だらけの汚ならしいふんどしを突き付けて洗濯はお前の役目とぬかした。他の先輩の僧達は円彰程、酷い事はない。

行水の垢落しは皆自分で落とし、湯の取替交換もしたが、この円彰は先拓に背中を洗わさせるし、勿論湯の持ち運びなどは絶対自分ではせず先拓にさせた。

かつて円彰が延暦寺に来てしばらくしてから先輩の腕自慢の僧を殴り倒してから腕に自信のない真面目な学僧達は、我身の傷に触るが如く当たり触りなく、それとなく避けていた。

《それにしてもあの円彰の餓鬼は鼻持ちならぬ》順昭は腹にすえかねた。いつかやってやる。観世音菩薩様は我が身を三十三身のお姿に代えてその人その人に時に応じて必要なお姿で現われるとは古来より耳にしてきた。それは魂の向上となりその大切な修業の中での一つの通らねばならぬ我身の為に仮りに相手が観世音菩薩様となって円彰のお姿でお現われになったのだとしても許し難し。いつまでもそんな出鱈目の乱暴や横暴が詣り通せる事がみ仏の御心にかなう筈はなし。多くの真面目な修業僧の求道の邪魔になる。わしは一つには円彰の為の大切な観世音菩薩様である。自分こそがその暖き観世音菩薩様の愛深き御心を心として、愛深く円彰の為に観世音菩薩様のお姿に化身して円彰を気付かす為にはどうしてもこっぴどく懲らしめてやり導きを与えてやらねばならぬ。第一真面目な学僧のためにはならぬし、この順昭様の気が殊に治まらぬ。

（五）

山の秋は早い盆地の大和ならまだ暑い日の頃にもう虫が鳴く、とある日薪木とりがあった。新米の身であり先輩学僧の指示通り順昭は枯れた木を拾い集め生木を鋸で切り倒して斧で手頃に揃え精一杯その仕事を果たし努力の上にも猶精を出して働いた。帰途それぞれの僧の背中には薪が背負われまた順昭が背負う重い薪が背中に食い込む程だったが、更に歩く中に急にドーンと新たに重味が加わった。オヤ、と思うと傍を円彰がニヤリといやらしく笑い乍、俺の分も頼むぞと有無を云わさずスタスタと行ってしまった。カッときたが、あえぎあえぎグウッと堪えて遠い道程の坂道を登り下りしながらこれも修業の中これくらいの事で腹を立ててはと漸くの事で延暦寺に辿り着いた。一瞬悔し涙がこぼれそうであった。その日は麓の遊女漁りにでも行ったか今宵は他の同室の先輩僧達が一人もおらず早々と床に就く事が出来宇覚の順昭と先拓の二人だけになった。どちからともなく修業の辛さよりは円彰の事が話題になった。順昭は急に懐かしい筒井の有難さを思い出しながら今日のこの自から飛込んだ苦労で急にムラムラときて、先拓に正直に心の中を吐露した。

「先拓坊はあの円彰の事をどう御思いか」

「どう思うとは、あの円彰のやり方の事ですかいな。」

「ウーム、左様わしは一度示しをつけておかねばならぬと思いますのじゃが。」

「宇覚坊はどう示しをなさるおつもりか」

「円彰の事は、観世音菩薩様に代わって一度へこましてやらねばのつもりで、おります。」

「観世音菩薩様に代わって？」

「左様観世音菩薩様は身を変じて、凡愚の衆生をお導きになられるとか。」

「観世音菩薩様に代わってとは良い思いつき、愚坊も其れくらいなら自分で。」

「いやいや、あの愛深き観世音菩薩様に代わって迷いの世界から円彰の行状を改めさせて一日も早く悟りに一歩近づけてやりたいので、仏に仕える僧侶としての我身の勤め。」

「宇覚坊はおのれが彼岸に渡る前に先ず人を彼岸へ渡してとお考えか、しかしそれは真に、観世音菩薩様に代わってでございますな、その様な大切な事、お座主様ならともかく真に失礼ではありますが、愚僧よりはこの延暦寺に先に見えたとは言え、まだまだ日の浅い修養中の宇覚坊だけで、失敗があってはなりませぬ。及ばずながら、この先拓は余所の寺でも充分修養を積みまして、ここでは最期の仕上げの積もり是非この愚僧が先に引導を渡し、万一力及ばずの時は宇覚坊が始末をなされては。」

「観世音菩薩様に代わってとまず最初に考えたのは外ならぬこの宇覚坊」

「イヤイヤ、三人寄れば文殊の智慧とか、しかし、一人足りませぬ。まず勿体無くも観世音菩薩様に我等の中の指導者としてお加わり頂き、それに宇覚坊とこの先拓の三人寄ってと考えれば、良い智慧も湧ますぞ。」

「観世音菩薩様をお迎えして三人寄ってか、中なか旨く考えるな。」

「この先拓は元は武士、故あって詳しくは申せませぬが、既に亡びました主家の菩提を弔う為に僧になりました。勿論腕には幾分覚えがございます。それに観世音菩薩様は坊の守護菩薩この御名がでれ

ば放って置けませぬ。」

「矢張左様か、武士でござったか、どう見てもいつまで経ても中なかその身のこなしはなおらぬか？」

「宇覚坊は相当な身分の御方とお見受け致して居りました。」

「アハハッ、そんな上等であるはずがない。先拓坊の買い被りですわいな。坊こそは代々続いた田舎の水呑の次男坊で食い逸れ、とてもとても、お門違い。」そうは云ったが、人の眼は誤魔化しがきかぬ、順昭は心の隅でドキリとした。

「宇覚坊、それは兎も角、三人でよろしいな。」

「ふたりの意気もこれで確か、よいとしなければ先拓坊もとても治まりはしますまい。」

「ウフッ、それではまた、次の薪集めの機会を楽しみに。」

「そうと決れば今宵の夢見は宇覚坊、とても楽しいございますな。」

薪集めの日は意外に早くあれから十日余りの後にやってきた。

月当番の僧は明日は炊きものとりと何時もの廊下に達筆で認めてあった。

宇覚坊の順昭と先拓は眼と眼で示し合わせて喜んだ。

拳骨

（一）

やがて、その日がきた。昨夜小雪が降り辺り一面薄化粧を施し、間もなく冬はくる。冬の訪れを前に山下の村人らも相当量のものを届けてはいたが、早くから何度も手分けして準備してはいてもどうしても、永い冬中には不足した。僧達は自から編んだ半わらじを素足に覆き地膚のぬかるみ道は足のあかぎれに染みて歩く度に痛かった。それに比べて大きな杉の林の下の枯れ葉には雪は少なく柔い感触が気持良かった。十数人の僧達は藁縄や鎌、大ナタ、山刀、竹ぼうき等を持ち柴狩りに山門を出かけていった。

身には単衣を纏って、僧の手足は初冬なのにあかぎれてふくれ上がり、修業とは言え厳しい条件の冬はつらい。

向こうの比良山は既に真白に雪を戴き冷厳の言葉がよく当てはまった。

冬でも晴れている日の琵琶湖は弱い日差しに照らされて美しく眼下に見える事があっても今日は鈍よりと曇り吹きつける小雪混じりの山中からは望むべくもなかった。木立の間を歩いている時は風も枝葉を上の方で鳴らすだけで防いでくれるが、枯れ倒れた薄の原にでれば一層風が厳しくまるで頬を擦り耳はちぎれそうだった。梢に山風がさわぎ遠くで猿がうそぶく。漸く決められた場所に着き一帯

に散らばってその日の割り当ての火の着きやすい今は小雪で湿った松の枯れ葉や、おお風に折れ落ちた杉の枝をかじかむ手をものともせず掻き集める者、雑木林の然るべき木を切る者とそれを適度の長さに鎌やナタで揃えるもの、それらを一ヵ所に運び集める者がいた。やがて燃料の小山が出来上がっていった。それを人数分に合わせて振り分け粗縄で縛り引率の僧が、ではぼちぼち戻ろうかと云った。

順昭が円彰をふと見ると背をこちらに向け腰帯に大きなナタを差し込み傍を通る僧達にブツブツ云いつつ竹筒の酒を呑みながら、からんでいる風だった。

《それにしてもあの餓鬼はふざけた奴だ》順昭は今に見ておれと心の底でつぶやいていた。

先拓坊の方を見遣ると間もなくだと軽く頭を縦に振った。

薪木を割って束ね揃えたり、積み上げたりしている時には寒さも少々はこたえず汗の出る程であったが、一束ずつを順番に僧達が背負うのを待つ頃には、すぐさま忽ち汗は引き寒さが、肌をさした。

殊勝にも今日の円彰は薪木の一把を背負った。引率の僧が心得ていて、それは皆の半分の大きさもない束を予め用意しておいた一番軽い物であった。薪木を背負うと順次歩き出し先頭の僧はもう大分遠い所まで進み小高い繁みに見えなくなった。順昭の後は先拓が一番最後であった。ものの、小一丁も歩いた道の半ばで数名の僧達が止まっている。声は風にかき消されて何も聞こえない。少し吹雪いていた。側まで行って見ると案の定円彰は薪木をおとなしい快淳坊の背中に乗せようと縛り直している所であった。

「こらっ、何をしてる。」何を云われても従順な今迄の順昭らと今日は少し違う。

「何を！」円彰はいつものなれきった手で振りかえり様拳を順昭に向けたが既に順昭はその時を待っていたので元より油断のあろうはずがない。道々その為に拾って持っていた杖代わりの棒切れを振りあげた円彰の二の腕へ発止と打ちつけた。

「おのれ、こ奴！」順昭は薪木を背中から素早く下ろし、二度めに打ちかかろうとすると、

「宇覚坊待ってくれ、こ奴はこの先拓坊にもやらしてくれ！」

「おのれ、こ奴等、新米共の分際で！」円彰は怒鳴ったが、先拓はうずうずしている。

「エイッ！」先拓は辛抱たまらず、このろくでなし、思い知ったか、とばかりに打ちつけた。

「ゴーン」円彰の頭に鈍い音がした。そう一人じめするな、

「ゴーン」順昭と先拓は入れ替わり立ち替わり、ゴンゴンやった。円彰はやっと思い出して背中のナタに手を廻して右手に持つとそれで受け太刀の代わりにした。

しっかりした刃物で順昭が打ち下ろした棒切れが、そのナタに食い込み暫く、はずれない。順昭は手を放した。

その機を幸い先拓がその隙を狙い様ナタを持つ円彰の腕に打ってかかる。パタッと棒切が食い込んだナタが落ちた。

いつの間にか外の僧も快淳坊もその場を振りかえりもせず、駈けて行ってしまった。残ったのは対決する三人だけ。

円彰をにらみつけ順昭は素手になるとさあこいと両の手を拡げた。おゝそれならと円彰も同じく両

手をひらきむんずと組んだ。
「ゴーン」と亦音がして、組みつほぐれつ、する間に拳骨で先拓が撲ってから、
「待てまて宇覚坊、話が違うぞ、二人で平等にやるはず、一人じめするとは卑怯だ。」
「いま忙しい少し待て」
「勿体無い事を、久し振りなのに待てとは、早く一度ひけ。」
「もう少し楽しむまで待ってくれ、久し振りなのは宇覚坊も一緒。」何と云っても僧は僧、武士、圧倒的に順昭が強い。繰返し足業ざでひっくりかえして摑まえては滑らかな腰に乗せて投げ、あとに立ち上がりかけたのを背負いでなげ飛ばす武器の戦いならとっくに順昭が首を掻いている所だがやっと順昭がパッと手を放すと先拓がまた組みついて好きな様に投げとばす。順昭はこの先拓なかなかやるなと感心した。しかし相手も何千といるこの比叡山延暦寺の荒法師の中での腕きき少し肥満で重量があるが、
「先拓坊、そやつしぶといぞ。」先拓はうなずき、
「ヤー、承知承知。」ヤーとはその頃の大和で使う返事だ。先拓坊は大和の者か、慌てた時に出る地の言葉。脳裏に懐かしさがかすめた。その先拓はまたしても順昭と同様殴る蹴るブチ投げる。
「余り時はないぞ、手伝うか。」
「ヤー」一人でも、もてあます円彰はもう音を上げそうな所へまたしても順昭が殴る蹴ると好き放題。
「グッヘエ」円彰は二人にやられて、もう立ち上がれなかった。頬と云わず僧衣から見える手足と云

わず、みみずばれとコブだらけで、おまけに背中も腰もどつかれっ放しで衣はボロボロ、もう全身の力が抜けてへなへなと座り込み、
「ご勘弁を！　どうぞご勘弁を。」鼻血が垂れたのを唇に受けてついに降参した。
「ご勘弁をだと、誰に向かって吐かしておる。先拓坊様かこの宇覚坊様か。」
「ご両僧にご勘弁を！」
「ご両僧だと、もっと丁寧に謝ればよし、左もなくばもう一度！」
「ご両僧様にはもう充分で！」
「もっと丁寧に謝れ、ご両僧様にはどうぞご勘弁下りませ候と言え！」
「ご両僧様にはどうぞご勘弁下りませ候と……」
「馬鹿！　候は要らんのじゃ、……先拓坊様とこの宇覚坊様が云う事は何でも聞くか。」と念をおした。
「ハイハイ、……何でも。」そこへ学僧達が多勢戻って来たが既に騒ぎが治まり、
「何があったのか」とみすみす判るものを老練な先達の僧は三人のそれぞれの顔を見てトボケて云ったが、治まれば結構、それで怪我の程はと円彰に眼を向けて尋ねたが心から気の毒そうな様子ではなかった。円彰は二人にやられてと眼で訴えていた。後は我等が収めますと順昭が申し出ると頼むと、又早々に立ち去ったが、気の弱い真面目な快淳坊が一人だけ去り難たそうにしていたのを先拓坊が眼で促すとすぐにその場を去った。宇覚坊の順昭と先拓坊の二人は本当に痛快であり、爽快であった。
二人は円彰の背に二つの薪の束を背負わせ、両方の手にも、持たそうとさせたが、手は腫れ上がり正

直に最早、握る事さえできず仕方がないので、そこにある葉の一枚もない蔦かずらをとって残りの二束を腰の左右両方に薪の把を括りつけひきずらせていた。順昭と先拓坊の二人はナタ一つを持つだけでブラブラ後を歩いた。重さにたえかねて円彰は、

「一つはあの快淳坊の」また云うか今迄何人にそうさせた。と怒鳴られて、シブシブ泣き顔で歩いた。

「シイーッ、チョイ。」牛を追う用語だ。シンキクサイなと云いながら先拓坊はあかざの枝で歩みの遅い円彰の尻をひっぱたいた。その度ごとに、

「ヒッ、ヒッ。」と円彰は悲鳴を上げた。

「痛かったらまた礼を言えッ」こうしてようやく、その日は全て延暦寺の山門の中に納まった。

(二)

さて十日余りも床に伏し乍、熱を出し、裂傷やみみず張れの痛みに耐えつつ、円彰は相手が卑怯にも二人掛りだからやられた。いつか折を見て必ず、仕返すぞと、その事許りにああしようか、こうしてやろうかと考えていた。

「僧の身であり乍、余りの事はしてはならぬ。」順昭と先拓坊の二人に役僧からは 注意があったものの、円彰の懲らしめを無言の眼で礼を言っていた。

順昭と先拓はもうぼちぼち円彰が起き出す気配を気付いた。

そんなある日、一人かわやに向かう、順昭の後を付ける円彰の姿があった。広い廊下の角で戻って

くる順昭を円彰が手ぐすねをひいて待っていた。手水鉢で手を洗い静かに順昭が廊下伝いに角まで来るその殺那、円彰は利き腕をのばして、順昭に挑みかかった。ボンボン育ちのお館様とは云え何にせよ、年中戦に明け暮れを生業（なりわい）の様にしてきた戦国大名の順昭に元より油断のあろうはずもない。間一発、前に出た勢を利用して円彰の利き腕の下に体を潜り込ませると、フアと軽く順昭は高く持上様デデンと廊下に仰向けに投げつけた。

「アッ、イタッタッ。」しこたま腰を打って両手で体を支えるのがやっとである。だか、懲りずにやっと立ち上がるとその懐中から、素早く光るものを出して突き出した。

順昭慌てず、ヒョイッと身を交し突き出す腕を手刀で撃った。敵もさるものサッと旨くかわして換発を入れず、今度は両手で、しっかと短刀を握りしめ南無さんと盲めっぽう順昭の胸元を突いてくるのを間合いを計って脇へそらすとサッと庭へ飛び降り竹のほうきを取って続いて下りた円彰の顔を目がけて突き出した。長いものを取れば順昭は旨い。狙いは違わす、顔に突き当たって仰けむにひっくり返る。

ひっくり返ったのを捨てて置かずに直ぐ様順昭はほうきを捨て両足揃えて顔を狙って思い切りふんずけた。

短刀を振り廻しながら起き上がろうと藻掻くがいつの間にか、短刀は何所かへ飛び、後は撲る蹴るのしたい放題。ついに円彰は目を廻して、気絶した。廊下をバタバタ音をさせて騒ぎに気付いて僧達が駈けてきた。

「喋って居りますと、急に気絶しました。」とぼけた事を順昭は役僧に報告した。
「喋ってて急に、それは偉い事、気絶しましたか。」こんな事は寺中の年中行事、聞く方も聞く方だ。
「気絶しましたので泉水の水を汲上げ手当を致します」
「これこれ、手荒なことを。」そう云って止める風ではあったが、順昭が庭の側の泉水から水を汲上げ、ぶっ掛けるのを皆じっとして見ていた。気がついた円彰は再び順昭をにらみ飛び懸かろうとしたが、気持だけで、足は立たなかった。

旅　枕

（一）

先拓坊が下の村へ出ていて、一人の時を狙い襲った円彰を懲らしめ完膚無きまでに叩きのめした順昭はその夜先拓坊が帰ってきて件の出来事を知られて先拓坊は今日は誰かに仕事を代わってもらえば自分も楽しめたのに惜しい事をしたと羨まし気にいった。
「所で先拓坊には昔の古傷、聞いてはならぬと思い乍、つい気に掛るので、尋ねたいが、あかんか。」
順昭はこの間の円彰をやった時に、先拓は相当な男と見込んでいた。
「また改まって何をこの先拓坊にお尋ねでございます」
「いや、怒らずに聞いてくれろや、坊に尋ねたいのは曾て何所に仕官していたかだが。」

「宇覚坊にもそう思っておりした。いつか別離のある迄にはお尋ねしておかねば、と。」
「予てから、こうして先拓坊と話している中で懐かしい気がする。年の変わらぬこの坊を立ててくれるし。」
「この先拓にない宇覚坊には犯し難い物がございます」
「左様か、正直に申す。坊は大和の筒井の将でござる。」
「唯の将ではございますまい」
「判るか」
「判りますとも、それも多分筒井のご一族様でございましょうに。」
「エエッ、筒井の一族とか。」順昭は驚いた。
「日頃の、お振舞い並みの出では真似が出来ませぬ。」
「流石先拓坊だけの事はあるな」
「坊からずばり申し上げましょうか、筒井順昭様でございましょう。」
「バレたか」順昭はちょっと戯（おど）けて見せたが、本当はぎょっとした。
「バレたか、では済みませぬぞ。」
「ナント、済まぬとか。」
「堅いご一族の結束と幸い、優秀なご重臣らが極秘にお館様ご病気と称して守って済ましておられる様でございますが、大変なご苦労との事。」

「この坊が病気か、なぜそこまで知っておる。」心配を心の底へ静めて聞いていた。
「人の耳に戸はたてられませぬ」
「真に、それはそうじゃが。」
「どうぞ、これまでのご無礼平にお許し下さいませ、この通りでございます。」
「なに故それ程、無礼を詫られる、如何程の無礼か、坊は悦び、……」
「いや、申されますな、この先拓坊の真の名とは、森志摩守好之家中の縁の者、弟に清三郎永久がおり私は小石元三郎の遺児二男の元二郎靖久めにございます。」
「なに、志州の身内か、小石元三郎ならようく知っていた。しかし、その子の一人は聞いていたが外にいたとは知らなんだ。」
「いや、申し訳ございませぬが、永年志州様の平野の砦におり木沢攻撃の折には生憎病に伏して倒れ従軍が適わずにおりました。その後快復の、後ち河州に居て異変に備え、志州様からの特命にて、あちこちの情勢を調べ大和へ大切な事柄をお知らせ申すのが、某の任務でございました。」先頃至急大和へ来いとの御命を受けお館様探索の新たな任務を頂戴し、お館様失踪直後からその日の馬借姿の足取りを一月余りを掛けて漸く坂本まで辿り着き、まさかこの延暦寺とは知らず、北は敦賀から北陸路を経て再び木の本から坂本まで戻りお館様らしきお方が、例の土倉で馬と僧衣とを取り替えられました事が判り意を決して、頭を丸め麓の例の土倉で墨染めをもらいこの延暦寺に潜り込み、生憎我等の主家のお館様とは言え、何せ尊顔を直々に拝した事等は一度もなく、随分それらしき御方と覚えまし

てからもご無礼をと、涙ながらに元二郎靖久は語った。こうなれば主従の話題は尽きぬ。
「いや、そうであったか、知らぬ事とは言えよう此所迄来てくれた。」しかし、人が聞いて三日坊主と後で判って笑われても釈だ。せめて一年の辛抱、いましばらく、このままでいてくれ。順昭は元二郎靖久へ言った。
「はい、それくらいなら今の大和にご心配はございませぬ。」
「元二郎の父小石元三郎は志州の父縫殿佐好順と共にあの木沢の戦いで、壮烈な討ち死にを遂げたはず。」順昭は記憶を頼りに元二郎靖久へ言った。
「以前我が父順興の折には志州の使番の組頭を永年勤め志州の奉録三千石の内から二百石位を志州も出し可愛がっていた。それに常に役に立つ事著しく側近に置いて放さなかったが。」
「はい」物語は尽きぬ。陽のさす朝まで語りあかした。
「そなた兄弟は」
「兄が父と共に打死にで今は弟が二人と妹が一人」
「皆兄の帰りを待っていように」
「いいえ、戦国の子、滅多にその様な事は。」
「わし、一人の我儘で余計な事を、影恥かしき我が姿、これより後は更に狂わじ。」と。
それからは恋人の毎夜の如く、しのび語り、今迄の僧らしき仕来たりはそれらしく守りながら幾夜

を重ね、日を送った。年が変わり、天文十九庚年の小正月を挟さみ順昭は枕辺に座して別れを告げる白絹姿の松倉右近政秀の夢を見た。

まるで真の事の様であり、《この様な所にいつまでも、居られずに直ぐに筒井へお戻り下され、元はこの政秀が、お館様をお止めしきれず、責（せめ）を深く覚えます。どうぞ一日でも早くお戻り下され、もう命運も尽き果てまする程に……》直ぐ姿は消えた。ハッとして胸打ちさわぎ辺りを見回す程真に迫っている平伏する右近政秀の姿であった。

夢の話を元二郎靖久へ言った。末期の知らせの異変かも知れませぬ。靖久がそう言った。単なる夢じゃと順昭は打ち消したが、何と無く気にはなった。

(二)

亦夢を見た。順昭の室が幼児の藤勝を抱き、滋明寺左門、福須美兵衛、森好之、島左近、小田切等皆が揃い順昭を迎えて悦びに充ち溢れ、その他の家臣らが多勢集まり賑かであった。だが、そこへ威儀を正した、松倉式部右近政秀が藤勝へ鄭重に挨拶した。俄に一同の者が暗い顔をして退出する政秀を悲しげにその後ろ姿を見送り号泣する者さえ見える。ややあって傍観していた順昭が藤勝を抱こうとして目が醒めた。寒い夜にびっしりと寝汗を全身に一杯かいていた。

嫌やな夢見が二日も続いた。夢も数添う旅枕。順昭はいたたまらず元二郎靖久へ、またこの様な夢をみた、まあ夢だが、とは言ったものの数日は気になった。順昭の目には満月青山はまぶたにあり、

比叡山下の眼下の拡がる湖に曇る日でも時々走って見に出て雲の波、煙のなみの幾重とも知らぬ風景で青垣をしのび世を捨てた積もりが、右近政秀の夢ですっかり里心がついた。こんな所にいても悟れはしまい。そうだ、《苦行は悟りの因にあらず》だ。可愛いい子供や家臣の待つ大和へ帰ろう。

そんな頃、下手な字で円彰から挑戦状がもたらされた。場所は門外で月夜が予定日であった。これだけは決着しておきたかった。

道具は勝手次第なんでも相手にしてやる二人揃って来いと認（したた）めてあった。元二郎靖久へ武器は何でもよいとは、何にしようと言ってみた。

鴫居の薙刀を借りましょう。と靖久は簡単に言ってのけた。刃渡り二尺を超える大薙刀であった。しばらく曇り空が続き日は過ぎて行った。時折靖久は何所かへ出ては何やら長い棒の様な物を布で巻き、こそこそしていた。

二月の終りに月がでたが、瞬く間にまた曇り、こうして日は無駄に過ぎていった。日中は晴れていても夜はもやや霧が出たりしてよく曇り、山は気候が不順であった。

円彰から其処へ暫く寺のご用とかで延期を言ってきた。

怖気づいたかと思っていると花誘う比良の山風の吹く三月も二十日を過ぎてまた決闘状が届いた。対決する日の条件は前文と一緒であった。

ついにその日がきた。夢の間惜しき春三月の二十六日の夜、場所は少し離れた門外の狐塚、靖久の先拓坊を連れ順昭は大薙刀を掻い込み高い寺の門を梯子を使って下へ降り、決闘の場所へきた。靖久

は薙刀の外に例の布で巻いた棒の様な物も一緒に持ってきた。
「約束違わず、馬鹿者共来たな、さあ、勝負だ！」見ると五、六ではきかぬ程の人影が月に照らされてうごめく。

すかさず、例の布で巻いた棒をくるくると解けば中から数本の矢が梓弓と共に出てきた。素早く棒を立てて持つと曲げて弦を懸け、靖久は弥猛心の梓弓にサアッと矢をつがえるとパッと射た。矢羽は薄く小さく削った杉板の様に見える。こんな物で役に立つのかと見ていると、向こうでギャッと叫び声。矢継ぎ早とはこの事か、直ぐ様二の矢にまた叫び声が聞こえた。誰に当たったかは判らない。しかし、確実に敵を倒していた。

それまで木蔭に隠れていたのが、あちこちから跳び出した。いるはいるは、十四五人もいるではないか。僧形許りではないらしい。数を頼んで、ワアッと出てきた。
「油断するな、多勢だぞ！」
「ヤー！」そう返事しながら未だ二、三本人影に靖久は矢を放った。
「巧いもんだな！　靖久。」順昭は靖久を頼母しく思った。
「ソレッ！」大勢が周りを取り囲み、皆手に得物を取って撃ち掛れば、当たるを幸い大薙刀を振り廻して、小石元二郎靖久が、御館様にもしもの事があってはとあたり八方に気を配り絡む相手を凪たおし一瞬の中に七八人が何所か怪我をして引き下る。ついに順昭は目指す円彰に迫り目でたく、その首を跳ねた。円彰がやられると、くもの子を散らすが如く悉く逃げ去った。弔いは叡山の仕事と、直ぐ

様塀を超える時外に出して置いた梯子から門内に入り仕度もそこそこに欠けた月夜の明かりを頼りに下山し、早朝の坂本の馬借を襲って、この銭二貫余りで馬二頭拝借、不足は大和の筒井に取りに来い、と捨て科白を残して二人は駈けに駈けた。帰るとなれば心は弾む。月が浮かべば兎も浪を奔ると云う琵琶湖を左に見て松林の向こうに旭にキラキラと輝く波が目に入ればこそ、浦に釣するあま小舟の釣りの暇の波の上、それを長閑とも思わず今日こそ吉日と走りに走って途中再び馬借へ寄り馬を代え代え夕闇迫る頃興福寺の相輪の真中に輝く九輪を見てようやく、成身院に辿りついた。家臣らはお館様ご病気と聞いていたのに粗末な衣で伴も僧形、何故のお越しかと唯々驚き、慌てたが兎に角湯浴みし明朝までこの事一切内緒と申し付けると湯漬を掻きこみごろりと寝てしまった。

その翌日は衣装も改め成身院にいる将兵百余りを引き連れ筒井の城へ大方一年ぶりに帰ってきた。三月二十八日の事であった。
「お館さまご帰城！」門番の将校は大声で奥へ告げた。

大悦びする家の子郎党の中に、松倉式部右近政秀の姿はなかった。
「まさか、逝ったのはこの正月の半ばではあるまいな。」森好之らに尋ねた。
「ようくご存知で」
「この正月の半ば二度に渉りわしの所へ挨拶にきよった」

まだそう年寄りでもないのに、と順昭はその忠義の程を心から悼んだ。

第三章　苦　節

默阿弥殿

(一)

「祝著に存知上げ奉ります。」と事情の知っている家臣団のみが威儀を正し、ひととせばかり物安らかならず、だが無事のお帰りと悦び祝ったが、以後はお館様御病気ご全快と触れた。しかし、父順興なき跡、十五年の長きに渉り困難辛苦を共にした忠義の士が我が夢枕にまで立ち別離の挨拶と一日も早く筒井へ戻れと言った松倉式部右近政秀の死は強烈に順昭の心を蝕んだ。一月程すると、父譲りの酒が禍し順昭の体の調子が完全に狂いはじめた。狩りに出かけても愛馬の癖が摑めず思う様に操る事が適わず、上付いて落馬を堪えるのがやっとであった。万一の合戦に備えて、鎧、兜を着用してみれば、重くて苦痛であった。

《妙だ》順昭は時折床に伏す様になった。

扨て、順昭が帰って、二月程すると、お館様御病の噂が後になって大和中に密やかに洩れ、これを知った、高田与左衛門らが筒井に不満を持つ箸尾の残党や越智家の元家臣を集めて、すねに傷持つふらち者等を加え葛下郡の当麻寺、万財郷一帯を中心にふざけた事に箸尾の旧領を荒らし村の娘等を犯した。

順昭の気持は久し振りの戦に雀躍りしたが、最早戦の先陣を切って戦場を駈ける様な状態ではない事を自らが知っていた。松倉式部右近政秀の長子弥五郎を右近勝重として、父の跡を継がせ、森志摩守好之を後見に立てて出陣させた。殊にこの度の一戦には、叡山から連れ帰った小石元二郎靖久に銭百貫文と五百石を臨時に与えて好之の配下に戻した。

亡父の名跡を襲った右近勝重は勇躍し《腰が抜けて一生立居のならぬ法もあれ、とか申します。必ず勝って勝利を土産と致しましょう》と主君に挨拶し、後見を得て三千の精鋭を引き連れ六月十日出陣した。同十一日万財郷一帯を焼き払い当麻寺に迫った。殆どの敵は散り、僅かに残った高田与左衛門貞員ら三十数名の首を挙げ同十三日筒井へ帰ってきた。順昭は悦び、どうしても右近勝重の勝利を春日大明神に奏上してこれからの筒井の武運長久を祈り、更には飯田へ嫁に行った妹にも久し振りに会いたいと言い出し、馬は無理と女物の輿に乗り静かに同十七日南都へ向かった。

帰途別荘である林小路の館に入る頃には、もう抱えられねば、一人では歩行さえも出来なかった。輿(こし)のまま順昭は奈良林小路の外館(しもやかた)に入ると、そのまま静かに、床に付いた。足は浮腫(むく)み、腹部は異状に脹(ふく)れ上がった。

供をしてきた森志摩守好之、松倉右近勝重らは奈良の名医を呼び、この病人が誰であるとか一切云わずに順昭を看せたが時に幾許の猶予もないし恐らく最早華陀の薬石を以ってでさえも、その効はなく命旦夕に迫ると看たてた。

直ぐ様お館様の急な宴の催しと称して使いを一族の主だった者へ走らせた。

順昭の後室、後の芳秀宗英を始め、順昭の叔父で順興の実弟筒井治郎大輔忠正、同叔母の主人の大和小和泉城主、小和泉四郎左衛門秀元、郡山城主、小田切宮内少輔春次、奈良北小路城主、飯田出羽守頼直、滋明寺左門順国、福須美兵衛順弘、十市兵部大輔遠勝、明山右近直国、家老島左近友武等当然の事乍、ごく一部の者のみに知らされた。一族は何の宴かと、息せき切って外館(しもやかた)に時に遅れじと駈け集まり順昭の事を聞かされてがくぜんとした。

同十八日の夜更け、それまでうつらうつらしていた順昭の眼が開き、

《最早此れ迄、儂(わし)は好い主(あるじ)ではなかった、相済まぬ。げにもまことの弱法師、徒(あだ)なる玉の緒のさだめじゃ、就いては藤勝は未だ二つ、何とも心もとなき事、冥途に通う我が身の事我無き跡は……、我無き跡は、呉々も皆結束して事に当たれ、決して内輪で争うな、尚向こう三年の間は喪を伏す事、三年の間、何事もなければ……、この筒井の祖順武公や高祖父以来の筒井を守る事が出来る……、この事決して忘れず疎かにするな……、一族、老臣へ最期の頼みだ。呉々も……。》薄れゆく意識の中になおも呉々も……、と唇は動いたが、その後は一族、老臣が順昭の体をいくら揺り動かしても、再び眼は開かなかった。

昏睡の状態は翌日天文十九年六月二十日の辰の刻まで続き、一族、老臣の見守る中、潮の引くように静かに吐く息ばかりをして咽喉の辺りで大きく息をしたかと見る中、ゴクリと唾を呑込んでガクッとなると、栄舜房法印順昭とのそれが最期の別れであった。

一族、老臣は体を震わせ声を押しころして忍び泣いた。

ここにいる一族、老臣と順昭の近習の五名以外には一切この事は知らされなかった。

此所で直ぐ様順昭の亡骸を前に喪の儀の事と以後の対策に緊急を要し、一族、老臣は最良の方法は影武者を考え、誰が最適かを密やかに諮った。中なかその順昭の身替りなどみつかるわけがない。叔父の誰々がしょうしょう似ていると云うだけで明らかにはっきりと似ているとは云えなかった。

その中で飯田出羽守頼直が急に口を挟んだ。

「一人、お館様にそっくりな男を知っている。」と云い出した。

「真か」皆がその耳を疑った。飯田頼直が言うには、予て飯田頼直の叔母の娘が盲の琴の師匠で黙阿弥と言うのに習っていたが、ある日たまたま手を引かれたその男に廊下で出会ったその顔を見て、何所かで見た顔だとつくづく暫く考えていて真に失礼とは存ずるが決してふざける分けではないが可笑しくなる位、世にも不思議な程お館様に似ている。年の頃と云い、背丈もましてお顔が瓜二つ、あれならご一同でさえも御衣装さえ取り替えればまずは恐らく、お館様とお呼びしたくなる。と言うのであった。

「今、何所にござる？　そのおひとは。」

「この奈良の角振だと記憶しております」それなら今すぐにとなって、地の利に明るい飯田頼直が若い近習を連れて角振へ黙阿弥を迎えに走った。

外館（しもやかた）に戻る時には正面には門番がいて黙阿弥の事がバレてはと予ての手筈通り兵を予め全て遠ざけた裏門へ廻った。裏門で待っていた別の近習が内側から扉を開き黙阿弥の手は飯田頼直が引いて、二人の近習が布を掛けた座棺を抱え一緒に中に入った。真夜なかの事でシンと静まりかえる廊下を頼直の手に引かれ黙阿弥殿はきた。

衣装を着せかえ、外館にくれば順昭が必ず座る場所の脇息を脇に座らせると一同は心から平伏したくなる程、黙阿弥殿は飯田頼直が言う様に順昭に声色までも似て生き写しであった。

老臣らが責任を以って交替で世話をやく事にして言葉つかいや、下の事、その他用事の時には手を二度打ってとか、文字通り手を取り、足を取ってこまごまと黙阿弥殿に教えた。

一方順昭の遺体は普段は隠れ部屋とも言うべき一番奥の部屋の床をこじあけて、深く穴を掘り、一同合掌の中、御家の為と御遺言とは云え多勢の僧門の読経もなく、お気の毒なお館様と香を炊き涙ながらに葬った。合掌の中で皆、《お館様……、お館様……、ご免下さりませ、おさらばでございます。》と咽び、おえつをこらえる中、真新しい白木の座棺だけが、しらじらしく、地中に静かに下ろされていった。

（二）

黙阿弥殿のお館様は三食の時に膳の上(あげ)、下(さげ)する二、三名の腰元達にさえも全く気ずかれずにきたが、思わぬ事を聞く者があった。

「膳部の長の平次郎でございますが」折りいってと森志摩守好之が詰めている時、控の間から出て台所の側を通った好之の後から声を掛けた。ご近習の方へお尋ねしましたがしかし、心配の余りどうしても御老臣のお方へお尋ねせねばと、云って、《食欲が旺盛でございますのはご病気とは云え結構なる事、しかしお館様のご病気の折には、今迄からもようく存知上げておりましたが、どんなご重体の時にでも、お箸は三分までしか、お濡らしではございませんでした。兎も角それが取分けよごれが三寸を越える有り様でござりまする。》

「此の度は殊の外、滅多な事は申すでないぞ、間もなくご快復。」とたしなめたが、黙阿弥殿のお館様は盲の上に、育ちにも、そんなたしなみはない。しかし、些細な事を除けば黙阿弥殿は一族老臣の言葉をよく守り忠実で気の毒な程真面目に順昭役を勤めた。箸の三寸を越える汚れの事は後に《大笑イス。》と和州諸将軍伝に見えるが、めしい故の気の毒な仕草であった。

一族老臣は順昭の遺言をよく守り、黙阿弥殿のお蔭で周囲の敵に狙われる事無く、ついに天文二十一年丑年六月　満二年の間の順昭の喪を世間に明らかにし奈良外館(しもやかた)の遺骸を掘り起こして、新めて円証寺に葬り鄭重なる内に盛大に法要を営んだ。

天文二十一年の他国の情勢は一月上杉憲政が北条氏康に追われて長尾景虎（後の謙信）に救援を求

め、同二十八日将軍義藤が、三好長慶と和して細川晴元を出奔させている。

また、同三月、手利元就が西条槌山城の将菅田光則を降し、七月には備後の諸城を攻め、長尾景虎はまた関東に兵を出していた。

扨て、黙阿弥殿へは金銀を充分に与え鄭重にその労(ろう)を労(ねぎら)い角振へ帰した。

影武者では外に楠木正成を始め真田幸村が有名で、よく知られている所だが、黙阿弥の事は神経を使い苦労してやっと大名暮しが身についてきたのに、元の只の琴の師匠に戻り《元の黙阿弥》とは気の毒であった。《元の黙阿弥》の故事である。

筒井家では先に一年近く順昭が、比叡山に遁世した事もあって、その経験が生かされ、この時代に主幼くしてよく持ち応えたのであった。

三好党

（一）

片方では慈悲だの救世だのと云う奇麗ごとも乱れれば形骸化してしまう。

山門衆徒と法華宗、一向衆と法華宗、一向衆と武将との争い、武将と武将、武将と家臣。果ては同族の相続争いや利権争奪戦に天下取と総ては謂わば金と物と慾の取り合いの世界。実際に誰が悪いのか見当もつかぬ。三途の川も何とやら。命の遣り取りの戦国乱世は上は将軍家から下は民百姓まで折

りあらば容赦無く他人からふんだくる。《明の勘合符があるかないかで莫大な利権が動く都》頭と力で頭角があらわせた時代が戦国時代であった。

　地方では長尾景虎がひ弱な兄に代わって父の後を受け、信長は嫡子とは云え、兄があり武田信玄は父を追い出し子を殺し、今川義元は長兄を追い、次兄の恵探を破り二十五歳で家督を継いだと枚挙にいとまなく、将軍を手に掛けて殺した者さえ現われる。

　何と云っても都の将軍家が持つ特権の勘合符を狙い周辺の力あるものは割込みに必死であった。

　実務は堺の豪商の手にあり海上輸送を守り、瀬戸を押えた三好長慶は四国沿岸に水軍を配し、播磨、摂津、河内、和泉に大勢力を張っていて二万余騎を駆って都に上り、従四位下の叙爵を受けた。

　時の将軍家義藤と同格と云う勢いである。将軍家の権威失墜を歴然とするものであったがこの長慶の寵愛を受けたのが松永弾正忠源久秀であった。

　長慶と将軍家とが不和となり追われた将軍義藤は負けて逃げまくっていた。

　その頃大和の筒井家では順昭の忘れ形見一粒種の子藤勝が高熱にうなされ顔は腫れ上がって幽冥境をさ迷い母は帯を解かずに着のみ着のまま側につき一族老臣らも交替しながら付ききりで看護に努め神仏に祈り解熱剤のみみずの煎じ薬を無理に呑ませてようやく十日余りを過ぎて快復し、しばらくは静養に心を配った。何せ藤勝以外は総て女子ばかりと云う懸け変えのない棟梁であった。

　天文二十三年正月五日僅か六歳の藤勝は掃き清められた市中を馬にゆられ母や福須美順弘、森志摩守好之等の重臣達に囲まれ三百の騎兵、二百挺の筒を担いだ鉄砲隊が従い五百の弓組、八百の長槍隊、

その他、長巻、薙刀など合計三千余りを率いて正月恒例の春日神社に参拝し東大寺を巡り二月堂を拝し、興福寺の我が作外成身院（いえもとじょうしんいん）に入り幼くして棟梁としての各僧門の饗応を勧めた。うるさい格式習慣の中、幼いながらも責任感が強く長時間の正座に耐えて大人達を心服させていった。

　翌日も明王院にて茶をすすめ北小路城で宿し八日に筒井城へ帰るまで勝手は許されなかった。三好党の乱波共もよく統制が取れた筒井衆を見て主君は幼少ながら武威は侮れずと書き送っていた。

　お陰で大和は平穏であった。

　将軍義藤はその二月自分の運勢を占わせた所このお名にては不都合と義輝と名を改めた。

弘治元年に入ると益々三好長慶は勢力を拡大し覇権を欲しいままに近隣は恐怖におののいていた。

　順昭なきあと棟梁としてのありかたについて弓矢、刀や槍、馬の稽古に騎兵や足軽の指揮と実戦の演習に重臣達は心を砕き大和を中心にした略図を開いて図上の陣の展開を一々作戦を順慶に示して様様な形を教えていった。伝役（ふやく）は三老が交替で当たり筒井家歴代の苦労話しを語り聞かせ決して手を抜いたりはしなかった。

「爺（じ）い、作戦の要は？」森好之に藤勝は問いかけた。

「おお、お難しい事を。」顔を綻ばせて好之は、その要諦について知っている限りの事を申し上げましょう、と語り出した。

　一番の上策は敵の謀り事を事前に察知してそれを旨く破る事、ついでは連衡する交わりの間に割っ

て入り敵同志の相互の信頼をつぶします。

次ぎに戦いに及びます。最後の下策は城攻めとか申します。また常に我配下に気を配り内部に亀裂の入らぬ様に致すこと。一兵といえども大切に扱い無駄にしてはなりませぬ。

門前に立つ乞食、用を為すとか、鶏鳴狗盗と云うのがございます。

支那の戦国時代に孟嘗君と云う武将があり、一芸に秀でる者であれば将来、何時か役に立つとして誰彼なしに食客三千人の中に加えて抱えておりました。

その三千人の中には勿論立派な武勇にたけた将兵もおりましたが、スリ、香具師（やし）、詐欺師、盗人、大道芸人などがおりました。ある時、孟嘗君は夜に逃げて函谷関まできましたが、朝の一番鶏が鳴くまで関の扉は開かず、困っておりますと部下の一人に鶏の鳴き真似の旨い者があり上手に鳴き真似をしますと辺りの鶏は一斉に斎（とき）を告げ扉は開かれ難を逃れました。鈍な男でも何か才能があり役に立つものだとする例えでございます。

この大和は四囲を山に囲まれ一見敵が攻め込みにくい特徴がございますが、都から大軍が押し寄せますと強い者にすぐ組する者が多くいて大敵にひとたまりもなく攻められ決して油断はなりませぬ。

筒井の力の及ばなかった頃には長い間北には古市氏が、南には越智殿や箸尾氏を始め西の山を越えれば河内には細川、両畠山氏が三好殿と絡み複雑な様相を呈しておりました。天子様のお膝元の都では押えるもの破れる者が入れ替わり立ち替わり今も騒がせております。代々のご祖先様には毎日の様に幾度となく合戦に出られ身には刀傷や槍傷、それに敗北の折りなどは無数の矢を背負われ人も馬も

酷いお姿で戻られた事もございました。

また、多くの将兵を失いながらどれ程ご苦労をなされたことでございましょう。

お父上様の時代になってようやく古市や越智氏は下りましたが並大抵の事ではございませんでした。

今日こうして安穏に暮らせますのはひとえにすべてはご先祖様のお徳に依るものでございます。

藤勝は生き生きとして聞き、順盛、順興、順昭のすべてを知りたがった。晴れた日は弓矢の稽古や馬や槍、大刀の捌きや薙刀の扱い、雨が降れば手習いや読経、史記、史略、軍略それに近隣の世の動きの外、茶の湯に和歌、謡曲の稽古と繰返して練習し日を重ねて学ぶ事に明け暮れた。

「ソレ青陽ノ春ニナレバ……杯ヲススムル　マンコノケ……」

「いやいや、マンコノケ……ではありませぬ。万戸ノ声……とはっきりと……」外はそぼ降る小雨。室内では年老いた白髪の謡の師が見台に向かってチョコンと座る藤勝に苦虫を噛みつぶした様な顔をして直していた。

今はまた茶の湯の稽古。

「左様、左様お茶杓は鎗を突き出すように拭き取りますのじゃ。」幼少の藤勝には小五月蠅師匠が沢山いて一つ済んだらまた一つ母は戸襖の陰で泣き笑いしつつ、伸びるものならその頭と脚を両方から引っ張り引き伸ばしたい思いで毎日を待ち続けていた。

(二)

幾分気の優しい所が藤勝にはあり、伝役(ふやく)の者達には気になったが、可愛想になるくらい、大和一国の棟梁を自覚し小さいながらも全身で藤勝は生真面目に一つ、一つものにしていった。

決して気儘は云わず一度や二度馬から落ちてもうまく乗れぬ事にみずからを嘆き泣きながら鞍ずれして尻に血をにじませながら馬にしがみつき自由に乗りこなすまで城内の馬場で暗くなるまで諦めずに頑張っていた。

一族老臣のおとなたちはハラハラしながらもその痛々しいまでの根性を何時かは大和はこの御大将の下に更に結束してビクともしはしまい。そう思えて物陰から涙して見守っていた。

母が風邪でも引こうものなら気づかって側につききりっで看護をしようとした。

「そなたに風邪がうつってはこの母が却って心配します。看病は他の女達がする。」のでとしつこく云ったが決して側を離れなかった。

「母者人様、無理をなされてはいけません。どうぞ、一日も早くお元気に……」と言葉で励まし女中達がちょっとでも目を離せばすぐに額を冷やす手拭を取替えようと小さな手で赤銅(あかがね)のたらいの水に手をいれ交換の巾を絞った。

(三)

「えらい事が起こりました。一大事でござるぞ！」

「なに、一大事とか。」一族、重臣達は乱波のもたらした松永の動きを控えの間に集まり緊張して額を寄せあっていた。

永禄二年二月二日織田信長が上洛し将軍義輝に謁した噂が飛び俄然、都の周辺が騒がしくなり、その上、長尾景虎までが五月一日には上京するなど近畿は緊張した。信長はこの年尾張一国を平均していた。

三好長慶は松永久秀等に命じて近畿の一帯の基盤を整備して大挙して上京するであろう各地の豪族や信長が来る前に河内、摂津、山城、大和の反三好勢を討とうと備え、河内に兵を出し、畠山高政の高屋城を攻めて落城させ続いて大和へも食指を動かせていた。

緊張する大和の筒井城内重臣の間ではまたしても猿沢の池の水が赤く濁り争乱近し、の前兆に心は沈んだ。

春頃から時折三好の手のものが大和河内の国境で出没すると乱波は報告していたが、その日晴れたかと見る間に雲が出て北方の生駒の山並みにかかる雲行きが峰を下り早くも大和平野に向けて、怪しく黒雲が流れ落ちて来るようであった。八月八日松永久秀率いる七千余りの大軍が筒井の一族郡山の辰巳の手引きにより一気に信貴山に入った。

一大事はその事であった。

「敵は、城作りの最中、今、攻めなければ機会を失おうぞ。」

「否、軽挙妄動は慎まねば、今七千の山の上の敵を相手に不利な戦いをするなど下手をすれば命取り、

背後に三好長慶がおり、ここは一番、松永の出方を見て。」
「何をゆうちょうな、今しか無いぞ。」激昂した面々は夜を徹して軍議を重ねたが主君藤勝は幼く慎重論が制した。数えて十歳であった。
藤勝には未だ大人の話は理解し得なかった。
大和河内の両国を押える絶好の地、信貴山はかつての木沢長政の時と同様大和にとって随分迷惑な場所であった。
戦備おさおさ怠り無く緊張の中に付近の砦の堀を深くし逆茂木を伏せ塀を修理している間にその年も暮れ同じころ着々と信貴山の城は見る間に整備され松永久秀は大和攻めの手筈を整えていった。
三月に入ると愈々信貴山を下り大和諸城を攻め始めた。俄かに大和は慌ただしく戦いを知らぬ藤勝も遂に六千余騎を率いて万余の敵を相手に大和各所で戦ったが圧倒的な松永方の弓鉄砲の数に押され忽ち踏み止まる所もなく敗戦に次ぐ敗戦であった。
筒井の動きは総て筒抜けで手の施し様も無かった。
まさか一族の郡山辰巳藤七郎が松永の手にあったとはやっとの事で河内の布施城へのがれた時に藤勝主従が知った事だった。
「必ず敵も隙を作ります。その時までこの遊佐殿の袖にすがって待つしか、手の付けようがありませぬ。」
母等は一早く興福寺一乗寺院内に身を隠し難を避けていた。一番気になる事に心配しなくても良か

ったので藤勝は不遇な中にも安堵した。
五月の二十日を過ぎた頃布施城の主遊佐河内守から藤勝(順慶)等一統は小国尾張の織田が駿・遠・参の太守今川義元を破ると聞かされ世の中がどう変って行くのか不安の日々を重ねるばかりであった。
織田信長は戦線を広げ柴田勝家、丹羽長秀、木下藤吉郎、前田犬千代、林佐渡、佐久間、蜂屋等を率いて瞬く間に近隣を平らげ勢力圏を拡大していった。
しばらくして河内守はまた順慶等に大和は益々松永が欲しいままにしている、南都北方の眉間寺墓をつぶして城を新築中であるというのであった。
多聞山城であった。天主を備え四重五層のこの城は後の天主閣付き城郭の最初のものであった。
大和平野をへいげいし出来栄えに驚いたフロイスも記録に留めている。この城へは息子の松永久通が入り二方から大和のにらみを利かせ順慶のいない大和側からは容易に攻撃する事等は望めそうにも無かった。
松永の応援に三好長慶は摂津芥川から河内飯盛城へ居を移し大和支配の後ろ盾となった。
例、順慶が大和に不在の悪条件でも筒井の息のあるものは小泉城の小泉重順や小田切四郎左衛門の外十市氏や越智氏と東山の山岳地帯や郡山から討って出て松永へ反撃したが多武峰(とうのみね)の僧等はその為に筒井に味方して多くが討たれる有りさまで筒井の勢力は東へ南へと追い落とされていった。大和北部は松永の制する所となり遂に小泉重順は松永の猛攻の挙げ句自殺し城は落城した。各方面から悲報が毎日の様に河内まで届けられまだ母が恋しい歳頃の順慶には二重にも三重にも苦しい日々であった。

「母者人様は、お風邪等を召して……」おられぬだろうか、優しい胸は母を思い心配していた。畠山稙長(たねなが)の守護代で血縁とは云えそう親しい間柄ではなくなりつつある遊佐河内守の保護下にあって河内守は気づかいながら大切にはしてくれているもののなんとつらく遠慮した生活の重苦しさと一日も早く元気な母に会いたい思いに焦がれていたが三老達に弱い顔は見せられなかった。

「若は小さくても大和の棟梁。河内の衆に笑われてはなりませぬぞ。ご先祖のお顔に泥を塗る様な事は決して……」なさいませぬようにと、ともすれば弱気になって暗い顔をする順慶を激励する。泣き言は云えなかった。僅かな救いはかしずく向井勝久の娘カナが辛うじて心を和らげた。順慶よりは二つ程上だが、それだけに何事も姉の様に順慶の世話を快くしてくれた。

(四)

大和は三好、松永勢に諸城はことごとく討ち破られ筒井家は一矢をも報いる事が出来なかった。

乱波を使い大和河内の間を筒井の家来達も密かに往来し一族大和東山の福須美や山田、十市、越智等と再起を機して謀ったが使いに立つ者も途中で捕まったりして河内に避難していた三老達はただ気をもむばかりで一向にはかどらなかった。

落城したとは云え筒井城は松永に焼かれずそのまま残っているだけに大和に潜む筒井の将兵らは遙かに望む城を見て余計松永打倒に思いをはせた。

戦費にあえいだ武将達は幕府に願い出て徳制令を乞い借金を棒引きにしてもらった。将軍義輝は相変わらず今日は都明日は石清水八幡へと逃げ回り往年の雄細川晴元が逝き、悲しい事に泉州堺に難を避けていた順慶の伯父順政も苦悶の中に客死した。

さて、松永であるが、我子義興が久秀の策謀で殺されたにもかかわらず三好長慶は庇った程信頼が厚く更に久秀のざんげんで実弟の冬康まで殺しその二ヶ月後に飯盛城で三好長慶も四十三歳で死んだ。慌ただしく世間が変わっていく。

長慶無き跡は三好三人衆と久秀が跡を継ぐが久秀は三好義継と組み、永禄八年五月十九日事もあろうに将軍義輝を攻め殺した。

これを知った弟の覚慶は興福寺を出て還俗し、義秋と名乗って近江に走り将軍家再興に心に砕いた。京にいた三好党と松永久秀、三好義継の連合軍との抗争が始まりこれを遊佐河内守から聞いた筒井順慶とその一族は秘策を練っていた。

森志摩守好之、島左近友之、松倉右近勝重等三人は主君を遊佐河内守に預けそれぞれ三好日向守長逸、同下野守政康、石成主税助友通を密かに訪れ松永弾正攻めの構想を明らかにし応援を乞うた。

反撃

(一)

正親町帝(おおぎまちのみかど)の即位から七年。永禄九年三月の終わり筒井の三老等の功が稔り、松永弾正久秀と抗争

を始めた三好日向守長逸（長縁）、三好下野守政康（政生）、石成主税助友通等三人衆から各二千五百宛を借り受けた筒井勢は河内の布施城を出て千早赤坂村から金剛、葛城山の間の水越峠を経て大和の御所に入り大和高田からまっすぐ三輪山の麓まで一気に走り東山づたいに敵に覚られぬ様、北上し松永久秀との決戦に意を決し、乾坤一擲このたびは徹底的に松永を討ち砕くべし、として海老名の家臣が守る大和美濃庄に巣喰う敵を完膚無きまでに討ちのめしてこれを落城させ、続いて筒井城周辺の今市城、三橋、若槻を攻めたてた。これを知った松永方は掃討すべく信貴山から一万余りの兵を出し法隆寺を経て筒井の諸族が守る小塞を次々につぶし、一方多聞山城から松永右衛門佐久通等が八千余りを率いて南都から筒井軍を囲んだ。時を併せ山城、河内の三好三人衆の勢が多聞山城、信貴山城へ背後から大挙して突き、攻防二ヶ月の末六月驚いた松永勢は乱れて各々の居城へ引き順慶は懐かしい筒井の城を奪還した。

この間三好の兵はあちこちの寺院や神社を荒した。

順慶を尋ねて各寺院の役僧等が来ては禁制を願ったが、まだ順慶等にはその力はなく三好三人衆にその僧侶を連れて礼物を携え引き合わせた上、禁制の高札を掲げてもらった。

禁制　大和国 西 京 薬師寺 並 門前、として、

一、当手軍勢先人等 乱暴狼籍 事

一、寺中陣取之事

一、相懸矢銭（軍用金と称するもの）兵粮米事

一、苅取作毛等事

一、伐採竹木事

右条々堅被停止 訖 若有違犯之

族者、遽可有処厳科者也

乃下知如件

永禄九年卯月日

下野入道　花押

主税助　花押

順慶が筒井に戻ってもすぐに母を迎えに行かせるわけには行かなかった。何時状況が変わるか判らない日々であった。

だが、筒井城に順慶戻ると知ると諸々に潜む将兵が陸続と帰ってきたが三老等が必ず好い日がくると励ましてきた甲斐あった。御大将が僧侶と云う家柄であり、一族老臣等から兵に到るまで信仰深く俄かの立ち小便にも大地に挨拶をしてからでないと用を足さなかった。

河内にある間、三老等は神を拝し、仏に祈り時間のかかる祈祷でもしんきくさい事をそうは思わなかった。

「若には未来がございます。辛抱は一時、過ぎれば何の事も有りませぬ。仏を知るもののみが仏に出会う事ができます。一心に祈れば必ず通じまする。我等なき跡長い将来はきっと穏やかな好い日が……
……」

「戦さは好かぬ」順慶は戦いが嫌いであった。

十一歳の永禄二年以来七年の苦節の歳月は順慶を大きく生長させていた。

(二)

苦節を経た今、順慶はもう十八歳に達し、久振りに主を仰いだ将兵らはその棟梁となった立派な生長ぶりに一様に目を細めて驚いた。一月もすると内衆、与力を併せて総軍は一万を越え愈々筒井の意気は盛んであった。

「お館様、得度の儀でございますが。」慌ただしい中にあっても一族、重臣達はその準備の手を打っていた。

同年九月二十五日松永方の多聞山城攻略の為に南都に陣を張った後、用意が出来た順慶は同二十八日興福寺成身院に於いて、戒師、宗慶権大僧都により得度し陽舜房法印順慶と号した。

地方では相前後して、上野を抑えた上杉輝虎は常陸小田城を陥落させ、更に下総臼井城等を囲んだ。京を制覇せんとした織田信長は背後の強敵武田信玄に何度も遣いを出して、勝頼に養女を嫁がせて身の安全を諮っており、近畿の和泉では河内守護本城高屋城から追いだしを喰っていた畠山高政が、三

好義継に破られ憂目を見た。この頃の畠山氏には昔程の勢いはなかった。大和の筒井氏と同格の河内守護代であった往年の筒井同盟軍の遊佐一族も同様に没落していたし、また当国では箸尾氏が松永勢に抑え込まれて止む無く降り、古市左近が裏切り、既に松永に下り、後には松永金吾へオナへが嫁いだが、此の頃久秀の甥松永金吾は柳本らを敗り楊本城にあり、十市の本城も占領された上また十市氏が東山に営んだ竜王山城まで松永の手にあった。楢原も同様松永氏に属し大和南部も完全に松永勢の抑える所となった。

さて、松永勢は引き掲げたが一方では堺を抑え鎧兜を射抜く、鉄砲の購入を急ぎ三好一族を撃つべく久秀は心を砕いていた。

天文十二年八月種子島に漂着したポルトガル船が持ち来たった、鉄砲の由来によれば、二、三説程あって紀州の津田監物等長の船が難破し、種子島に漂着した彼が技術の修得をして天文十三年根来寺にかえり、堺から鍛冶芝辻清右衛門を招いて持ちかえったものと同じ物を作らせた、とするものと、堺の橘屋又三郎（通商、鉄砲又）が種子島にきて鉄砲鍛冶八板清定に製造技術を学び堺へ帰って、製造を始めた。とするものとがあるが、何れにしても堺も紀州の根来寺も鉄砲の有名な産地となった。品質のよい、眼新しい物に飛びつくのは今も昔も変わらない。

松永久秀は信貴山に祭る四天王の一つ憤怒相の多聞天を崇拝していたが、武田信玄もこの多聞天に多大の寄進をしていた。上杉輝虎（謙信）は多聞天の別称、毘沙門天（倶毘羅とも云う）を信仰していたから、不思議なことに武田上杉の両軍は同じ武神に守られて雌雄を決したのだから一生涯勝敗が

引き分けであったのかも知れない。

大仏燃ゆ！

(一)

永禄十年四月堺から戻った松永久秀は織田信長の上洛近しと見て今のうちに大和支配をと急ぎ多聞城、信貴山城から兵を繰り出し王寺、暗がり峠を固めまた、奈良の車坂から奈良街道を抑え、一挙に勝敗を決しようとあせったものの、又しても三好三人衆らが松永の背後を脅かし松永の思い通りにはならず、長い対陣を双方は余儀無くされた。三好三人衆はぞくぞくと兵を大和に送り込み三好日向守長逸、三好下野守政康、石成主税助友通、三好山城守康重入道笑三、細川六郎氏元、松山蔵人久清、中村新兵衛高次、同舎弟新助高之等が南都の防衛線を突破して多聞山城、信貴山両城へひたおしに押して攻めたてた。一度は引いた松永軍は入江大五郎、岡周防守、鷹山主殿、海老名兵衛、同助九郎、森兵助、古市左近、菅田備前守等を動員して多聞山城を下り、東大寺付近まで迫った。

三好衆は初冬、東大寺大仏殿に宿陣した。小雨降るなかにも、火を絶やさぬ様に赤あかと夜ぞらを焦がす程かがり火を炊き、敵の夜襲に一応の備えを怠らなかった。

折柄、松永軍は夜襲に馴れきった選り抜きの一群の五百余人を海老名兵衛友清が率いて陣頭指揮し、櫓を組んで上からあらん限りの新調の鉄砲の筒先を揃えて東大寺大仏殿を目掛けて撃ち込んだ。一斉

射撃に瞬く間に三好衆は六百余人が撃たれ驚き慌てふためいた三好衆は先を争い火籠を蹴飛ばしほうほうの体でその場を逃れた。

永禄十年十月十日の亥の刻、折節雨風が吹き荒(す)さぶ最中(さなか)、三好衆が置き忘れた寺の回廊下におかれた鉄砲の火薬に火の子が飛び、引火するが早いか轟音を発っして忽まち爆発し辺り一面火の海となった。

大仏殿を始め講堂、中門、二つの西門、回廊に到るまで悉く灰燼に帰した。

〈如何に戦乱の仏の捨てし世とは云え大和国中至る所に堂塔伽藍のその数を知らず、幾く百年この方、先人の知恵と力と真心と民百姓に到るまで血のにじむ様な浄財を一瞬の内に、斯くならしめた、憎々しきは松永奴、己の欲望を欲しいままにして、尚その上にかかる事を、逆賊討つべし！〉と日頃大人しい筒井順慶も心の底から松永に対して言い表わしようのない、憤りを抑える事や我慢する事さえも出来ず、旗下に怒りをぶつけた。

一方松永久秀もことの重大さに、戦さとは言え余りの事にただ、呆然と海老名兵衛友清の報告を聞いて顎然とした。

そればかりではなく、流石の久秀も腰を抜かしへなへなと床にしゃがみこみ、一時奥へ入り、誰とも会わず、唯々身の罪の深さに自責の念を覚え震える体が転々反則を繰り返しその夜は明け方までまんじりともしなかった。

盧遮那(るしゃな)仏も湯になりたもう、と旧誌にいう。盧遮那仏がお釈迦になった。早速十八日には筒井の同

族、山田民部は復興の為に献資をなし、再建にやっきとなった。

(二)

十一月九日密勅が織田信長に下り禁中修理が命じられた。正親町帝はかって弊を熱田へもたらせられた折り、信長が今川を破ってすぐに帝に立入頼満を使いとされ、

「朕、卿ガ威名ヲ聞キ、……略……未ダ朝廷衰紐シ、姦宄縦横ナリ……不世ノ勲ヲ策シナバ、即チ予一人ヲ以ッテ喜バン、……」云々。と光栄に浴しているがこの度は益々勢力を拡大した信長へ帝は更にご期待遊ばされたのだった。その信長が初めて拝謁を許された折り、帝が静かにお臨み遊ばされると流石の信長もその冒しがたいお姿に両脇から冷ややかな汗が流れ畏れおおくなって身は自然に縮み板の間に額を付けて平伏した。

「弾正忠か」穏やかな御言葉があった。

「ハハッ」信長の声は震えた。今迄幾多の合戦に臨んで恐い目に合ってもおのれを本当に震憾させる程の恐いものは何一つ無かった。だが今日この場でこれ程の畏れは何故ぞ。この様な表現をどう云えばよいのか。信長は現人神の恐さが身にしみた。帝を取り巻く公郷共の生ちょろい取り済ましたつらとは桁が違っている。武威や権力では太刀打ち出来ぬお姿に信長はすっかりおのれの無力を恥じ畏れ入った。

そうだ。日の本の国はこの御方の元にすべての祭り事の中心が戻らなければ乱れる。この戦国の世

を一日にも早く鎮静させ帝御自らきこしめす政治でなければならぬと信長は密かにこころの底で誓った。

「今にご覧下さいませ」信長はそう奏上したかったがまだそこまでは程遠く先の事ではあったが信念は固まった。織田が勢力を拡大している頃、ここ大和は三好三人衆が敗退し松永勢が武を張り筒井順慶は筒井城から一歩も出られなかった。筒井の親族と森、島、松倉等は相謀り戦闘要員将兵の再編について合議を重ね、二十人をまとめる長を伍長とし、その伍長の五人を束ねるものを仕手とし、仕手の十人の長を組頭として鉄砲を重点に弓、槍、長巻、薙刀、騎馬武者、輜重等の編成を終え、順慶に報告した。

(三)

「縫殿佐を呼べ」森縫殿佐好高は何事かと順慶の前に膝行した。縫殿佐は先代を襲名していた。

「外でもないが、今後しばらくの間、鉄砲隊の指揮を採れ。足軽共は敵を恐れ早撃ちして、命中する確率が見ているとすこぶる悪い。一度目の射撃では敵に当たっているようだが、二発目は慌てているのか玉薬の詰め方が悪いのか不発も多々ある様だ。一発必中を期するため相手が騎兵なら半丁手前、徒歩ならあと十歩に迫るまで射ってはならぬ。仕手共は思い思いに命じておる。玉薬の代が高く付くので申すのではない。一発一発を大切にすれば命中するとわしは思うぞ。この月の間、藁や板でそれらしく人形をこしらえ、それに台車を着け綱をかけて別の足軽に引っ張らせ馬の早さ、徒歩の早さを

計り形を整え訓練に励め。」縫殿佐はただちに、城内の鉄砲的場（まとば）に組頭を集め毎日毎日鉄砲足軽達に采配を奮って特訓に精を出した。やがてようやく采配一振り一糸乱れぬ一斉射撃の体制が整った。

「一番隊、撃ちまする！」縫殿佐は順慶へ大声で叫んだ。

「よーしっ！」硝煙の煙る鉄砲的場で順慶は訓練の様を見て一応の満足を得た。今迄の様に各自が勝手に馬や徒歩で得意の業物を手に戦う戦法は敵の鉄砲の前には為す術も無く、ひとたまりもなかった。

永禄八年五月十九日三好義継と松永久秀は将軍義輝を殺してしばらくの間、将軍家は空席であり万松院義晴の甥の源義栄が公方となり将軍家を立てたのは十一年二月五日の事であった。

順慶は形式を重んじ例え実権の乏しい将軍家といえどもみずから上洛出来ぬので山程の祝の貢物を整え慶賀奉り、重臣の森志摩守好之を代わって上洛せしめて寿いだ。

新将軍家には忠節が廃れた中によくぞ来てくれたとお誉めに預かり、相州の陣太刀一口や巻き絹五巻を何も下賜出来ぬがと頂いて帰ってきた。

都の様子は四条五条の橋の上は老若男女貴賤の人々が賑々しく行き交っていたが、至る所血生臭く多勢の荒武者が声を張り揚げ我もの顔に人込みの中を鞭を振り振り騎馬で駈けぬけあちこちで硝煙の匂いが漂っていると云う事であった。

第四章　石山合戦

信長の版図

(一)

松永久秀は山城西ノ岡辺りが出自であると云うが、あまりはっきりとはしないらしい。しかし、旗下に剛勇の指揮官を多数持ちその配下に数万の将兵が付き随っていたから決して無謀無能ばかりの無茶者であったとは云い難い。

戦の合間には金儲けもしたが、名器の平ぐもの釜を取出しては茶を楽しんだと云うし、旗下には殊に眼を掛け可愛がった。

義栄（よしひで）の事は先に書いたが永禄十一年二月五日義栄が将軍には成ったものの僅か七ヵ月後の同年九月五日二十九歳の若さで薨去した。

如月、義栄が新将軍に叙爵された頃、信長は北伊勢に入り、十草信濃守、宇野右馬助、赤堀越中守、

後藤市正等を随えたが、一人神戸友盛は能く防ぎなかなか落城せず、遂に和議を以って下した。同族峰筑前守、鹿伏兎右京亮、国府佐渡守らも降った。その他雲林院出羽守、草生与市右衛門、家所主馬助、中尾権頭、乙部勘解由ら北伊勢の豪族は悉く信長の膝下となったが、去年八月には木股隠岐守以下十余りの城を既に抑えている。同八年信長は妹、於市を近江浅井長政の室として画策しこの十一年四月嫁がせていた。

浅井との連合を以って強豪朝倉を討ち、京師への足掛かりとしたかったのだ。

七月二十五日、信長は慌ただしい中に足利義昭を美濃立政寺に迎え信長は伊勢が片づいたのを機に八月師を進めて岐阜を発し、近江佐和山に陣して、佐々木六角承禎へ信長は三度に渡って降伏を説いたが、応ぜず、この後岐阜へ兵を出し、再度近江へ戻り近江での戦(いくさ)が始まった。正親町帝に申し上げていた愈々近江攻めであった。六角承禎が和田山等十七もの砦を築いて抵抗した。坂井政尚、森可成等が五百余りを率いてこれを攻め一方浅井長政へ使いを出したが、長政は信長の意向を無視した。信長の弟信時や林通勝、明智光秀、平手汎秀、氏家卜全等に和田山を攻めさせ、自分は柴田勝家、森可成、坂井政尚等を率いて観音寺城を攻めた。九月十三日六角承禎は遂にたまらず、観音寺城を捨てて伊賀へ走った。浅井新八郎を以って近江近郊を案内させ、佐久間信盛、丹羽長秀、羽柴秀吉等の騎兵四千五百余りが近江箕作城を囲んだが、中なか落ちず、織田軍の建部信勝、吉田実重らが討ち死にした。漸くの殊に敵は和を乞い落城した。これを聞いた各近江の雄琴にいた和田秀純や堅田の沢田宗忠、和爾氏条、新庄貞光、高島高泰等の十八城は悉くついえ去った。蒲生堅秀だけは日野城を尚も守り、

信長は神戸友盛を遣わし降伏を説かせたが自ら死を以って誓うとする堅秀を信長はその節操を嘉歎して、その子氏郷に嫁を取らせ食邑を復させた。柴田勝家、森可成等をして近江の守備とし、信長は不破道貞を越前に遣いとして向かわせ、義昭は迎えられて二十一日入京した。信長は三井寺に陣し継いで義昭を挟み騎兵三万は湖上や陸路で京へ向かった。一方相前後して筒井一族は相謀り、順慶は親族山田民部を派して此の機を逃さず、東福寺に移っていた信長への恭順を願い出た。反松永等の豪族、細川晴賢、京極高吉、荒木村重、朽木貞綱なども同様であった。信長は菅屋長頼を京都の守備に就かせたが、厳しい軍政を敷いた。例え織田軍の将兵と云えども違反者にはその頸をはねた。あまり上等の兵ではなかったが、ある店で代価を声高に口汚く罵る兵がいて菅屋長頼はこれを捕えて信長に申し出た。《ワレ聞く、君子の道カナラズ近キョリス》として即刻頸をはねさせた。それまで混乱していた、京の民はその元のなりわいに戻った。それまで京を抑えていた、三好義継一族は総て摂津へ引き、松永勢も大和へ逃げていたが、流石の松永久秀も人質をいれて和を乞い、一応治まったのを見て、織田信長は十月二日、羽柴秀吉に将軍の補佐と京都の守護代を命じ岐阜へ帰っていった。

十月八日松永久秀は織田軍の助けを借りて三好三人衆が巣くう各城と筒井に組する大和諸城をしらみつぶしに悉く討ち破った。順慶は筒井城を開いて大和東山の福住へ落ちのびた。折角一度は大和を回復したのに織田軍の加勢でどうにもならなかった。

「最早、並みの事では敵を叩く事などは出来ませぬ。」
「時の来るまで此処で敵の動きを見て次の手を皆して考えましょう」そんな中で順慶は大和東山山中深く兵を隠したまま、重臣の子の森縫殿佐、島清興、松倉重政等二十五騎を下山させ敵の誘いを計った。

(二)

鬱蒼と繁る木立の間道を騎兵は足並みを揃えゆっくりと敵状視察に丹波市の村を経て、更に柳本を抜け、福住へ駒の鼻を向けて駈けた。先頭を往く山田、福須美、森、島、松倉、矢負らはみな若者ばかり。早くも敵、松永の十市城の斥候は目敏くこれを見つけ釜口左兵衛、喜島景明等百余騎が跡を追跡し始めていた。

筒井勢の跡から無数の蹄の響き、我武者羅に登り道を追い上げる。
「まだ筒井勢は気が付いてはおらぬと見える。追え！」
「待て！」
「ビシューン」ゆっくりと駈ける筒井隊の後尾には既に矢うなりが耳をかすめる。
「敵襲でござる！」最後尾の喜多三郎兵衛は大きく叫んだ。
「ビシッ！」一斉に馬腹を蹴り一際高く鞭が冴えた。パカパカパカッ、と早足になり、敵も尚一層早くと鞭を当てるが急な登り道、それまでも思いきり馬をせめており早くも疲れがある。
筒井勢は瞬く間に距離を空ける。

「おい、どうせ敵は次の登り道辺りで脚は止まる。もう一息じゃ。」其所まで何とか追い着けと釜口左兵衛は叱咤した。もうかれこれ東山の裾に入る。真新しい蹄の跡が土にくっきりと真っ直ぐ上に登っている。
「あゝ、あそこに人影が。」薄くらい木陰に数騎の人影があえぎながらのぼって行くのが幽かに見えた。それ！　と、ばかり勢い込んだ釜口左兵衛等は尚も追った。その時まさに、
「ドドーン」天地に轟く百雷の響き、鉄砲の音。
「うわぉー」忽ち二、三十の騎馬武者が撃たれて落馬した。続いて矢の雨、また鉄砲のあられ、馬は主を失い、どこへともなく八方に逃げて行く。
「引け、引け。」陣頭指揮する釜口左兵衛は一瞬にして五十余騎を討たれ顔面蒼白になり、わなわなと震えて退却した。
筒井側はしばし、溜飲を下げたが、しかし、それが決定的な戦ではなかった。
「待てば海路の日和ありとか、必ず敵は再び隙を作りましょう。」筒井一族、三老、三百余りの将兵らはこぞって主君順慶を守り、勇気付けて今こそ辛抱の時、と耐えに耐えた。
「そま道を松永の四、五名の斥候（せっこう）が参ります。」
「待て！　慌てるな、やりすごさせろ、静かに！」
「もう、此所まできたか。」松永軍は草の根を分けてもと順慶らの行方を探索していた。
「油断がなりませぬ」順慶主従はひそとして、動かなかった。

「林間に藁人形を立て、奇策を以って、敵を翻弄させましょう。」
「あの下の峰に岩がございます」
「ウーム」
「昔、支那の諸葛孔明は奇岩を生かして、風を使い、敵を欺いたとか。」
「ウーム」
「あれほどの岩ではたいした働きはございませぬが、あれへ敵をおびき寄せ、敵の数にもよりますが、ここから下って一挙に敵を叩きます。」森、島、松倉の諸将は将兵を動員して数十の旗や藁人形を作ってこれを岩蔭から覗(のぞ)かせ、大小の岩を集めて積み上げ、大木を切って縄を掛け、落とし穴を掘って枯草で覆いこれを隠した。

(三)

「この間ここまで参りましたら、おびただしい軍馬の足跡を見つけました。」松永久秀室の妹婿、入江左衛門尉らの手勢五百余りがこの間の斥候に導かれてやってきた。
「ウーム、確かにこれはおびただしい数じゃ、敵に違いない。こんな所に潜んでいたか。」入江左衛門尉の顔は敵を見つけて紅潮した。
「どうせ、敵は百か百五十、数はしれておる。行くぞ、それ！」
「あっ、敵があの岩蔭に！」

「おいっ、鉄砲隊、あの岩蔭の敵を撃て！」
「パーン、パッパーン。」幾十の鉄砲が火を吹いた。後方の鉄砲隊の支援を受けて入江左衛門尉、政重親子を先頭に岩の峰に向かって突撃を敢行した。
「パーン、パッパーン。」
「殿、なんぼ撃っても敵は死にませぬ。」鉄砲隊長が入江左衛門尉へ息咳切って追い着き報告した。
「なに、死なぬ、そんな馬鹿な、敵のわなか、オイッ、わなだ気を付けろ。」
「パーン、パッパーン。」それまで峰の岩蔭に潜んでいた筒井勢から十余りの鉄砲が鳴った。
「敵じゃ、敵がいるぞ。」
「パーン、パッパーン。」一頻(ひとしき)り鉄砲の響きが続いた後、入江勢は峰を目指して大挙して登り始めた。
それを見て取った、峰の筒井兵は上から雨あられと大小の岩を投げ、太い丸太の縄を切って落とした。
「ウワァッ」入江の将兵はたまらず、松林の蔭へ入ろうとするが多勢の事と、混乱で忽(たちま)ち総崩れになった。
「引け、引けッ。」入江は鐘を打たせて引きにかかるが思うようには捗らない。漸く軍を下げ麓へ引いた。引くと使番を走らせ白土にいる松永勢の海老名助九郎へ応援を乞うた。
　直ぐ様同勢三百が馳せ来たり、再び、攻撃に転じた。正面攻撃を避け、鐘を打ち、太鼓を響かせ、こんどこそはとあたかも峰を包む様に陣を巻き、徐々に攻め登った。峰の半ばに達した時、再び鉄砲

を射かけ、弓矢を揃えて筒井勢を攻めた。
最早丸太も大小の石もその数はわずかしか残っていなかった。峰の上で、筒井勢は敵の為すがままにたえ、最後の時を待っている。
峰まで後半丁程に迫った頃、俄かに轟く筒井の攻め太鼓と鐘の音、いつ表われたか三老を筆頭に二百余りが、峰に取り巻く入江、海老名の中軍へ討ってかかる。
数はわずかながらも最後まで順慶につき随った筒井の精鋭、たちまちにして入江左衛門尉、政重親子の眼の前に迫った。下から攻めるのに比し、上からの攻撃は勢いがついている。
圧倒的に上からの方が有利であったのは云うまでもない。
「父上、あやうございます。」
「その方こそ、危ないぞ。」入江親子は互いに励まし合いつつ、先へ進もうとするが、上から傷ついた将兵が転がり落ちてくる。入江左衛門尉は自分が危なくなって、引き鐘を打たせたからたまらない。
又しても総崩れになった。
崩れ出すと怖気づいた入江、海老名軍は麓へ向かって敗走した。この機を逃がすな、筒井勢は尚も攻めてこれを追い落し、またしても溜飲を下げた。

（四）

扨て、十月十日に信長は岐阜へ帰り着いたものの、また、京へ取って返し三好衆らの摂津池田城を攻めた。三好長縁、政康は恐れて身を挺して四国の阿波へ落ちた。
継いで各城の、芥川、高槻、越水、飯盛、高屋の諸城を攻め摂津、河内の二州は完全に信長の支配下となった。
やがて信長は義昭の為に本圀寺を整備してこれに入れた。
三好長慶の死後、長慶の養子三好義継（長慶の弟十河一存の子）、三好三人衆それに松永久秀が後を継いだのだが、大和に勢力を張った松永久秀と三好三人衆の仲がこじれ三好義継は久秀に就いたまま同族間の争いは治らなかった。
両畠山は、永正元年の和議により河内一国は分領支配となって畠山政長の子尚順（高屋城）と同基家の子義英（誉田城）が南北を分けたが、そんな経緯から織田信長は入京すると北の河内若江城へは三好義継、南は畠山高政を任じたが、大和へは松永久秀を封じたので筒井一族は久秀の風下に立たされ東山の山岳地帯へ逃れたままであった。筒井家は危なくなれば何時もこの東山の連峰か西へ山を越し河内へ潜んだ。先の小競り合いは松永を叩いたものの差程松永はこたえてはいなかった。
東山の連峰にさえ入れば代々その地形に合わせた作戦で崖を利用したり、木々に仕掛けを施したり敵に対抗する手段は無限にあって少しも破られる事はなかった。

並松合戦

（一）

永禄十一年十月半ば、東山の峰々を中心として巣喰う筒井勢を松永久秀は海老名、入江等に命じて一千二百余りの軍勢を率い、夜陰に紛れて山裾から山上に向け筒井勢を打ち砕くべしと指示していた。
「敵は妙にここしばらく鳴りを潜めぼちぼち今宵辺りは奇襲があるやも知れませぬ。」乱波のもたらす情報に筒井の三老らは緊張を決して緩めはしなかった。
「覚られぬように今宵はかがり火を極端に少なくして平静を保ち、また多分この様子では霧があるものと思われますので古い手ながらそれを生かしましょう。」
「よーし、それは好都合、予ねての手筈通り、山下の登り道に急ぎ兵を隠せ。」何時かこの日があるものと地形を考え計を三老等は打ち合わせていた。ぐずぐずしてはいられない。森志摩守の子縫殿佐好高、島左近の子の清興など若い筒井三老の子等が三百余りを率いて大掛矢や荒縄、鋸、大なた、大鎌、山刀などを手にてに素早く下っていった。
　とも知らず、松永勢は大挙して押し寄せ、霧の中を赤々と松明を灯し勢い強く俄か作りの柵に沿って谷沢の道を大勢が駈け上った。柵は山肌の途中で谷に向かって無くなっているのに気づかず、後からあとから将兵が押し上げて続く。真っ逆さまに叫び声を残して谷へ二、三百余りが落ちていった。

落ちる所を踏み止まり軍勢の流れに逆らって一人が後方の将、入江左衛門尉盛重へ知らせに走りようやく、治まった。態勢を立て直した松永勢は直も怯まず山道を攻め登らんとする所へ筒井方が撃って出て、弓、鉄砲を雨、あられと射込み乱戦になった。再び、松永勢は二百余りが撃たれて今宵はこれまでと遂に退却を余儀無くされた。
　諸国のみだれはさて置き当国大和の領内は相変わらず松永久秀の軍勢が席捲を欲しいままにしていた。永禄十二年正月五日阿波から三好政康等三好衆が摂津に上り、これに呼応して松永久秀は信長を甘く見て反旗を翻し将軍義昭を本圀寺に囲んだ。これを聞いた信長は食事の最中であったが、直ぐ様箸を置いて京へ向かった。将軍護衛の将士はこれを良く防戦しその多くは討ち死にしたが、危急を知った畿内の織田の諸将は駈け集まり三好、松永勢を打ち破り信長上京で松永父子は再び降伏した。頑強な石山本願寺との戦の為に敢えて曲者の松永であっても大きな版図を描く信長にとっては願い出れば許さざるを得なかった。それからしばらくして同年三月上旬から久秀は信貴山城に諸将を集め、順慶の糞坊主共と口汚く罵りながらその行方を厳しく探していたが、大和東山辺りに潜み、時には、はいかいして松永の手の砦を相変わらず攻めては久秀を悩ましていた。
　おまけに少しでも松永の手が緩むと忽ち筒井勢が各所に蔓延り予てから腹立たしい限りと思っていた。
「あの餓鬼共は疥鮮の様な奴じゃ、痛くも何とも無いが五月蝿奴め！」順慶は福住にいながら松永勢が引き揚げた後の筒井城も一早く回復していた。

「近頃では筒井の餓鬼共、総勢、その数三千に届くと聞く！」

三月九日、久秀の子の久通が東大寺の僧兵千人に旗下の岡周防守国高、古市左近景治、菅田備前守豊春、鷹山主殿等三千余人が多聞山城に在城し、信貴山城には、飯盛山城から本拠を移した久秀が入江左衛門尉盛重、同大五郎政重、森兵助正友、石成小次郎春之、海老名兵衛尉友清等七千余りを動員して、法隆寺まで出陣した。龍野、龍田の社人を随え法隆寺周辺の土豪五百余りを加えて街道を固め兵を別けて一つは大和小和泉に巣喰う筒井勢を攻めさせた。

これを知った筒井順慶は福住城を下り、大和平野へ出て、筒井から一路向かい撃つべく挙族一致して三千余りを従え法隆寺への街道を真しぐらに軍を進めた。

（二）

法隆寺の境内に松永勢は精兵千五百に土豪五百を加え、声を潜めてこれを隠した。順慶が寺院に無闇矢鱈に踏込まないことを知っている。松永勢先方隊は岡周防守が指揮し、鷹山主殿、古市左近ら一千余人が就き従い、後続には松永久通が大将となり、海老名らを従え、松永久秀らは入江大五郎、石成小次郎、細川六郎等二千余りを引き連れ出陣した。

「小和泉城より火急の報せ」小和泉城では、富雄川を挟み奮戦中、至急ご援軍を乞うと云う事ではあったが、順慶は筒井の城に飯田三郎次郎直宗にたった五百を授けて留守居役とした外には松永攻めに絞って残りの全軍を率いていた。とは言え筒井と小和泉は眼と鼻の先、放っては置けぬ。筒井の三老

らは越智玄蕃頭、小田切宮内等と共に小和泉城救援を順慶に迫り、順慶は島左近に一千を与えて小和泉城へ向かわせた。すぐさま島左近は軍を返して小和泉へ向かった。順慶は森志摩守好之、松倉右近、清須美右兵衛尉盛時等を率いて額田部、窪田を経て法隆寺の南へ迫って松永の中核を攻めた。すでに松永から戻っていた楢原右衛門が一族を率いて参陣し松永勢を攻めに攻めた。猛将島左近は小和泉の危機を救い、素早く敵を蹴散らせ直も追い、法隆寺の筒井軍に合流した。

松永勢はたまらず各所で打ち破られ混乱した。やがて陽がかげり宵闇が迫りこの日は双方引いた。

翌永禄十二年三月十一日、龍田の北に軍を纒めた松永と並松まで寄せた筒井軍との壮烈な戦いが早朝から始まった。

島左近、松倉右近が七百余りを率いて敵の岡周防守国高、古市、鷹山等の軍と矢弾を交わし双方多数の犠牲者を出しながら切り結んで優劣付け難く、しばらくは、こう着状態であった。そこへ若冠二十三歳の楢原右衛門尉が名を連銭と云う駒に打ち跨り大薙刀をかいこみ両軍の間に割って入り、向かうところ敵なく、松永勢は浮き足だった。

これを見た松永右衛門佐久通は敵は小勢何するものぞ、と海老名等を指揮して楢原隊の脇を突いた。

「楢原右衛門尉、松永右衛門佐久通殿に推参！」あまりの形相に呑まれた右衛門佐久通はおののきに満ち、すぐさまこれはかなわじと、引き鐘を打たせた。楢原右衛門尉は久通に気を取られている間に後ろは崩されここまで久通に迫りながらみすみす逃げる敵を追えず、と地だんだを踏みつつ、自軍をまとめて新たな敵の海老名へ襲いかかった。

海老名も崩れ久通の後を追い松永勢もろしと筒井側は勢いづいた。

順慶の本陣から手に取るようにその活躍振りが眼に入った。昨日にもまして戦は激しかった。松永右衛門佐久通は今日こそはと攻め寄せる島左近、松倉右近に挑みかかり勢を進めた。島、松倉の両名は並の将ではない。知らぬ久通ではなかったが、筒井勢の中軍へ深く入りすぎた。この機を逃がすなとばかり島、松倉の両将が久通に迫った。槍をくり出し、二、三合併せては見たものの元より両将に叶うはずはない。

忽ち、攻め捲(まく)られ危うくなった。そうはさせじと松永勢が久通の側に駈け集り島、松倉の両将を阻む。尚も激しく攻め寄る両将を背に久通は馬首を返し、馬腹を思い切り蹴って逃げ出した。逃さじと松倉右近の槍が迫って、久通の兜を叩きつけた。はずみで久通は一瞬にしてどどっと落馬した。数名の松永の雑兵が、すぐさま駈けより御大将の大事はこの時と、死にもの狂いに右近の槍を払い除けそこにいた松永の石成小次郎、海老名介九郎らの諸将も一斉に右近目掛けてそれぞれ槍、薙刀、太刀を振るって防戦した。この間に雑兵に担ぎ上げられた久通は再び愛馬の背に乗せられるとしがみついて後方の自軍を目指して逃げ出した。石成小次郎、海老名介九郎を島左近が蹴散らせ再び久通の後を追う。その後に松倉右近が続く。久通は一気に信貴山下まで逃げ帰った。

不甲斐無き、我が子に松永久秀は労いの言葉も無くただ、じっと戦いの、成り行きを見守っていた。

島左近、松倉右近はなおも迫った。

まるで汐の引くように松永勢は総軍が鮮やかに引き始めた。

「右近殿！　敵に策があるぞ、気を付けようぞ」島左近は駒を寄せ、右近も即座に覚っていた。

両騎の側を楢原右衛門尉が二、三百を率いて追い抜いていった。

右衛門尉の追撃に細川六郎の旗下百余りが撃たれ、更に迫り呆気無く併せて二百余りを瞬く間に討った。

筒井順慶の本陣は森志摩守好之、越智玄蕃頭、小田切宮内等が守っていたが慈明寺左門、清須美等は島左近、松倉右近らと共に追撃に出て手薄になっていた。法隆寺から西一里付近を筒井の勢が、猶も信貴山下に向けて追撃していた頃、その間隙を突いて法隆寺内に潜んでいた、入江左衛門、森兵助、それに土豪ら二千が、筒井本陣手薄と見て門を開いて繰り出した。

忽ち響く鯨浪の声、前衛二百五十が壊滅。

「お館様、御免ご武運を！」これを見て小田切や小石靖久等が槍をひっさげ三百余を率いて迎え討つ、

だが、多勢に無勢乱戦の中に敵に囲まれ掻き消される様に討たれていった。

「お館様、最早これまで某が先方の露払いを承ります。御免ご武運を！」続いて越智玄蕃頭利基が馬に打ち跨がりその場からの退散を迫る。

「この度の戦いは、我れらに不利でございます。お館様ご用意を。」順慶の側にいた森志摩守好之は退却を勧めた。

「皆を見捨てて、我れらが逃げるのか。」玄蕃頭の後ろ姿を見送りながら立ち上がった順慶は無念の

涙を零し太刀の柄を握りしめてサァッ、と抜き払い者ども来たれと身構えた。志摩守好之は無理に太刀をもぎとる様にして順慶から受け取ると素早く鞘に納め小者の牽いてきた馬に乗せて間もなく、入江左衛門、森兵助の兵共が目前に迫った。順慶は再び太刀の柄に手を掛け、雑兵なにするものぞと、身構えた。そうこうする中に敵兵が迫ってくる。

「志州、わしもやるぞ、玄蕃頭や靖久を見殺しにはできぬ。」

「なにを仰せられます。御大将がその様な事を、皆に武運があれば大丈夫でございます。ここは某が。」

森志摩守は槍を振るって直ぐ様群がる敵を薙ぎ倒し、瞬く間に五、六人を突き差しなお息急き切って駈けてくる雑兵を串刺しにした。

「これまで、さあ、お館様！　今のうちに。」志摩守は自ら馬の轡を取ると順慶を乗せて筒井城へ向かって駈けだした。両軍のしれつな合戦には構わず馬印や、梅鉢の紋所がその後を追った。

十数名の兵が就き従っているだけであった。

俄かに馬蹄の響き、振り返ると主人の後を何時の間にか追いかけてきた志州の駒であった。愛馬を待ってこれに乗り、主従は駈けた。一里程走った頃、越智玄蕃頭が三騎とともに追いついてきた。無事がなによりと喜んだが、傷だらけであった。

島左近らは松永勢に囲まれ苦戦し、松倉右近の消息は不明であった。

遙か彼方から土ほこりが上がってこちらに向かって必至で駈けてくる一隊が有る。

志州の手の大安寺孫三郎等二十余名であった。飯田三郎次郎直宗及び同甚次郎基次らは筒井城であくまで死守としていたが、既に城外の戦いで松永勢に破られ、落城寸前に再起を期すため血路を開いて森伝助好久の勧めを容れて二隊に別れて落ちてきたと云う事であった。

捨石

(一)

筒井順慶は大和の東山中、福住城に戻りここは移動した筒井家の参謀本部であった。

筒井の同族福須美慶次等が地の利を生かして旗下に敵の動きを調べさせ、大和各地に潜む筒井の将兵に敵の動きと密命を密かに伝えていた。親筒井家の絶対安全な村々に潜む将兵は何時もの事ながら百姓に姿を変え密命が来るまで適当に鋤鍬を取って百姓仕事に精をだし百姓を手伝った。敵が余程綿密に調べ挙げないと滅多に身分の露見する心配は無かった。

「お召しにより、森伝助好久只今参りまして御座居まする。」順慶を主座に三老等が緊張した面持ちで控えていた。

「念のう早かったな」

「ハッ」

「呼び就けたのは外でもない。じいっ！　詳（つま）びらかに申し聞かせ。好久が嫌なら無理にはさせるでな

いぞ」
　順慶は静かに云った。
「ハハッ」向き直って志摩守好之は経緯を語り始めた。
「これ、好久、これから申す事をよーく聞くのだぞ。嫌ならそれは今のお言葉通りじゃ」
「ハイ」
「結論から先に申す……驚くでないぞ。お主は之切りにて牢人となり、筒井家を去る。もう之より後はわしら親族とは何の関係も無い一介の牢人に成らねばならぬ……」志摩守好之は最初にきつい事を云って好久の説得にかかった。そうでも云わなければ好久の腹が決らないと考えたからであった。好久は思わず声を発した。
「エッ！」
「最後まできけ、我等筒井親族縁族旗下一切の為に、ご主命によりお主が名誉な事に選りぬかれたのだ。」
「…………」好久は何が何んだか判らなかった。
「これより牢人の上、折りを見て松永の家中となり、我が筒井家へ反間の士となるのだ。」つまりは今で云うスパイであった。
「…………」
「演者は、見るものをして感動させねば相努まらぬ。中々難しいが、わしの口から申すのも妙な具合

じゃが、幸いそなたは何事によらず優れておる。歳も若くは無く、さりとて年寄りでもない。若さ故の失敗の心配も要らぬ。槍を持たせば筒井家随一、武勇は人並み外れ、戦いの駈引きも巧みで度胸は人一倍じゃ、更に和顔と才智に長け人には無い真心があり行き届く事限りなし。また機智に富み今まで全てを器用にこなして参った。どうじゃ、この度のお役、並みの事では済まされぬし、外に人は無い。喜んで引き受けては呉れぬか。」
「兄者、ご主命とあらば何事も承知致しまするが、いや、それ程のお大役某には矢張無理かも知れませぬ。とても勝手の知らぬ松永家で、万一失敗致しましたら何と致しましょう。伝助の馬鹿がでは取り返しがつきませぬ。」
「無理は承知で頼むのじゃ」順慶等は言葉の遣り取りを黙然と眼を閉じて聞いていた。
「他にどなた様かお人が御座居ませぬのか。どうしても？」
「無い、外に誰がある。全ては承知で頼むのじゃ。」
「たって、とあらば何なりとお受け致しまするが。」
　心は決して喜んで受けたのではなかった。日頃は負け戦の中にあっても忠節一途にこれまで尽くして来た筒井家であった。今更自分を捨て妻子を捨てて例え松永に旨く取り入れられてもそれから後、事が露見してしまえば元も子もない。
　急な呼び出しは容易ならぬ事とは承知でここへはきたが、ただの戦の事とは訳が違っていた。
「おゝ、やって呉れるか、このお役。」

「ハヽ、この身に変えましても、このお家の為。」
「よう、申してくれた。一心に頼みおく、頼む。この通り。」
三老一同は膝を乗り出し伝助の手を両の手でしっかりと握りしめ、頬に涙して伝助承知に泣いた。
伝助好久は志摩守好之の父縫殿佐好順の弟で森掃部介好頼の二男であった。つまり伝助は森志摩守とは従兄弟である。永禄十年十月十日東大寺での戦いで負傷し掃部介好頼は打ち続く戦いの傷が元でこの時には既に亡くなっている。好之は一族の長でもあり好久を弟の様にし、好久も兄の如くに慕っていた。

（二）

「よう聞けや、今の大和は昔の面影も勢いも無い。お館様も途方に暮れられ、我等三人相謀り、このお役お主、伝助でなくてはと決めておった。」志州が云った。
「始めこの企を、そなたにさせる事に就いてはお館様は反対であったがしかし、今にして何とかしなければこの筒井家は滅ぶ。如何に奇策とは云えこの企を殊にお主にさせる事はならぬ、と仰せられたのを、我等一族の間の者で外に誰が出来る。お主しかなかった。」
「それ程までにこの私を、勿体無いお言葉でございまする。必ず、成し遂げまする。」
「よう、云うてくれた。この通り、この通り礼をもうす。済まぬ。相済まぬ。」
「ハイッ」

「今は皆の消息さえ定かではないが、お主の家族や縁族家臣下僕下女に至るまで一切はこの好之が面倒を見るぞ。心おきなく相努めてくれ。」
「頼むぞ、伝助。」順慶もその伝助の苦衷を慮んばかり、初めて口を開き心から頼んだ。
「ハイッ」
「今宵は何もないが別離の杯を取ろうぞ。さあ、盃をとれ。」主従は盃を交わし別れを惜しみその夜の宴は何時までも尽きる事が無かった。
筒井家を去るにあたり表向きには先年並松（なんまつ）の戦いで筒井城留守代の飯田三郎直宗やその次男甚次郎基次等に、伝助が卑怯にも敵を前にして一戦も戦かわずに筒井城退城を唆した責（せめ）を受けた事にした。やがて、当分の路用の銭と砂金等を袋にいれ数日の中に福住を森伝助藤原好久は世を背くとならば心は墨にこそと、何処へとも無く去って行った。

模索

（一）

しばしの落着きを待って宇陀から越智玄蕃頭らは高取へ帰って行った。ここには明山右近直国が四、五百の兵等を有し筒井直属の千五百の将兵を併せて二千がおり、暫らくは安定していた。順慶は敵の探索を逃れ福住と宇陀の山間部を時折は移動して敵勢を翻弄させ時には十市城付近まで出ては松永勢

を攻めた。松永久秀は並松の戦いで筒井軍を壊滅させたが順慶を始め一族山田太郎左衛門、三老の外、主だった越智、井戸、清須美、福住、飯田の兄弟、楢原、芳野又左衛門、中坊左近はほぼ皆無事であった。越智玄蕃頭らが高取に戻ると直ぐに松永勢石成永種等八百が囲みに来たが知らせを聞いても高取まで順慶は救援を出せなかった。みすみす手をこまねいてどうか無事であって欲しいものと高取の方に向いては朝夕神仏に手を併せ祈っていた。この様に一生懸命に祈ってもどうにもならないのではと、ふと、心に疑いの思いがよぎったがいやいや、さはあらじ、宇陀の大木の森の上に広がる金銀を散りばめたような夜の大空に目を向ければあの大星雲間に光々と輝く月もそして無数の星達でさえも、また日中の太陽も大宇宙の一点に在り、小は地上の蟻、蚊の類。山河に育つ松柏も生あるすべての一切合切が勝手に出来ぬ。雀一匹その大神のお許し無くしては地上に落ちて死ぬことさえ出来ぬと云う。はたまた天上の大日如来の輝きも大宇宙の中心を司る天御中主の大神をいたずらに怨み裁くことが常に生死もおのれのままならぬ無力な我ら如きに何が出来ると順慶は思い返し一時でも不遜な心をいだいたおのれを静かに反省しその天御中主大神の御徳に今ただ無事であるだけで有り難いと思うべきだと深く感謝した。高取城は無事であったが貝吹城は敗れ子島、米田ら守将が討死した。移りゆく季節の色さえ眼に入らぬこの様な状態の中で何か名案は無いものかと順慶は取り巻く諸将に手段を重ねて求めていた。

「只今甲賀から戻りました」永禄十二年危急存亡の秋、森志摩守好之、松倉弥七郎の二人は順慶の前に出た。甲賀の飯道山の行者らに会いましたら矢張近隣は乱れて伊勢の国司北畠具教の云うことを

誰も聞かず伊勢長嶋を始め伊賀甲賀の両衆は織田殿には組さずと一揆を以って戦っており織田信長殿が七万余りを率いて岐阜を出ました。これに掛かりきりになれば大和の方は手薄になりましょう。と云う事であった。

「成程、そう云えば貝吹城の松永勢も早々と引き上げました。」

永禄十二年十一月順慶は松倉弥七郎を名張へ使いに出した。大和から名張へは急げば半日の行程である。同二十二日丈六寺に於いて名張の豪族らの首脳と会い大和でも時機を併せ暴れまくる旨伝えさせ序でに心利いた忍びの者を双方の連絡を兼ねる為、数名借り受け大和で働いて貰いたいと口頭で頼む事を忘れなかった。順慶は総力を挙げて松永金吾の十市城を攻めまくり十二月遂にこれを落として入り久々の勝利を味わった。更に辰市城を落とし順慶の姉の主人井戸国秋、同弟良弘に守らせた。元亀と年号が変わるその二月二十二日松永金吾らが辰市城をせめたが頑として落ちなかった。だが十市城へは松永久秀自ら五千余りを率いて押し寄せ多勢に無勢怪我の少ない間にと順慶旗下二千三百は捨てて再び宇陀まで逃れ明山城にありそれが良策でもあった。六月四日業を煮やした久秀は一隊を出して郡山衆を殺し散郷を焼いて民を苛めた。

しばらく英気を養った順慶は秋七月二十七日三千余人を連れて出陣し十市城をまたしても攻めた。忍びのもたらす情報は正確であった。たちまち、そこ、ここに潜んでいた筒井の将兵が結集し漸く筒井の城を回復し武威を張った。しかし執こく松永勢は辰市城、片岡城など筒井衆をひっきりなしに攻め続けた。救援の手を出せぬ順慶の節歯扼腕とはこの事であった。悪寒があるかと思えば吐いた。静

まると全身に発疹していらいらし馬に乗る事さえ辛い日があり再び高熱を出し頭はもうろうとして順慶の出陣は無理であった。そうこうする内に片岡の城は落城してしまった。

　真夜中に楠木の大木にふくろうのなく声を聞きながら筒井城の一室で一族老臣らが額を集めて何やら真剣に話込んでいる。

「…………」

「さすれば、お館様の影は外には辰市城の井戸国秋殿へ一人と……奈良北小路の飯田三郎頼直殿の弟甚次郎基次殿が一人……」

「何れにしても国内を一巡りするのに五、六人のお館様の影武者をこしらえねば、それでと、供廻り衆をいれて総勢二十騎くらいで……」

「…………」

「しっ、誰だ！」

「ハッ、六兵衛でございます。志摩守様はこちらに居られまするか。」六兵衛は甲賀の忍びであった。

「ハッ」

「おゝ、如何にもおるぞ、御苦労これへ入れ身内ばかりだ。」

「そう緊張せずとも良い、して何か判ったのか。」

「はい早速ながらまずい事に相成りました。只今国許からの知らせによれば松永様のご家来衆に伊賀の衆が混じりました。元より織田殿へご謀反の由を承り止む無く加わったとの事でございますが。」

「ウーム」一同は愈々これからの時となってと顔を曇らせた。

「致し方が無い」事実仕方の無い事であった。

「…………」

「六兵衛、お主等今直ぐなら何人揃う。」志摩守好之は六兵衛に尋ねた。

「はい、波蔵、右衛門それに忠助と某（それがし）めでございます。」

「うーむ、四人か。」

「はい何か御用で」

「皆強者（つわもの）ぞろいであったな」

「はい、少々は腕がたちます。」

「馬には」

「勿論巧でございます」

「よし、ここに書状それぞれにお館様の頭巾と衣装が四組ある。明朝四人に渡してそれぞれ宛名の城へ向かってくれ。」

「たやすい事、で先様へは何とでございます？」

「いゃ、城門内でこれを渡すだけで良いのだ。一刻余、ばかりその城にいて戻ってくれ、志州がそう申しておった、と。」

「それだけでございまするか？」

「それだけだ。何事もなければ急がずともゆっくり行ってくれればよい。」
「承知致しました」六兵衛は下った。忍びの一人忠助は素知らぬ顔をして黙って書状の封を開いて見たが中身は真っ白で何も書かれていなかった。

(二)

翌朝六兵衛らが二、三騎の供を連れ一組となって四組が高取城、石上の砦、柳本城、十市城へ向かって城を出た頃、同じ順慶の衣装を着けた島左近等一行二十名が筒井から疾駆し辰市城から奈良の北小路城へ廻り飯田兄弟に会った。飯田三郎頼直はそうでもなかったが同じ兄弟でありながら弟甚次郎基次は頭を丸めなくとも何と無く順慶に似ていた。
「今日よりは御舎弟甚次郎基次殿には、お館様の影武者をお務め願います。」島左近は委細を述べた。今お館様は大和中を駆け巡られてここにお着きでござる。
「勿体なくもご承知致しました」甚次郎基次はすぐに頭を丸められ剃り後も青々しく立派なお館様が出来上がった。島左近は十名を残して辰市城へ戻った。途中砂煙りを揚げて駈けぬける島左近らの一行を余所目に道端に幼女がちょこちょこと出てくると恐れ気もなくその家の軒下で素知らぬ顔をして事もなげにこちらにお尻を向けもどかしそうにしながら両方の脚を上げ下げしくるりとから上げるとしゃがんで用をたしたがその姿は余りにもあどけなく荒くれ供の眼にも可愛いく映った。
「あの者らを松永の犠牲にしてはならぬ」荒くれ共も一様にそう思わずにはいられなかった。主の

思いが配下にも染み込んでいた。
再々辰市城は松永勢の囲む所であった。辰市城は東に菩提川と西に東堀川があり旧平城京条坊図によれば東二条坊大路と八条大路の交差する地点にあった。松永方は筒井順慶が大和のあちこちで殆ど同時に現われたと云う情報にそれでなくとも追うと運よく逃れる順慶の為に右往左往させられているのに更に混乱していた。
扨て、法体に身を包み頭を丸められた甚次郎基次は以後城内奥深く外に出ることもなく頭巾を戴き毎日することがなくて上段の間に座し書見や茶をしてみてもすぐに飽いてしまい毎日かしずく順慶直下の側近が鄭重に甚次郎基次を扱い兄の飯田三郎頼直も同様に手を仕えて膝行し、物を言った。
これ程気分のよいものはない。酒の勢いで、
「頼直！　酒の相手を致せ。」今までは小さい時から武勇学問その他詩歌に茶の湯にと総て一歩を兄には譲ってきたのに今はお館様である。それを良いことに、
「遠慮致すな、これ頼直。」と云いたい放題段々横暴になってきた。やがて酒色が過ぎご乱行が続いた。片端から見境無く女中衆に手を付け始めた。宿下りをさせる分けにはゆかない。頼直は苦々しく思った。
「頼直！　臣の分際で何を止める。控えよ。」大抵秘密は内からもれるので極限られたものしか偽順慶である事は知らされてはいない。基次も要領をよく心得ていて大声を出す。大声を出されると頼直もそれ以上の事は出来なかった。それでも酒が醒ると基次は謹んで頼直や側近にはもう二度と致しま

せぬ故どうぞお許しをと小声で詫びた。本当に基次は心からそう思っていた。
「判ればよい、お主はただの身分ではないのだ。」頼直は日頃から仲の良い弟を簡単に許した。止むをえぬ。好きな事も弟は出来ぬのだ。そう思って何事も許してやった。だが二、三日もすると又しても深酒が禍し同じ事を繰り返した。酔眼もうろうとして奥殿のあちこちをふらふら歩きたまたま出会(でくわ)したのが上を預かる若く美しい女性(にょしょう)であると日頃鍛えた剛の腕で、ばたつきもさせず軽々と抱きかかえて寝屋に連れ込むので始末に悪い。側近が眼聡く見つけて、
「お館様、およしなされまし、ご無体な。」とすがるが振り切って隠れてしまう。
「頼直殿を」と側近達が慌てて頼直を探してもすぐには見つからず誰にも止めようが無かった。戻ってきた頼直が醒めた基次を捕まえてきつく、たしなめるとまたしても何時もの基次に戻り以後は絶対に致しませぬ。と平謝りに謝った。
「基次、二言はないぞ。」
「はい、二言はございませぬ。」幼児期から訓練を積み癖に成ってないとじっと毎日長時間座り続ける事等格式のある総領でないと出来ない。
　一時は治まったかに見えて一同は安心していたが、うっくつした基次の心は何時の間にかまた寝屋にまで酒を持込み宿直(とのい)を遠ざけその間に女性を引き込み潤いを求めた。
「基次、二言はない筈ではなかったか。」
「兄者、これにてお暇を頂戴いたしまする。」基次の決心は堅かった。大薙刀一つに大小を束さみ大

鎧櫃を背負うと何処へとも無く去っていった。兄は可愛いい弟を見放さねばならず弟は生じっか順慶の身代わりに成ったばかりに酒色におぼれ過ちを犯しそれでなくとも勇将の少なくなった筒井一族には打ち続く戦を前に懸け替えのない豪傑の一人を失いまた二人の兄弟には真に悲しい男の潔(いさぎよ)さが哀れであった。
　一方辰市城へ入った島左近は井戸国秋、良弘兄弟と共に松永に備えて着々と防備を固め城の周囲の田圃の各所に杭を打ち、また幾筋ものしゅろ縄を埋込み城壁の外周に新たに仮設の壁を巡らし百挺の鉄砲を揃え敵襲を待った。密かにこの事を知った森伝助好久は堺で来たるべき機会を窺っていた。

牢人二人

(一)

　ここ堺は豪商が多く、またその魚屋田中与兵衛の倅、利休を師と仰ぐ者達が数奇を好み多くの茶人が集う。利休は幼少の頃から茶をたしなみ、この頃には一門を成していた。
　野陣用の塩干乾物を商う五十がらみの讃岐屋宇兵衛は中秋も半ばの昼下がり折しも茶室で三十半ばすぎの侍を前に点前を教えている真最中である。元々讃岐屋は屋号が示す通り四国三好党の一族十河の保護下にあってその後は松永の軍資金を賄ったりして商売人としての地位を築いていた。当世流行りの茶の湯は各大名衆も戦いの合間の寸刻を惜しんで楽しみ、この立派な門構えの大きな邸宅へは静寂

の中にも凄味さえ漂わせる殺那の茶を求め心得のある武士達が真剣勝負に似た迫力のある茶を勤しんだのであった。ここへは茶の湯を志す大名の家来衆も時々訪れる。

この侍も習いかけてもう一、二年位には、なるのか幾分身のこなしが仕草に現われていた。

「左様、ふくさを持つ手はもう少し上の方が品よく映ります。」

「ハイッ」侍は緊張した面持ちで丹念に教えられるままに両の手を心持ち上げた。

「ウーム、もう少しでございましょうかな。」まだ足りぬと云う処であった。

「ハイッ」侍の額には汗が吹き出していた。

「大分よくなりました」師匠の主は遠慮会釈なく、ずけずけ指摘する。

「…………」

「そのお茶碗は高麗国のもの……両の手の扱いで、唐や、高麗のものは基より鄭重な扱いでなければなりませぬが……、いえいえ、それは右の手で、まあまあ今日はそのくらいで。」

「有難うございました」侍は汗でびっしょりと背中まで濡らしていた。

「処で、明後日はお午のお茶事でございます。あなたも兄弟子の起ち居振舞いをお水屋の辺りに控えて見ておきなされ時分斎にはあなたの点心もご用意致しておきましょう。」と主人は誘った。

「有難うございます」

「お招きしたお客様のお三人はいずれも大和の松永様のご家来衆でロレンソ様から洗礼を受けられた三木様等でございます。」主人はその時ふっと秋風にゆれた床の桔梗と薄紅の河原撫子の小壷に眼が

行き気づかなかったが一瞬侍は松永と聞いてぎくっとした。茶の習い事についてはその都度師匠は知っている限りの事を総て教えてくれる白髪混じりの親切な人である。侍は森伝助好久であった。愈々仕官する好機到来の機会につながるか胸はときめいていた。

表通りの賑わいを余所に茶室に続く露地には木の葉一枚落ちておらず水が打たれ、つくばえの水は透き通りやがて違わず刻限に訪れる客を静かに待っていた。

(二)

午茶事は巳の下刻からであった。仏も他人も、それに我もと云うのがその道の茶事であった。亭主と主客の挨拶に始まり酒肴が出され伝助好久も何度となく云われるままに狭い茶室を往復し手伝った。それとなく客の顔を見たが厳い容貌に似ず全て作法を心得ており心の思いとは別に茶という志しを同じくする松永の臣三木判太夫を憎くは思えなかった。やがて主菓子が出て中立で銅羅を合図に席入りし、濃い茶から後炭手前をすませ薄茶へと進み、主客双方和やかな中にその日は終った。

「本日は折角のお招き辱く存知ました。有難うございました。」

「いやお招き致しましても大した事はできませず、ご満足頂けました事やら。」

「常々お客人のもてなしは斯様でなければと存知ますする。本日は有難うございました。重ねて御礼申し上げますする。所で世話を頂いたあの御人はどなたでございましたか。」

「あのご牢人は森様と申して、あいや、ではお引きあわせ致しましょう。森様！　時々はご一緒致さ

ねばなりませぬ。こちらへ参られませ茶の同人同志。」主人は教えている時は森殿と呼び、終ると森様と呼んだ。

「はい、何かご用でございましたか。」

「いや、外でもない御紹介しておくのを忘れておりました。こちらは今を時めく松永様のご家来衆で上座の方から三木判太夫様、津田善兵衛様それに極楽寺のご住寺様で名を施明さまと申され、また、こなたはおけいこを始められて三日を開けずのけいこで二年になりますか中々筋の良いご修得でございまして将来楽しみなお方です。元は大和のご牢人森隼人佐（はやとのすけ）様でございます。皆様にはどうぞ機会を見てご指導をなされて上げて下さりませ。私からもお願い申しまする。」

「どうぞ宜しくお願い申し上げまする」

「いやいや我れらの方こそ何分よしなに、しかし茶の湯とは難かしゅうございまするな。所で我が松永家にも森姓は兵助様がござるが大和のご牢人とか筒井家にも森のご一族がござるのでは。」

「はい、おっしゃる通りでございます。」伝助は牢人をした時から森隼人佐と称していた。

「ぶしつけなお尋ねながら何故のご牢人でございましたか」如何せん予てからの敵同志、気になるのは当り前であった。

「永話になりますが辱かしながら皆様もよくご存知のあの並松の戦いの折り松永様の余りの攻勢に命有っての筒井家、ここは一度城を捨ててと守将飯田殿に筒井の城を捨てる事をお勧めした某は張本人、おとがめにより主君順慶様から腰抜けめと、きつくお叱かりを受けて追放と相成り牢人の身となりま

した。私に致しますれば命さえあれば何時かは再起出来るものと忠義の積もりでおりましただけに情け無いやら悔しいやらと女々しく暮らしており　一層の事世を捨て　僧侶にでもなれば　気楽と　心得まして」隼人佐はしみじみと語った。

「おう気の毒に左様なご事情がございましたか」

「私も森様に松永様の御家来衆には伝てがござれば弾正様へ仕官されては如何かとお奨めした事もございましたが」人の良い主人は脇から口を挟んだ。

「それは某らが何ならお取次ぎしても良かろうかと」

「いや、永年居りました譜代の筒井家でさえも物の役には立たずとの仰せ却って皆様の足手纏いと成り、ご迷惑をお掛けいたしましょう。某は左様心得……」

「いやいや、ここでお会いしたのもご縁、一度某がご推挙致しましょう。ここ一両日の間お待ち下されい朗報をお届致しましょう程に。」松永とて兵は足りぬし随分寛容な所も久秀にはあった。

「森様そうなされませ。何時までもご牢人では行方が案じられます。どうぞ三木様そうして上げて下され。」

「有難う存知まする」顔には顕さなかったがもとより否はないし内心ではほくそ微笑んでいた。

「ではいずれまた」三木判太夫らは帰っていった。しばらく日を置いて三木判太夫から遣いが来て河内飯盛城へ来いとの事であった。三好義継に用があって飯盛城へ松永久秀が来ていた。判太夫は元々播磨の赤松氏であった。

「ハハッ、この間申し上げておりました某がしの茶の師匠讃岐屋宇兵衛の同門で元は筒井家の牢人森隼人佐。」と三木判太夫は隼人佐を後ろに控えさせ松永久秀の前に平伏していた。

「うーむ、筒井の牢人か人相がよいな茶をたしなむか？　面白い森隼人佐、牢人をしておったにしては、余りやつれてはおらぬな。取敢えず五百石を与える。側にいてみよ。」三木判太夫は自分の下で働かせてみようと考えていたのに直々にとは意外であった。

(三)

数日をおいてここ信貴山城の一室。

「判太夫、今日は茶のけいこと致そうか。」

「ハハッ、辱く。」三木判太夫は緊張しきっている。部屋の片隅に俄か作りの仕切を設け屏風を囲って茶の湯となった。

「これを知っておろうか」松永久秀自慢の名器平ぐもの釜であった。形からして平ぐもかも知れぬと思ったが間違ってはと思い隼人佐は

「ハハッ、恐れながら承りますれば幾つも名器をご所持の由、某にはよく存知おりませぬが。」と答えた。

「知らぬか、判太夫、その方は。」

「ハハッ、某も。」

「これが、平ぐもじゃ、家来も大事じゃが茶は一時ものを忘れさせがさつなわしでも茶は一生懸命になるな。」

「ハハッ、某共も一生懸命になりまする。」

「これ、そのハハッ、ハハッを辞めろ、三好修理の家臣であった頃にはわしもハハッ、と申しておったが、折角の茶が昔を思い出させてまずうなる。」

「ハハッ」緊張を解す積もりで久秀は判太夫へ云ったが、判太夫には返事のしようがなかった。

「まだハハッ、云うておる。お主も一城の主じゃ、茶には身分はない。日頃は戦の中にあって命懸けせめて茶の時にはもっと鷹揚にして亭主と客の立場じゃ、讃岐屋に何を習っている。」

「ハハッ」

その日から森隼人佐好久は久秀の側に侍った。趣味は人と人の差を殊の外近づけ日毎に親しさが増していった。

「辰市城を攻めたいが」久秀は側の隼人佐に聞いた。

「辰市城には今多分島左近がおり策謀を巡らし待ち構えておりまする」

「辰市城にか、あいつは手強い奴、お前は行かずとも良いが誰かに攻めさせせねばならぬ。」

「ご承知のはずでございましょうが相当ご要心遊ばしませ」

「なに程の事もない。手強いとて多寡が知れておる。」

「はい」

「まあ見ておれ、あの城は度々攻めており様子は全て承知致しておるわい。」
元亀二年八月織田信長に叛旗を翻がえした松永久秀久通父子は入江盛重同大五郎父子、森兵助正友、海老名兵衛尉友清、石成小次郎春之、古市左近景治、菅田備前守豊春等五千余と摂津和泉の将兵等三千を率いて織田軍の応援無く無理に辰市城を遮二無二、勢に任せて攻めたてた。小城の周囲を取り囲む松永勢は弓鉄砲を雨あられと撃ちまくり勢込んで予て島左近が設（しつら）えた仮設のやにこい外壁に濠を渡って取り付いた。壁はバリバリと音を立てて崩れ出し二、三百の松永勢は一瞬にして濠へ投げ出され、その機を逃さず辰市城の百挺の鉄砲が一斉に火を吐いた。

(四)

それでも功をあせる松永勢は猶も懲りずに攻め寄せる。頃合いはよし、島左近が合図をすれば井戸兄弟は下知して狼煙（のろし）に火を付けさせた。
予ねての手筈通り辰市城の東一里に待機していた筒井順慶の旗下四千五百余りの将兵、慈明寺順国、山田順清、福須美順弘、森好之、清須美盛時等采配一振りたちまちにして辰市城に群がる松永勢に撃って掛れば城内外から呼応した筒井軍はこの一戦にここが先途ともみにもんだ。先陣森志摩守、松倉右近勝重に続いて小田切春次、小和泉秀元、越智玄蕃、水間春澄、鯨監物、佐味兵庫頭、別所春長等一千余りに加えて多武峰（とうのみね）の僧侶一千五百が城の東側から攻めつけた。
ここ筒井の本陣順慶はまんじりともせず股を開いて仁王立のままなりゆきを見守る。

「敵の鉄砲が止みましたぞ！」
「よし、志州は正面を、右近は右へ真しぐらにつけ、一気に騎馬で打破れ！」
「あゝ、松永の騎兵三百余が出ます！」
「小田切宮内、井戸十郎各二百を率いて正面志州につづいて援護しろ！」
「海老名、石成の隊が杜のかげ西から迫ります！」
「縫殿佐！　弥七郎！　鉄砲隊の指揮はわしにまかせろ、おくれるな！　海老名、石成にあたれ！控の鉄砲隊前へ！　ぬかるな、もっと引寄せてから射て！」
「…………」
「弓組前へ！」順慶は甲鎧燦然声をからして本陣から全軍を鼓舞し続ける。
思わぬ筒井の伏兵に慌てふためく松永勢に更に混乱をもたらした。
乱戦の最中、順慶は何を思い付いたか、旗本の五騎を呼び、
「これより先陣の森、松倉、山田、福須美、清須美等に使い致せ、本陣の采配に併せ敵、松永の引きがねを打たせる。よいか、間違えるなよ、敵の引き鐘の合図四度打ち三回の連打じゃ、すぐにゆけ、」
采配一振り攻める筒井方から松永方の引き鐘がけたたましく鳴り響いた。敵と刃を併せ、槍を交え、切り結び打つか打たれるかのまっ最中。
「カンカンカンカン！」「カンカンカンカン！」「カンカンカン!!」
「ヤヤッ、わが方の引き鐘！」いくら伏勢ありとは言え妙だが、何か新手の攻撃があるのか、命令は

絶対。夢中に戦う将は、

「引け、ひけ、引き鐘ぞ！」慌てふためき松永勢は総崩れになった。

益々高鳴る筒井の攻め太鼓。順慶のとっさの機転、さしもの松永勢もひるみ大挙して敵を防ぎつつ退かせた。順慶は時折ひょっこりとこう云う機転をひらめかせた。

城方も順慶本隊も浮き足だった敵を追い落とし追い討ちにあらん限りの弓、鉄砲を射込み間断なくせめ続け猶待ち受ける田の畦下に張り巡らせて潜ませたしゅろ縄が島左近指揮する号令一下、杭を持ち上げ、逃げる松永勢に襲いかかる。

「牽け、牽け、今こそこの綱を！」手許のしゅろ縄は引き絞られた。鋭く先が削られた棒杭が頭を持ち上げ田圃のあちこちで牙を剝いた。

松永の将森兵助正友が戦死。外にも討たれたもの数知れず、口々に喚きながら人馬諸共綱に脚を採られもんどりうってひっくりかえった。久々の大勝利であったが、筒井側も猶、深追いし過ぎた山田順清、水間春澄等が敵の鉄砲にあたり討ち死にした。敵はおびただしい武具、糧馬草を見捨てて逃げ去った。

「馬鹿共！　誰が引き鐘を打たせた！」久秀は引いた各武将を叱りつけた。誰れが打ったか知らぬが間違いなく、引鐘を確かにこの耳で聞いていた。あとで判った久秀は筒井の謀略に地団駄を踏んで悔しがった。

信貴山城の一室で松永久秀はこの度の敗北をかこち顔して悔やんでいた。

「隼人佐の云う通りであった。あの筒井の糞坊主共が。」森隼人佐を前にして久秀はむくれていた。がこの事で却って隼人佐を深く信頼した。

「はい、しかし策はございましょう。」

「どんな？」

「云うまでもございませぬが矢張りここはご辛抱なされて織田信長様に詫びをお要れになっては如何かと」

「ど阿呆、いやじゃあの信長如きに何度頭を下げるのじゃ。」

「左様では御座居ましょうが外に如何な手段が」

「ないわい、故に腹だたしい。」

「今や都を抑え尾張美濃、近江遠近江、伊勢等近国に武を張る織田様は間もなく完全にあのお方の物となりましょう。」

「うーむ」久秀の野望を瞬く間に打ち砕き腹に据えかねる憎々しき相手は信長であった。

「お前は時々気に喰わぬ事を平気で吐かすな」

「滅相も無き事どうぞお許し下さりませ」

「いや気にせずともよいお前の云う通りじゃ」

(五)

しばらくして久々に五百余りの将兵を引き連れ久秀は東大寺へ参詣した後信貴山城へ戻るべく秋篠寺の近くまで来ると自分の行列が止まった。
「何事じゃ隼人佐見て参れ」隼人佐好久は側にいた。
「ハハッ」その時先頭の物頭が走って報らせに来た。
「申し上げます」
「何じゃ」
「牢人者がお行列の行く手に大薙刀を振り回し暴れてございます」
「幾人かその者共は」
「一人でございます」
「何たった一人じゃと、絡め取ってここまで連れてこい。」
「それが強くて刃が立ちませぬ」
「誰もかなわずとか馬鹿者共、好久行って捕らまえて来い。」
「畏まりました」好久は槍を引っ提げ駈けていった。
「僧形ッ、静まれこのお行列をどなたと心得る。こなたは松永様ぞ。」
「知っておるわ邪魔するな、それともわしの相手をいたすか。」
「アッ、お主まさか奈良北小路の飯田三郎頼直殿の弟、甚次郎基次殿ではござるまいな。」

「なに！　某を知っておるとか、ふらちな奴め、この薙刀の錆にしてくれん。」
「待たれい、森伝助好久でござる。何故かような所にしかも僧形で。」
「なに！　森伝助好久じゃと、馬鹿な、左様なはず……おゝ成る程森伝助殿、お主こそ何故かような。」
「いやいぶかられるのも最もでござる。某(それがし)が子細あって牢人の所この松永様に拾われた。」
「何、子細あって牢人じゃと筒井の同族でありながら事もあろうに松永の家来じゃとは怪しからぬ。この甚次郎基次がお主を手始めに成敗してくれん。そこへ直れこの裏切り者め。」云うが早いか大薙刀を振り回して伝助好久に切ってかかる。伝助の制止も聞かばこそ、三、四合伝助は槍で受け交わしながら基次の隙を狙って膝の裏側を一振り打ち付けた。基次はばったり前のめりに両手を着いた。
「お待ちあれ渡り会いはここまで基次殿、貴殿の委細を伺おうぞ、ここは松永様の御領内。」ゆっくりと起きあがった基次も一端の負けた勝負に気を取りなおした。
　成り行きを見守る将兵を尻目に二人は秋篠寺の低い石段に並んで腰を下ろし基次は牢人をした経緯(いきさつ)を手短かに語り好久は、貴殿の父上や貴殿にはお咎(とが)めなしで、某はこの通り責めを受けて牢人をしたと述べやがて腰を上げた。
「何分、様子を見て参れとの仰せ故、直ぐにも久秀様の側まで行こう。」と好久は納得した基次を引っ張っていった。かくかくしかじか、と久秀に好久は経緯を説明した。
「お主も牢人か」久秀は委細を聞くと取敢えずしばらくは仕官はせずともよいので食客として留ま

る様誘った。食客なら気が楽と不承不承信貴山城へ基次はついて行った。毎日酒が無制限に出て飯田基次はすっかり信貴山城が気に入りとうとう長逗留した。

法　敵

(一)

森隼人佐は懐かしくまた、久々に出会った元筒井一族の飯田甚次郎基次へは密命を帯びている事に付いては知っていたかもしれぬが、一切喋らなかった。

扨て、松永久秀は織田信長と事を構えたことから松永孫六、竹内秀勝らは丹波の八上城を波田野晴通、秀治に攻められ尼崎迄引き、丹後の松永長頼も潰滅状態で敗走した。

上洛しようとしていた池田勝正、伊丹親興等は高槻城の松永の配下、入江春景が阻んだ事から信長はこれを切った。

苛立ちを覚えた松永久秀は益々信長への抵抗をつよめていたが、摂津の海老江まで出陣した信長は野田、福島城を囲みまた、本願寺は阿波から篠原長房を呼び信長と対陣させた。

近畿は複雑に絡みあった。

筒井の往年の盟友遊佐氏の末の一人高清は三好康長に随いようやく命脈を保っているに過ぎなかった。

〈人間五十年、化天の中をくらぶれば、夢幻の如くなり……〉

織田信長は自分の人生を五十年と決めていたのに全国制覇の目標には未だ幾多の困難が待ち受け、その道程は程遠いものであった。その様々の知識の中には南蛮人のもたらす情報に世界が如何に広いものであるかを知り、果て無き信長の夢は果たしてどんなものであったろうか。はかり知れない。

だが、心に焦りを持つ信長を諸国は簡単にはその行手を通さなかった。

その一つ本願寺は並みの相手ではなかった。関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、北九州に拠点を持ち一族一家衆が各地に勢力を張った。一家衆とは本願寺の血族であった。各大名の中には一向宗を領内で禁止した所さえありホトホト手を焼いていた。取り分け加賀一国の一揆は凄まじく徴税に反対し守護富樫氏と争い数百の道場や寺を置き集結して抵抗を続けた。地域に依っては万余の一向衆徒が死滅したが、近江の一向衆はかつて、山門延暦寺に手酷い眼に合わされた経過もあって《百姓の持ちたる国》、加賀を習い早くから浅井、朝倉氏の先方を以って臨み頼りない武士より犠牲者は常に一向衆であっても物ともせず《帰命尽十方無碍光如来》や《南無阿弥陀仏》のむしろ旗を掲げ《まいど一揆衆ばかりさきがけ……》と厭う事無く信長に抗した。伊勢長島も同様であった。元々《王法》を支える片輪が仏法と国は両輪でなければとする本願寺であった。その為信長上洛に屈してその際五千貫文もの献金を差出しているにも拘らずその本願寺の我が大坂石山が危なくなり元亀元年九月六日付の近江門徒衆への強烈な檄を顕如は飛ばした。同九月十二日三好衆を追う中、各地の一揆の元凶は大坂石山本願寺也として信長は潰そうとした事にあった。

遂に顕如は挙兵した。従わざるものは破門、《しゃばは一たんの苦しみ、未来は永世の楽果……》と死後の安楽を約し、開祖の教えは何処へやら、檄を受けた各地では同時多発して織田信長を阻止した。だが同様にその強力な織田を阻止する事は筒井衆にとって至難の事であった。

大和も織田勢の為にじゅうりんの憂き目をみるかも知れぬ。順慶は我身が思わぬ所でいつ落命し果てるかも知れぬ。身寄りは在れど一子もなし。跡は誰がこの身の供養を真心でしてくれるか、深刻に考えた順慶は将来我身無き跡の供養の為に生きている今の間にと四十九日の法要を行い、山辺郡のつげ村来迎寺に我名を石に刻み逆修の五輪塔を建て後世の極楽往生を願った。

さて、進撃を続ける信長の背後を本願寺光佐（顕如）は武田信玄と誼(よしみ)を通じて脅かし、中国の毛利氏の助けを要請していた。また信長の庇護により対面を保っていた将軍義昭を唆(そそのか)し根来、湯川、有田、日高、雑賀衆が本願寺危急を聞いて、都合一万余りが馳せ来たり昼夜を問わず戦いは続いた。更に紀州、泉州の二万余りの一向宗が加わり織田軍は苦戦を強いられた。

近江の浅井、越前の朝倉に味方した比叡山では信長の帰路を断つ事を企て朝倉義景は大挙して比叡山に陣し京師へ眼を向けた。大坂を抑えても京師が煙れば何にもならず、として京師へ信長は取って返した。

(二)

古い宗門二派が相呼応した形で信長に抗していた。

近江、越前攻めの合戦では大敗北を喫し、ようやく朽木元綱の手引きで命からがら信長は逃げ帰ると云う危ない眼に会っている。

比叡山の坊さん達は〈山僧もとより豪侈乱行にして戒を持(じ)せず。ここにいたりて、ますます婦女をおさめ、肉葷(にくくん)を貯え、号して師をねぎらうことなし、公然姦をなす。信長、勃然として、まさにいかりののしっていわく、「ああ凶賊、他日かならず罰せん……」〉と歯噛みした。

近江浅井郡は比叡山の言わば眼下、周囲の食い逸れや、極道から僧になったものが比叡山には多くいたし、古い時代の中興の祖と云われた第十八代良源座主は近江浅井郡の出身、近いこともあって元元因縁浅からぬ。

《あきらけく、のちの仏のみ世までも、光り伝えよ、法(のり)のともしび》と鎮国を切に願った伝教大師の心とは裏腹に元亀二年九月十二日織田信長はあろうことか、その比叡山に総攻撃を掛けて、根本中堂、山上堂舎、日吉(ひえ)山王二十一社を焼き払い、幾千の男女が殺され麓の坂本も仏像経巻と共に悉く灰になった。同三年十月三日武田信玄が織田の援軍及び徳川家康を三方原に囲んでこれを破り、家康は浜松城へ逃げ帰った。

この世界は奇妙に出来ている。

時には都合よく和し、間違えば骨肉の争いであった。

因みに、あのアフリカのライオンは協力して獲物へは爪を立て、牙を剝いてそれを倒すが余程の事がない限り親子同志で相争う愚を犯さないし、必要以外の動物達へも攻撃しないと云われている。

それに比べて人間様は一部を除いて様々な知恵や知識を持ちながら愛憎に満ち、恨み、悲しみ苦しみ、また、はち切れそうな欲望と夢を持ち、揚げ句に自らの生命を断つ愚を冒す。仮に男女の事でも表が思い遣りと深い愛であるとすれば、その裏は一変してドロドロとした憎しみ、嫉妬、しまいには罵りに変わり、果ては命の遣り取りにまで行き着く。

　虫けらでさえもせめて同種だけはと仲良く協同生活が出来るものが沢山いるのに人間社会はそうは行かない。

　お坊様はお坊様同士、学者は互いに説を曲げず論駁しあい、守銭奴は金だけが頼り、また組する党派、党略を専し、戦国大名は罪科（つみとが）のないものまで容赦なくその住まいを焼き、収穫前の穀物を踏みにじり、生命を奪い領土を横領し殺りくを繰返し、折角治水の堤防を切り裂き、さいぎの心で人を見た。何等かの形で相手に勝てば悦にいる。どうせそれとて長続きはしないほんの一時の為に。人間の欲望程恐ろしいものはない。

微笑と恩愛

（一）

　戦国とは云え全てがその様な者たちばかりでもなかった。
信心深く敬けんな信仰者もあり、乱れた世であればこそ時の流れに浮かびながら一時でも一瞬でも

猶、人との和を一層大切にして穏やかに微笑ましく、過ごそうと心懸ける者達もいる。ここは筒井城外、大きな棟が何軒も連なり、濠を巡らす一見百姓家風。筒井城に危険が迫れば城内の将兵を隠し子女達が緊急避難する屋敷街でもある。

　折しも仏前に供え物を捧げ拝礼して経文を唱えおわり静かにその屋の仏間を下り一室に待つ客を前にして酒肴を挟さみ楽しむ姿があった。しばしの平和な一時である。

「誰ぞ！　この酒は腐っておるぞ。」

「エエッ！　……まさかその様な事が。」室（妻）は慌てて飛んできた。

「イヤ、確かに某も先程よりこの酒は妙だと存知おりながら頂戴致しておりましたが。」松倉弥七郎も云って盃を置いた。

　室は徳利を預かり顔を近づけて臭（にお）いを匂（かい）だ。

「まあ！　これは何とした事、まさかあれを。」

「まさかあれを、とは何事だ。ご無礼ではないか。」森好之は、けげんな顔をして問い詰めた。

「先程下男の佐助がヘチマの汁を大徳利にいれて裏の台所へ置いて行きましたがそれに相違ございませぬ。」

「これはしたり、何と云う愚かな事を毒では無いにしろ、弥七郎殿で良かったが、他の御方なら、ただでは済むまいぞ。」

「申し訳次第も御座居ませぬ。私共と致しました事が、今直ぐに新しいお酒を、どうぞ、お許し下さ

れませや。」ほぅほぅの体で室は台所へ引き下がった。

　主と客は少し不機嫌であったが、娘や女供はえらい事をして怖いやら、可笑(おか)しいやら、台所の片隅に寄りあって着物の片袖に両頬を埋め、涙をこぼしながらくッくッと、声を抑え体を振るわせ可笑しさを必死でこらえている。

「これ！　何を笑ぅのです、お客様に妙な物をお出ししておきながら、不心得な。」室は失礼を叱り乍ら、眼は矢張り可笑しさを押し殺し咳込んで胡麻化した。

　再び客間では明るい外の庭の紅白の梅を眺めつつ、まともな酒が来るまで肴を摘まみ周囲の敵の動きなどを話していると、森好之の老母がきた。戦のない久振りの寛(くつろ)ぎである。

「まあ、よぅ参られました。皆様はお変わりありませぬのか、……あゝ左様で、弥七郎殿もお元気そうで何よりじゃ、ゆっくりと充分にお召し上がれや。」

「はい、有難ぅ御座居まする。それにしてもご老母様には殊の外のご機嫌、何よりと存知まする。」

「はいはい、婆々もお蔭様でな、この様に。」

「所で母者人(ははじゃひと)、昨日八木近長殿の母御(ははご)に出会いましてな。」

　数少ない母の知人の消息を子は教えた。母の顔は綻び、

「おぅ左様か、……して、お達者でありましたか、永い間お会いしておらぬが。」

「はあ、大分お年をお召しになり。」

「おうおう、そうじゃろ。」

「おぐしの色も真っ白になられ、それに妙な事にお顎の下には小さい小指の先程のこぶとその下にはお髭が。」

「おお、こぶが、左様か、たまにはそうしたお年寄りがあるもの。」

「はい、その上、頭にはこの様な角が二本。」好之は両のこめかみのあたりに両手を伸ばし、両方の人差指(ひとさしゆび)を真っ直ぐに立てた。

「エェッ！　角が二本、まさかその様な……」

「はい、奇怪でございます。」

「これ、何が角が二本です。好之、母をなぶるものではありませぬ。此方、それは唐国にいるとか云う獣の山羊の事ではありませぬか。」

「左様、角が二本でこの様に、……やぎさん……」

「まだ、云ぅのですか、何時まで経っても此方は子供の様な事を。」黙って親子の会話を聞いていた弥七郎は吹き出して笑った。好之も笑いながら母は何時までこの様に過ごして下されるやら、とそう長くも無い老母への何時かは来る別れを心の底でふと思った。

(二)

　さて、数日を経て所用があって森好之はその屋敷を出ようとしていた。重臣達らの十日毎の交替の日とは異なっていた。

「汚い、眼ざわりじゃ、往け、往け。」寒い北風の吹く門前で、好之の伴の槍持ちや轡取り等に口汚く罵しられた年寄がいた。今まさに馬に乗ろうとする好之の母とは年格好がそう変わらない白髪の一人の老婆の姿がそこにあった。成程、身に纏うているものは粗末で垢にまみれ、髪の毛を振り乱してはいるが、何処と無く顔には且つては良家の夫人であった面影が漂っていた。

「これこれ、そうむげに人を扱うものではない。」

「ハハッ」好之は乗馬を止めて伴等を強く叱った。

「ひもじゅうのでござるか」好之は近づき少し腰を折り老婆の顔の辺りまで屈み自ら尋ねた。

「はい、ここ数日何も食してはおりませぬ。」か細い老婆の声が哀れであった。

「おお、気の毒に、裏に廻り何ぞ食べものでも、これ、誰か此方を案内しろ、わしがそう云っておると云え、ついでに湯でも沸かして我が母者人の古い着物でも着せた上、わしが帰るまで寝床へ休ませ、よいな。」

「旦那様、こんなもんに優しくしておればなんぼでも仰山いてきりがありませんが。」

「これ、何を云うぞ、わしが申しておる。はよう。」垢で汚れた首筋を真っ黒にした老婆の眼から温情に謝したかポロポロと涙がこぼれていた。やがて、好之は十数名の伴を連れ筒井城へ上がった。道道何処やらでみた顔であるとその老婆の面影が誰かに似ているのを想出そうとしていたが、思い出せなかった。

主な事は終ったらしく雑談になっていた。

「筒井家の跡継ぎも決まってようござったが、さてさて、松永めには。」相変らず対松永のことであったが、跡継ぎの事では元亀三年正月十三日順慶に嗣子なく、母は心配して養子を迎えていた。

「そなた藤勝、何故、女子衆（おなごしゅう）を好かぬのかてんと解（げ）しませぬ。」母は子の体が普通の子とは違うのかとかつていぶかって云ったことがある。

「その様な事はありませぬが、御仏は女色を男が弄ぶ事を戒めておられまする。それに子が無い事はお松だけの責任ではなく、此の世の私の定めであればそれは仕方のない事でございます。子の無いことで他の者とは違うこの世の仕事が私の仕事とも思えまするが。」

「それはそうかも知れませぬが、そなたは筒井家の頭領。お松に子が出来ぬのなら大和の名だたる箸尾や高取の越智の娘の外、家来衆の子も幾らでもありその中に気に入った娘があれば側へ侍らせてもよいではありませぬか。そなたの云様ではこの筒井家も絶えてしまいまするぞ。」母は詰め寄った。

「家とは理念によりまして続きまする。一族の優れた甥達の中から跡目を継ぐものを選びましてもよいのではありませぬか。万一我子が出来てそれがひ弱な子で跡を継ぐよりはむしろよろしゅうござりまする。この激しい戦いの毎日を頼りない主君では家来達もたまりませぬ。またその子に能力がなければ私以上に苦労を背負わせる事にでもなれば親の立場からすれば見るに耐えませぬ。母者人の様に明けても暮れても子の行く末をご案じ下され神仏に帰依して心配せずにはおれませぬ。この筒井家が私一代限りであってもよいなどとは思いも致しませぬ。それで藤四郎でも継がせては如何でござりましょうか。」

「いらだたしいことを申すものじゃ……」母はまだお松以外の他の女性に心を向けていた。
「本来ならそなたの子が立派に跡を継ぎ次代を担う事が何故なりませぬ。例え少々力のない子でも有能な伝役をつけ育てればその子にとって苦労でも何でもありませぬ。云うことが判りませぬ。そなたの父者人は十指に余る側室がありましたのに。」
「母者人でさえも、悋気でご苦労があったとか。お松が可哀想で憐れでござりまする。」母は涙して順慶を説得したが、二人目の女性をそれでも侍べらす事にはがんとして応じなかった。
「あの偏屈なお松にそれ程まで」
「偏屈には十分飽きてはおりまするが」この子は優しすぎると母は改めて思いあまり神や仏の事ばかりを教え込み過ぎたと却って嘆いていたが母の強い勧めで慈明寺左門の子藤四郎定次を目出度く養子とした。さて城内での話題は。
「……松永勢はこの間の辰市城で敗北を喫しても応えてはおりませぬ。」
「織田殿は松永を尚高く買うておられる由」
「否、そうではない。織田は各地で戦い、一兵でも欲しいのでござる。」
「あの様に度重なる反乱を許されるのは、それしか考えられぬ。」
「ウーム」
「志州殿、所で伝助殿のその後の消息は、如何でござる。」
「いや、その後はまだなにも。」

「どうして居ろうのう」
「苦労じゃろうに」
「飯田の弟御も、北小路を去ったとか。」
「何もかも、いらいら致す。」
「先頃、篠原長房が、折角阿波からきたのに織田殿と和して本願寺の苦労も徒労に終わり長房は阿波の勝瑞に戻ったとか。」重臣達はそれぞれの事を口にした。
「そう、将来を暗く考えては成らぬ。何時か必ず転機があるはず。」
「志州殿は何時でも呑気な事を仰せられる。何時がその時でござるな、そう申されて何年に成ります。」
「中坊殿、先程まで居眠っていて、刺のあるお言葉を申されるものですな、しからば貴殿にはご良策でもござるのか、ここでご披露願おうか。」島左近が詰め寄った。
「お館様がお出ましなら、某が許さぬ所でござるぞ。」松倉右近勝重が云った。
「右近殿これはわしの問題じゃ、わしは腹が立つ分けでもない。そうむきになられるな。事実いつもわしはそれを信じて今日迄きたし、またそうも云って参った。身内で争う時ではない。筒井家は長く続いた徳のある家柄、思いも寄らぬ必ず良い日が来る。中坊殿とて筒井の為を思われてのこと。」
　松倉右近勝重の子の弥七郎重正（後、豊後守重政）の姉は森志摩守好之の嫡男縫殿佐好高の室でありつい、代々の親族当然弁護した。癖があってこの男頭は切れるが人にわずかな非があると平気で誰

彼なく手厳しく非難し、受けたものは顔も上げられぬ程反論が出来ないのが普通だった。一見容貌も鋭く白皙（はくせき）で言葉は滑らかであったが殊玉にたとえれば折角ながらその玉には傷があり時にはそれがこの男を時折台無しにした。その中坊左近を嫌う者が多かったが中坊一族は何時も要領よく、時代に旨く乗っていた。

「お館様がお出ましではないし、今日の所は此処までと致しましょう。各々持ち場へ戻ると致しましょうか。今の所差し迫った事は無いので。」皆は下っていった。

松倉右近はまだ腹立ちが醒めなかった。

（三）

森好之は件の城下の百姓家へ戻った。

老婆の事はどうしたか、俄かに思いだし、尋ねてみた。

「機嫌よく、離れ家に休みおります。」出た時から半日は過ぎていた。しばらくすると先程とは見違える程顔の色艶も良くなり老婆はこの屋敷の下女に伴われて書院の庭先で平伏（ひれふし）していた。

「その様な所では寒くて話も出来ぬ。遠慮には及ばず、これへ。」

好之は老婆を部屋へ上げ、これまでの身の上を聞いてやった。湯を使い衣服を改めるとその老婆は人品いやしからず、気品に満ち余程の育ちである事が察せられた。播磨の国の海辺の然るべき家柄であったらしい。

折しも城から火急の知らせが入った。松永から入江の家臣中村左衛門一行が河豚（ふぐ）一折り持参、応対について至急登城と云うことであった。

「なに、河豚じゃと。」明らかに松永の嫌がらせであった。

「はい、明石の鯛、ひらめの外に、河豚を。」玄関まで出て志州は知らせを受けとった。老婆へはしばし、お城のご用と、告げたが、ふとこの老婆が海辺の育ちである事を思い出し、まさかと思いながら知っているかもしれぬと、食方を尋ねてみた。

「河豚にもよりますが、毒の無いものもありまする。」

「なに、毒の無いものもあるとか。」

「はい、見れば大体わかります。」

「ここへ使いを城から寄越す故、教えて呉れぬか。」森好之はすぐ支度をして登城した。ふっーと、何かを思い出した。そうだ、あれは、あの老婆の顔は能の松風の面（おもて）とそっくりじゃ、そう思うと何と無く、好之は心が落ち着いた。

入江の家臣中村左衛門一行は客座にあって、酒肴の接待を受けていた。何でも巻絹三巻、太刀三口とそれに今日持参の魚をご一同と一緒にしたいと、意地悪く粘っているとのことであった。

「その魚を見せてみろ」好之は手に取ると直ぐ城外の屋敷へ遣いを走らせた。間もなく、遣いが料理の仕方を聞いて帰ってきて報告した。

「まず、腸（はらわた）の毒が一番強く、決してつぶさず腸に触らぬ様にして、脇鰭から包丁を入れ、裏皮一重

残して魚の頭から剝ぐ様にして剝きます。肉は充分に洗えばまずは大丈夫と云う事でございます。」
これ此の様にと、順に随い三匹の河豚が手順通りに行き届いて並べてあった。
「うーむ」
「なお、茄子の古漬けでもあれば刻んで味噌汁の具とすれば毒には当たらぬとの事でございました。」
「うーむ」
「それに出来上がればまず念のため、犬に喰わせればとも。」
「よーし、すぐにやってみよ。」膳部の料理人は立ち所に仕上げた。
「河豚汁でござる。どうぞ、熱いうちに召し上がれ。」
まさしく、河豚汁であった。身が椀の中で浮き沈みしていて中村左衛門らはまさかと思っているのに膳に付けられぎくりとした。
中村左衛門一行は鯛やひらめ、それに須磨の松露等は兎も角、まさか河豚は食すまい、料理として出なければ大笑いし、田舎大名のふぬけども河豚の喰いかたも知らぬか、として蔑み大手を振って退城してやるべし、とまるで狂言芝居である。
だが、件の老婆のお蔭で筒井一族は恥をかくこともなく、筒井の重臣達と客が相交え、味噌仕立ての河豚料理を一同は食し温まって帰っていった。
「してやったり」好之等は筒井の面子を保ち密かに微笑み乍ら丁重に土産を持たせて中村左衛門一行を送った。

「有難うござった」森好之は件の老婆に礼を述べた。
「お役に立てて幸いで御座居ました」老婆は謙虚であった。
老婆は一つ、外にも大事な情報をもたらした。
森隼人佐好久と飯田基次が既に松永の手にあり、茶の道を通して、可愛いがられている。と云うのであった。
「何、誠でござるか。」森好之は件の老婆の言葉を聞いて疑い、驚いた。
「はい、確かに。」老婆はきっぱりと云った。
「何処でその話を」
「直に隼人佐好久様からでございます」隼人佐好久にすれば松永潜り込みを一日でも早く大和の一族へ知らせたかった。適任の者を探しあぐねていた所へ曽って隼人佐も仮寓していた堺の干し鰯肥料屋の明石屋藤兵衛方に、羽柴筑前軍と戦った後行方不明となっていた明石城の支城の主、赤松某の夫と息子の消息を尋ねて同じく身を寄せていたこの老婆に頼んだと云う事であった。明石屋は昔その夫にかなりの世話を受けた経過があった。門に立つ乞食、用をなし、情けは人の為ならず、経緯を理解した好之はもう既の所でこの大切な老婆を邪険にするところであり、日頃の人への僅かの思い遣りに彼は我乍ら胸を撫で下ろした。
さて、石山合戦の間を気遣いながら老婆は堺を出るときから身形を下とし、前に堺へ来る時もそうであった様に狂女に化けて土地柄不案内の事もあって三好、松永の幾つもの柵を越え、ようやく大和

へは来たものの路用のものは見苦しい乞食の群れに多寡られて辛うじて衣服のみは免れたと語るのであった。途方に暮れてさまよう中偶然辿り着いたのがここ筒井老臣の外館門前であるとは知らなかったが、それもこれも皆日頃信仰する大日如来様の御導き、行方をお照らし下されあなたとお会い出来、老い先短い妾に御用が果たせました。安堵致しました。

あの隼人佐様と云うお方はご親切なお方、明石屋では親子にも優るお世話を頂きました。

日頃は折り目正しく妾(わたし)を母者人様と呼んでは足腰をもみ解(ほぐ)し、珍しいものが手に入れば下された。茶の湯に通われてからはその日に習われたおけいこを妾に何時も見せられ、屡々茶を二人して頂いたものでございます。また、我が子と年も変わらぬ事もあってつい、お互い気心を許しあいしばらくは久振りに和やかな日々を過ごすことが出来ました。人を救えば我が望みも聞かれるとか、たっての頼みとあれば外でもない、隼人殿の頼み事とお引き受け致しました。彼女の長い物語であった。

直ぐに無事に着いた事を隼人殿に知らせねばと云うのを押し留め、志摩守好之はかなり衰弱したその老婆を労った。気の毒な事に数日を経ぬ中、お役にたてて嬉しいと云いながらこの屋敷で老婆は世を去った。真に哀れな事であった。後日の事ながら探し求めた件の老婆の良人こそ三木判太夫であり赤松氏から三木と姓を変えていたので判らず好久は伝える事ができなかった。筒井家に取っても好久にとっても判太夫の夫婦はいわば大恩人であったのだ。

錯綜(さくそう)

(一)

大和の国の争いといえども織田、豊臣、徳川や石山本願寺を抜きには語れない。

武将達はよく名前や官職名が変わるだけでなく時折は苗字まで全然違う姓を名乗ったり、急に裏切って主君を替えるので判りにくい。筒井順慶の曽祖父の順盛のほぼ同時代に河内の遊佐氏に畠山稙長(たねなが)の守護代として遊佐順盛がいたし、有名な顕如は贈名で光佐の名は両本願寺の関係者か歴史家でないと判らない。長政とか直政と云えば沢山出てくる。義とか信と付く名前も多くまた親から何代も襲名するものがあり更に人に何かあれば自分の名前の一字を与えたり、とっくに死んだ人の名がものの本に載せられていたり其れが当て字の場合やまた、畠山、武田、三好、細川などは各地に居て尚その上に子孫の分かれも多く正室以外の庶子や養子が相分かれて戦いを繰返し余計ややこしい。この頃の河内には三ヵ(三箇)氏等日頃目に付きにくい特異な苗字もあった。

「この者は討ち死に、あの者は傷つき。」太刀を磨き槍の穂先をとがらせ気は天を突き、馬は威けり旗下は、はち切れんばかりの勢いといえども筒井家中は不景気な話ばかりの中にあった。元亀三年三月十五日筒井順慶は三老旗下を従え曽つての河豚の返礼にけったくその悪い松永久秀、久通父子を南都北小路飯田頼直の城へ招きふんだんに酒肴を振舞い能楽を演じさせ接待した。しばらくすると松永

も順慶を招くと云ってきたが、みすみすわなに掛かりに行くようで順慶は断った。同年四月の終りここ筒井城へ思わぬ知らせが届いた。

織田信長の武将明智日向守光秀から松永攻略の話であった。信長はそれまで松永に痛め付けられ脆弱な勢力の筒井よりも松永の方を評価していた。しかし信長は松永に対して警戒を抱き反松永の筒井とここで和した。

森志摩守好之が口癖であった筒井の好機到来、攻守立場を替え転機が訪れた。口々に志州の予想を賞めそやすものが多勢いたが禍福は常成らずとして志州は取り合わなかった。諸手を挙げて喜び俄かに眼の前が開けた。松永久秀は石山本願寺を支援し信長に抗している。筒井軍は奮い起ち織田勢の応援を心の支えとして踏ん張った。

考えてみれば何も筒井の為に織田が応援しているのではなかったが筒井一族にすれば永禄二年八月松永が大和信貴山入城以来十三年の永きに渉る積年の恨みを晴す苦節に耐えた後の喜びであった。多聞山城攻撃に明日の戦いは筒井殿は不要、一日位は休めと云われてもそれを断り毎日のように攻めた。この度は攻めるのに攻め甲斐があった。筒井の旗下は全軍生き生きとして戦った。喜べば喜ぶ程、活気が全軍にみなぎり将兵の怪我は少なく、また潜んでいた筒井旗下が陸続と順慶の下に戻り軍令を冒すものさえ一人としていなかった。かつて織田軍にいた松永勢とは比べようもなく筒井勢は統制が行き届き行儀良くふざけるものさえなく日増しにその勢力は膨れ上った。

(二)

元亀三年四月半ば、河内の南半国支配の高屋城(現羽曳野市)には織田信長の姪を室とした畠山左衛門督昭高が兄播磨守（尾張守とも）高政から永禄十二年に譲られ守護であった。守護代の遊佐河内守信教がその昭高の臣となっていたが三好左京大夫義継、松永久秀らが高屋城を囲んだのを見た遊佐信教はこの姪を主君に仰いで実権を握ろうとして畠山昭高を殺してしまった。信長は余りの事に激怒して保田若狭守を使いとして佐久間信盛、柴田勝家等を急派し双方は激しく戦った。信教を許さず攻めて姪を救い信教は他国へ逃げた。遊佐氏は能登にも同姓の一族がいたが畠山氏の衰微とともに行儀の悪い信教の様なものがでた。変わって天正二年能登の守護畠山義隆が矢張り遊佐続光に毒殺されている。

そんな頃信長は元亀三年の師走の二日清州城下で唐人方及び呉服方商売司を置いた。一方ではその激しい性格からしてどぎつい荒療治を各所で行ったが、もっと大きな観点で理想を持ち世の中を大局的に見て領地下では厳しく善政を敷いていた。天正時代に入って世情は益々著しく激変していく。天正元年正月（元亀四年）の三箇日も明けて早々、永年の夢であった上京（じょうきょう）を目前に控える武田晴信（信玄）と晴信より若くして京を既に抑えていた信長の間を第十五代足利将軍義昭が取り持ったが、その時信長は晴信へ使いを出し、

《敝邑、四方に事あり、遠の人（家康）つねに賦をもって従う。いまその救けを求む。寡人（信長）あえて力（つと）めずんばあらず。もって善隣の誼を全うするのみ。あえて前のよしみを忘れんや。》晴信怒

りて和好を絶つ、と。義昭の斡旋は旨くいかず同十一日織田を無視した晴信は四万余を率いて出陣し三河の吉田城を攻め、同徳川家康の属城野田城を攻めてこれを落とし尾張、三河の通路を分断し二月十七日守将菅沼将盈を虜にした。武田勢は屢々三河を侵した。

（三）

三河は徳川家康の領域であり織田と徳川の盟約からすれば義昭の調停失敗は将軍としての立場にありながら明らかに両方を統御する権力を失い、また義昭は晴信をかばった。

武田はまだしも最早、織田には畏き帝以外の権威の無い将軍など有ってもなくてもどちらにしても大した問題ではないが、しかし、信長はまだ形の上で将軍を立てていた。

義昭は器でなく今更ながら将軍は名前だけで権威は落ちていた。叙爵も上って、従四位下としか認められず十四代の義栄の従五位の下に比べれば幾分かはましと云う程度であった。歴代の身分からすれば地方の有力長官くらいの値打ちでしかない。お公家さん達も義昭の器量と実体をよく知っていた。信長にすれば当初には上に戴く権威の象徴としての将軍の意味は既に失われていたし、そこへこの度の失敗で信長はもう義昭を見かぎっていた。

以前から義昭は将軍らしかずとして元亀三年九月には信長は一度義昭を十七のおきてにまとめ諫めた事さえあった。同三年冬十一月信長はこれまで武田晴信にこびていたのを辞め三河進入を食い止めるのに上杉謙信との交わりを考え、晴信は武将秋山信友を派して美濃へ攻め入り岩村城を攻略した。

天正元年二月二十六日勢多光浄院運慶らが義昭に呼応し一向宗徒等が石山や近江今堅田で織田勢に反旗を翻した。また、越前、近江では再び一揆が猛威を振るい、信長は柴田勝家、明智光秀、蜂屋頼隆、丹羽長秀らに命じ、これを討って西近江を平定した。

同年三月十五日晴信は石山本願寺光佐や義昭等の意向を請けて東美濃まで兵を出し、信長の背後を脅かし自らも三河へ出陣した。義昭は信長というじゃじゃ馬の様な男を御する事が出来なかった。初めは信長の有能さに感動さえ覚えた義昭ではあったがその粗暴さには耐え切れなかったのかも知れぬ。晴信と謀り信長を挟撃しようと企んだ。義昭が何を血迷いそんな愚を仕出来(しでか)したのか心の底が見えぬ。信長はそれでもなお義昭へ鄭重に接した。

《信長、幕府に対して更に疎意なし。これをもってわが前鋒二寨をほふれり。かつて幕府を輔翼し、大任を恢復させるは、ことごとく臣の力のつくせしところなり。しかるにいま浸潤膚受のうったえ蕭(しょう)墻(しょう)（身内）より起こり、頃日、屢隙にせめぐ。臣のいまだ知らざるところなり。願わくばその精誠の心を、……》十分理解して欲しい旨三使をつかわして要望したが義昭は和せず要れなかった。

信長は義昭の企てを知り武田勢の動きを封ずるべく上杉謙信と組み晴信を牽制し謙信は越中で動きだした。信長は洛外、上京(かみぎょう)の一二八カ所を焼き武威を示して義昭に和を乞うたが許されず信長は義昭に実子を質にしてでもと申し出たが義昭はこれを強く拒んだ。義昭は三好三人衆と通謀し信長は四月四日二条第を囲んだ。ようやく正親町帝の勅による取り成しで七日誓書を交わし治まった。武田晴信は四月十二日上京の途にあって信州駒場で倒れて果敢(はかな)無くなった。信長は武田信玄が死んだ事を一早

く知ったが義昭は知らなかった。信長はその事で大きく前進出来た。義昭はまだ来ぬ武田を待っていた。その内きっと来るに違い無いとまだ信じていた。時間的に来ないことで一つの大きな当ては外れたが義昭はまだ自分を推す者が沢山あるものと考えていた。幕府は禁裏の付近に屯する織田軍の立ち入りを禁止した。六月に入り義昭は益々信長打倒に腐心し十三日には挙兵しようとしたが諦め時期を待った。武田は遺言を守り喪を伏した。大坂石山本願寺と呼応して七月三日義昭は宇治橋を落とし槇島城で兵を挙げた。ここ宇治川は治承四年源頼政ら、寿永三年義経と義仲、後鳥羽上皇と鎌倉幕府との戦いの承久三年の乱及び建武三年の尊氏と楠木正成の戦いなど都を控えた戦いには必ず繰返し登場する戦略上重要な拠点であった。

(四)

義昭は挙兵に合わせ中国の毛利、越後の上杉、晴信亡き後の甲斐の武田勝頼等に攻め上がれと要請していた。毛利がすぐに来てくれるものと義昭は考えていたが、間に合わなかった。織田勢は二条第を囲んだ。二条第の義昭の将は日野大納言輝資、高倉宰相範国、三淵大和守藤英等が応戦、他に洛北の一乗寺砦には渡辺宮内少輔、磯貝新右衛門尉久次等二千、又、静市静原砦方面には山本対馬守和光らが、山城の淀には石成主税友通がおり、それぞれ織田軍は京都白川（一乗寺付近）、粟田口（三条通東大路東付近）祇園、清水（きよみず）六波羅（東山五条から七条の間）、鳥羽（現在の南区から伏見区にかけた地域）に布陣し交戦した。槇島城には総帥義昭がいたが細川は従わなかった。後年光秀が山崎合戦の

時、最も頼りにした細川を仕切りに誘ったがこの時も応じていない。槇島城は仁木大館、上野陸奥守清秀、和爾次郎兵衛信全、その他吉良、飯河、松原等六千余りがいた。これを聞いた織田信長は三万余りを率いて七月五日直ぐ岐阜を出、近江佐和山から湖上を越えて志賀越えから上洛し軍を三手に別け、一手は柴田修理亮勝家を大将とし、佐久間玄蕃允、稲葉伊予守昌通、柴田三左衛門、安藤伊賀守、氏家常陸介等が宇治川上流平等院から筏を組んで下り、もう一手は佐久間信盛が一軍を卒し、丹羽長秀、蒲生飛騨守氏郷、池田伊予守景雄、筒井順慶等が川下から槇島城を囲んだ。これより先、筒井順慶は火急の織田の軍令を受けて大和から三千五百余りを率いて京へ上る途上、道を歌姫にとり山城相楽木津を渡り、上狛、多賀、久世郡久御山（くせぐんくみやま）に達し村々の長を集め宇治川筋の瀬に付いて情報を尋ねた。このまま進めば槇島城へ直にぶつかる。そこで筒井軍は迂回した。槇島城は現在の宇治市槇島国道二十四号線から少し西に入った一段高い一ノ坪付近の台地がその後と云われそのすぐ西側には近鉄京都奈良線が走る。

「こなたは大和の筒井城主陽舜房法印家臣、島清興である。お座りのお方が隠れも無き我が主順慶様じゃ。」

「へへ」

「さてここへ呼び出したのは外でもない。この巨椋（おぐら）の大池の船々、また宇治川の瀬について漁師を致すものらは要所を心得ておるはず。この度の合戦に川筋の案内方を頼みたい。謝礼は十分に取らせるが、ここで年嵩の者は。」

「へへ、私でございまする。はばかりながら何なりと承り、お手伝い申し上げます。」巨椋池は周囲四里、琵琶湖石山付近の瀬田川から曲折し南西に流れ宇治川と名を替えて巨椋池へ流れ込む淡水湖であった。後に豊臣秀吉が桃山城築城の時この大池を四つに区切る土堤をこしらえるまで航行は自由に出来た。

「殊勝な心掛け、したが、その方の名はなにがしと。」

「へへ佐山村、藤磯右衛門治一郎と申しまする。この辺はあの大池のお蔭で日頃は皆潤うてはございますが一度大水の節には木津川からも水が溢れ一帯は水害になります故、水呑みは別にして一同皆家の軒先に二、三の船を吊り何時でも二百や三百の船はご用意出来まするが、外に何ぞ。」

「うーむ、よう申し出て呉れた。しかし、藤とはあまり聞かぬ名じゃが。」

「へへ、恥かしながら元は斎藤別当実盛の流れと伝え、今や斯様な身なればご先祖の名を汚してはと斎藤の斎を外して通しておりまする。」

「成程左様か。磯右衛門、中々の奇相とみた。この度の水夫（かこ）共の事はその方へ手配方一切を頼みおく、抜かり無きよう手助けいたせ。」

「へへ、一心にさせていただきまする。」

激流渦巻く波を越え水夫が漕ぐ船に乗り込んで順慶等は織田の部将佐久間信盛と合流し寄せ手に有利な川筋を進言した。その他の織田軍の明智日向、塙九郎右衛門（原田直政）、林美作、原、蜂屋等は洛北静原、一乗寺、山城淀など各所で交戦していたが、信長は本陣にあって兜を右手に持ち床几に

座して観戦していた。この時梶川弥三郎高盛が一騎駈けを願い出たが抜け駈けは厳罰として許さなかった。滝川左近、羽柴筑前が信長の周りにいた。徳川時代の初めに隠元禅師の開いた黄檗山の近くの五箇庄と宇治川上流宇治郷から槇島に織田勢は押し寄せた。

「防備厚きは川の浅瀬それッ！」とばかりにそこを目掛けて攻め込めと佐久間信盛がまず川へ飛沫を揚げて飛込み全軍突撃を開始。川の半ば迄攻め寄せると槇島城から弓鉄砲を射かけて討って出た。槇島城主は槇島玄蕃頭昭光であった。織田の猛攻に槇島城は呆気無く陥落した。梶川弥三郎高盛が兜首一つを信長に差出したが信長は見向きもしなかった。高盛は腹がたってその頸を信長の馬の脚に投げ付けた。さて、義昭は再び勅を仰いで和平の道を探したが、各街道は織田軍で溢れていた。この時摂津へ落ちた勇将の和田伊賀守惟正は織田方中川瀬兵衛清秀に首を打たれた。各所で戦う自軍を余所に義昭は一日にして簡単に降伏、同十八日槇島で今回は自ら二歳になる子の義尋を質に出して義昭は信長に和を乞い、信長は義昭を丸坊主にして同十九日放逐した。未だ余力があるのにお上はと、義昭の各所の武将等はもう少し辛抱してもらえればと歯噛みして残念がったがそれで将軍家は終ってしまった。室町将軍足利幕府はここに力を失い滅亡した。父とも頼むとしていた信長のお陰で義昭は将軍にさせて貰いながら恩義を忘れ己の本当の力を知らなかった。筒井勢は左程の働きもなく、淀城の石成友通を囲み、他の織田軍についていただけで大したことはなにもなかった。

同二十一日信長は上京（かみぎょう）（その頃上京下京が都であった）の地子銭を免ぜしめ村井貞勝を所司代に任ずると長岡藤孝や三淵藤英らについて頑強に戦う石成友通の淀城も落城した。三淵藤英は義昭に愛想を

つかし信長に降った。藤英は二条第で死んだとするものもあるが藤英が石成友通を攻めたのは八月であった。

長岡藤孝は先頃義昭挙兵に加わらずこれを賞でた信長は長岡の地を与えて細川から長岡に姓を変えた。

(五)

羽柴筑前らにつれられて槇島玄蕃頭昭光は義昭に従い一度大和へ入る意向を探したが、今此の時期に到って義昭を迎える事は得策では無いとした森好之、島左近、松倉重正らの申し出で帝に次ぐ元将軍家の願いとは云え順慶は涙を呑んで受け入れを断り若江城へ重臣を付けて送った。義昭は三好義継を頼った。三好義継の室は公方義輝の妹であり三好義継には若江三人衆と呼ばれる池田丹後守教正、野間佐吉、多羅尾右近がおり義継は河内北半国の守護であった。信長は八月十日朝倉義景を刀根山に破り同二十八日小谷(おだに)城主浅井長政は長政の臣、阿閉(あつじ)淡路守の寝返りで孤立し、朝倉義景は二万の軍勢を引き連れ加勢しようとして破れ長政も遂に自殺、九月には秀吉を城主に残し織田軍は引き揚げた。勝利を祝して筒井順慶は松倉勝重を岐阜へ派した。この後直ぐに大坂石山本願寺が毛利の応援を得て下妻(間)与四郎ら三千が出迎え義昭を石山にいれた。下間頼秀、頼照などは本願寺の一家衆であった。しかし長年の宿敵浅井も亡び浅井らの一族佐々木、六角承禎らが伊賀へ走り一揆を指揮して信長に抗した。信長は長島攻めに向かった。

《我身危うし》と光佐もみたし松永久秀は予てよりの森隼人佐好久の奨めにより信長の動きで急激に移る世情を見て三好の臣多羅尾右近、野間佐吉を唆し義昭の臣、金山駿河守武春を殺した。若江城内は混乱し動揺が走り若江城へ入った義昭は五十余日いて去ったが信長は高屋城に拠る三好下野守政生(政生(まさいく)、政康(まさやす)と称す。釣竿斎)等の動きを封じ義昭を匿(かくま)った事を理由に十一月十日大将は佐久間信盛にして筒井順慶が一族旗下を率いて犠牲の多い先陣を承り今こそ織田の信頼を高める好機と奮い立ち永禄三年一月以来畠山高政の河内守護代であった安見直政の交野城を三百余りの犠牲を出しながらこれを攻めて落した。更に筒井順慶一族旗下は、鯰江城を攻めた。筒井勢の意気は盛んであった。余程でない限り、この頃の筒井順慶らは戦いの為の軍議を開く必要はなかった。織田軍の命令さえ忠実に従えば何も問題は無かった。武勇を発揮するだけで戦いはどしどし進んでいった。更に若江城に迫り十一月十六日三好義継を攻めれば若江三人衆が織田に内通して義継を自害させたし、一方本願寺光佐も名物茶器自天目を贈って信長に和し畿内は治まるかにみえた。

幕府滅亡を挟み、やがてその天正元年も押し詰まった十二月二十五日筒井軍が攻略中の久秀は多聞山城を突然呆気無(あっけな)く織田の司令官、佐久間信盛に明渡し事前に金山駿河守を切った事を土産に松永久秀は三度め信長に降り同二十六日信貴山城へ入った。筒井一党は感激しその夜は何時までも祝宴を止めなかったが何と無く頼ない勝利であった。

(六)

天正二年が明けた。筒井順慶は春日神社に詣で成身院に宿した。順慶の周囲は例年に無き賑わいを見せ大勢の祝儀を大広間で受けた。

織田信長は正月一日付を以って良日と定め明智光秀の子定頼を順慶の嗣とし順慶の養女二人（向井氏の娘等）を長岡忠興及び明智信澄に嫁がせた。勝利の上に重る祝事であった。光秀の子定頼に付いては異説があり定かには出来ぬ。誰か外の子を養子にして出したのかとも思われる。筒井衆は安定した。二日慌ただしく順慶はお礼言上の為に岐阜へ発ち、信長は杯を順慶に与えただけで挨拶は簡単に済み十七日大和へ戻った。

その間、明智光秀は同十一日多聞城へ入り城番となった。以後光秀は何呉れと無く筒井を庇った。大和を去る前の光秀を順慶は二月一日多聞城へ尋ねた。一月余のみ在城した光秀は去り、代わって長岡藤孝が入った。

二月二十日に順慶は細川へ伺候したがその日は多聞城内で幽斉が三条実枝から古今の伝授を受けていた。戦乱の中にあっても織田軍には余裕があった。

「ご開門！」筒井城城門にけたたましい織田軍からの火急の遣い番の到着の声であった。

前線将校へ何時でも信長は火急の命令を出した。

常に各前線将校の掌握に余念が無く、豊臣秀吉は疑い深い信長に細大洩らさずせっせと毎日仮名釘流の報告を送ったと云うし場合によっては秀吉みずから最前線の危地を離れ信長の元へ直（じか）に決断を仰

ぎに馬を飛ばしてやって来た。

人遣いの荒い信長は又しても順慶の座に温もりを与えず、翌二十一日岐阜へ呼び付けた。岐阜の可児にあった明智城が武田軍に攻撃を受けていた。順慶が参陣する直前の二十四日明智城は既に落城し信長が退いたので順慶は二十九日この度も戦功芳しくすることなく筒井へ帰還した。

さて信長は日頃、形式的なかたくるしい伺候で一、二度言葉を交わしただけの筒井順慶に対して本来の心根がどんな糞坊主であろうかと心を綻ばせながら興味津々で大和の事へ思いを巡らせていた。と云うのも初めて大和へ入ることになったからだった。かつて足利八代将軍義政が切り取った蘭奢待とは如何なる香りのするものかと思うとちいっと欲しくなった。

(七)

三月九日順慶は大和筒井城を出た。松永凋落を悟って筒井へ戻ってきた箸尾、高田、岡等を連れ順慶は信長へ心服を誓わせる為にであった。十三日になって帰ってきたが順慶は慌ただしく日を過ごしていた。大和へ信長来たる。信長は他にも無茶を云った。人質の事であった。

興福寺大乗院門主尋円みずから宇治まで出迎えに出たし勿論順慶は改めて上洛して侍した。奈良中からは神人百人、地下（じげ）衆一町より十人ずつ、肩衣、袴にて木津迄出迎えた。蘭奢待は帝の勅許がなければ切れずと遣いの壇重友や筒井順慶に対して東大寺側は拒んだ。信長の実力を知らなかった。二十三日順慶は信長の正規の寄騎として迎えられたが辛（つら）い日になった。

元亀二年八月一日辰市城の松永との戦いの節、敵松永は武器弾薬を山程残して敗残した経緯を知った織田は島左近と順慶の実母、大方殿を人質として出せとの事であった。平伏する順慶に信長の小姓がその意向を簡単に伝えた。全く事務的な扱いである。云い方は穏やかであるが情もなにもなくきびしかった。光秀に申し出て、順慶は叩頭三拝して断りを続けたが、許されず信長は光秀を通じて大方殿は、はずせないが、島左近でなければならぬ所をこれは又譜代の筒井の重臣、ならばあの戦いの時の副将で掛け替えの無い井戸国秋、良弘の兄弟の中の一人を代わりに出せとなった。

島左近の身代わりは一人ではない。もう一人は貰わねばとなって向井備中守が質となった。順慶は親不孝と云う苦衷と大切な勇将を捕られてしまった。取り分け井戸良弘は折角この時期になって質になるとはお家の為には仕方が無いとは云え無念と涙して別を順慶に告げた。幸い母は岐阜へまでは行かず山城の勝龍寺城（現長岡京市）へそなたの為一族家臣子孫の為ならと悲しみを堪えて井戸良弘、向井備中守等と共に去っていった。井戸若狭守良弘は後織田の将となり宇治槇島城二万石の城主となった。重臣達がいつかもっとよい日が必ず参りますとなぐさめて忍従をすすめたが母が質になるなどとは思ってもみず相済みませぬと順慶は不甲斐無きおのれの不孝と力の無さに一晩泣いた。

さて、二十六日日野大納言資定、飛鳥井中納言雅教の勅使二人は綸旨（りんじ）を戴き厳かに開封の許可を与えたのには東大寺側も驚き謹んで開けた。翌二十七日信長は勅使同道の上、荒木摂津守村重、壇重友、佐久間右衛門信盛、柴田修理亮勝家、順慶等と共に三千余りを引き連れ大和多聞城へ入った。順慶は大和国内の警備や接待のことで緊張したが、重臣達が事細かに事を運びすべては無事に済んだ。

二十七日夜の饗応接待は順慶が仰せつかり山海川の幸を膳に上らせ信長は満足した。順慶にしてみれば大切な母や家の子の為に精一杯のもてなしをしなければと励んだ甲斐があった。季節は移り変わったが日中は城外晩春の里ではまだ鶯が鳴き、空には揚げ雲雀が長閑に囀いていた。生じっか人間に生まれるより春日の杜にねそべる鹿の方がよいなと順慶はフト心に思って恥じた。

同じ織田軍との立場から恨み骨髄の宿敵松永と時には顔を合わす事があっても形式的に会釈するだけで言葉を交わす事はほとんどなかった。何か事をおこせば松永は喜んでその隙をつけねらう。順慶は一族、重臣以下どんな事があっても松永の者と争ってはならぬと厳しく将兵を戒めていた。二十八日信長は有名な正倉院の御物蘭奢待を截った。外にも沈香を蘭奢待と共に多聞城泉殿に持ってこさせたが切ったのは蘭奢待一寸四方二つだけであったと截香記（せっこうき）は記す。八代将軍義政が寛正六年に截って丁度百十年目の三月二十八日の事であった。この後信長は東大寺大仏殿に参詣して帰って行った。順慶以下筒井衆は解放されてほっとした。

四月二日本願寺光佐がまた、挙兵し周囲の織田の属城を次々に攻めたてた。順慶はそんなことはつゆ知らず勝龍寺城へ母を見舞いに行ったが織田軍からの呼出しはなく母としみじみ語りあい母の見送りをうけ別れを惜しんで帰った。織田勢との戦いが再開され石山合戦はしれつを極めいくら織田方が攻めても中々陥落しなかった。

五月に入り信長は伏見にあった三淵藤英の旧城をつぶし宇治の槇島城に都、山城の守護として壇九郎右衛門重友を置いた。

(八)

七月十九日荒木村重、高山右近らは一向一揆が巣くう中島城を攻めてやっと一度の凱歌を上げたが毛利輝元はやがて宍戸備前守元可(もとよし)、来嶋兵太夫、児玉内蔵太夫、飯田越中守等五千余人の乗る兵船二百余隻を以って義昭の迎えに出し鞆ノ浦へ入れた。毛利が義昭を入れた事でことが大きく変わるのではないかと順慶は神経をとがらせたが大した動揺は起こらなかった。

さて、人の一生は精一杯の努力と苦難に耐えながら、剰え(あまっ)時には高き志を抑えて屈辱を受けながらこび、へつらいぎりぎりまで辛抱の上どうにか人生を全う出来る可能性が辛うじて残りそれが残らなければそれもまた憐れとも云うべき人の人生。血のにじむ様な努力の揚げ句に不満足ながらやがてそれなりに安定した最期が迎えられれば上等としなければならぬ事の方が多いと老臣は口をそろえて忍従ばかりを明けても暮れても説いた。

お館様は織田殿のまないたの上の鯉にすぎず、生殺与奪は信長様の意のまま、じたばたせずにじっと我慢することで我筒井家全勢力をより充実することに徹し、その一点に絞って辛抱を全軍に厳命していた。

何も欲しくなければこれ程の幸せはないが旨く出来ているのか此の世は地獄なのかそうはいかぬ。何かの慾が付きまとう。

既に滅亡した大和の豪族の子孫からみれば、筒井家は今をときめく織田軍にあることを羨やましく思う所である。いつかよくなる。きっとよくなると口を極め、また今迄の松永との戦いに比べれば格

段の安穏を有難く思うべしと口がすっぱくなる程毎日経を読む様に、重臣達はたしなめた。

「辛抱する木に花が咲くぞ、よいか、短気は損気。もう先はみえているぞ。今しばしの辛抱ぞ。」本当の苦労がなければ人の苦しみも判る訳ではないし、判らなければ人を疎んじる。

ちやほやされて時代の行方を気位の高い義昭は結構な身分を受けながら気付かずに大切な人生を見誤ってしまった。錯誤の人生であった。まだ最期に殺されなかっただけでも戦国の時代にあって幸せであったと云える。幕府としては亡んだが、元足利将軍家と云う家の徳がまだ義昭に残っていたのかも知れない。全国を統制出来る実力将軍、そんな夢を抱いていたのかも知れぬ。激動の時代に人格に幅の少ない小心の故に徳も権威も失った。

陣中法度

(一)

母が去って懐かしい便りが順慶に届けられた。

元気にしているが、此処に発願した祖先順武以来の祖霊を祭り奉り、そなたのご武運長久を祈願の為の律院の建物の進捗状況は如何がかと認め(したた)られていた。

三月五日母の芳秀宗大禅尼は南都率川(いさかわ)の地に慈明寺左門、福須美兵衛を普請奉行にして一寺を建立すべく建てかけた所で京へ行ってしまいその事が気になっていたらしいが、それはこの度の人質の事

とは関係無く進められていた。

順慶はこの頃しきりに河内の布施城に潜んだ頃によく仕えてくれた向井の娘のカナを思いつづけて偲んでいた。自分の愛はこの女性にこそ捧げ総てを与えるべきであると考えていたが折角大和まで連れ帰ってきたのに程なく逝ってしまった。母が奨めた布施の娘お松は微笑みが少なく不愛想でいつも膨れている様に順慶には映った。いとおしい仕種がなく側室のこの女よりはまだ女中達の方が丁寧に仕えてくれた。いや、わしの心がその様に相手にも鏡の如く映るのだ、と心を込めた言葉を掛けてやっても悋気(りんき)はそのくせ強い割りに冷たく、カナに比べて心は通わなかった。母もあれは石女(うまずめ)、冷たく気の利かぬ女。と漏らしているようすである。第一好みとしては背の高い女は嫌いであった。母は小柄で何事も動けば豆々しいが、お松は小太りで背が自分とほとんどかわらず、髪型の分が順慶より高く大振りにどんくさく動き本質的に抱いてやろうとする気を起こさず好きにはなれなかった。だんだん順慶は顔を見るのもうとましく嫌気がさして味気無い暮らしを身の不徳として甘んじて耐えた。かつて、風邪を引いた母の床までは腰元を伴い側までは来るが形ばかりの見舞いを済ませるとそそくさと自分の部屋へ引き下がっていった。なじると、

「ちゃんとお見舞い申し上げました。」と平然としていた。主人の順慶の食膳に侍べることは決してせず酒食の相手は腰元の仕事と割切っていて招いても知らん顔をして来なかった。

却って母が気使いお松の機嫌をとる始末。離別も考えたがその中よくなるかも知れぬと思い返し、

「なんで、あのお松は。」と順慶に奨めた母は責任を感じ嘆いたがあれにも良いところが必ずあるはずと母を慰めた。今、母が不在で母と松とのことで余計な神経を使わなくて済み、自分の気分が救われるという矛盾した思いがかすめて自分が情けなく、また親不孝者とせめた。お松はなんとなくしんきくさい女であった。順慶はまず奥へ足を向けることはなかった。お松の生いたちが人との接触を好まなかったのだ。父の布施太郎左衛門は義父であり実父は戦いで昔に死んでいた。実父でなくてひがみっぽい性格に育っていたのだ。順慶はお松を里に帰せば更にこの女に不幸の影がおいうちをかけると可愛想だと何事も寛容に赦すことにしていたのだった。みたところはまことにしとやかに大人しそうだが芯は頑固でまず一度でハイッとまともに返事をすることはなかった。

「何故そなたはそう不愛想に振舞うのか！」

「私も悪うございますが、本当は母が悪いのでございます。母がそう教え育てゝくれました。殿御にまみえる時は冷たく、水くさい方がよいと。」

「なに！　なんという躾じゃ！　その母をこれへ呼べ！」順慶は責めた。

「ハイッ」珍しく返事した。

「義理ではあるがそなたはお松の母故、儂にも母にあたるそなたに尋ねるが、主人へのもてなしに妙な躾をしたとお松が申すがまことか？」

「はい。この戦国の世故尚更殿御に仕える女にとっては至難の苦しみ。耐えられるものではありませぬ。」

「…………」

「いつ戦場でお果てになるやら知れたものではありませぬ。それ故情を浅くしておきませぬと残された者はたまったものではありませぬ。いつまでも生涯涙を友としてかなしまねばならぬことになりまする。」

「ウーム、妙な理屈じゃな。」

「わが姑が妾めにそう躾られました」

「なにそなたの姑がか？　松にとって祖母じゃな。埒もないことを申す者じゃな。そのババもこれへつれてこい！」

「はゝ」小姓が去ってお松の婆がきた。

「代々布施家では妙な躾をいたすが何故かようなひがんだことを！」

「仰せの通り、妾も左様に姑から強く言われ守って参りましたが、それもこれもお松のひい婆さまが、そのまたひいひい婆さまからのことと聞き及びます。」

「最早、この世におらぬもの。なにがヒーヒーひ婆さまじゃ、知らなんだ。布施次郎はそれでは今でも死んでから大分たつのに未だに浮ばれまい。左様な家系とは知らなんだ。」順慶はその家の根性がいつまでたっても変らぬ馬鹿さ加減にあきれかえってしまって言葉もなかった。歪んだ家系であった。

さて、筒井順慶は一族老臣の申し出を受け日常の生活全般は元より大和所領の実情を隅なく視察し村長（むらおさ）の要望を時間をかけて聞いてやり民を撫でまた、織田の令がよく行き届き今まで大和では多少の事は大目に見てきたものの、織田に倣い一層将兵らの軍律を厳しく守らせ自軍をよく統制し、一族老

臣以下軽輩足軽、小者に到るまでその持つ所の意見を聞き、これを用いた。要望を快く取り上げて即、間に合うものから実践に移したが取るに足りないものの方が沢山あった。しかし、丹念に意見の汲み揚げに努力し、時には上級将校の誹りも含まれる事があり事実関係を十分調査の上、適、否を裁いた。

順慶は意見役を設け行政上の得失の是非や自分の過失に一族家臣から遠慮無く意見を出させて議論させた。

さて、予てから憎々しき宿敵、松永の家臣等に対しては同じ織田軍に参陣を余儀無くされて以来筒井全軍は緊張して臨んでいたし、決して争わぬ様軍中法度を敷き戒めていた。

例え松永の者からからかわれても微笑みを以って接すべしとしていてほとんど問題は起こらなかった。

筒井軍の勢力が日に日に回復し重臣達もそれぞれ各城、砦を預かり大和一帯は筒井一党が徐々に浸透しつつあった。ここに櫟本城（いちのもとじょう）を預かる森伝八郎好景がいた。森好之の二男であった。一隊三百を率いて今は南都の筒井本軍に従軍している。

奈良の北口では時折松永久通とのいざこざもあったが、久通が詫を入れ治まったりしていた。

扨て、河内枚岡（ひらおか）の石黒右近が枚岡神社宮司、水走左近有忠らに謀反の動きあり、と織田軍へ讒言（ざんげん）した事から織田勢の攻撃を受け、遊佐高清、同新右衛門尉、和田左衛門佐、同仁左衛門尉、甲斐庄氏らが平岡城に陣取り織田勢と一戦。忽ち圧倒的な織田勢に囲まれたが、しばらくは持ちこたえた。大和筒井の祖は枚岡を源とする説が有る程親しく因縁浅からぬ間柄である。順慶が河内にあり、不遇をか

こっていた頃、何呉れとなくよく面倒をみてくれた経緯もある。

九月に入り大半が敗走して平岡城は落城、枚岡神社神殿は消失し水走左近有忠の一行は混乱の最中右往左往し、信貴山城を目指して逃れた。何度も松永の命に服して功をあげたこともあり織田に内緒で隠れさせて欲しいと頼んだが、今や松永は織田に服し敵を受け入れる事、かなわじ、として、却ってこれを追った。

敗残の上に追われてはたまらない。

有忠はほうほうの体で旗下十四騎とともに夕まぐれ大和へ入った。

(二)

如何に大和が筒井の支配下にあるとはいえ、順慶は矢張り織田の旗下、だが、密かに水走有忠の一行は筒井城を訪れた。城番で年老いた松倉右近勝重は極秘に城外の件の百姓屋に留め、食を与えて、夜中に彼等の無事を祈って見送った。

有忠の一行は愛憎くの雨の中、今更行くあても無く一里余りの道を東へ進み途方に暮れやがて、横田砦の脇を避けて通り櫟本城を頼った。最早、人も馬も夜中の逃避行に疲れきっており、何でもよい、何処かで一夜のしのぎがしたかった。遊佐新右衛門尉が一人密かに槍を人に預け馬を下り徒歩で門番に告げた。

「ご本陣より火急の密使でござる。ご開門！」

会ってみれば河内よりの落ち武者。

守将森伝八郎不在を理由に一度は断った。有忠らは筒井城へ寄った事は一切云わなかったので憐れに思った留守を預かる伝八郎の弟猪之助好長は一行の姿を見るに偲びず、詳しく訳を聞いてみると水走有忠らには元々罪科はない。猪之助は武勇もあったが、義狭心も人一倍厚かった。城外野小屋で兜(かぶと)や鎧を脱がせ河内恩田村百姓共として、城内長屋にいれたがいくら百姓姿とは云え彼等のきらびやかな太刀や、業物(わざもの)は百姓の身には過ぎ、目立った。好長はこの事をすぐ南都駐留中の兄伝八郎へ使者を以って知らせた。

筒井家には満更これら水走一族とは関係のない者ばかりではない。しかし、例え元は有忠に罪科(つみとが)はないにせよ、一度は織田に弓ひく一党の身。

単なる織田の一属将に過ぎない筒井一統が織田家に対して有忠らを庇う力と、正々堂々申し開きの出来る状況や逐一反証する何ものもなく、有利な立場ではなかった。情に於て偲びなきとは云え、伝八郎は知らせを聞いて窮地に追い込まれた。弟は大変な事をしてくれた。そう思ったが事を荒立てることは出来ぬ。

だが、翌日主君順慶からの使いとして森伝八郎へ召し出しがあった。直ぐ来いとの中身は夕べの事が早くも順慶の耳に達していた。

「これ、伝八、その方の櫟本城に水走有忠一行が留まると聞いたが真か。」父志摩守好之が順慶の側にいて尋ねた。

「ハハッ」
「何故即刻申し出なんだ」
「ハハッ」伝八郎には言い訳が出来なかった。下手に返事をすれば父や我が身のみならず、筒井家一族にも事が及ぶ。
「その方の罪かろからず」
「爺ィ、そうきつく問い詰めては伝八が返事できぬ。もっと穏やかに聞いてやれ。」順慶が諫めた。
有忠一行の後をつけていた松永の密偵が久秀に報告しその夜の内に久秀は筒井家中、中坊左近へ全て、密使を以って遣わし知らせていたのであった。松永久秀は恩を売った。
この次第が織田へ洩れては一大事、順慶以下重臣達は、些細な事から大問題をはらむ結果となった。急ぎ鳩首を集め相謀った。
「……懐に飛び込めば猟師もこれを撃たずとか。」
「いや、この事態にそれは許されぬ。直ちに有忠らを捉えて織田勢に引き渡すのが穏当、左様致さねば守将伝八郎殿に腹を切らさねば相済まず、……」
「ここは、一つ矢張り有忠を捉えて……」森志摩守ら一族は同席しながら身内の事柄、決まるまで一切口出しは出来なかった。松永が知った以上ぐずぐずしてはおれなかったが、決論は中なか捗らない。
「中坊殿、何ゆえ貴殿の所へ松永から報らせがあったのでござる。」中坊左近へ話が移った。
「予ての戦いでお館さまの命令通り松永勢と戦列を共にしたことで、知りあいにはなったが特別の事

ではござらぬ。」
「そんな事くらいで、この度の知らせとでござるのか。」
「如何にも、それだけの事、他意はござらぬ。」
「妙じゃな」
「……その様な事、今は急ぎの時、本来の水走有忠らの事を。」
「おゝ、左様。」
「織田殿に引き渡せば、有忠らはどうせ、打ち首。」
「うーむ、まず、取敢えず直ぐ様有忠殿らを捉えてから、織田家の明智殿へでもお願いして取り成して頂いては。打ち首は何としても理に合わぬ。」大和守護職長岡藤孝は折り悪しく岐阜へ出ており不在であった。
「だが、織田殿に引き渡せば、有忠殿らは間違い無く即刻打ち首は免れぬ。」
「何れにしても、背に腹は替えられぬ。伝八郎、これよりすぐに櫟本城へ参り、有忠らを捉え、そこで待っておれ。追って沙汰を致す。」
「ハハッ」
「重正、そなた直ぐに宇治槇島城の壇様へこの度の事を知らせよ。正直に申し上げた方が将来の為になる。」松倉重正は慎んで順慶の命を受けた。
報告を聞いた壇重友は直ちに岐阜の織田信長へ使いを出すとともに下知を仰いだ。

壇重友からは一両日を置いて返答が届いた。織田軍のやり方は常にずば抜けて全て処置は早く、重友の居る槇島城に於て櫟本城守将森伝八郎好景は守将としての責(せめ)を受け、重友の目前で切腹の事、並びに水走有忠らも槇島城へ同道の上、同日同時刻打ち首と決まった。

森一族のみならず筒井一統は騒然となったが、今更否応は許されなかった。

伝八郎の弟猪之助好景も筒井家より剃髪の上追放と決まった。伝八郎には馬は許されず徒歩で参れとの命令であり兄の縫殿佐好高が付き添い山城宇治槇島城へ向かった。

一日遅れで水走有忠ら一行十五人も槇島城へ向かった。処刑は九月二十七日と決まっていた。

全ての者は最早逃れる事は出来ず、夫れ夫れ覚悟していた。

「兄者人、長々お世話に相成りましてございます。お後の事どうぞ、宜しくお願い申し上げます。何時か、あの猪之助にもそれなりに何か後で、あれは生れ付きあの様な性格、きっと何処かで好かれて過ごしましょうが。」

「心配致すな。父者人が何時も申されておろう。良い日が必ず来る。この様な時代故のそなたの身の上、恨むでないぞ、何事も。」道中兄弟は警護の者等に、はばかりながら、小声で語り合い死別の苦しみを味わいながら進まぬ足を運んだ。

(三)

森伝八郎好景と水走有忠ら一行十五人の処刑が始まる寸前であった。事は慮外の方向へ向かっていた。

水走有忠は百姓姿のまま、むしろに一列に座し、首切り役人は既に太刀の鞘を払い輝く太陽の下、水桶から柄杓でまさに太刀に水を掛けようとしている。

三好一族が萱振城に拠って石山本願寺と手を組み、一揆が猛威を振るった。織田勢は各所を放火して遂に萱振城は落城し、この度の河内枚岡の石黒右近が石山本願寺と通謀の上での虚言が露見して織田軍の佐久間信盛はそれこそ即刻首をはねさせ、この事を京都守護職、壇重友にも使い番が到着し、知らせを届けた。城内の庭、晴天下の下、床几に座した壇重友の元へ緊急の使い番は地面に両手を付いて件の一件を報告し切腹、打ち首の処刑は間一髪、事無きを得て全員釈放、放免になった。

水走有忠らは、鄭重に壇重友に挨拶し、縫殿佐好高兄弟と共に大和へ戻って行った。も少しの所で首が飛ぶ寸前であった伝八郎好景へは飛んでもない思いをさせたと、水走有忠らは平伏して詫びたが、済んだ事として、兄弟は晴れ晴れとしていた。

大和へ着いてすぐにこの度の件で色々筒井一族に迷惑を掛けたと順慶初め重臣一同に森親子兄弟は揃って挨拶にまわった。順慶は喜び彼等一同に盃を与え無事を喜びあった。

(四)

またしても問題が起きた。

松倉重正の臣で順慶が最も神経をとがらせていた松永の家来とのいざこざであった。

筒井にこの度非常な迷惑をもたらした例の水走有忠らとともにいた若い遊佐新右衛門尉は松倉の配下となっていたが、お前等はよくも首が飛ばずに、おめおめと、武士としての根性も無く織田のそれも筒井の配下の松倉に身を寄せ情け無くはないかと罵られた。新右衛門尉はぐっーと堪えたが、更にその雑兵らは筒井一族の悪口を吐いた。雑兵らは筒井の衆は鎧兜や全ての武具、衣装がボロボロで、それでよく戦いが出来るものだとからかわれた。自分の事ならともかく、大恩ある筒井家の悪口は承知できぬ。と辛抱出来なくなった新右衛門尉はその中の一人を殴りつけた。折り悪く、そこへ松永久通一行が通りかかった。

新右衛門尉が牽いていた犬が悪いことに主人の意をくんでその久通に吠え立てて馬が棒立ちになり、必死でしがみつく久通はどっさぁ、と愛馬からずり落ち、しこたま尻を打った。この男、よく馬から落ちる。

さあ、そうなれば家来同志の喧嘩とは訳が違う。

「おのれ、無礼な犬め！」久通は太刀を抜きはらって直ぐ様その犬を叩き切った。

「キャンキャン」憐れな断末魔の叫びを残して犬は小刻みに震えて息絶えた。

騒ぎは大きくなった。血迷った久通は今度は返す太刀で尻の痛みをこらえながら新右衛門尉へ向けた。久通の家来が慌てて止めに入ったが、一瞬早く久通の刃は新右衛門尉の草摺りを掠めた。

こうなれば受けて立つのが礼儀と新右衛門尉が太刀の柄に手をかければ、周囲は人垣が出来て無責任な将兵共が双方へはやし立てる。

ようやく、聞き付けた松倉重正が駈けてきて平謝りに謝って事は治まった。しかし、治まらないのは愛犬を殺された上、この間は敗走中を追われた松永が相手の新右衛門尉。その夜の内に遁走して行方知れずになった。

数日の後、信貴山城に近く、一人の百姓風情の男が、側に鍬を置き、菰（こも）を被って道筋の脇に寝転んでいる。

通りかかった松永久秀が、目敏く見つけ、むさいと悟って森隼人佐好久に見てこいと命じた。

菰を剝げば件（くだん）の百姓は遊佐新右衛門尉、跳ね起き様隠し持った太刀を抜き、隼人佐好久に切って掛かった。

おい、それと斬られる好久ではない。二人の戦いがはじまった。カチン、カチンと両方の刃が火花を散らす。

異常を知った松永の兵ら数名が集り割込んで、忽ち、憐れ新右衛門尉の首が飛んだ。

「今日はげんくそ悪い！」とした、久秀はすぐ道を元に取り城へ返っていったが、調べれば、これが松倉に身を寄せていた、遊佐新右衛門尉であったから筒井の謀略、闇討ち承知出来ぬ。となって織田諸将の集合に合わせ松永はいきりたち、筒井順慶をなじった。

何れ決着となってその日は治まったが譜代の家来ではなく、それもつい先ころ問題の水走一行らの件が治まったばかりで、順慶は緊張の上にも緊張を強いられ、腹部に痛みが訪れた。胃脘痛（いかんつう）を患っていた。胃脘痛は今の胃潰瘍の様であった。

ただでさえ、馴れぬ織田軍の指揮下にあって神経が高ぶるのに、戦い以外の心配事も絶えなかった。
松永久秀は信貴山城で浮かぬ顔をして腐っていた。
「織田の武将は皆、嫌な顔を致しておる。」
近々決着の筈の筒井順慶の問題にも織田側は放っておいた。余り、久秀に織田の武将らは好感を抱いていないのは当り前であった。
久秀は織田の諸将に石山攻めの織田の将兵等は、行儀が悪く向城から夜な夜な出ては我が管轄下の村の娘共に悪さを働き苦情が頻繁で困っているのでそれぞれ取り締まって貰いたい旨申し出た。これが信長の耳に聞こえては総司令官の佐久間信盛の立場が悪くなり信盛は全軍に布令を出し各所に村落立ち入りを厳しく戒めた制札を立て、厳しく取り締まった。所が久秀は信貴山城下所領の百姓の女共を連れては各陣所を巡り女共を一回二百文也でひさがせる。
更にやり方は小汚い。まんじゅうを作らせては織田の兵卒から銭を集める。兵の日当の二日分にも当たるこれも二百文もするまんじゅうを売り付ける。
その頃の甘味と云えば、干し柿か、蜂の蜜であった。そんなものが何時でも手に入る訳ではないし、ここは戦場で向こうから売りに来てくれれば、丁度戦列から離れずに便利に手に入る。そのまんじゅうが日増しに痩せてゆくのに値段は同じ二百文。甘いものに飢えた将兵は競ってそのまんじゅうを買い松永は銭を巻き上げる。
のみならず、堺の商人ベニヤとやらと手を組み、対する石山本願寺へ鉄砲、玉薬を密かに売り込む

事までしていた。
織田軍の二万もの将兵が各所で石山本願寺を取り巻いている中で、こんな事が何時までも誰も知らぬままであろうはずがない。
だが、織田信長はそこまでする松永久秀に対してまだ自軍に留めて置きたかった。
対石山合戦は河川が幾筋も走る摂津の地で戦いははかどらない。松永久秀はその様子からして、無理攻めはせず、弾丸は極力控え、矢は落ちた敵のものを拾って使い、危なくなればすぐに退却しろと部下の将兵に命じていたし自らは茶道具を担ぎ出して、織田の将を招いては呑気に茶を楽しんでいた。

(五)

佐久間信盛の下には筒井を初め、荒木、松永、岡の四将がいたが、順慶はこの久秀のやり方には心の底から嫌気がさしたが、まだ、織田軍では日の浅い順慶には好きな事は云えなかった。同じ戦場でこんな気分で戦列にある事は織田の将兵に少なからず、厭戦気分を掻き立てた。癖の強い松永の体臭が辺りの匂いを嫌なものにする。
十一月に入り荒木村重は伊丹親興を攻め伊丹城は落ちた。この時伊丹城を在岡城に信長は改めさせているが、少しずつではあったが、織田勢はしらみつぶしに石山本願寺の拠点を潰していった。
信長は各地の抵抗を受けてもどかしい毎日を過ごしていたが、分けても一向一揆には手こずってい

た。
初め、総大将の佐久間信盛は張り切って石山合戦に臨んでいたが、無理推しに攻めると犠牲者が多く、やがて緩慢な攻撃しか出来なくなった。おまけに折角戦っているにもかかわらずその気をそぐように時折信長は和睦したりして段々嫌気が刺し、各武将にもこれ程長引く戦いに屢々休暇を与えながら戦わねばならなかった。
お蔭で順慶も正月には旗下の三分の一を大坂に残して大和に戻りゆっくり春日社に詣でて十日余りも滞在しこの三年の二月には薪能を勤役したり京から戻った母と三月には花見に室を連れて楽しむゆとりさえあり、奈良北小路城で飯田頼直と宴を張りまた母の念願であった昨秋完成したばかりの伝香寺に泊まり祖先の回向にも時が持てたし、旗下にも各家庭の味を楽しませ、かつて松永と戦っていた頃とは比較にならぬ日々を過ごしていた。母は勝龍寺城へ再び虜として戻る道すがら、放生川を眺め、山上の石清水八幡宮へ参拝し山下の高良神社へも呉れぐれも我が子の事一族の事を頼み参らせ八幡に一泊し帰って行った。八幡から勝龍寺城までは舟運をつかって一里半程しか離れていなかった。
三月二十三日壇九郎右衛門が信長から大和守護に任ぜられ赴任してきた。
順慶は早速、慈明寺左門、布施太郎左衛門、森志摩守、島左近、松倉右近らの旗下を連れ着任の祝を述べに伺候して寿いだ。

（六）

「この度早々の大和ご着到何よりと存知上、御目出度う存知上げ奉ります。先年の水走の節には何やかやご迷惑をお掛け申し上げ、」
「いや、この方こそ一つよしなに、今後共何かと……」壇重友と順慶は交互に挨拶を交わした。
「所で、これから尚一層忙しゅうなり申す。筒井殿は生真面目なお方故、お体には気をつけられる様に。」
「ハッ、有り難きお言葉、しかし、如何様に多忙になりまするか。」
「殿は丹波、丹後を明智殿に、徳川殿とは武田を相手に、大坂は、三好一統を叩いてから大和から我れらが総力を挙げて佐久間殿の合力を、羽柴殿は中国の毛利を攻め、柴田殿は上杉の備えに北陸にと全織田軍は各地に出向き、来月からはご多忙でござるぞ。伊勢、長嶋が済み、それ以来長らく殿は策を練っておられた由。」
「…………」
河内での戦いがはじまった。順慶は凡そ一万余りを率いて壇重友に従い河内へ参陣した。
例に依って筒井勢は先陣をかって出て、高屋城を囲み、松倉重正は一群三千を指揮して猛攻した。
順慶が無理をするには及ばずと伝令を出したが、振り来る矢弾をものともせず、大手城門に迫ると遮二無二攻めたてた。
敵もさるもの城門の真下に迫った敵を目掛けて石や大木を落として寄せつけず、壮烈な戦いとなっ

た。
　これ以上は無理と悟って重正が引けば代わって島左近が同様三千余りを率いて城門に迫る。順慶が見かねてその日は戦いを避けた。
　翌日は雨。鉄砲が余り役には立たぬ。
　佐久間の将兵が代わったが、頼りない攻め手でろくに戦わずに退却を繰り返す。
　見ていた壇重友が佐久間信盛に文句を付けた。
「筒井殿は壮烈な攻め手、もう少し強く攻めて頂かねば普代の織田の名がなく、我等の恥では。」
「いや、面目次第もござらぬ。」佐久間の兵等には厭戦の気分があった。休暇も総大将の配下では他の織田勢より少なく不満があるのは当たり前であった。
　今でこそ何時も筒井軍が先陣を承ってくれるので良いが以前は何時も佐久間軍が先陣で多くの一族が犠牲になっていた。
「筒井殿、吉報でござる。」壇重友が順慶をにこやかに呼びつけた。
「筒井殿の働き、格別と織田の殿様からお褒めのお言葉があった。筒井に遅れず各将は明日、一気にこの城を潰す、と仰せられているぞ。」信長も河内に来ていた。
　吉報の事は良かったが大和の留守を預かる森志摩守、松倉右近勝重等に治水や興産の為に道路には砂利を敷き、側溝には松板を打ち込んで崩れぬように整備し採油の増産五穀の増収を細かく書き送って指示した。日を追って戦費がかさむ。前線の食料や馬草、矢や鉄砲の玉薬等財政は国許でも逼迫し

ていた。せめてお館様だけは白米でなければと云う家来達の奨めもきかず、
「旗下と同じものを」と云って麦飯を奨励しみずからも頬張りぜいたくを戒めた。米は翌年の種籾を極力残そうと国許も必死であった。
　四月八日、筒井は先陣を承って松倉重正に続いて織田勢は猛攻し遂に根を上げた楯籠る三好笑岩（康長）を松井友閑を以って御詮吉、御赦免候也。となって、三好一統は降伏した。
　順慶は信長から感状を受けた。この度の働き真に見事也。
　順慶は嬉しく重正等を褒めた。
　信長は移動しながら祐筆にせっせと手紙を書かせ、各地の抵抗する相手に降伏勧告文書を送った。
　高屋城の次は本願寺の各所にある寺内町を根城にする各城の攻撃に信長は目を向け十二日住吉へ向かって去った。
　信長は壇重友に命じて河内の各城を潰し始めた。こうなれば残るは唯一つ裸になった大坂石山のみ。とは云え石山周辺には沢山の砦や、小城を配して織田勢に抵抗している。あちこちの湿地帯が巧みに濠の役目を果たして攻めるのには不利であった。
　泥（ぬかるみ）では鉄砲方も安定した姿勢が取れずぐずぐずしていると城方から雨あられと矢弾を射落として飛んでくる。
「筒井殿はこれより、某（それがし）と北河内に参軍されよ。」
　壇重友に従い順慶は枚方、招提、それに山間部の長尾、穂谷、津田に散らばる反織田勢力の掃討戦

に参加したが、この度の戦いが余りにもきつく、言わば骨休めの索敵行であった。
五月に入るとしばらく大和へ戻っていた順慶は岐阜から直接二千の兵と鉄砲五十挺を至急送れと司令を受け森縫殿佐、飯田頼直の子の能直等が岐阜へ向かっていった。
この頃には筒井家でも領内で鉄砲の生産に乗り出しており、商人から購入する三分の一の価格で僅かずつではあるが手にする事が出来る様になっていた。

長篠の合戦

(一)

天正三乙亥年夏五月、織田、徳川連合軍七万余りはそれぞれ一人ずつ長い丸太棒を担いで武田が囲む一路三河の長篠城へ向けて順次出発していった。連合軍の実戦部隊三万六千余りに、二本ずつ杭を担いだ雑役人夫が従軍し総勢七万余りになっていた。織田は五万、徳川は二万。
信長は兵を十五隊に分かち十八日設楽に軍し極楽寺に陣す、と。相手はその数一万五千余騎、国中天下に豪名轟く勝頼の指揮する最強の武田騎馬軍団であった。
近畿の諸将を初め各地の武将等も直接参加はしなくとも、この長篠の戦いには何等かの形で出兵していた。
佐久間信盛もこの時右軍の将として大和勢の森縫殿佐、飯田能頼等を従えて参戦した。またしても

出費が重なったが、織田家さえ、天下を統一してくれれば天皇国家日本は鎮まり我筒井家はもとより民百姓に到るまで塗炭の苦しみを救い無用の争いから逃れる事が出来る。そう思えば何のこれしきの出費くらいと喜んで森、飯田等に別れの杯を与え大いに働けと激励して参戦させた。
さて、鉄砲隊三千を三隊に分け織田、徳川連合軍は柵内で敵が数歩に迫るまで発砲させず、騎馬軍の進入を阻み武田騎馬軍団を迎撃した。弾の詰め替えに要する換発の間を攻め込む武田の戦法は全く外れ二十一日黎明に始まった戦いは敢え無く潰え去り、一万三千のしかばねは丘をなし武田勝頼は二千余りの残兵を纏めて引き揚げた。三段構えのこの戦法は信長が考えだした優秀な作戦であったが、その後やっと約百年の後イタリアで使われるまで世界中で唯一つ日本の独自の鉄砲使用作戦であった。織田、徳川連合軍は殆ど無傷であり森縫殿佐、飯田能頼等五百等も一兵も損なわず無事大和へ戻ってきた。森、飯田の二将は興奮さめやらず、戦いの凄まじさをつぶさに順慶や重臣達に報告した。織田信長様はすこぶる奇抜な戦法をなさるものと筒井家では目をみはって驚いた。同二十五日徳川家康、前田利家、羽柴秀吉等は更に武田軍を追う事を信長に進言したが、信長は師老いて（我が軍は疲れており）無理せずに帰途に着いた。
この時も戦勝報告をしたが、桶狭間の時もそうであった。大事な戦いには必ず、信長は往復の途上熱田神宮へ参った。
七月に入り信長は上京し勅して毛鞠の候に列せられ、清涼殿で天盃を賜りその上で、部下の武将の事を、

《……爵位は足りました。勲功のある我が武将に叙爵を願い奉り……》と帝に奏上し、柴田勝家、佐久間信盛、林通勝、滝川一益、明智光秀、丹羽長秀、蜂屋頼隆、羽柴秀吉等十人が従五位下に叙せられたとするものと羽柴秀吉、明智光秀、原田直政（壇九郎右衛門重友）、河尻鎮吉、梁田政辰、武井夕庵、松井友閑等七人が叙任されたとするものがあるが、何れにしても織田の家来は出世した。この時壇九郎右衛門重友は信長から原田備中守と名を改めよと云われて改めたが、丹羽は惟住（これずみ）、明智は惟（これ）任（とう）の姓を受けた。この後信長は永年苦労してきた部下の将達へ、云った。お前達にも領地を増やしてやりたいが、今は与える寸土もない。加、越を取れば与えようと、越前、加賀の一向宗を信長は攻めさせ、みずからも岐阜をでた。総軍八万に及ぶ師を敦賀まで進めた後、若狭からは丹後の守護一色義道が軍艦数百隻を以って加わり挟撃した。虎杖城（いたどりじょう）の下間秀敏、同述頼等は朝倉景健に切られ、朝倉景健は信長に投降を乞うたが許されず向久家をして誅せられ破竹の勢の織田軍はたった七日にして加、越を平定し一万数千の宗徒は悉く斬られて死んだ。ここでも多くの屍が山をなした。九月に岐阜へ戻り、十月八日には令して、自軍の移動を迅速に進める為道路の整備と夏の通行に利する木陰の為に並木を植える事を尾州の街道筋に図った。大坂攻撃の為直ぐ京へ上り、石山本願寺の動きをみた。加賀、越前の強力な一族一向宗徒の敗残に光佐等は顔色を変えたが、和議の道を同時に考えていた。

十月二十一日また和した。

(二)

信長にしても未だ、石山本願寺の勢いは侮り難く、無理な攻撃は控え、その代わり京及び堺の名のある十七の茶人を妙覚寺に集め利休にてん茶を点じさせて楽しんだ。御大将がそうなら、と云う事でもないが、大和に戻っていた筒井順慶は母の大方殿や慈明寺左門の室、布施太郎左衛門尉の娘で順慶の室（妾）の冬子（後、松）、小田切宮内少輔春次の室、森志摩守好之の室、それに養子の藤四郎定次等を連れて春日の杜に紅葉狩を久しぶりに楽しんでいた。折から一陣の風と共に小雨が降った。「時雨を……いそぐ……紅葉狩……」と順慶はうたい乍ら一杯口にふくむと急いで成身院へ向かいさらに徳蔵院が宴の用意をし終日宴に果てて北小路城に泊し後筒井城へ帰ってきた。気楽な休養の日々であった。

一方ではこの頃、山名氏政が織田に援軍を頼み、小高い丘の多い丹波で明智軍は必死で黒井城を囲む最中であった。

光秀の努力の甲斐あって大半の者が光秀に降伏又は一味した。帝は信長の力を御認めになられ十一月詔され、信長を権大納言に任じ、ついで右近衛大将を兼ねさせられた。しかし、良いことばかりではなかった。息子信忠は数ヶ月も攻めていた岩村城が落ちず、秋山晴近は木曽義昌に援軍を要請し木曽義昌は信忠を攻めたが破れず秋山晴近は夜営を襲ったが、却って敗北し遂に秋山晴近は飢えと兵の疲労から降伏を願い出た。手こずらされた苦さから信長は晴近をはりつけに処した。晴近はしぶとく、かつて初めに信長が攻めたのに失敗しその上で息子の信忠が攻めたが時間が掛かりすぎ、いらいらが

昂じてはりつけにさせた。勇武の士の末路があわれであると大和にいた順慶は聞いて不安をかくせなかった。

「戦さは嫌いじゃ」子供の頃からの気持は長じても決して変わりはしなかった。

天正四年正月、信長はここ岐阜では余りにも京は遠く、予てから琵琶湖の側に築城を考えていた。

近江の国、湖東の蒲生郡安土目賀多山であった。信長は何度も湖上を兵を率いて渡っている。滑るが如き船の速さは大軍の移動に、これ程便利な物はない。京に何かあれば直ぐに役にたつ便宜があった。湖上遙かに西は比叡、比良の峰々を望み湖北は目が届かぬ程遠く、北々東には伊吹山が高くそびえていた。伊吹山へは数限りなく負傷する将兵の為に百草園をこしらえて薬の開発を考えたが、信長は何事にでも真剣であった。

二月二十二日畿内、尾張、美濃の諸国に安土城天主造営の工事を命じて築城が始まった。自分は安土に在り、息子信忠を岐阜に置く計画であった。惟任（これとう）光秀に監理の役を命じ惟住（これずみ）長秀に奉行させた。

多方面に作戦を展開させながら、同時に築城にも意を注いだ。だが、一方この頃毛利の一族小早川隆景は配下の松浦党に毛利一族の申し合わせとして、元将軍足利義昭を奉じて都へ攻め上る準備の為の軍船を急造せよ、と二月二十五日に書面で強く指示を出した。大坂の石山本願寺との合同作戦で織田軍を破る事にあった。

折りしも昨十月二十一日和睦した許りの本願寺がまたしても背いた。案の状毛利、吉川、小早川等毛利一族が背後から予想通り糸を引いていた。

四月二日光佐は塁を海口に列ねて西の海上から運ばれる食料、矢弾を速やかに受け取れる砦を造った。

信長は直ちに荒木村重を派した。村重は米穀の上陸を阻止すべく野田、長岡に砦を築き、守口に陣し、明智光秀、原田長俊、筒井順慶等は天王寺に砦を築き石山に備えた。

光佐は更に木津、難波、楼岸等に城を築き粟屋元宣等がこれに拠った。順慶は出陣の度毎に藤四郎定次を伴い、戦場の厳しさを身を以って教えた。圧倒的な織田軍のなかにあったとは云え、毎日どこかの隊の将兵が幾人も怪我や、死者となって運ばれてくるのを見ると張り詰めた緊張の中で常に見るものをして恐怖を感じさせた。今は乾いてどす黒く濁った血だらけの顔をよく見ると、目の当たりから切られたのか飛びだした目玉が半分ちぎれ頬にだらしなく垂れ下がっていて、顔を背けたくなった。首を取られた死体は別に珍しい事ではなかったし、割に奇麗な死体はたった一発の弾で急所を貫かれたものであった。戸板で運ばれて来る者の中には当たり構わず大声で喚く者がいた。大抵は足か、手かを切られた未だ元気のあるものであった。瀕死の者は最早声を出さなかった。

戦いは双方とも悲惨としか言いようが無かった。

伝役

「世間はこの身を喰いものにしたくてうずうずしているものが沢山いるぞ」順慶は定次に順々と諭し

た。

「…………」

「身近には、こうしていても、虻や蚊、蚤にしらみ、蜂や百虫の虫の類、それ、今そなたの顔に蚊が止まっておる。まさかとは思うがここでは大きな声では云えぬ事だが織田殿も場合に依っては旨みのある間だけ吸えば離す、虻かも知れぬぞ、心は決して許してはならぬ。」世の中は油断も隙もない。身に一杯の危険が待ち受けている。油断や隙を少しでも対手に見せれば、そなたが餌食(えじき)になるのだ。もっと怖いことは人の策、律儀そうな忠義者でも場合に依っては平気でそなたを裏切る。幸い今この筒井にはその様な者はおらぬが、大切な身内と思っていた者さえ、松永に寝返った者がいたのは、そなたも十分聞いていよう。恨みを買うでないぞ、策にも注意致せ。一つ間違えばあの首のない者のように何所で頭(こうべ)を晒す事になるやら知れたものではない。年若い藤四郎定次は目をらんらんと見開き生唾を飲んで黙って聞いていた。その通りである。そう思って聞いていた。彼は純真でしかも流石母が見込んだだけあって利発で、素直であった。

　真面目な順慶は実子では無いだけに自分の養子にした以上、強い責任感で一生懸命に育もうとし、その都度気が付けばあれこれと定次へ言い聞かせた。軍略駈引きだけではない。その他、武将としての礼儀作法やしきたり、筒井家の歴史、家臣達の扱い、大和の風土や春日神社、興福寺、東大寺、成身院等の事。今の筒井は大和の国の人々からどれ程期待されているか、など事細かに教えた。伝役(ふやく)の役とは異なった父としての立場であった。東大寺は昔から強引な興福寺に荘園、寺領を侵食され近く

にあっても必ずしも仲はよくない。

「我等は常に春日の神に詣でて、皇国の一日も早い静まりで帝の御心を安んじ奉りその上で我等自身の武運長久の祈祷をなし、成身院では我等のために、事あるごとに読経を捧げ息災を念じてくれている。」

　事実筒井順慶は一身に大和の国人から棟梁として信頼と期待を集め、様々の人々が宗旨、宗派を問わずそれぞれの立場で戦場にある順慶の為に何時も祈りを捧げていた。

　筒井は大和の全てを知り、大和の国人は順慶を熟知していた。あれこれを思うと順慶の心は身に余る程の心配や焦りがあり神経は時には過敏に反応した。しかし、暴虐に振舞う事なく、我が身を徹底して抑え平静を保ち、対面を重んじて家臣達を大切に扱った。この戦国の世にあって真に模範的な武将であった。故に一族の結束は殊の外堅く、家臣団も忠義ものが他国に比して多かった。永年松永との戦いで全てがより一層内部を堅いものにしていた。

　四月十三日信長は義昭が館とした二条第(にじょうてい)をぶちこわして安土城への移築を京都所司代、村井長門守貞勝に命じた。翌日の十四日からの戦いは毎日しれつを極めた。信長が敷いた糧道を断つ持久作戦は徐々に効を顕せていた。信長は河内全域を攻めさせ河内古市城なども周囲がつぶされて裸になり落城したがその頃、信長は京にあった。佐久間信盛に一時代わって惟任日向守光秀が石山本願寺攻撃の総司令官となり、天王寺に付城を築きこれを守って合戦に臨んだ。

　従う将は長岡藤孝、原田直政、荒木村重、筒井順慶であった。繰返し攻防が続いたが、付城はあと

四、五日も持たずと信長へ伝令が走り信長はわずか百騎を率いて疾駆し若江に来た。京からは所司代村井も京を留守にして参戦したが敵は河岸に城を備えて待ち受け、村井貞勝は河に入り敵に向かったものの、続く兵士も馴れぬ泥沼での戦いに接戦では不利であった。信長は我が河内にある三万余りの軍勢の勢の振るわない事で焦ったが仕方の無い事であった。

信長は若江城に到着して後続を待った。佐久間信盛、羽柴秀吉、松永久秀等がまず着いた。

第五章　大和守護職

一国安堵

(一)

一戦で勝利を得たかと思うと翌日には織田方が破られて後退し、その翌日には再び織田勢が圧倒して勝った。

……以天王寺茶磨山要害ニ築。佐久間甚九郎信勝ヲ入置。大坂ノ為押。原田備中守ハ木津ヲ可攻ト命。信長公御帰洛。干時五月三日。明智日向守。筒井順慶ハ大坂ヲ押ヘ。原田備中守。使三好山城守先陣ヲ攻木津難波。鈴木孫市。数万挺ノ鉄砲ヲ以セリ合。三好敗走。原田攻入。主従中鉄砲死（主従鉄砲にあたる）。……織田方が攻略中、遂に五月三日原田備中守直政が乱戦の中で摂津の三津寺で戦死。……堀一重柵ハカリニテ。甚九郎走廻。タヽミ戸板ヲ柵ニトリツケ防戦。明智筒井モ城ニ入。……

同五日。……先陣佐久間信盛。松永久秀。永岡藤孝。二陣瀧川一益。羽柴秀吉。丹羽長秀。池田信輝。

三陣ハ御旗下ニテ押寄給フ……

反撃した織田勢は一城を落として勝利を得たが、上記の通り土塀はなく戸板や畳を代りに使用したと云うから防備は大して出来なかった。また堺まで出た織田勢は十河因幡守、香西越後守等を攻めた。彼等三好党はたまらず織田の松井友閑をして降伏を申し出た。あちこちで戦いの終わった出城などから煙が上り、天王寺はこの時に燃えた。周囲は織田勢がしばらく抑えたが、しかし、この戦いでは筒井衆にも三百を過ぎる多くの犠牲者がでた。

《和州一国一円筒井順慶可有存知之由、信長ヨリ明智十兵衛、万見専千代両使ニテ被申出之由、従森弥四郎折紙ニテ成身院ヘ注進在之》国元は戦いの激しさを直接には知らず、結構な事として大いに喜んでいた。当の順慶を始め一族重臣達の喜びは一入（ひとしお）であったのは当然ながら、嬉しさの余り幾筋もの涙が皆の頬から滴り落ちた。勿論一早く虜となって長岡にいる母の元へ順慶が知らせたのは云うまでもない。母の喜びは如何ばかりであったろう。母は子の栄達を一言、「今日まで辛抱し、筒井の名誉をよくぞ、此処まで回復してくれました。」と云ってその苦労を労り褒めてやりたかったが身は虜であった。

(二)

十日信長は大和の守護原田直政討ち死により筒井順慶を大和守護に任じたが筒井家始まって順武公以来大和守護となったものは誰一人居なかった。皆守護代であり守護は代々興福寺が兼ね、最期は原

田備中守直政であった。行政的には畿内は織田信長の意のままになっている。だが順慶は祝事どころではなかった。毎日激しい戦いが続きかつて、将軍義昭との宇治川の合戦の砌、船を頼んだ山城久御山の水夫共を集めに走り、また国許大和へ至急男児は参戦せよと使いを出したが、最低限ギリギリの各居城を守る将兵以外は大和の根からの武士達はもう一人もいなかった。十五歳以上の男なら坊様達まで出て欲しいと誘ったが流石に驚いた坊様達は大般若経を読経して大和衆の勝利を祈るので勘弁して貰いたいと返事が来た。

ここで旧原田備中守の家臣から大和一国を引き継ぐに際し、料紙一枚と云えども原田殿の物は限無く勝手に処分する事なく差出せ、と厳しく布令を出し大和の行政の第一歩が始まった。大和の事は今や原田でも松永でもなく、全て順慶の行政下にあった。十市城の松永金吾派と筒井派との争いを中止させる為、浄田、松田の両使を送り、喧嘩の出来る余裕があるなら少しでも直ちに大坂へ出陣せよ、と松永への内政干渉ではなく、命令出来る立場に順慶はなっているがその時実際には来る日も来る日も苦しい戦いの中にありただ永年の苦節から一歩抜け出た様な壮快な出来事の中にいたのである。

とは云え大和の民は極端にひえいし、それでも敢えて矢銭を国の者達から徴収しなければならなかった。極力節約し麦飯で辛抱しても足りなかった。民も同じそのつらい中、民は順慶の徳をしたい惜しみ無く矢の増産に野鍛冶屋に鍬鋤の生産を遅らせても鉛をとかせ弾をつくらせ、矢じりを打たせた。更に鉄砲の量産にも協力して励み銃後から必死で支えてくれている。兜類の傷みも酷く修理もしなければならなかった。また分けても原料の南蛮鉄に玉薬の代。鉄砲は高くついた。生産だけでは追いつ

かず、織田を通じたり根来まで直に買いに行かせ十、二十挺と集めてようやく体制を整えるのに精一杯であった。おまけに食料生産も戦で田畑は踏みにじられ連年の干ばつ、翌年の水害と飢饉に見舞われた後遺症が残り、まだまだ乞食の数は減っていない。その上での矢銭を懸ねばならぬ立場の順慶は身の細る思いであった。代価は迅速に支払わねばならない。手間賃は遅らせられなかった。民百姓の支持がなければ戦には勝てぬ。順慶が大和一国の守護となっても状況はすぐにはよくならないし管轄地が増えただけで実収は遠く及ばない。栄誉だけで腹は膨れず他の織田の各将の格式に応じた装備や兵糧、軍馬の数に併せるので出費は続くばかりであった。

(三)

さて、勝利もつかの間、六月五日信長が安土へ戻った隙に毛利輝元、小早川隆景の兵船が本願寺の食料欠乏の報を聞いて九百隻を大坂に向けて出発した。水軍との戦いには歩卒が幾ら居ても物の役には立たず、竿や、櫨を操る者が織田勢には必要であった。

勿論織田信長は予てから小畑、九鬼の主力水軍を手配して戦いに備えてはいた。運河の日常の兵員輸送には順慶が連れてきた山城久御山の水夫共も用を足した。

僅かな移動にも湿地帯では船は欠かせなかった。

扨てもさても、強力な毛利の小早川隆景が率いる伊予の村上水軍九百隻の軍船と尼崎及び木津川口に海戦し、織田方は完敗、多くの将兵は海の藻屑と潰え去った。毛利の水軍は真に強かった。鉄砲や火矢を駆使して海上を鷗の如く旋回し自在に小船を操り、波を楯にして陸（くが）の将兵を寄せつけず小船が小畑、九鬼の両主力水軍の間を疾風の如くすり抜けて火矢、鉄砲を射込み織田の船は火災を興して手が付けられぬか、または襲撃を受けて憐れ主無き船となり、船は敵の占する所となった。七月十三日毛利軍はやすやすと糧米を貝塚から揚陸し石山に入れた。だが、石山は戦いには勝ったが無傷では無く、二千七百余りに上る者が討たれていた。

信長は敗北を喫し安土へ戻る道々、あの毛利の水軍を破る策を馬上でゆられながら考え必ずあれを破るぞとほぞを噛んだ。

急いでいた安土城の天主閣が完成し、信長は機嫌よく我が安土城の威容を誇る天主閣を仰いで満足した事であろう。

安土城については標高凡そ二百米の丘に【〔須弥山の山頂にあるという梵天帝の城を具現化した〕理想の城であり、七層の天主閣は安土山上にそびえたち、朱黒の漆光は金色の瓦当と日光に映え、光彩燦爛眩目の城郭は翠杉の間にそびえ、遠影湖水に活画図を浮べたり、是れ実に我邦築城法の革新にして、また天下の偉観たり】壮麗であった。天主閣は八、九カ月の工事で完成した。

織田は喜びに湧く一方、他方では再び加賀、石川で一向衆徒が活発に反織田を掲げて騒ぎ出した。

何時までも執っこい連中であった。

人の営みには何時まで経ても変わらぬ生理の事がある。

石山本願寺との戦いは長期の滞陣で陣中には大名は特別の物を用意して他の将格とは区別していた

が、その他は仮設とは言え立派な厠（かわや）の棟が軒を連ねて総司令官佐久間信盛の数名の歩哨が周囲を常時警戒に当たっていた。

将兵が無闇矢鱈な所で用を足そうものなら、何時敵に狙撃されたり、槍で串刺しにされるか判ったものではなかった。

これまで幾人がその犠牲になった事か、殊に一揆は今で云うゲリラであり大人しそうな百姓が急に隙を狙って襲う事を常套手段としていた。後に秀吉が刀狩を厳しくしたのはこれら農民一揆の再発を極度に恐れたからに外ならない。

各部武将級等は伴を二三連れて来る事もあるが部隊の将校は大概単騎で来て勝手に馬つなぎの杭に駒を止めて然るべく用を足した。筒井と松永勢は陣中隣同志であった。

筒井軍五百を預る森縫殿佐好高がたまたま用足しにやってきて松永軍にいる森隼人佐好久と出口で出会した。

「おゝ叔父貴！」と縫殿佐好高は思わず叫んだ。

「やあ、お縫か！」二人は偶然の出会いに吃驚したが、そんな事もあろうかとお互いの無事を確めあった後で、予ねてから連絡の言葉を用意していた。

件の老婆から詳細は聞いた。だが、その後はどうしているのか一族は心配していたと手短かに語り、隼人佐好久はあの様子ではその内きっと松永等は反織田の旗を掲げて翻るに違い無く、それこそ松永最期の時、その時には必ずみずから連絡に走りお役目を果たす故、是非遅れる事無く、抜かり無きよ

うと念を押した。筒井を思う健気な叔父の隼人佐好久の姿に思わず知らず、縫殿佐好高の頬には涙が溢れ出た。

「叔父貴！」縫殿佐好高はたまらなくなって両の手を差出し好久の両手を掴んで握り占めた。

呉れぐれもお館様や一族の者によろしく伝えてくれ、それに、わしの妻や子にも。好久も泣いていた。ほんの一瞬一時の出会いであった。

積年の恨み、今までどれ程松永に苛め抜かれた事であったろう。しかし、互いの連絡が着いた事で筒井一族は心強く思う一方で心変わりのなかった好久の忠節を余計憐れに思い、その苦労の程を慮った。

（四）

安土城が出来て気分の良い信長に加賀の一揆再発は五月蝿く映った。ここは柴田勝家が守る所。家来の毛受家照をして攻めさせ勝利を治めた。余りの素早さに信長は柴田を褒めたが、武井夕庵は信長を諫めたという。

《公、いまあらたに加越二州の捷報（しょうほう）を聞き、しきりにその武を奨揚す。……もし知らずして法令をおかす者あらば、よく教えをほどこし、善に進めんと欲するは、これすなわち君子の道なり……むちの助にあらざるなり。云々……請う公、この病根を断つときは、すなわち兆民慶によらん。》と治政について小難しい事を述べた。しかし、意欲満々の信長はそれを《よし》として聞き入れた。

足乳根

十一月に入ると信長は上京した。
叙爵の事であった。正三位を受け、内大臣に任じられた。
筒井城には森志摩守、島左近、松倉右近等を留守居役に残して直ぐ様筒井順慶は一早く、養子定次を連れ太刀二口金子百両、奈良晒百疋、奈良柿五箱等を献じて安土城へ伺候し祝すと却って信長からは駿馬五頭、縮子十巻等沢山な土産と今後の大和一国の事、重々怠り無き様全て委し置く故、呉れぐれも頼むと有り難い信頼の言葉を貰って帰路に付いたが京に寄ったりして末の二十七日春日若宮の神役を果たした後、筒井へ帰ってきたのは三十日であった。
その月十五日の夕暮順慶の母は山城の勝龍寺城から伴衆や、侍女を引き連れ自由の身となって懐かしい大和へ帰って来ていた。安土城から帰ってくる息子を母は鶴首の思いで待っていた。かつて主人順昭が戦に勝利を治めて凱旋した時には確かに勝利を祝い、無事を喜んで出迎えたが、息子順慶が勝利を治めて帰って来た時には勝敗だけではなく、無事であるだけでも心の底から嬉しさが込み上げてきて主人を迎えた時とは別の喜びが感動と成って噴き出る思いを抑えるのに重臣達を前にして我が身の慎みの無さを恥じる程であった。それがこの度は大和の守護職である。母は息子の顔を見るまで心配であった。今や立派な武将となって最早母が心配する事は何一つ無かった。しかし、今にして思えば早くして父順昭を失い行く末は、どうなるものやらと心配した幼き日より、慈しみ引き伸ばしたい程、この子の生長を待っていたのに今や押しも押されもせぬ大和一国の主である。順慶が帰り着くと母は抱き締めたくなる様な雀躍する心を抑え満面微笑をたたえて出迎え、双方の無事を喜び合った。胸に熱いものが迫る。
「母者人！」順慶の頬は大粒の涙がしたたり落ち、万感が全身をふるわす。
「おゝ、藤勝……」と呼びなれた昔の名で呼ぶだけで母には発する言葉も無い。戦国の強い母とて普通の母と変わり無くただ、ただ嬉しいばっかりであった。
「母者人！」母はうん、うんと首肯くばかり。その夜は母子を囲む温かい宴が何時までも続いていた。
人一倍皇国の戦乱を憂い、また一入順慶は誰にでも温情豊かに接し様と勤めて努力していた。
帰ってきて聞いた報告には世話になった惟任日向守光秀が病気である事を知ると作外成身院へ使いを出し、平癒祈願を依頼した。多聞院日記には諸事多忙の最中、この事を
《明智煩付、従筒井彼坊舎衆七人へ祈祷事被申、信（真）読配巻在之……》とその月の晦日に記した。
日増しに信長の信頼が増して行く順慶に比べ伊勢の北畠具教は信長に危惧を抱かせ二十六日怪しんだ信長は具教を殺した。さて、去る七月の戦いで織田勢敗北に快くした本願寺光佐は吉川元春に、義昭を奉じて一日も早く入京すること、周辺海域防備の為淡路岩屋城に番兵を入れて制海権の確保に努めて貰いたいと改めて強く要望し、毛利勢は呼応して番勢を岩屋城に入れた。
十二月に入ると近畿圏では紀伊の畠山貞政が雑賀衆の一向宗徒と和泉の衆とが相呼応して貝塚に栖

籠り各所に砦をこしらえて威を張り益々日々勢力は膨れ上がっていった。

大和の西の丘を越えると直ぐ、河内であり、そこから和泉は近かったし順慶は神経を高ぶらせた。

信貴山城落城

(一)

信長は多忙の中で小忠実（こまめ）に今の時代に比べようもない事だが色々なことをした。取り分け今なら実業家か政治家のゴルフをする姿に似て暮れも押し詰まった師走。紀伊の雑賀衆根来衆等が砦を増築し日増しに激しい戦さの為に準備が急がれる中で二日にわたり伴を連れ吉良で鷹狩りを楽しんだ。鋭い目をキラキラ輝かせ勇壮に羽根を拡げて舞い上がる鷹の姿が好きだった。

《儂に翼があれば》信長はそう思った事だ。

大空からの鳥瞰（ちょうかん）図がどの様であるのか興味は尽きなかった筈である。

その暮れも過ぎて明けて天正五年正月、もう紀伊の騒動は放って置けなかった。

九日には嫡男織田信忠も尾張美濃の総勢三万五千の大軍を率いて父の後を追い紀州へ向かった。

信長から順慶にも出陣の要請が来ていた。

二月十四日迄に河内古市城へ参着せよ、であった。

打ち続く出陣にこの度は敵の鉄砲が織田の数と互角乃至はそれ以上であり充分心せよ、との口上が

付いていた。

出陣に先立ち帝を遥拝し奉り我が身の事は素より一族一兵に到るまで無事に勝利を治めて凱旋出来るよう如月の五日夜を徹して二月堂に籠り祈り続けた。如何に激しい戦いが予想されたとは云え歴代の誰もしなかった事である。

《今夜二月堂参籠了、希代ノ事也。》

「この度の戦は並の事では済みませぬ。どうぞ、最後までお見捨てなく守らせ給え。」幼少の頃に森好之等から神祭る時神居ますが如く、仏祭る時仏居ますが如く、と教えられ母もそう云ったしそれを守り続け、今もまた真剣に祈っていた。今日まで何度危ない目にあった事か、しかし、これまで生きてこれたのは矢張神仏の守があったからである。

そう信じきっていた。東山の不遇な生活で時には苦戦の揚げ句に天をも怨んだ。日頃これ程皇国の平和と我が大和の鎮まりを願い、武運の安泰を心から真剣に天に祈り神仏に一日として怠らずに祈りを捧げ願い奉り疎かにした事など一度も無い積もりなのになぜ、天は悪逆の勢を扶けまともな我等が敗北しこれ程苦しみ傷めつけられねばならぬのか、神仏はあるのか無いのか、この祈りがどうして神仏に届かぬ。そう思った事は一度ならずだ。だが、否、天も神、仏も必ずある。そう思い返し仕えてきた。今日はもっと順慶の気持を高ぶらせ冷厳な程真剣味が益して未だ寒い堂に籠もり明け方まで祈願し続けた。

(二)

さて、雑賀衆は五郷が三緘の者であった。彼等は本願寺から厳しい農民支配のおきてを受けている。信長は彼等の分裂を画策し二月十三日その五郷の中、宮郷南郷中川郷の三つの組織が杉之坊に応じ織田との内通に成功した。根来の杉之坊とは一代の豪傑である。佐賀府知津の伊佐平治の三男で幼名を弥千歳といった。二十歳の時高野山に入り将来を嘱望されたが乱暴者で放逐されたが鉄砲に詳しくこれをよく駆使して壮大な根来寺を根城にした。山内の坊舎八十余り、建築物は二千七百を越えやがて領地は七十二万石に達した。総大将織田信長は京を経て大坂の戦いの様子を見て再び京へ戻りついで西高野街道から堺に出た後、岸和田に陣し更に二月十五日に河内の若江城へ入った。紀州へ向けて出発する準備で東西の両高野、磐船の各街道筋は織田勢が列をなし人の入れる神社仏閣は云うに及ばずその他の大きな民家は織田の諸将に占拠され廃城になった所へでも人馬を収容出来れば上出来であった。八尾、飯盛、古市、萱振、長尾、津田、穂谷、太田、若林、藤井寺、天王寺、狭山、西代、伯田、大県、高屋の各城は和泉を囲む様に織田の諸将の指揮する将兵で溢れ返り、河内は参集する将兵でごったがえし屯する将兵に混じって荷駄類が山積され陣所には軍馬や警備兵、将旗や旗指物が林立しみぞれまじりの寒風が旗をうならせていた。信長は伊賀から二男信雄伊勢から三男信孝等も参陣させる程この戦いを重視している。

勿論大和の筒井、松永、山城の村井、河内の佐久間、摂津の荒木、越前の柴田、近江の明智、播磨の羽柴、丹後丹波から瀧川、長岡の諸将が将兵を率いて総大将の信長の下へ日を追って陸続として参

着した。河内の佐久間、摂津の荒木等自身は軍を割いただけで無論本人は石山を抑える要であったから来ていなかった。

遂に総勢十五万余りに及ぶ織田軍の隊列は進軍を開始した。その雲霞の如き大軍の隊列の中に順慶等筒井衆も混じり紀州へ、紀州へと動き出した。

別にこれ程の軍勢は必要ではなかったが相手を威嚇するのには充分過ぎる人数であった。

全軍の出発に際し信長は和泉の香ノ荘に陣取り手始めに貝塚の本願寺道場に火を掛け一向宗徒を血祭に上げた。ここ貝塚は昨秋毛利の水軍が米穀を陸揚げして石山に協力した所であった。

雑賀衆の鈴木孫市、一向宗徒は畠山貞政らが織田勢に勝る鉄砲で対抗したが織田の勢の盛んなるをみて雑賀衆の三緘の者と杉之坊等が降った事は先に記したが、次々に城塞を織田勢はしらみつぶしに攻撃し既に先発隊が三百余りの首級を上げて進軍する。織田の本陣は佐野郷に営を移動して中野城を攻め一宮、十河、太田垣の砦は戦う前に離散してついえ去った。

杉之坊等を道案内にたて比較的地理に詳しい佐久間や荒木の兵がこれに続き羽柴秀吉、堀秀政の諸将が三万の軍勢を率いて夜中山に添って土豪と戦い多くの兵に犠牲者を出しながら進み筒井順慶、瀧川一益、惟任光秀、惟住長秀、長岡藤孝等は海浜の丹輪口（淡輪）から南進し矢張三万余りを率いて上陸を敢行した。ここで長岡藤孝の将兵が幾らか損害を被ったが敢えて尚攻めて百五十余りの敵を討ち信長も陣を丹輪へ移し信忠は中野城へ入った。日増しに織田の勢は強くようやく三月一日瀧川一益、惟任光秀、惟住長秀、峰屋頼隆等が雑賀城に立て籠もる鈴木孫市を巻き攻めにして下した。翌日陣を

若宮八幡宮に移すと不破道貞等が根来口を強引にせめて火を放って首領の土橋平次や岡崎三郎太夫、松田源太夫、宮本兵太夫、蔦木左衛門太夫、岡島三郎太夫等がようやく降伏した。ここで根来の杉之坊と津田太郎左衛門に佐野城を守らせてこの度の紀州攻めは終わった。

三月十二日京へ戻った信長は紀州の鎮静を帝に奏上すると予てから気になっていた禁裏の築地土壁修築を洛中の町人にさせる様、所司代村井貞勝に命じて安土城へ帰って行った。

(三)

「お館様、合戦に張合いがございませぬ。」筒井の家臣等は織田軍に組み込まれてから日頃の戦功も大勢の中では人目に立たず御大将の順慶は何でも織田の言いなりに従うばかり。

重臣達も軍議にでる必要はなく順慶が軍議の間、馬の手入れや武具の繕いで手持ち無沙汰。これでは鳥の羽づくろいじゃ、と精がなかった。

「何を申しておる。結構な事ではないか。命を的にする愚がないだけ有難いと思え。その様な事、滅多に云ってはならぬぞ。」と戒める始末であった。

「百も承知で」と自覚しているが合戦が本職。大軍の中では退屈であった。

戦も昔のようにこの大軍の中ではひとかどの敵の騎馬武者を相手に槍を交わす分けでもなく、刃を交える様な凄絶な組打ちの事も先陣の隊だけで筒井勢には機会は少なく皆役立たぬ我が腕を擦るばかりである。従来から合戦は一番最後の手段である。開戦の以前には余程の事がないかぎり必ず敵に降

伏を勧告している。

最近の合戦は鉄砲足軽同志の撃合から始まり敵の鉄砲隊が静まれば騎兵を撃ちその後歩兵に照準を合わす。陽動、奇襲、伏兵、敵の誘い込み等千思万考の限りを尽し、戦略、戦法は技術的に高度になっていた。軍勢の多寡もあるが合戦は、より知恵のある方が勝つ。順慶は長篠の合戦には直接参加していなかったが、この度の戦いで鉄砲の凄まじさをより一層深く知らされた。

根来攻めは只織田軍の中に混じって付いていっただけの事ではなかった。国許大和へ帰り着くとまずは神社仏閣に帝の安泰を願いこの度紀州攻め参陣の事、無事に相済みとその旨の奉祝の為に参詣し筒井城へ戻ると鉄砲量産に拍車をかけ次代の戦いは正確に狙いを付けて敵を討つ狙撃の訓練に重点を置いて将も兵も射撃に励むよう重臣達に命じた。

順慶は平野での戦いや騎馬との合戦で決められた配置に陣を敷くと鉄砲隊を二手に別け一隊は正面の敵に向けて撃たせもう一隊は待機させておいて敵の騎馬軍が動き出したら騎兵ばかりを狙った。だが早く駈け抜ける敵は中々、的になりにくく簡単には討ち取れなかったが足軽が慣れてくると命中率は上がった。

大和から到着する新兵を選抜して機敏なものを鉄砲隊に回して訓練させやがて精度は徐々に上がりつつあった。一度に沢山やってくる分けではないが父や兄、叔父や知人等について新兵達はきた。重臣達が選別するのを見ていると青年達は緊張して各隊に編入されるが概して身分の低い者の中に思わぬ沈着、剛胆なものが多く混じるのに順慶は頼もしい物を覚えた。中堅の将校級の子弟が一番役に立

ちにくく重臣の子は始めはどうにもならぬかと思える者も大体が面子を重んじやがて重要な働きが出来る様になっていった。たまに中には水呑みの若い者が切望してきて入れてやるが始めは大人しいものの僅かな勲功を二、三手柄にすると急に鼻に掛け横着になり度胸はあっても行儀が悪く大和へ帰らさなければならなかった。二階堂村の水呑みの子は夜中に人の給金に手をつけ密かに酒をあおった。法度により切るのが常道であったが、報告を聞いた順慶は忍びずまげを切り大和へ戻る輜重隊に潜り込ませて帰らせた。また中には給金を貰うと行方不明になる者もいる。井戸国秋が何時かの戦いで、とある村の孤児(みなしご)になった嬰児を養って豊秋と名乗らせたが実子でない事を知りその事で僻んだ揚げ句口喧嘩をして義理の従兄弟の井戸定秋を切ってしまった。井戸国秋は井戸定秋討ち死にとして大和のその母へ人足をつけて死体を送った。養子ながら豊秋のその才を国秋は大事にして自分の子以上に可愛がっていた。が放っておく分けにも行かず順慶に謀ったところまだ若いのに殺すのは可愛想そうだと順慶は云い、二人だけの秘密にして明智日向守を陣処に尋ね豊秋をつれてたまたまこの者は筒井勢にあって鉄砲が旨く今迄に幾多の功もあり殺すに忍びず何をさせても良いので預かって貰えればと頼み込んで処理した。

旗下が増えれば戦い以外の事も増えて煩わしかった。

(四)

さて、上から部下を見ると何をしているか本人は知られていないない積もりでもよく見える。

信長は紀州攻め参陣の松永勢の動きを惟任光秀から聞いていた。陣中で信長も直に松永久秀に久しぶりに逢ってみると老いも手伝い何所か精彩に欠け上目遣いに信長に応答していた。今正に遙かな山の端に西陽が入る寸前のきらびやかな安土城の天守閣最上の間で信長は光秀に再び大和の松永の事で尋ねていた。

「猿と信盛から又しても久秀が光佐とひそかに遣いを往来(ゆきき)……確たる証拠はないと申してはおるが」

「まさかとは存知上げまするが或いはあの男なら謀りかねまする。」

「ウーム、矢張りそちもそう思うか、後々の用心最早その時期かも知れぬ。祐筆を呼べ。」信長は祐筆に京の所司代村井長門守あての書状を認(したた)めさせ書状は伝令によって長門守に届けられた。筒井順慶にも手伝わさせて大和多聞城を至急破却、と云う事であった。原田直政についてかつて順慶は河内の各城の破却をして回った事があり無駄にある城を破壊するのは信長の戦略の一つであった。

五月、僧同志の葛藤の続く高野山で人の心の争いが摩擦して周囲に熱を招き民衆とも遊離し、やがて形を変え俗と聖の区切りである山門を野火は燃やし山門は轟音を立てて倒壊した。織田とは戦かわねばいずれは滅ぼされるとする者と他宗は他宗我々は金剛の教えを大切に守ればそれが仕事とする者達との醜く激しい争いがあった。

さて、永禄三年五月築城以来、足掛け十八年戦国期最初の四重の層を持つ画期的な多聞櫓を施した草分け的な多聞城であったが京都から早速、村井長門守は出張り愈々取壊しが始まった。順慶は南都中の人夫を掻き集めて合力したが、筒井衆の下級の武士達は積年の怨み骨髄のこの城の取壊しに喜々

として人夫を追い立て破却していった。秋風の吹く七月には石垣を残して完全になくなり、また同七日京の都の四条大橋の修復も完了して畿内の整理を着々と信長はすすめていた。
　順慶は信長が都の整備や警護を厳重にしたり宇治の橋を架け直したり伊勢神宮の遷宮に献金したり石清水八幡宮の木樋を修復する等と聞度に自分が出来ぬ事をする信長は自分と志を同じくする皇国の忠臣であると思って尊敬の度が増した。

(五)

　さて、大和守護の地位は順慶に奪われた上この度は多聞城をつぶされ久秀はみずからが冒した過ちでそうなった事は棚に揚げ
「おのれ、信長め！　今に見ておれ。」松永久秀は愛着の強い多聞城を破却される事で頭に来て辛抱出来ず密偵を大坂へ走らせた。
　折り返し光佐の書状には共に信長を討つべしと認められてあった。
　信長にしてもそうすぐに叛意を催すとは思ってもみなかった。織田の有力武将は今、上杉謙信の破竹の進撃に大童である。柴田勝家を総大将にして、この春根来を抑えた諸軍の瀧川一益、惟住長秀、前田利家、羽柴秀吉、佐々成政等は北陸に大作戦を展開中であり再び紀州の雑賀衆がこの春信長に内通して破れた恨みを宮郷、中川郷、南郷に向け戦いが始まった。織田の勢力が半減した隙を狙い久秀は八月十七日の夜天王寺の付城定番に三百余りを置き総司令官の佐久間信盛にも黙って残りの全軍を

纏めて信貴山城へ帰ってしまった。帰ると高々と信貴山城に叛旗を翻した。
　もっと早く反織田の旗を揚げたかったが松永久秀の家臣の中、石山本願寺とは派の合わぬヤソの者等がいて久秀の決断を鈍らせていた。パードレ・オルガンチーノ、パードレジョアン・フランシスコから洗礼を授かる者摂津、河内で五千人に上った。
　元々自分の勢力圏の摂津、河内の衆にはヤソに帰依するものが沢山いたし石山本願寺の遣り口が余りえげつないので懲りて一向宗徒から逃げ出した者達だ。救いの権威である信心深いはずの坊様から戦いに出よ、と云われるのでやりきれない。来世は極楽と云われても今の今が苦しみで一杯である。
　それに比べるとヤソの神様は優しかった。
「主よ、我等を許しし如く、彼等を許し給え。」
「主よ、今日一日の神の御恵みを感謝し、明日また御心の儘に運ばれますように。」
「汝の隣人を愛し、敵をも愛せよ。」
「汝の右の頬を打つ者あらば、左の頬を出して打たしめよ。」
　寺の号令一下、戦いに狩出される日々を逃れ民衆は神々しいばかりの言葉を聞き、愛の言葉に酔い神聖な神の御名を崇め、たちどころに魅かれていった。
　だが、反織田を掲げた以上否やは云っておれない。
　雑賀衆の反乱で佐久間信盛父子は大坂を空けて紀州へ向かい、羽柴秀吉は天王寺の付城へ配下の中村一民、堀尾吉晴等と急拠入り、これを知った本願寺は天王寺の付城を囲んだ。

信長はじっとしておれず筒井はただちに和泉迄至急参陣せよと命じ嫡男信忠を連れて安土城を出た。順慶はえらいこっちゃ、と思いながら七千余りを率いて和泉久米田へ直ちに駆け付け織田諸軍に合流した。

大坂、紀州で戦うのは良いとしても大和と河内の間の軍事上最大の拠点である要の信貴山城に陣取る松永久秀が河内の織田軍を攻めれば腹背どころか三方を相手に織田勢は戦わねばならず、懸念して一応松永をにらんだ形の陣形を敷いていたが順慶にしてみれば気が気ではなかった。

信長は今、未だ松永とは正式に戦いになった分けではないので正使は松井友閑、副使には大和興福寺成身院を選び、その二人を松永に遣わした。何故急に何が気に喰わなくて反旗を翻すのか場合によっては許すのでなんとか説き伏せて来いと命じて松永離反を食い止めようと計った。

《何ヨウノ子細カ、存分申シ上ゲ候へ、委細ヲ聞届ケラレ、御裁許アルベキノ由……》

だが、久秀の今度の離反の意思はかたく最早下る素振りは毛頭無かった。

怒った信長は久秀から佐久間与六郎が預かっていた人質二人を一つ車に牽かせて都の六条河原で斬首刑に処して曝しものにしてしまった。

逆臣久秀に恨みを持つ群衆がそれ見ろ、と思ったが信長のどぎついやり方に恐怖を覚える者等は顔を背けて幼い二人の人質のなれの果てを憐れに思いそっと手を併せて立ち去った。都中はその噂で持ちきりであった。

信貴山城に陣取る松永久秀の勢力は息子右衛門佐久通、入江大次郎永種、同大五郎政重、石成小次

郎春之、並びに岡周防守、古市左近、鷹山主殿頭、菅田備前守等騎馬三百余り、諸士その他八千余人である。

ここ信貴山は周囲から盛り上がり人道以外は一歩道を逸れると薮が生い茂り、楠、杉、かやの大木に覆われ人馬の歩みもむつかしい並みの上りではない急坂であった。

（六）

信貴山城の山頂には多聞天を祭り、幾つもの高い楼閣の柱は朱が映えて夕方、立ち並ぶ石灯籠に火が入ると尚一層美しく、暮れゆく空に雁の列見えて高層楼閣の塔を越える。

山頂に到るには法隆寺前の道の王寺街道の龍田明神の側からの登り道と、河内からの間道、大和側からは平郡谷（へぐりだに）からと生駒山からの間道などがあったが正面の王寺街道からの道は殊に険しかった。

貧すれば鈍するの例か。

一月前まであった久秀のもう一つの城、多聞城があれば戦略上、云うことは無かった。山城からの敵の侵入を入口で阻み大和をへいげいする事が出来る。多聞城破却の前であれば或いは信長を久秀はしとめる事になったかも知れない。

ともかく順慶は河内へ出陣はしたものの本国大和が気になった。大半ではないが相当の兵力を率いて参陣している。

大和に残った者は確かに筒井家の最重臣達ではあったがまだ惚けのあるものは無いにしても森志摩

守好之はもう五十の半ばを越え、島左近清興の父も老いており松倉勝重ももうそれぞれ晩年を迎えていた。

元より短い時間で護身の立会い位は出来ても皆口は達者であるが歴戦の勇士とは云え戦に出て陣頭指揮をしたり数日に渡って激しい戦いが続けば体力が続かない者達がばかりだ。

「筒井法印殿！　お上より、火急の御命令でござる。」

「ハハッ、これにおりまする。」陣中へ信長から騎馬の使い番が来た。

「法印殿はこれより至急御陣払いの上、磐船街道を避け東高野街道から八幡を迂回して大和へ戻り松永攻めを大和からしてもらいたい！　尚、詳細は後刻当お使い番が追ってご連絡に参上の予定、以上！」順慶が申出た危惧を信長も気付きすぐ手をうった。

「承知仕りました。直ちに大和へ戻りまする。」俄かに陣を払って大和を目ざして無事筒井へ帰ってきた。

直ぐに大和全域の各城へ騎馬の伝令を走らせ愈々松永攻略の手筈を整えにかかった。大和の城や砦に類する大きなものは五十を越え旗色を示さない松永の拠点が十以上ある。織田、筒井に組み従う城は三十を数えたが南部ではまだ松永は大きな勢力を張っている。その中で順慶の筒井平城から宿院辻城、雲井城、戒重城、島城、西の城、森屋城、氷室城、天満城、高田城、窪城、豊田城、大西城、越智らの越智本城、貝吹城、佐田、高取の各城、超昇寺城、井戸城、福住城、郡山城、細井戸城、高樋山城、櫟本城、郡山付城、白土城、辰市城、番条城、野垣内城、竹下城、九条城、江堤城、兵庫城、

内膳城、新賀城、柳本城等へ順慶の緊急指令が走った。これに対する松永方の諸城は次の各城を占拠していた。岸田城、伴堂城、幸田城、片岡城、十市城、竜王城、十常山城、それに本城の信貴山城等であった。

各城の連携も敵松永と筒井方の城が入り組み孤立する城が双方にあって複雑に絡まっていた。

信長が順慶を急ぎ大和へ帰国させた大きな理由の一つは河内、和泉の織田軍に松永が攻撃を掛けて織田の勢力を割き、その上もう一方では大和へ雪崩込んで攪乱させる両面作戦の可能性を慮った。

十市城は故十市遠忠の娘お料が松永金吾の妻となり松永を推すものと筒井を支持する二派に別れお料を中心に紛争が絶えない。猶他の城でも事情は同じであったし織田と反織田の者のとの区別が難しい城もあった。松永久秀が檄を飛ばせば一万や二万の勢力はすぐにでも集るかも知れぬ。

信長は順慶さえ大和に戻せば松永はそう簡単には動き得ない。万一松永が大和へ攻め入れば逆に背後の河内側からその隙に信貴山城を突けば良い。かくして松永勢は釘付けとなった。

即日の中に松永、織田内府に抗すの報は時を経ずして大和中に知れ渡り順慶は出陣を前に私怨もあるが義憤である。帝の足下を騒がし続けし悪逆の徒筒井衆の心意気で叩きつぶすのだ。今こそ命を捨てよ、美名を天下に轟かせる好機到来と叫んだ。全軍の顔付きが変わった。織田信忠を総大将として長岡兵部大輔藤孝同嫡子与市郎忠興、次子頓五郎藤忠、惟任日向守等が南都へ入った。筒井城には慈明寺左門、福須美兵衛、島左近、森志摩守に留守を守らせ順慶は藤四郎定次、箸尾宮内少輔高春、楢原右衛門光之、小田切宮内春次、小和泉四郎左衛門秀元、井戸十郎国秋、松倉弥七郎重正等五千余人

を率いて織田軍に合流し総勢四万余人は十月朔日十重の備えをしていた。第一陣は地理に明るい筒井軍が承り勇躍して法隆寺に著陣した。この辺りは順慶いまだ青年の砌、松永との並松の合戦で危うく一命を落としそうになった所でしみじみと省みた。場所は同じと云えども事情は攻守所を替えこの度は松永を最期迄叩きのめし例え不幸にして我身は果てるとも織田の諸将は必ず積年の怨みを晴らしてくれようぞ。と改めて心に秘め、いにしえの武将の如く生れたからは戦わば国の為、死ぬのは帝の為と、もののふの心意気に満ち溢れ兜の緒を締め直した。

(七)

難攻不落の信貴山城を最期の楽しみと云う分けではないが、まず、支城の小城を手始めに海老名兵衛友清、同助九郎友久、森藤五郎正次等一千余りの松永勢が立て籠もる片岡城を囲んだ。連続して筒井軍は波状攻撃を敢行し猛攻したが敵は筒先を揃えて死に者狂いに反撃し力みかえる筒井家中二百余りが負傷したので信忠は無理をするな、と注意しやむなく退却した。

翌二日、惟任日向守が攻め三日は一日鉄砲のみの交戦であった。四日は払暁より五百の鉄砲を全面に出して入れ替わり立ち替わり片岡城へ弾を打ち込み最早城方から筒音の響きが絶え城門を打ち破った織田勢二千余人が狭い城内へ乱入した。城内は上下の将兵が折り重なり剣を抜く者さえ一人としておらず雑兵の生あるもの二十余りが降伏して落城した。

折角長岡与市郎忠興は一番の兜首一つを得たが誰であるも判らず、海老名等は既に切腹して果てて

いた。

順慶は信忠卿に願い出て幸い十市には筒井に味方するもの甚だ多く之より十市城へ参り出来れば双方に無益の犠牲を少なくする為、説得に行きたく申し出た。

順慶はただちに五千の軍勢を引き連れ急ぎ十市城を目指したが、柳本衆からの伝令に途中で出会い既に十市城は内外呼応の上、城主松永金吾は切腹し落城したと聞かされた。

筒井を支持する一同の中にも幾人か犠牲者があり順慶は残念に思ったが仕方が無かった。百余りが留守を守り、残りの全軍は間もなく順慶の筒井勢に合流し信貴山城攻撃に参陣の予定と併せて伝令は伝え、順慶は軍を帰し南都へ向かった。

一方同五日に若し順慶等筒井軍が信貴山城攻撃の第一陣を承ればその一の城戸を預る飯田甚次郎基次と交戦する事になったであろうが十市城へ向いた後に織田勢三万五千余りの長岡勢が一の城戸で甚次郎基次の甚しい抵抗を受け、あっけなく二百余りが討たれそびえたつ石垣から真下に向けて弓鉄砲を浴びせその他七、八百に上る多数の負傷者が出てその日は引いていた。

いつものことながら上向きに攻める戦いは寄手には誠に不利であった。しばらくは四万の軍勢は取り囲むだけに留め時折り鉄砲を射て敵を誘ったが出て戦いをする気配はなく長期戦の様相を呈した。

信貴山城内の松永久秀父子を始め部将達は如何に勇将多く城は急坂の上にあり堅固にして堀は深く水脈は豊富なりと云えどもこのままではいずれ糧道を断たれ弓矢、弾薬の底を尽し、じり貧になって最期は餓死か突撃の中に討ち死になるとして焦り今にして手を打たねばと謀っていた。

織田勢の囲みをくぐり抜け大坂石山本願寺の光佐上人に応援を受け、更に毛利への手引きを併せて光佐上人に頼まなければならないがその重要な手段に誰を使うかでもめていた。入江大五郎は一の城戸を預る飯田基次に命じて一度筒井に入れさせ折りを見て大坂へ向かわせればあの男は勇将にして律儀の一徹者、義にも厚く情もつよく裏切りはないので安心だ、として基次を推薦し一徹故の武骨者、却って敵に見破られやすく、また因縁浅からぬ筒井に降る事は考えられるとして反対する者の二派に別れた。

　同じ筒井の縁ならば森隼人佐好久があると石成小次郎は云い、両名とも人物に問題はないとしながら、隼人佐好久は日頃愛想もよく機智に富み武勇も人並み優れて力あり、まだその上に万一の時には敵に一人で一泡吹かせる位は朝飯前と議論は伯仲した。石山にさえ連絡が取れれば、背後には毛利が動いて大軍を率いて大坂に到れば、今は幸い織田勢は北陸で上杉に手を焼き、今や武田勝頼が上杉と手を握りその上一向宗徒が上杉について反織田の旗を揚げている。一つの流れが替わればこの信貴山城を囲む織田四、五万の兵等何程の事もない。

　万一事細かに光佐上人からお尋ねがあっても武骨だけでは説明も叶わず器用な森好久でなくてはと大勢は好久を推した。そうなれば好久は弁も立ち、また、人を動かす方便も心得、何と無く初対面でも好感がもてる容貌である。

　久秀は悩んだ揚げ句その一人を選んだ。

　あれ程儂しに尽くし仕えてきた好久、如何にも元は筒井の臣とは云えまさかはあるまい。万に一つ

そんな事があるのなら儂も老い腐ってきた鯖の目、そうなれば諦めねばならぬ。この度は好久に信を預けようぞ。腹は決まった。

　果たして九死に一生が得られるか。重大な決断を久秀はした。すぐに祐筆を呼び二葉の書を認めさせ一つは光佐、もう一つは云うまでもなく光佐を通じて手渡してもらう毛利一族の本家毛利輝元へであった。

「……命セシハ是松永ガ家運ノ窮ル所ナリ……」好久ハ渡リニ船ヲ得タル心地シテ……八日の夜、松倉弥七郎の陣を目差し松永の謀略を伝えた。

　元の筒井家での名前が伝助、順慶の積年の使いを文字通り伝え助ける働きをした。

　さて、松倉弥七郎はただちに夜中、順慶を起こして隼人佐好久を伴い子細を語った。

《……大悦限リナク、先ヅ酒盃ヲ与ヘ、当座ノ賞トシテ金子三十両ヲ好久ニ玉ハリ。》弥七郎重正と打合わせの上、隼人佐は箸尾宮内、楢原右衛門佐の兵二百余人を光佐上人から派遣の軍勢に仕立て上げ十月九日の夜河内の平野の庄に隠し入れて大坂へ行った振りをして直ぐに信貴山城へ戻ると首尾を報告し密かに山越えして兵を入れた。

　城内からは喜んで縄梯子を下ろし迎えいれた。

　好久は松永久秀の前に出るとしゃあしゃあと大坂では光佐上人とは直（じか）に会い快諾を得、取り急ぎ精兵二百を授けられ毛利へは明日にでも通謀出来れば数万の軍勢を上らせるので松永殿には今しばし奮戦し持ち堪えて貰いたい。この度のその方の役向き神妙につきとこの通りご褒美として金子三十両を

頂戴致しました。と順慶から貰った金を差し出した。

「ご覧の通り」松永主従は大いに喜び手筈はなれりとして守備を疎かにせず徹底交戦を叫び各城、砦、各柵の守将へ万難を排して死守せよと改めて厳令した。

（八）

一方筒井順慶は織田信忠郷へこの旨火急として届出、明十日払暁より某（それがし）八千余りを率いまして鯨波（とき）の声を合図に真一文字に攻め上りますれば敵は内謀を知らず我軍を弓、鉄砲で上から雨、あられと射込みましょう。

我勢が総崩れを起こせば敵は一の城戸を開け飯田、石成、入江等は追い討ちを掛け崩れるを幸いここが先途と迫りまする。我旗下、小田切、小和泉等にはしばし支えさせて戦う中城内より頃合いを見計らい我手の既に入城した箸尾、楢原の二百は森隼人佐が案内にて城内要所の各所に放火致しますれば敵は城内よりの謀反と慌てふためき混乱を重ね遂には総軍にて芽出度ご勝利間違いなく是非先陣を承りご承認をと申し出た。翌十日筒井順慶はわが陣を十の隊列に編成しかって松永に居たからと云う訳ではないが先陣一番隊に箸尾宮内に二百五十人を当て二番は松倉重正の三百五十余人、三番隊小田切、四番楢原右衛門尉、五番森縫殿佐、六番、七番……本陣順慶本隊二千八百とし各人に色鮮やかな三寸幅で一尺の緋の巾を兜につけさせ同志打に意を含ませた。攻撃に先立ち順慶は筒井全軍に語気鋭く顔面を紅潮し大声で叫び気を吐いた。獅子の咆哮であった。

「者共に告げん！　全軍徒歩（かち）ぞ、敵はここが先途と激しい戦いになる。最早多言を要せず。今日が限りの命である。永年よく苦難に耐え、皆このわしを今日まで助けてくれた。最後の筒井の美々しさ、後世に名を残すはこの秋（とき）ぞ、決して生きる望みなど一切持つものではない！　大和衆の心意気ここに示さん。知っての通り、この城には森好久と飯田基次がいる。気付けば戦わずに通すのだ。いざ、織田信忠様の攻め太鼓に合わせ一番隊に続いて敵を討たん、敵を皆殺しにするのだ！」

「おゝ……」筒井勢はこれ迄これ程どぎつい言葉を順慶から聞いた事が無い。順慶の言葉に奮い起つ。

「ドドーン、ドドーン。」折りから打ち出す総攻撃の攻め太鼓。

おびただしい鳥獣が泣き喚き空を覆い地を一杯に駈けだした。

「それ！　攻め太鼓ぞ、者共遅れるな！」枯れた松葉の香りを踏みにじり、

「登れや！　登れ！」交戦する両軍から矢弾は空をおゝって地をくらくし、双方におびただしい死傷者が一瞬の中に山をなす。

手筈通り戦いが始まり積年の怨み今日こそ雪ぐべしと先陣を承る筒井勢は必死の思いで急坂の信貴山城を這うようにして木の枝にしがみつき、蔓草を握ってよじのぼり激しい戦いが始まった。手は脚半を破って甲も掌も茨の刺で既に皆血だらけに染めている。

敵松永方は弓、鉄砲のみならず無限にある辺りの大木を切り出し手頃に切り揃えて筒井勢目掛けて三、四人が高々と掲げると下の 群がる筒井軍に投げつける。阿鼻叫喚が上がる。悲惨な戦いであったが尚も怯まず次々と筒井勢は上を目差した。一番隊箸尾宮内の二百五十人は箸尾宮内みずから槍を

握り先頭に立って叱咤激励、督戦を咽喉から血が吹き出す程激しく将兵を急き立てる。

おりしも敵城内に轟く百雷の響き、火薬庫に火がついたか、天地は鳴動し轟音一発火の手が上がった。瞬間にして火柱が天高く舞い上がる。忽ち今度は城内を逃げ廻る敵は城壁に身を乗り出して火の粉を払う様子が下から窺い知れる。

百尺の下は堀、水までは程遠いがそれへ飛び込めば火は消せる。大きな口を開けて水は待つ。こうなれば戦いどころではない。一人が勇を決して飛び込めば後を追う者数知れず次々に叫び声を残して落下していった。

筒井軍最後尾の御大将筒井順慶は旗下の見殺しは出来ぬ。と、本陣に詰める重臣が止めるのも聞かず、怪しく光る家宝の銘刀筒井丸を抜き放ち箸尾の一番隊に迫った。

「ドドドッ、ドドドッ。」間断なく松永方も箸尾の一番隊目掛けて鉄砲を射込んでくる。猶も怯まず順慶は前に出ようとするのを目敏く見つけた松倉重正、楢原右衛門尉、森縫殿佐等各隊長が鎧の袖を必死で掴み腕を引っ張り抱き付いて留める。

「ここで、お館様に万一の事でもあれば我等はご先祖様や、母者人様に何と申し開きが適いましょう。今のお姿は匹夫の勇、お止め下さいませ。」と皆は涙をためて押し留める。猶も順慶は興奮し、

「最早滅亡間近き松永の鉄砲に当るこの順慶ではないぞ」とたけり狂った様な順慶もお後は某等が先へ進みますと云いのこして松倉重正、楢原右衛門尉、森縫殿佐は駈け出していった。今は心を鎮めようやく順慶は後方に引いた。

筒井勢が奮い起つと続く織田勢各武将達も筒井を討たすなと先を争い敵陣深く切り込んで益々戦いは激しさを増した。

紅蓮の炎が各所に立ち上り落城は最早時間の問題であった。

城内八千余りの軍勢は混乱を極め一の城戸を守る飯田甚次郎基次は最早これまでと知ると無数に飛び込む織田勢の鉄砲の中をかいくぐり入江大五郎、石成小次郎に叫んだ。

「今日にて松永も滅亡なり、すぐさま殿上に参り主君父子の介錯をし給うべし、それまでこの基次が守り抜く、急がれよ。」と怒鳴りつけ松永の郎従石井大蔵正春、北市才助等五十余人と盃を交わし槍一つを抱えて今や最期の一戦に挑むべしと立ち上がった。

周囲は松永、織田両軍の屍が丘をなし血と鉄砲の硝煙の臭いが辺りに漂い折りから細い糸の如き小雨に煙る櫓の下の石積みに腰掛け五十余人は飯田基次の下に最早この城も見納めとしみじみ最後の時を迎えていた。

各砦から伝令が走ってきて報告する。

「飯田殿、三の櫓の衆、中野太郎兵衛殿以下悉く討ち死に！」

「外の状況は如何に」

「城外へ出て交戦中の三木判太夫殿が行方不明でござる。その他の事は存知ぜぬ。最早、大軍織田勢は各所で蟻がよじのぼる様に石垣を次々に乗り越え味方は混乱して互いの連絡はもう無理でござる。もうどうにもならぬ……」

云い終わらぬ内にあっ、と叫んでのけぞりその伝令は鉄砲弾を受けて即死した。

「いざ、最後ぞ。覚悟致せ。再びあの世で再会いたそうぞ。」

「おゝ、では各々がた、おさらばでござる。」火がついて崩れつつある城戸の方を全員槍や太刀をしっかりと握り直してにらみつけた。強火の下をかいくぐり織田の将兵二、三人が手柄を求めて必死で城内へ駈け入ってくる。次々に上を仰いで駈けのぼって行く。

「あれ、あのように織田勢が登って来るぞ。」飯田基次の踏み出す一歩を皆は待っていた。

(九)

いま一歩踏みだそうとする刹那、そこへ森隼人佐好久は駈け足でやってきた。

「おゝ、ここに居られたか、お探し申しておった。」

「おゝ貴殿もご無事でなにより、して、この合戦の最中何どこの基次へのご用でも。」

「さても、その事でござるが、この度の戦いは筒井一族の遠謀、貴殿は確かに、松永殿に永年養われていたが、臣下にはあらず食客の身、これより我等と共に筒井本軍へ戻ろうでは御座らぬか。」筒井の縁族、例え織田信忠様からこの一の城戸にて奮戦の事をとがめを受ければ某しの一功を以って願い奉り、死を懸けて貴殿を守る。遠慮は不要、かつ、元々筒井の一将、討ち死にだけは思い止まられよと涙ながらに説得したが、甚次郎基次も涙して、貴殿が芳情充分過ぎる程判るが浪人してから松永の食、五千表をはみ《……今此ノ落城ニ及ビ義ヲ見テ為ザルハ勇ナキナリ……》逃げ出す事は出来ぬ。

二人の会話を五十余人は聞かぬ振りして背を向けていた。

貴殿が反間の士である事は薄々知らぬでもなかった。それが貴殿が筒井家から出された使命であれば止むを得ないこと。若し、他の者が反間の士であるならばすぐにでも叩き切る所であるが、同族であり、知らぬ顔をしてきた。

《足下モ仕ヘテ禄ヲ食トキハ其難ヲ避クベカラズト云フ……》

勘気にふれた兄頼直にも立派な死を黄泉で報告し許しも得たい。戦陣で勇武の働きが出来ない事は武門の恥辱、ここは死華を咲かせたい。と好久の説得には応じず、理路の上で好久は顔を赤らめ恥ながら、そうまで云うのなら仕方がない、と双方互いに暇乞をして別れた。

その間にも織田勢は激しく攻めよせ、入江大五郎、石成小次郎等は松永久秀の前に出て切腹を迫った。

既に毘沙門堂は兵火にかかりその他の楼閣も鉄砲矢弾を無数に被弾し、辺り構わず無闇矢鱈に織田勢は攻撃を続けている。

「待て待て、そう慌てるな。間に合う様にするわい。」と中風用心の灸を据え終るとやおら茶道具のひらぐもの釜を取り出して鉄砲火薬を一杯に詰め込み、別に火薬を風呂敷に包んで、自らの首にも巻き付け、火付け役の入江大五郎、石成小次郎等に長い間世話になったな、その炉の火種を持ってこいとにっこり笑って二つとも信長には渡せぬ大事な品と云いながら、信貴山城の天守閣にどっかりと胡坐をかき、火をつけさせ、轟音とともに首も釜も一瞬に吹っ飛んでしまった。こうなってはたまらな

い。最期まで残っていた百余りの将兵も互いに刺し違え、或いは華々しく敵に向かって槍を投げつつ一斉射撃を受けたり、立派に腹を切る者等それぞれに死んでいった。最期に残った入江大五郎、石成小次郎等は元将軍義輝から奪った久秀愛用の粟田口吉光の名刀を油の流れた床の間に灯しみの火を懸けて燃え上がるのを見届けてから吉光を投げ込み刺し違えて死んだ。

「既に殿はご最期を遂げられました」

雑兵が飯田基次の所まで駈けてきて報告した。

「もう、これまでお前も落るのなら落ちよ。」飯田基次は槍を抱え込み迫る筒井軍へ五十の兵を引き連れ駈け入ったが、基次を知っていて誰も討って来ず、とうとう細川勢を蹴散らし、残りの二十余りをつれて惟任日向守の勢を討ち、みずからも深傷を受けて遂に明智光春の手に掛かり果てた。

森隼人佐好久は飯田基次と別れ城を下ってきた。傍らの大木の辺りをふと見ると定めし立派な大将らしき武者一人手負いで身を横たえている。

「あっ、三木判太夫殿、判太夫殿ではござらぬか、傷は浅うござるぞ。さあ、某に掴まって。」駈け寄ると判太夫を抱えこもうと手を差し伸べたが、

「ああ、好久殿か、貴、貴殿に悪いことを……」息も絶え絶えであった。かなりの深傷を負い顔は血の気を失い土色をしている。

「何をでござる」

「いや、お詫申す、許してくれ、それがしが貴殿を弾正様に仕官させなければ、今日例え助かっても

またもや牢人に……もっと余所へ仕官すれば……斯くのごときことには……ならなかったものをと。」瀕死の中で判太夫は好久の行く末を心配してくれていた。

「ご心配はご無用、それがしは馴れております。さあ、それより下りましょうぞ、さあ、しっかりつかまって。」

「痛い、もうあかん、このわしの太刀で首を掻いてくれ、貴殿に切られれば本望、苦しい、後生じゃ、はや、頼む。子もなく妻も無い身、何の心残りも無い。はよう。」

「傷は浅うござるぞ。さあ。」

「みずから命を断つことは神に許されぬ。ヤソのおきて。」

「左様か、命を断つことが神に許されぬのでござるのか。」

「これより黄泉（よみ）の国ではなく、神が居られる天上へ召される。平和な天国へでござる。早く切って下され、はやく。」

「それ程までに、左様か。」泣く泣く好久は判太夫愛用の血刀を取り上げ恩のある判太夫にそれでは御免と、首を落とし、泣きながら自分の鎧の下の衣をちぎり頭を包み楠の大木の下に枯草を掛け冥目合掌しいずれ数日の中にお迎えに参りますと心に念じて筒井軍の跡を追っていった。

さしもの難攻不落の信貴山城も天正五年十月十日双方多大の屍を累々と積み上げ山をなし、沢山な犠牲の中に筒井の宿敵松永はここに亡び落城した。

一世の怪物松永弾正源久秀は従五位下六十八歳であった。奇しくも今日はかつて、松永勢と三好三

人衆との永禄十年十月十日の戦いで大仏も湯にたりたまう時から満十年目であった。
この合戦後筒井順慶は飯田基次の遺体を申し受けて飯田三郎直宗に下げ渡し手厚く称若寺に葬った。息子松永久通の死体は判らぬままであった。
戦い済んで順慶は味方は元より、松永の家臣等の遺体を集め矢張り手厚く達磨寺へ葬り懇ろに供養を営んだ。
翌日は更に雨が一頻り降った。焼け焦げた柱や死体から出る臭いが信貴山中に雨とともに流れ出て麓の水は濁り水はしばらく使えなかった。
森隼人佐は一日願い出て信貴山の件の楠を目指して登っていった。数匹の犬の争う声、まさかと思って隼人佐は駈けだした。
かなり大きい犬三匹が三方から何やらくわえて引っ張り合っている。
「あゝ、こらっ！　犬共何をする！」太刀を抜いて一匹をきった。あろうことか我が衣の袖は引きちぎれボロボロになって大地に散らばり、鋭い臭覚でまさしく判太夫の胡麻塩頭を見つけ噛み合う犬共である。犬の絶命の叫びも構わずまだ判太夫の頭に二匹の犬が喰い付き隼人佐をねめつけ獲物を取りに来たかと鋭い牙を剝き出している。顔の鼻は途中からどす黒い血が乾き噛みちぎられてなくなり左の頰も半分ない。首の下は頸骨が白く覗いていた。ようやく犬を追い払い見れば両方の耳もちぎれていた。
「あゝ、判太夫殿、何と浅ましい姿。」隼人佐の衝撃は大きくしばしとめどもなく涙した。気を取り

直して持ってきた白衣で頭を包み泣きながら下山して麓の村の寺に葬った。

（十）

さて、一日筒井城へ戻った筒井軍は凱旋を迎える歓呼の声に顔を綻ばせたが、戦さには臆病風を吹かさぬ順慶も群衆に混じって若い母親に手をつなぎながら片方の手を思い切り振ってはしゃぐ無心のおさな児の姿をみると泪をうかべた。大勢の犠牲者を出した事で我夫や我子や兄、弟を探す不安な様子の留守家族の目を見た順慶は更に胸をも痛めた。松永を破った事で旧松永の大和の所領は悉く筒井の物となった。
論功行賞は大であり箸尾、楢原、小田切、小和泉、井戸、それに森隼人佐等には信長より感状が贈られた。
取分けこの度の軍功第一として森隼人佐は一躍千五百石の加増をうけ二千石の大身になったが、合戦中飯田基次が義を立てたその言葉の重みを噛み締めている。この度の出世は出世としながらも、きつい所もあったが可愛がってくれた松永久秀の顔が屢々目に浮かび寝ても覚めても気掛かりで、眠れぬ日々が日増しに激しさをました。怒れば恐いがたまに久秀は面白い事を思い着くと子供の様に目を丸くして無邪気に隼人佐へ微笑みながら語ったものだ。
早く父に別れた隼人佐にすれば時には久秀が慈父の様に映る事さえあった。腹の底に目的を潜ませみずからも微笑みを返し苦衷の程は誰にも語れないし、判っては困る。ようやく大役を果たした今に

して、筒井家には忠義の士、松永には不忠、その言葉が隼人佐を悩ませた。
初め勝利に湧いた頃は手柄の程を自慢したい心を抑え、なに事もお家の為、皆の為と人にも云い、自らも納得し重大な仕事をした満足感で一杯であった。
やがて、日がたつに連れ人の目は松永を裏切った卑怯者と云って見つめられている様になり事実そう自分で思うと惨めさがました。件の老婆が探していた夫が三木判太夫であったこともつらかった。
あの時使命を果たしてすぐに基次殿の様に他の陣へ切り込み討ち死にすれば良かった。生じっか生きながらえてこれ程苦しむ事になるとは。罪の意識は時を追って膨れあがった。唐国の周王公旦の謀略の犠牲（いけにえ）と成った妲己（だっき）は女ながら使命を果たして自分が為した業の深さを王公旦の手に掛かり殺される事に依って清算し、人々の怨みもあったが、死生の観には優れていた。
男の癖に恥を知れ、毎日毎日頭からその事が離れずみずからを責めた。
そんな中で世間は自分とは関係無く二千石の侍大将と云う身分は筒井家の中にあって旧松永に組していた岡周防守、古市景治、鷹山主殿頭、萱田備前守等の居城の没収明渡しに日頃は忙殺されたが、始末に悪いのは何時も夜であった。転々反則、寝汗が朝まで体を被い苦しみの中に朝を迎えていた。

(十一)

松永が片付くと再び織田軍は休む暇まなく各地に転戦した。その年の十月下旬からは惟任日向守、長岡藤孝等は丹波に出て諸城を攻め、羽柴秀吉は小寺孝隆（後、黒田勘兵衛）や竹中重治を連れて中

国平定の途（かどいで）に就いた。
十一月の半ば上京した信長は二十日右大臣に任じられた。
惟任日向守は亀山（現亀岡市）に丹波の拠点として城を構築し、羽柴秀吉は播磨上月城を攻めて尼子勝久を守将として守らせ織田の各地の武将達は競って着々と成果を上げていった。
年が変わり六年の正月早々の二日毛利輝元は配下の児玉就英に命じて淡路島の岩屋城の警備を固めさせ七日には毛利の六角義尭が義昭の先鋒として阿波や淡路の将兵を率いて堺に上陸した。雪深き北陸では柴田勝家が上杉謙信に苦戦し、大和では永年の十市の城であった東山の龍王山にある龍王山城を順慶は破却していた。
戦略に丈た軍師竹中半兵衛重治や黒田勘兵衛（かんべえ）孝隆（よしたか）を率いてそれまで善戦していた羽柴秀吉は二月二十三日三木城の別所長治が毛利側に付いた事で書写山に陣を敷き苦戦を強いられた。
例によって足利義昭は何としても信長を討ちたくて毛利や石山、上杉に檄を飛ばしていたが、その内の一人上杉謙信が年には勝てぬと云うわけではなかったが、四十九才にして二千七百十四枚にも上る黄金を残し越後の春日山城に於て没した。三月十三日の事であった。
信長は喜んだ。また明日も佳き日。
大和が安定して以来、信長は折角自分が築いた領国を赤の他人に委せては置けなかった。
筒井には末娘の秀子を贈ろう。これで大和は儂の血縁になる。順慶は未だ若いが、人格温厚にして良いしゅうと。苦労はするまい。

十四日織田信長の叔父孫三郎信光の子の小津田市之助信成の長子菅屋九右衛門行清が主臣となり、桃谷与次郎国仲、河村与六、松浦左内等四百余人が秀子の輿を守り上洛した。順慶は定次の室として秀子を迎えるにあたり、小田切宮内春次を順慶の名代（みょうだい）として小和泉四郎左衛門秀元、島左近、松倉右近勝重等を出して迎えた。

この時、織田からの付け人として来た桃谷与次郎国仲の子等が後に筒井の家を滅ぼしたとも云える事になった。

秀子の衣服三百櫃、定次への贈り物は太刀、短刀各一腰呉服五十重ね、金子一万両を給い、諸将諸士相集い饗宴は果てることも無く数日に渡り続いた。

定次は十七才、秀子は十二才であった。

順慶は信長への返礼にあたり定次と共に小和泉四郎左衛門秀元を連れ安土城へ向かった。

礼物として、太刀一口、駿馬三頭、奈良晒（さらし）五百疋、奈良酒百樽、奈良墨千挺を持参した。目出たい事がそうでない始まりであった。

さて、謙信が死んだ事で上杉に連動して頑張っていた石山本願寺一派の衝撃は大変なものであった。織田勢は北陸での戦いが有利になった事で難を避けていた神保長住を助け越中を回復、光佐は逆に加賀の能美郡山田庄惣中の鈴木出羽守に注意を喚起した。

五月四日羽柴秀吉は荒木村重とともに高倉山に陣を移し毛利軍と対陣した。上月城下の攻防や神吉城の攻守で秀吉は敗北し、辛酸をなめた。

だが毛利軍は中国の織田軍、羽柴秀吉への攻撃を益々盛んにし、秀吉が折角取った播磨上月城を吉川元春や小早川隆景軍に囲まれ、信長は瀧川一益、惟任日向、筒井順慶等に播磨へ出陣を命じ各武将は急拠兵を率いて国許を出、毛利軍の後から陣を巻いた。筒井順慶は織田の縁族となり、筒井城へは藤四郎定次に松倉勝重を付け、その他越智、箸尾、秋山、小田切、小和泉等に交替で城番をさせ、筒井順慶は張り切って大和を発ったが進軍中胃痛がどんよりと腹を痛めていた。

付き従う将は飯田三郎次郎、楢原右衛門、井戸十郎大夫国秋、片岡弥太郎、島左近、同清興、森志摩守好之、同縫殿佐好高、松倉弥七郎重正、清須美兵衛等五千余りを率いて参陣した。羽柴秀吉は六月の暑い中頑張っていた。六月二十六日遂に上月城に群がる毛利軍への攻撃を諦め陣を下げた。

六月の初めから対織田作戦の上で上杉謙信死後最早、頼みは毛利勢、もし、ここで毛利を失えばと懸念した本願寺光佐は中国に力をいれ七月には光佐が紀州門徒に危機を知らせて、播磨の国高砂へ兵を出し、また神吉城の守には海路を確保して羽柴軍を寄せ付けなかった。七月五日上月城は落城し尼子勝久らは自害した。他の伊賀で戦っていた織田信雄も丸山城を攻めて七月二十五日に敗退、北陸の羽柴勝家は負傷し、しばらくは静養を余儀無くされ織田勢全軍の士気は振るわず各所は停滞していた。

転戦

（一）

八月三日毛利勢が播磨から引き、十日秀吉は志方城を攻め落とした。ついで別所長治の守る三木城を囲んだが進展は無かった。

毛利にしても織田だけと戦っているのではない。四国、北九州方面との戦もあって思い通りばかりには、はかどらない。この様な戦い激しい戦国期にあっても商売人は今こそが好機と稼ぎ廻っていた。

七月三日、明国商人が相模に行き北条氏と交易した。明船は天正三年に九州の臼杵に入港し、虎、象、孔雀等の珍しいものを持ってやって来ていたので目新しいものが好きな日本人はよい顧客であったが筒井順慶の陣に堺の商人から九官鳥が届られた。

「お館様、この鳥は人の言葉を話しまする。」小姓衆の一人が竹駕籠に入れて持ってきた。

「ふーん、真にか。」順慶は不思議であった。まさか鳥が、

「本当でございます。何ど仰言って見て下さりませ。」

「おい、何か云ってみろ。」

「阿呆ー」

「こやつ、無礼な、しかし、いま確かに喋べったな。アハハハッ。」

「アハハハッ」九官鳥も笑った。その声は全く順慶の特徴をよく捉えていた。

「笑ったぞ」他愛もない事でしばし笑ったが安土へいったり大和へ戻ったりしていた筒井順慶の体調子が悪い事を知った秀吉は軍中一人でも将兵が欲しい時にしばらく大和にあって静養してからまた参陣されよと気遣った。大和へ帰るにあたり秀吉に挨拶に行き件の九官鳥を届けた。

「何、物を云うとか。」おもしろいやつ。秀吉は喜んだ。陽性だ。

「某に阿呆ー、と申しました。」

「なに阿呆、とか、無礼なやつじゃな。」

「何か申されては……」

「ウーム、おい、どこからきた。」

「ウーム、おい、どこからきた。」

「わしが聞いておるのじゃ」

「わしが聞いておるのじゃ」

「エヘン」

「エヘン」

「馬鹿もの」一頻り秀吉は愉快そうに鳥と遊んでいたが織田の縁族になった筒井を立てただけではなく、胃脘痛の患で大和へ帰れと云う配慮の出来る秀吉であった。

大和へ帰ってきた順慶はしばらく静養し幾分体調が回復すると大和一向宗徒が頻りに石山の応援をしている事が判明し、大和南部の吉野の一向宗徒討伐の事を織田信長へ遣いを出した。大和の一円の一向宗徒では吉野が一番強い勢力の根拠になっていた。了承を得、十月七日筒井を出て、十一日八千余りが吉野一帯に陣を敷き、吉野の上市、下市、飯貝の一向宗徒の拠点の集落に放火して、これを討伐し、再起は不能と云える所まで抑え下市に城を築き芳野又左衛門に預けてこれを守らせた。順慶が勢いよく吉野へ作戦展開中、涙のにじんだ便りが筒井城番森志摩守から届けられた。昨十日、森隼人佐好久は煩悶の中に逝去と認めてあった。去年の十月十日松永久秀信貴山落城と同日の十日であった。あれ以来優れぬとは聞いていたが、それ程であるとは知らなかったが四十五歳の若さで逝った。数行《……侍大将トナリ太刀一腰薙刀一振駿馬二匹金子三百両小袖十重ヲタマヘリ好久ガ妻去天正三年春病死ス今又順慶ノ命ニ依リ小和泉四郎左衛門尉秀元ガ妹婿トナリ武運ヲ開キケルガ明ル天正六年十月十日四十五歳ニシテ頓死ス好久ガ毎夜ノ夢ニ松永久秀ガ亡魂来リテ大ニ怒ルト見シガ……果シテ死ケルコソ不思議ナレ》とあり、あの好久がと順慶はなげきまたしても忠臣を失い、人の世の憐れさを何所へもぶつけることなく悔みつつ、筒井へ帰ってきた。順慶は力を落とし、喪の家族へ金子を贈り充分な供養をさせた。

そんな時、あらぬ方の騒ぎが持ちあがっていた。

荒木摂津守村重が織田に叛旗を翻した。

十月十七日の事であった。

村重は在岡（伊丹）城を中心に付近の花隅城、芥川城、茨木城、高槻城、尼崎城などに支城を置き摂津一円を抑え、叛乱した。羽柴秀吉と共につい最近まで中国方面に有力な織田勢として遠征していたのだ。織田勢の動揺は並みの事ではなかった。大坂石山の本願寺に近く、また中国に駐留中の羽柴秀吉は居ても立ってもいられない程、戦略上で不利を受け挟撃を受ける覚悟をしなければならなかった。秀吉はすぐに村重の説得を信長に願出てみずから出向いたが応じず、失敗に終った。続いて黒田官兵衛孝隆が向かったが、虜になってしまった。黒田官兵衛孝隆は洗礼を受けていてクリスチャン・ネイムをドンニ・シナオンと云った。

竹中半兵衛重治と黒田官兵衛孝隆とは秀吉の知謀の両翼であり両腕であった。

安土城から各地の織田の武将へ指令が飛んだ。織田の勢力からすれば村重の在岡城には三千余りしかいないのでそんなに大した荒木勢ではないが、下手をすると中国にいる羽柴秀吉軍が壊滅する危険があった。

織田中将信忠を総大将にして京都に集合し、各地から武将がついた。

惟住長秀、池田信輝、筒井順慶、万見仙千代、惟任日向守、塩川国満等であった。

十一月三日信長は安土城を出て摂津へ向かった。

秀吉から火急の使者が信長の下に届いた。

毛利の水軍大坂に向かうと、常備している上に増援の水軍であった。

天正四年七月、毛利との戦いで織田の水軍は完敗した後、信長はすぐ、九鬼義隆へ応戦の手筈を命

じた。

信長はこの度の水軍同志の戦いで目にもの見せてくれん、と待っていた所であった。

九鬼義隆へ命じて、各船々には鉄板を打ち付け鉄甲船として敵の火攻めから守る工夫を既に終えていた。この鉄甲船は世界海戦史に残る歴史上初めてのものであった。

十一月四日信長は荒木村重を孤立させるべく、本願寺と毛利とに講和する事を朝廷に願出たが、すぐには間に合わなかった。同月六日九鬼軍の大作戦があるとも知らぬ毛利の村上水軍六百余隻はまた例によって敵に一泡吹かしてやるべく堂々の船陣を組み、一軍は大坂木津川口に待ち、もう一方の瀬戸内からの村上水軍は九鬼軍を目指して押し寄せた。

だが、前回に懲りた九鬼軍はこの間たゆまぬ鉄砲射撃訓練に並々ならぬ努力を尽くし火矢の準備に余念なく時化であろうと、凪であろうと日夜悪条件を克服して今こそ決戦と挑みかかった。

木津川口では上流から村上水軍は有利に作戦を展開、九鬼軍苦戦するかに見えた。しかし、村上軍の火矢は一向に九鬼軍を破れず、却って敵の打ち出す六門の大砲（おおつつ）の攻撃や激しい火矢を以って逆に攻撃され、船が波の頂きに止まった一瞬を号令一下、「ドドッ、ドーン」百雷一瞬一糸乱れぬ九鬼軍鉄砲の一斉射撃の攻撃に村上軍は乱れ遂に破れた。

小船で海上をくるくると回る戦法も九鬼軍の射程距離に入るとすかさず撃ちだす鉄砲に早々と潰滅九鬼軍は雪辱を果たしこの勝利を聞いて気をよくした信長はみずから軍を指揮しヤソ会の宣教師を招いて荒木村重に人質を取られ織田に抵抗していた高山右近長房を説得させ高槻城は荒木から外れた。

人質になっていた高山右近の子に罪は無しとして、村重はその子を無傷で笑って帰した。

一方、意外に荒木勢は強く、織田軍が攻めれば多大の犠牲者が相次いで出た。

十八日茨木の惣持寺へ師を進めて在岡城の周囲を固め、攻撃を繰返し、二十四日中川清兵衛清秀が織田方の誘いに乗って投降したが、この後織田中将信忠の側近万見仙千代が織田軍の無数の鉄砲の援護を受けて在岡城へ真先駆けて城壁に取り付いたまではよかったが、あっけなく討たれた。万見仙千代はかねてから敵と内通して、攻め口を決め乗り込んだがそれを知った敵は城中の兵の配属を変えていた。信長、信忠等は無理な攻めを思い止まり筒井順慶等諸将は割り当てられた将兵を残し全軍各国許へ引き上げ持久戦となった。

十二月十一日信長は古池田へ陣を移して砦を築き根気よく小競り合いを繰返して敵の消耗を待った。

これでしばらくは村重が石山本願寺や毛利との連絡が簡単には取れずまた、動く事は出来なくなった。

再び羽柴軍応援の令が各武将に出され同日三木城の付城である織田の羽柴軍への糧道輸送路の警護や確保に援軍として佐久間信盛、惟任光秀、筒井順慶らが参陣した。

やがて滞陣はその年の暮れを過ぎ、筒井順慶が播磨を引き上げたのは翌天正七年正月の三日であり自軍を全て連れ大和へ帰った。

(二)

帰って一番にすることは春日神社への参詣や多聞院でのお籠りであった。

この折春日社へ参詣した時の衣装は侍烏帽子の懸け緒を取り出し気高く結び素襖小袴を着けた天晴弓矢の御大将である。帝のさきはえを祈り天を拝し、神を尊び仏を心から敬い民への善政を心懸ける真に生真面目な武将であった。

大和へ帰って来ると胃の痛みは不思議なほどなくなった。

気分が優れている時には茶に心が向いた。

二十二日塗師屋に於いて茶の湯を開き、楽しんだ。順慶の師匠は栄和であったが、茶の湯を許されるのは織田勢の中でも特別な者達である。

この年になると今迄は退屈と思えるものが、実は深い味わいのある物であることがようやく、理解出来た。

能もその一つであった。幼い日に、覚える事よりしびれが切れて早く終りにして欲しかった頃に覚えた謡の一節が陣中の暇に浮かんできて、思いだして胸が一杯になる事があった。親子の情を歌ったものが取分け好きであった。

熊野も好きだったが、分けても幼き日、親に別れた順慶は目にその面影も無い父を思い、隅田川が最も好きな謡であった。

だが感傷許りに浸っては居られない。

松永方から投降してきた将兵達で筒井城は一杯になり、手狭になったのでと一族重臣等が施工の概略図を持って来て見せた。何時か織田右府様に願出て、郡山にでも移さねば、この平城では戦略的にみても拡張するにしても旨くないと申し出るものがいたが、取敢えずは多聞城にあった石垣の一部を取り壊して筒井城の外郭を整備し舘や収容する建物の増築で凌ぐ事として、造営した。

今迄、松永が出鱈目な行政をしていたお蔭で民百姓の暮らし向は無茶苦茶になっていた。好き放題に金を集め年貢を絞り揚げた為商人は兎も角、百姓は春を迎えて種籾にさえ事欠く始末であった。順慶が守護になって急に日常の業務は膨らみ農産物の収穫量は大幅に増えた。訴事は民からの要望に応えるべく重臣達に振り分けて迅速に処理を急がせた。

織田信長は各地を攻め落としたが、領内からその地方の者がやってきては方言で勝手なことをまくしたるので、聞いていてもさっぱり理解出来ない。そこで方言やなまりに懲りた信長は前例に習い話し言葉は全て能の謡につかわれる言葉を以って喋るべしと、命じていた。関西の言葉が主なので順慶は随分喋りやすく思った。

四月十日播磨へ筒井順慶は著陣、織田信澄、堀秀政、惟住長秀、越前衆、山城衆等と合流したが秀吉軍は三木城を囲み抜けずに苦戦していた。

五月四日惟任日向守に従い筒井順慶は播州から西丹波に転戦し、西丹波方面の抵抗は強かったが、丹後の但馬口から織田軍は筒井順慶、津田上野介、佐々成政、不破河内守、蜂屋兵庫頭頼隆、蒲生氏郷、秀吉の弟羽柴秀長を率いた織田信忠の下に結集し一早く叩いて凱歌を挙げて順慶は大和へ帰った。

此度の出陣では敵に鉄砲の数が少なく、圧倒的に整備された織田軍各勢の鉄砲隊が威力を発揮し織田側の犠牲者は極端に少なかった。

　久振りに城内の奥まる一室でようやくゆとりの出来た順慶は、脇息にもたれのんびりとして、留守を預かっていたお松の相手をしていた。

「爺（じい）は、時折、ひょうひゃく（冗談）を申すのでこのお松が珍しく、笑っておったぞ。」順慶が云った。

「何んとでございましたな」順慶、お松と志摩守好之の三人以外は誰もいない。

「それも真夜中に品悪くゲラゲラと、夢中で爺が例のそなたの母者人へ山羊の話か何かでひょうひゃくを申したとかで。」

「へェ」

「これは昼間は不愛想で黙っておるが、夜のしとねではにぎやかなことじゃ。」

「ホー、それはそれは仲のお睦まじい事。」

「お館さま、何を申されまするのじゃ、恥ずかしいではありませぬか。」お松は顔を赤らめて云った。

「よく聞けよ、夜は歯ぎしりはするし、へはこくし、しょっちゅう夢でも見るのか大声で寝言は云う、おまけに往復のいびきで一晩中眠れたものではないぞ。」

「誠でございまするか」

「嘘です。そんな事はありませぬ。」お松は必死で否定するが、なおも順慶が続ける。

「いやいや、昼間は猪を被っておる。」

「猪を被るとは？」志州は驚いて聞いた。

「普通なら猫をかぶるのじゃが、この者は亥年の生まれ、昼間は木陰の日溜まりで目立たぬように静かに致しておるぞ。」

「これは和やかなお話。何より和がお家を栄えさせ、結構なことでござりまする。アハハハ。」

「コラッ、爺、笑い事ではないぞ。毎夜わしは不眠症になって眠れぬのに。ハハハハッ。」順慶も明るく笑い飛ばした。戦国に明け暮れする城内の殺気を打ち消すようにお松への気ずかいをのぞかせていた。

罪なき者と愚者

（一）

　荒木村重が叛乱した事で信長の予想は大きく狂った。大坂と毛利への攻撃はのべつくまなく繰返し続けられ織田の各将達は多忙を極め各武将も兵も疲労の快復を待たず連日敵と戦い続けていた。

　信長の人遣いが荒いのではなく、そうせざるを得なかったのである。

　荒木村重は毛利の小早川隆景に対して昨年水軍が織田に破れはしたが、尚、余力を残している事を知って海上要路の確保を要請した。

《淡路の岩屋へ》出兵してもらいたい、であった。

だが、毛利は用心して中々出陣しなかった。

もどかしいのは織田軍でもしぶとい荒木勢への攻略である。さて、それでなくとも慌ただしい信長の膝元の安土でややこしい争い事があった。ここ安土城下の浄厳院に於いて宗教論争を行う事となったのである。浄土宗の僧霊誉が東国で修業したあと安土へ来て、百日に渡って説法を説き民衆を済度して日に日に人気を集めていた。

日頃から頑固で愚かしい行いがあり、隠れては女を犯す不真面目な男が二人そっと霊誉の様子を見て霊誉の弁法が余りにも爽やかであり、これを嫉んで悪ふざけを考えた。それも一人は城下の目代を努める建部紹智と云う者であり、もう一人は建部同様日蓮宗の大脇伝介なるものであった。神道を破り、仏教を誹り争い事を好み始末の悪い悪たれどもである。

建部紹智と大脇伝介は檜の曲げ物でこしらえた箱に汚物をつめ集う者を尻目に仏前に供えるとさっさと出ていった。

立派な身形の男がまさかそんな事はすまい。だが、開けて吃驚それを知って呆然とした霊誉や弟子達等は驚歎しすぐに仏前を洗い清め、お香を炊き不心得者が犯した愚行で神聖な仏前を汚した事を仏に詫た。腹に据えかねた霊誉の弟子達等はその一檜曲の箱をきれいに洗ってこれをこしらえた工人を探し求めた。安土では信長が様々な恩典を施策していたので商工業者等は噂を聞いて全国から集まり才智と腕を競っていた。そんな中の工人の一人が注文主は建部紹智と大脇伝介である事を述べ、突き

とめられた建部紹智と大脇伝介は群衆を掻き分け進みでて霊誉を罵って云った。

《疑うところあらば、請う、これを問わん。》霊誉は応えた。

《大俗に対して応対（何の）益（も）なきなり、もし（宗教的な教義について）問わんと欲するところあらば、すなわちなんじら依頼するところの僧を伴い来たれ。われもまたこれに応えん》となって双方は京都や奈良の僧を集め対決となったが、畿内や近江の両派のものが城下に集まり騒ぎが大きくなった。織田の武将で執政官の菅屋貞頼や堀秀政、長谷川秀一、矢部善七郎等は命令を受けて取り締まったが、日蓮宗のものが制止を聞かず京の南禅寺の長老景秀を迎えて判者とし、副に南都の華厳寺の住職がそれに従い、かつて信長が教えを受けた事のある有髪の僧、因果居士も同席し、宗教論争をする事で騒ぎは静まった。

（二）

建部紹智等は頂妙寺の日光、久遠院、妙顕寺、大蔵坊、仁俠不伝等を味方に虚勢を張って論破してやるべしと、興奮して威勢が良かった。

織田信澄、菅屋貞頼等が警備に就く物々しさであったが一方霊誉は四条貞安に相談した所、即座に任せろ、となって宗論が始まった。

四条貞安は論争を前にして、もし、説破された時の処遇について相手に尋ねた。

「勝敗の結果、僧籍を剝奪するか、流罪になるのを好むか。」

「お前等が負けたら、即刻頸をはね、四本寺の者等は畿内から放逐し、お前達の宗旨を替えさせた上日蓮宗の派下に置くべし。」と頂妙寺の日光は答えた。

南禅寺の長老景秀は経文の教義について書記に控えさせ論争させた。

四条貞安がまず問いかけた。

「法華八軸のうち、念仏の言あるか？」と。

「あり」蓮徒は応えた。

「無間に墜つるの念仏をもって、法華なんすれぞこれを説くか？」それに対して逆に蓮徒が問いかえした。

「浄土の弥陀と法華の弥陀と一体か、異体か？」

「それ弥陀に二体なきなり」四条貞安が応え、続いて云った。

「もし一体の弥陀たるときはすなわちなんぞ法華の弥陀をもって捨閉、閣抛をなして廃するか？」と。

「法華をもって廃するにあらず。念仏の機を修する前に捨閉、閣抛をなして、これを捨つるなり。」と。

いわく、

「念仏機を修する前にあたり、法華を廃するの経文ありや？」

いわく、

「あり。浄土経にいう種々説法は、方便力をもってし、四千余年いまだ真実をあらわさず。」と。

いわく、

「四千余年の法文をもって、もし爾前に廃するときはすなわち方座第四の妙の一字もまた捨てんか？」と。

いわく、

「四千余年の四妙の妙は、これ奚の妙ぞや？」と。そこで貞安がいった。

「これすなわち法華の妙なり。子いまだ識らざるか？」と。蓮徒共は貞安に詰め寄られて返事に窮し口ごもった。貞安は扇を叩いて返事を促しすかさず、さらに迫った。

「棄つるか、棄てざるか。」蓮徒等は狼狽して、ああだ、こうだとやっていたが、明らかに蓮徒の敗北であった。

これを見ていた因果居士はつかつかと進み出て南禅寺の長老景秀の前にある大香炉の火の勢いが盛んで煙が出ているのを掴むと応答代表格の頂妙寺の日光目掛けて投げつけた。

灰塵が辺りに飛び散り本堂の中はもうもうと灰だらけになった。論破された事を知ると日蓮宗徒は一目散に逃げ出したが、そうはさせじ、と明智光秀の娘婿の織田信澄、菅屋貞頼等は警備の士卒を指揮して片端から逃走者を捕まえて縄を打ち、宗論の前に取り極めた通り、頂妙寺の日光等の望み通りとして、日光と大蔵坊の二人は二頭の牛に片脚ずつ括り着けて牽かせ、股裂きにして殺し、その頸をさらし、また、騒ぎの張本人の建部紹智と大脇伝介ははりつけにし、目代の禄は貞安が頂き、景秀や霊誉等へは特に豪華な饗応を施しこの一件は形がついた。生じっかな信仰が醜い争いを演じ扇られた

馬鹿者共が調子に乗り余計な事ではかなくなった。かつての天文法華の乱の対立が底に流れまだしこりが残っていたのだった。その五月も終り大和に居た順慶は華厳寺の僧からそんな事があったと聞いたが、六月十一日には気楽に中坊覚祐、松屋久政を招き茶会を催していた。

三伏（さんぷく）の夏も過ぎ涼風の吹く八月の一日には多聞城の石も筒井へ運び込み筒井城は着々と体裁が整い見違える程威容を辺りに輝かせた。陣触れがあっても出兵は小人数で大幅に減り手の空く者が増えていた。順慶は織田各軍が転戦で多忙な時に大和の内政や松永の後遺症の整理に過ごし荒木村重が九月の二日に僅かな伴を連れ在岡城から逃亡し尼崎城へ入った情報が届いても出陣には及ばず謂わば長期の休暇の中にあった。

（三）

順慶は出陣の招集が無い合間この春から国許に於いて河川の堤に山の松の大木を切り倒し多量の矢板をこしらえ棒杭を当て土止め木を打ち込み堤防を補強して水路を改修し、富雄川、高瀬川、佐保川等治水は随分良くなった。財政の立て直しの為に日夜思いを致し重臣達に今出来ることを次々に命じ重臣達も旗下の兵の中、次の戦に呼集するまで輜重の者で手の空いた者を各村々の働き手として出身の村へ送り出した。日頃兵が食す膨大な穀物や副食の量は減るし民は喜び一石二鳥の効果が上がった。

この年台風があったが治水のお陰で被害は少なくその後の天候は順調で治水もよく行き届き村へ下って手助けした兵達の効果は流石に米の収穫を上げ、片付けも捗り民は喜びに満ち溢れ大和の国は五

穀の豊饒を口々に寿ほぎ収穫量を競いあって守護職筒井順慶を心からたたえ秋の収穫を終えた各村々の民百姓は餅をつき酒樽を荷車に山と積み村長（むらおさ）を先頭に筒井城へ列をなして礼に来た。

順慶も一々時間の許す限り村長等に会ってやり、その努力を誉めてねぎらい杯を与えて共に喜びの涙の中にお互いに心の結びつきは更に深まっていった。松永時代の民の顔の暗さは最早微塵も無くなっている。一日祭りを行い、民を城に招き猿楽を催し酒肴を施して千秋楽を祝った。充実した喜びの毎日であり、守護職の重責を心から順慶はかみしめつつ日を送っていた。

（四）

そんな頃伊丹の在岡城は織田の猛攻を受けてついに落城した。武器弾薬矢弾の消耗と食料の極度の不足の中に主のない城は、織田勢の猛攻を受けながらよくここまで持ち堪えた。荒木村重が九月の二日に在岡城から尼崎へ逃げた事を聞いて信長が急拠摂津まで進もうとしたが、折柄相憎、台風が近畿一円を襲い山城山崎に留まった。この間悪らつな盲目の検校（けんぎょう）に二千両を課しその金で宇治橋を修理し、日蓮宗から取り上げた黄金二百枚を播磨の将兵に分け与えた。いらつく、信長の下へ伊賀で戦う息子信雄（のぶかつ）から敗北の知らせが届き信長はすぐに書を認めさせあれ程の兵力が何故として、激怒して、《もって、これと絶つ。》とした。台風のあと信長は軍勢を池田へ進め前線各将校を激励し猛攻を続けろと、命じて京へ戻った。

筒井順慶も十月上旬摂津へ参陣したが、信長の機嫌は優れず、織田の各武将等は城下に点在する侍

屋敷は反撃の根城と町全体を悉く焼き払い尼崎城は裸城となり、十五日在岡城攻撃で順慶は必死の覚悟で臨み筒井を支える中堅将校の鷹山、塩谷采女、別所左馬介、和田吉太夫以下が討ち死にした。敵の女郎塚砦は既に織田勢の総掛かりで落城し、危ないとみた荒木村重は家族や家来を捨て一早く逃亡し、華隅(はなくま)城へ入った。

在岡城に居た村重の家族、郎党、女衆にいたるまで縄を打たせた信長は百人ずつを順次出発させ刑場へ向かわせた。

城の将士の妻子百二十二人が落城したひよどり城の近く、尼崎七ッ松ではりつけにされたのを初め、女達三百八十八人、従者百二十四人都合六百三十四人が処刑された。

村重の妻等は京都六条河原で斬首刑となったが、自分だけ逃げた夫の村重をあざける織田の家来に向かって、きっぱりと云って退けた。

「夫は卑怯者ではなく、また、妻子の情にひかれ、志を失うようでは、妾(わたし)の夫ではありませぬ。」また、今日までの栄華はお父上のお陰、都にて諸人に恥をさらすまいぞ。いさぎよく死ぬのじゃ、と云って村重の妹二人と三人の子等は平然と切られた。

順慶は摂津の陣幕にあってお宮の側の黄心樹(おがたまのき)の下で床几に座し、この事を聞いて敗北の将が如何に憐れな苦しみを味わわなければならないか、村重の心中を察し今は敵とは云え、元は石山合戦では度々顔を合わせ戦った仲間でありその面影を偲んだ。日焼けした不敵な村重の傷だらけの面構えが思い出される。性格は粗野の様ではあるが松永久秀の様な陰欝さはなく、カラリとして他の武将等にも好

かれていた。村重に云わせれば妻子には罪はないものをと云いたかったであろうが、武士(もののふ)の妻子の見事さであった。人の世は移り変わっても情けは変らぬものと思うのだが。

無残な荒木村重の妻子達が殺された後、信長は旧二城第の修復を終え、十一月二十二日春宮として、時の皇太子光陽殿下にこれを献じきらびやかな衣装を身に纒った織田の儀杖兵が整列する中、殿下は春宮に入られた。また、宮城南の守護神である、神功皇后、応神天皇、比売神(ひめおおかみ)の三神を祭神とする石清水八幡宮の木の樋が朽ちたのを信長は赤銅で鋳て付け替えさせた。

御皇室に対する信長の貢献は後の秀吉や家康等に多大の影響を与え後世まで変わらなかった。乱世にあって信長は天長の意味と意義を良く弁えていた。

順慶は信長はどぎついが一方忠君愛国の士と見てその理想を我が理想とし日の本の国の自解作用の為には旧態依然としてその上に胡坐をかき横暴を極めた悪習を維持しようとして民百姓の塗炭の苦をものともしない宗教、門閥、将軍家が潰え去る大きな犠牲も場合に依っては仕方なしと考えるようになってきていた。

織田殿の下でわしも精一杯尽くさねば相済まぬ。そう思うようになってから出陣も少しずつ気が楽になり重臣達へも影響を浸透させていった。

そう云えば織田軍団の規律は違反する者達へ厳罰が科せられる事で全く乱れはなく統制が行き届いている。見習わねばと順慶は規律を厳しくし、理想を追った。枯れゆく、弱い冬の陽の数葉を残す大きな銀杏の天指す枝の先に止まりさえずる百舌の声が甲高くやがて、程無く雪が舞いその年は暮れて

いった。

指　出

(一)

天正八年正月を羽柴秀吉は播磨に長対陣をしながら迎えたが、石山一派へは無理に強硬な攻撃をするな、と云う信長の命により他の各武将は国許にあった。今年の年賀は来るに及ばずと信長は労いをなし、筒井順慶も大和にあった。

一つには最早別所長治の三木城は糧道を断たれ、倦むことなく攻める秀吉の根気良さに辺りの支城は悉く落城し後は長治の三木城さえ落ちればここが足掛かりとなって芸州毛利への攻撃は時間の問題であった。

筒井城にあった順慶は例によって神社の参拝や能楽師を招いて楽しんだりようやく、十五日になって安土城へ年頭の挨拶に出かけていったりしていた。

「法印！　猿めは遂に三木城を落としおったぞ。」日頃きつい目の信長が、細めて云った。

「それはまことに祝着至極に存知上げまする。」と順慶は寿いだ。

「ところで法印、お汝のぜいたくとは。」

「ハッ、上様には比べようもなく、はしたないことでございまする。」

「ウーム、しかし、お汝がしているなにかがあろうに。」

「ハッ、はずかしながら、一つ、二つ、明日にでもお目を汚しますれば。」

「ウーム、左様かたのしみに致そうぞ。」

「ハッ」

翌日、昨日とほゞ同様のいでたちで順慶は伺候した。手に風呂敷包を抱え、お小姓が受取って信長へ差出した。順慶は信長がどう云うか、恐れながらじっと待った。

「ひろげてみい」

お小姓はひとかさねずつひろげた。何の変哲もない下かさねの着物と茶羽織が二枚。眼をこらして信長と小姓はしげしげとみつめている。

「どこにも特に変わった所はないな、いや内側をみせい。」

「ハッ」

お小姓は広げた。順慶は胸をトキめかせ信長主従の仕草を目で追った。鋭い鷹の眼のようなきびしいまなざしの信長。

「おゝ、流石に、心にくいばかりのぜいたくを。」

下かさねの裏地は腰のあたりに縞もようが、浮出ており、両胸には磐若心経が金でしじゅうされていた。茶羽織の裏地は色々色彩の絹糸が、茶碗、茶釜、棗、茶杓、水指を描いていた。

「さすがじゃ」と信長はまたもほめた。順慶のぜいたくは目立つところになく深いつつしみがおだや

かな人柄をおおっていて面目をほどこした。さて別所長治と叔父、弟等一族が切腹、将士にはとがめなしであった。だが、彼等将士は糧道を断たれ、既に何人かは餓死し、もう堪えるのが限度に来ていて犬、猫の類は全て喰いつくし鼠を喰らい、畳の藺草を塩につけしがんでみても腹の足しにはならなかった。食なく、武士の精なく、目は落窪み頬は痩せ衰えて長く風呂に入らず酸っぱい悪臭が兵士達から匂い、どの兵士も立っているのがやっと、と云う状態である。降伏した兵に薄粥から食わさなければならない程三木城の将兵は衰弱していた。三木城は中川清秀に預け羽柴秀吉は因幡鳥取方面へ転戦していった。

三木城落城を聞いた石山は動揺し、本願寺は急拠、紀伊の雑賀衆、四国の長曽我部元親などへ連絡を取れと命じたが、播磨の三木城が落城したことで羽柴秀吉の軍勢は勢力圏を増し、本願寺は苦悩した。折しも正親町帝は織田と石山本願寺との十一年に及ぶ戦いを憂いられ三月七日左大臣藤原前久、権中納言源重通を遣わせられ信長も松井友閑を派して、和を講じた。

同閏三月十七日遂に光佐は結局は秋までには大坂から退却する事で屈辱的な条件をのみ戦いは終ったかに見えたが、息子の光寿（教如）は降伏が不満であった。

しかし、一度受け入れた以上大坂には居れず光佐は光寿に後を托し四月九日紀伊の雑賀衆を頼りに逃げ鷺の森へ隠れた。同じ閏三月十七日筒井順慶は大和の中に居て大和の諸寺の鐘を集めさせ会ケ峰で鉄砲鋳造の大量生産に乗り出し軍備に余念が無かった。出陣が少なくて余計な出費はなく、今や天下の織田軍の部隊として恥ずかしく無いよう将兵にも大量の給金を与え鉄砲相手の戦いに相応しい南

蛮鉄の鎧、兜や衣装を揃え軍馬を養い日常から兵の訓練に旗下の将校等を当たらせて怠りはなかった。
石山の一件が落着して、信長は安土で相撲を興行し順慶も招かれ一時の楽しみを持った。

この間秀吉は因幡と摂津、播磨を往き来し、荒木の巣喰う諸城を攻め、六月には尾崎城を破った。

(二)

「この地は天険なり、信長の武を以ってして抜くをあたわざるもの一紀（十二年）に近し。」あの残虐な信長に何故降伏しなければならぬのか、いずれ捕縛を受けて殺されるのが落ち、と光寿は配下の者に唆かされた。

光寿は然りとして、再び兵を集め守備を強くし石山に拠った。光佐は子に帝のお取り成しの上でそんな事をしたら立場は無く、また我等親子は危ういと叱ったが光寿は聞き入れなかった。

信長は激怒して云った。

帝の御言葉に背く不届き者、《詔（みことのり）をすて盟にそむく。罪死をまぬがれず。》織田のこの度の攻め方は以前にも増して激しく周囲の砦はたちまちにして潰えさった。順慶はたとえ織田がどうであれ詔に叛く石山を赦せずとして麾下を督戦し、無数の矢弾をものともせず、他の織田勢におくれをとるなと先陣を先駆して攻城を繰返し、一機に三つの砦を破り、目ざめましい働きをして他の織田勢の目をみはらさせて一度大和へ戻った。

驚いた光寿は怖れをなして降伏を申し出た。

《まさに城を攻め、しかるのち、おもむろにこれをはかり、枯木をひしぐが（おしつけてつぶす）ごとくすべきのみ。》として信長は許した。

七月二日には荒木の華隅城も落城した。村重はもうこれ以上は無理と当てには出来ない毛利を指して落ち延びた。

信長は数万余の軍勢を率いて京に宿し、順慶は伴を従え再び参上し信長に会って祝着至極と寿いたが数日何所へも行かず詰め切りであった。小用もなにかも奥向きで済ませ伴の者にさえ会わなかった。恐い信長も今では順慶も会うことを楽しみにしていたが、そんな事とは知らぬ家来達は、

「お館様は、只今上様のお側にてご多様中。」老臣の松倉勝重が他の伴にそう云ったきりであり、勝重も家来のたまりに居て控えており、筒井家伴回り衆の所へは来なかった。身分が異なり勝手に奥向きへは家臣等は通れない。

ひょいと不安になったものが、大和から遣いに来た者へ洩らしたから事は大袈裟になって国許大和では順慶切腹の噂が広まった。二十三日大和の筒井の家臣達を初め、作外（いえもと）の寺院らは上を下への大騒ぎになった。

《ナラ中上下振動了、剰騒国同時ニ及沙汰云々、大天魔ノ所為也、ケシカラヌ事可出来……》この事は同二十五日に嘘と判明した。興福寺のみならず多数のものから慕われていた証拠であった。当の順慶は信長と茶を楽しみ、謡を唄い、仕舞を舞い、酒の席にばいせきしていた。

さて、信長は大坂に入り各砦や出城を見て回った。五十に及ぶ城塞全てを織田勢は占拠して警備に

当たっていたが、八月二日突如光寿は城郭に火を放ち、どさくさに紛れて父光佐同様紀伊の雑賀衆を頼り落ちた。

これで摂津は全地域が織田勢の占するところとなった。

戦後処理の中で一番初めに手を付けたのは武将の怠慢であった。

ただちに書を認めさせ、佐久間信盛、正勝父子を追放した。佐久間信盛は元々は真面目に戦っていたものの、あまりの将兵の損耗に段々手温くなって責められたのであった。この二月宿老で信長が未だ若かった頃に信長廃嫡を図った林通勝や伊賀範俊も追放されていた。信長は最早彼等を必要とせず、速やかに処断した。

佐久間信盛も茶や花見じゃと折々に陣中にありながら時には松永や順慶を無理に招き新参者の秀吉や光秀に比し遊び過ぎた割りには功績が上がっていなかった。

(三)

信長はまた筒井順慶を呼び付け摂津、河内、大和三国の諸城の破却を命じた。体の弱い事を知っていた信長は順慶には極力激しい戦いが予想される戦地への派遣を避けていた。

あの男軍議があってもさして発言する分けではないが、決まった事は生真面目にするし、第一律儀である。行儀は成り上がりものとは異なってよく、謹みを知り、戦功を立てても賞を欲しがりもせず、また家来等一同をよくまとめ、酒色の噂もてんと聞かぬ。また、字は流石坊主だけあって立派な字を

書くし、茶は昨日今日ではあれ程はこなせまい。惟任日向や羽柴秀吉、それに今は無き原田備中もその温厚さに感心しておった。いずれ体が快復すればまた、あの男でなければ出来ぬ仕事が有るはず。城の破却なら見ているだけで良い。信長はそう思ってこの仕事ならと命じたのであった。

順慶は元々人殺しなど出来る男ではない。

武人であるからには戦いに備えてしなければならないことはするが無闇に旗下を叱ったり、切腹させたりはしなかったが、芯はしっかりしていて決して悔どられる様な事は無かった。

先年整備したばかりの筒井城はつぶし、郡山へ移り、その他の城は例え筒井の一族の居城であっても全て取りつぶす事になった。

筒井郷の人々は驚いて騒ぎになったが、戦略上から見て筒井よりは郡山の方が有利でありまた、信長にすれば、一国の守護が、郷里に執着を持つ事は却って自軍が大きく作戦を展開する時に謂わば転勤等の移動に懸念するきらいがあり、民衆との長期にわたる物心両面での癒着のもたらす弊害は避けるべしと考えていた。尾張のうつけ者の時代から既に飛躍した信長の家臣団は各地に守護となり、じっとしている将はこの順慶位であったが、体を気遣いそれでも大和のしかも近い郡山への移動は他の武将に比べれば何でもなく信長の深い思い遣りの筈であり大和国内整備の中で既に信長へ申し出て郡山に大がかりな築城を始めていた順慶にすれば、信長の好意そのものであった。

だが、地元の筒井郷を初め奈良の民衆は矢張り不安を隠せず大騒ぎしていた。

（四）

八月十九日祖先から連綿として続いた筒井城は遂に奈良から集められた人夫の手によって破却されてしまった。順慶が三国の城の破却を終えて一段落した九月二十五日、突然瀧川一益と惟任日向守光秀が安土城からやってきた。

「法印殿、お久振りでござるが、早速ながら上様から指出しの事にて詣り越してござる。」両使は云った。

順慶は南都興福寺の成身院で応対したが、指出しとは大和所領の田畑の石高の調査の検地であった。大和の国力がどの程度なのか、遠い安土から大和の大体の石高と特産物はこれこれ、添上、添下、式郡、平群、十市郡、吉野郡などでございますと届けられても判然としない。興福寺や東大寺、それ以外の大寺院が無数にある上、春日神社の所領、私領、買徳分、名主抱分、百姓持分それに被官や家来のもの、土地にしても田畑、山林、屋敷等謂わば大和一国の全不動産に対する調査であった。この実勢を基にして、軍益に用するのである。大体が何所でもこんな物は胡麻化して税を免れようとするのは何時の時代でも変わらない。

《筒井内方以外煩大也云々、同後室モ物狂ノ沙汰在之》とありその狼狽ぶりが窺える。

この指出しの機会を捉えて惟任光秀、瀧川一益の両奉行に戒重（かいじゅう）は金蔵院、ヤケアトでは岡弥二郎、大仏供（だいぶつぐ）は新屋で、高田当次郎を中ノ坊で切腹させ、また、かつて永禄の砌、逃亡の上一早く松永を手引きした張本人の元筒井の同族郡山辰巳父子を十一月四日矢田で成敗し、いずれも久秀に組した筒井

家に取っては憎々しいばかりの者達の処分をした。それぞれ各在郷へ勢を出し、家来等の叛乱がないように抑えて順慶は長年辛抱し、苦しみを受けた相手に対して溜飲を下げた。結局指出しの方の寺社領も十一月七日雪の舞う日信長から使がきて安堵され、問題はなかった。天正四年既に順慶が国中一円存知の報を受けていたが、この九日国中一円存知の朱印状が改めて信長から贈られ検地によっても信長からの信頼を深める事になった。

十二日拡張して、新装なった木の香も新しい郡山城へ甲鎧燦爛たる諸将を従え順慶は入った。

今迄の筒井城とは桁違いに大きく、東西南北は眼下に広がりを見せ今後はもう水害に悩ませられる事は無くなった。

(五)

織田の統一された行政手腕は徹底していて順慶の一族に名を連ねた箸尾宮内高春は帰順後の並々ならぬ尽力で信頼を回復し、改めて順慶に従属を誓わせられ死罪は免ぜられた。筒井家重臣達はこの機会に虎の威を借り不穏なくすぶりのある配下を速やかに処断する事を順慶に進言した。早速安土へ申し出て許可を得た。この度は大物であった。

順慶は大和の治政の為に有力な旗下の越智玄蕃頭頼秀の重臣弓場志摩守等に不義ヲ企ツとして十二月一日付の信長の書状を示して上意討ちにした。最早越智は完全に抵抗力を失い、順慶に為されるままでありこれで大和国内危険のある者の大方の処分は終った。

十九日順慶は定次を連れ近江坂本の惟任日向守へ礼の挨拶に出た。様々の事で光秀には世話になっていた。指出しでは随分配慮を見せ大和守護としての体面を保たせてくれたのは外でもない光秀であった。

成　敗

(一)

天正九年の正月順慶は安土城へ向かって正月の挨拶に出たが、他国の大名は伺候に及ばず、との通知を知らず信長は後日京で会うとして、順慶父子を帰らせた。

折角遠い所から来たのに右府様ともなれば身勝手な、と順慶は思いながら仕方なく大和へ戻った。

武田勝頼が遠江の高天神城の応援に出陣し、その知らせが徳川家康から入る一方中国の毛利は秀吉勢へ攻撃の手を緩ずなをも攻めた。順慶は出陣には関係無く大和で例によって春日神社を拝し、手向（たむけ）の神を巡り円証寺に泊ったり成身院に宿したりしている所へ安土城から遣いが到着した。

また出陣かと思ったがそうではなく、正親町帝の天覧を仰ぎ奉り織田の武将達を一同に集め京での馬揃えを致す故準備に手抜かり無きようとの事であった。

かつて信長は朝倉征伐を前にして近江の長浜で天正元年に馬揃えを行っていて他の織田の武将等は要領を心得ていたが、順慶は知らず、すぐ森縫殿佐好高を坂本の惟任日向守へ遣わし詳細を尋ねさせ

た。
京へ向けて信長は出発する前の二月二十三日昨年から時折伺候してきていたバリニャニがやってきて上様に面白い者をお見せ致しますと云って黒人の奴隷を連れてきた。
その代わりどうぞこの地に神学校の設立の許可を給わりますれば誠に有難く、と申し出た。かねて聞かぬ事ではなかったが、信長は世界は広くこんなに黒い人間が居ようとはと、世界の広さを改めて見直した。
さて、馬揃えとは、閲兵の事であった。馬揃えの奉行は惟任日向守であり、馬入の順序は一番が惟住長秀及び摂津衆若狭衆等、二番には蜂屋頼隆、河内衆和泉衆等、三番惟任日向守光秀に続いて筒井順慶であった。その他織田信長の一族や公家衆馬廻り、お小姓衆などがきらびやかな衣装を着け、各武将達の伴までも美粧を凝らし一大絵巻物を見る様であり、帝も殊の外ご機嫌を麗く信長へ顕され二月二十八日滞り無く終了した。
終って順慶が大和の筒井へ帰って来た翌二十九日払暁、重臣達の最長老であった森志摩守好久が亡くなった。今日までは順慶の父親とも頼み一途に筒井家に仕えた重臣の死は順慶にとって堪え難いものであった。
《……森志摩守好之生年六十三ニシテ死去ス順昭ノ妹婿殊ニ三臣ノ一ニシテ知謀勇士万夫ニ敵ス順慶定次大ニ憂テ伝香寺ニ於テ厚ク追悼ス》
剛勇ながらひょうきんな一面と真心があり思い返せばあの並松（なんまつ）の合戦でたまらず太刀を抜き今まさ

に雑兵を相手に構えんとする時に志州がこれを留めて宇陀に落ちたが、親にも勝るとも劣らぬ彼の死は順慶に衝撃を与え落胆させた。筒井順興、順昭、それに順慶の三代にわたって仕え、この度馬揃えで京へ向かう日までは何ともなかったのに風邪が元で寝込みゆっくり見舞う事もせぬ僅かな不在の間に急変し、花を待たずに逝ってしまった。子の縫殿佐好高等は城番で留めていたのがせめてもの幸であったが、容態が変わった時に馬揃えの御家の大事な時として順慶には知らせなかった。
順慶へ父の枕の下よりこの様な書状が、と一通の遺言（いごん）を子の縫殿佐好高から指し出された。
「……かかる世に生を受けられ、忍従、苦節三十有余年にしてようやく大和の守護にお成りになられましたる事、これに過ぐる喜び事はございませぬ。某は黄泉（よみ）にて、ご祖先様方にご報告出来まする喜びはさておき、未だいろいろ致さねば成らぬ事共数多（あまた）にして、最早余命幾許（よめいいくばく）もなくなりました。命数尽くるに当たりまして、子の行く末は兎も角御家の君側の奸は織田様から付けられた桃谷等一派でございまする。もうひとりは中坊、これは今の所は別に致しましていずれの日にか、ご処分を、あの男は御前での軍議に時折居眠りを致しまする。将来必ず筒井家に仇となりましょう程に。更に些細な事乍、吐田（はんだ）遠秀は腹に一物がございまする。この者は一日もお早くご処断遊ばされまする様……ご出陣の無いお暇な折りには、出来るだけ神社仏閣のご参詣を初め、能狂言や茶にうつつを抜かされこれらの者らへ油断を御見せ遊ばされ……」外にも二、三の事がこまごまと記されていたが、一心に筒井家に掛わる事ばかりであった。
今はの際の志州のあまりの忠節に心中を察した順慶は思わず遺言状の上に落涙し数行の墨の字が涙

にじんだ。日頃の志州の字とは似ても似つかぬ筆は悪寒に堪えて乱れてはいたが書き方は志州そのものであった。

日頃不愛想なお松が是非にと順慶にねだり十人余の腰元を従え志州の枕辺へ別れを告げにきて、

「この気難しい筒井家でひょうひゃくを云うおもしろい一番好きな爺であったのに……」と珍しく暴涙をお松でさえも滴らせお松に涙があったのかと順慶を驚かせた。

さて、元々常々神社仏閣への参拝を順慶は欠かさずしていて誰も疑うものはいない。

弥生三月の末に春日神社へ例によって参詣し帰途金勝院にて茶壺を見て、その場から書状を認めさせて吐田遠秀へ遣いを出した。四月の十三日春日の杜で能を催すので共に見ようとの誘いであった。

この四月の十二日外でも人が人を招く事があった。予てじっこんであった、長岡藤孝父子が風光明媚な丹後の宮津に惟任日向守光秀と里村紹巴を招き、光秀に今日まで世話になった礼を心から謝して一日を楽しんでいた。翌年に何が起るかも知らずにであった。

それはさて置き吐田からは体調不具合につき暫し静養の上、何時かご挨拶に参上云々(そうそう)と折り返し返事が来た。

要心している風が行間から読み取れたが、順慶はすぐさま金子百両を持たせ松倉重正を遣いに出して、病気見舞をさせた。重病ではなかったが確かに鼻風邪は引いていた。

順慶は仮病を悟ってしばらく置いておき次の機会を待った。有り難い事に鳥取城攻撃を続ける羽柴秀吉等とは異なり順慶の出陣はなかった。

(二)

さて、いつもの事ながら二番草の頃に氷室の雪を詰め込み夜を日に継いで筋骨たくましい若者が禁裏御用の札を掲げ吉野から都へ向けて採れたばかりの鮎を駈足で街道筋を引いて行く。

順慶の下へ届くのはいつもは揚(あ)げ草(くさ)（三番草の頃旧六月下旬）の頃であったが今年は特に頼んで一番草より二、三日早く届ける事を吉野きっての豪商北村又左衛門方へ頼み、吐田遠秀との和談の手筈を整えた。奔流に育った鮎は六寸を超え取分け香ばしい吉野の鮎は夏の最高の魚である。

畦道に渡る風も稲草の香りをのせ蝗が群れて極暑の中を百余の将兵を連れた吐田遠秀が順慶の誘いに乗ってやってきた。書状は、

「吉野川の鮎を魚に……」

「うるさいことを」と思い乍ら遠秀は此度は断れずに街道をすゝんだ。場所は郡山城から少し離れた額田部村の額安寺で六月三日会見する事になっていた。

吐田遠秀はこの大和で千石を安堵され身の程も知らず大和守護である筒井家に何かと理由を付けては逆らう事があって志州等が心配するのも無理からぬ事であった。

予てから大和諸寺の鐘を集めてつぶし、会ケ峰で量産態勢に入っていた鉄砲の新調出来立ての試射しかしてない鉄砲が連続して実戦に使用できるかどうかの段階に来ている二百余挺があった。

この噂は大和国内では誰知らぬ者は無かったので出陣でも無い限り無闇には持ち運びしていない。

「殿、筒井の鉄砲隊があの村の出口の土堤の上に整列致し折りまする。」会ケ峰はこの村から近い。

先走りが帰ってきて報告した。
「何、鉄砲隊！　して、旗のぼりには何と。」
「ハッ、吐田遠秀様御出迎え鉄砲隊と。」
「御出迎え鉄砲隊、気色悪いな、何故街道筋の村中に控えぬのか。」不審に思いながら一行百余人は村を通過し、終った。
それ迄整然と膝を折り頭を下に向け陣笠から人の顔が見えぬ程控えて見送っていた筒井の鉄砲隊はその背後半丁程の所に身を低くして待機していた百姓の群れが素早く駆けてくると鉄砲隊に火種を手筈通り一斉に手渡すや、それ、それ、と掛け声諸共二百余りに及ぶ鉄砲の筒先揃えて火を吹いた。
「ドッドドーッ」百雷の響がこだました。
「謀られしぞ、あっ。」たちまちにしてあっけなく吐田遠秀等は筒井家量産の新型の鉄砲が遺憾無くその威力を発揮し阿鼻叫喚の中に全員討ち取られた。優しい順慶にしては異例の大虐殺であったが、せめて鮎をご馳走してからにしてやればと思うが釣った魚に餌をやる馬鹿は無い。将来の筒井家の為に敢えて順慶は殺生をし、心の隅に悔いを残しつつこの一件は済んだ。
「今日の鮎はもみない（まずい）」と順慶は味気ない吉野川の鮎を皿に残した。

曲事

(一)

織田信長は八月高野へ兵を出し、聖千三百八十三人を捉え近江の勢多、安土、都の七条河原等に引き出してその月の終わりにこれら総ての聖を殺した。荒木村重の手の者が多勢ここに巣喰っていたのだ。
高野山の坊様も相手を知らなかった。信長は荒木の兵を出せ、と遣いに云わしめたが、
《……いにしえより而来、この山に入る者は、たとえ罪を犯す者なりといえども、これを索むるにおよばす》
と云ってしまったから酷い事になった。
彼等が予想した通り一部の者が根来に手を貸したのが仇になり順慶の吐田殺しとは分けが違った。
織田の右府様とは恐い御方、微塵も容赦の無いやり方に矛盾を覚えてこれからの行方がどう変わって行くのかしみじみ思うと順慶は背筋が寒くなった。
台風にあって足止めをくらい山城山崎にいた父信長に先年織田信雄が伊賀での敗北を報告して信長から絶つと迄云われた伊賀への進攻が始まった。天はどこまでも高く辺りの木々も色付き田圃には黄金の波が刈り取りを前になびき戦いに出向くのには勿体無い様な清々しい日和続きの中での出陣であ

った。順慶は四千を率いて九月三日大和郡山城を発ち大和口から伊賀を目指した。織田の各武将達は信雄が、甲賀口から瀧川一益、蒲生氏郷等を従え、また、信楽口からは堀久太郎、永田刑部、池田孫次郎、進藤山城守等が、織田信包（のぶかね）は加太口（かぶとぐち）から瀧川三郎兵衛等を連れて伊賀全域を周囲から囲む様にして迫った。

敵は元興福寺東門院主で還俗した北畠具教の弟の宮内少輔具親であった。兄は伊賀の国司であったが既に信長から不審を受けて殺されており、北畠家の再興を強く心に刻んで旗を揚げた。織田勢は勢いに任せて敵が逃げ潜むと見れば諸処に放火し、上野やその他敵が巣喰う各所の周囲には砦を築き、無数の櫓を組んで伊賀の土豪共を攻め続けた。伊賀勢は女子供まで動員し順慶が攻める比自山では十一人の旗頭が指揮して縦横無尽に雨、あられと大木、石ころ、瓦の破片を上から放り投げ一糸乱れず三千五百余りが抵抗を繰返し筒井軍にも少なからず負傷者が出た。

(二)

雲行き怪しいその夜敵は筒井勢に向かって横着にも夜襲を掛けてきた。もとより油断のあるはずもなく、反撃した筒井勢は勢い込み追撃の手を緩めなかったが、敵に策があった。

全軍が出払った隙を突いて伊賀衆の服部、西山、小田、上野党等が押し迫り筒井の本陣順慶目指して攻めよせた。

既に筒井に組した地の利を知る菊川清九郎が、順慶を四十九院村の箕の谷へ潜ませて辛うじて助か

ったが、順慶行方不明は大騒ぎとなった。やがて所在が判明するとぞくぞく箕の谷へ終結し直ちに態勢を立て直した順慶は勝利に酔う敵に闇夜を幸い反撃を加えた。元々順慶は下るものを快く許し他の織田生え抜き勢に比し幅の広い扱いをして温情を以って対陣してきたのにこの度の夜襲は許せぬ。とみずから陣頭指揮して敵陣に突き進み主君にもしもの事があっては一大事と、筒井勢は勢込み激しい戦いとなった。

この為将校の主たるものの犠牲は大怪我の程度で済んだが足軽衆や物頭等の半数近くが討たれ敵を破ったものの深刻な状況に追い詰められた。

これを知った織田信長は順慶の生じっかの温情が仇となりあたら無駄に混乱を招き余計な将卒に多くの犠牲者が出た事で不興をかい軍中の油断言語同断ときつく戒め《於伊賀筒井働曲事》の朱印状がもたらされ叱責を甘んじて受けた。

さて、北畠宮内少輔具親は御台所河原に陣し、織田勢を相手に戦ったが壬生（みぶ）野城、さなご、嶺おろしの城は次々に落城し十一日に織田勢がさなご城へ迫った時には伊賀の土豪、国侍等は既に昨夜中に逃げてしまっていた。

さしもの伊賀勢も信長直々の出陣には阿賀郡、阿閉郡、名張郡の各郡を織田の諸将が撫で切りしてそれぞれの敵将を下し、各所で頸をはねた。

名張郡へは惟住五郎左衛門等と共に順慶も抑えに入ったがこの間の事があるのですぐに郡山へ遣いを出し、三千の援兵の手配をして緊張の中にあった。伊賀の東や北や南部は織田勢が完全に囲み手薄

は西と一斉に伊賀の敗軍は山を越し大和を指して逃げ出した。忍者の上、下の服部党も一人一人は優れていても筒先揃えた鉄砲には手も足も出ない。間隙を縫って討って出れば精兵揃いの織田軍が数に任せて三人一組で一人を倒す。

《……上服部党、下服部党一々数多切リ捨テラル。》有様であった。敵が大和へ入れば筒井軍の地元勝手知ったる筒井軍総勢が名張から直ぐ様移動して、追撃に入った。

「この道を追えば、春日山奥の能登川に至り、そこから先は深い谷がはばんで西へは行留りでございまする。」

順慶の麾下(きか)らは急いよく追撃した。

敗軍の先頭が既に大和春日山に達している。緑林に白刃矛槍は魚鱗のきらめきに似て、閃光が動けば敵の身体から血がふき散った。

山々の奥を尋ね草の根を分け入り悉く探して大将分七十五人、その他の雑兵の数知れず、ようやく伊賀征伐は静まった。

伊賀平均を終わると信長は陣を紀州の高野山へ移し十月二日根来に軍を進め高野山を包囲した。

僧兵も聖が千三百余人既に殺されており負けて成るものかと、那智山青岸渡寺に陣取り防戦に及んだが遂に本堂が焼失し、僧達は離散して抵抗するものは無くなった。

十月の七日例のバリニャニが神学校の完成を報告してきて是非上様に見て頂きたいと云ってきたので信長は金子を用意させ行って見るとハイカラな建物が出来上がっていてまた新しい知識の膨らみに

普段のかんしゃく玉を爆発させることなく楽しんで安土城へ戻り側近達を相手にその日は酒をのみ静かに湖上に輝く月の光を愛で謡等を口吟(くちずさ)み安眠をむさぼった。

相変らず毛利が淡路島に勢を置き背後から高野山を操った。六月二十五日に囲んで以来四ヵ月、鳥取城に頑張る毛利の吉川経家を攻めていた羽柴秀吉はついにこれを降ろし、吉川経家は真教寺で自殺した。

鳥取城の落城は十月二十五日であったが、ここへは宮部継潤を入れて守らせると山陰から軍を山陽へ向け、海を渡って淡路島へ侵攻し、由良城主安宅清康を攻めてこれを降らし、洲本へも将千石秀久を入れて守らせ瀬戸内海沿岸の一部の制海権を握ると紀州の雑賀、根来、和泉、播磨、淡路での毛利軍の動きは一度に静かになった。

秀吉は着々と地固めを行い、既に成った姫路城を根城に活動範囲は大きく拡大され播磨、但島、因幡、淡路を手中にし、織田勢全体に大きく貢献し始めていた。だが、四国には長曽我部元親が反織田を掲げて辺りを荒し回り、秀吉は三好康長に手を回して反元親をまさぐっていたが織田へ向かって毛利の軍はいま一つ攻撃を控えていた。

天目山

天正十年の正月に入りまた信長は軍を動かす事を考えていた。先年武田の高天神城が落城し、武田

勝頼を叩く機会を狙っていた信長は庶民を味方に付ける為だけではなかったが、伊勢の両大神宮を大修理し遷宮を復活させ、神職等に金銭を献じ、御皇室の周囲を整えその廃れた悪習を元の如くに復させた。武田の臣福島の城主で勝頼の義兄木曽義昌は家来の遠山友政をして密に信長に通じていわく、勝頼は最近民を苦しめ国事は放ったらかしで主人の木曽義昌は既に袖を別ち、いま旗下に属したいとして、属する千村、山村、岩井、臼田、矢島等の子と一緒に人質を贈ってきた。二月の一日のことであった。その折りも折り上杉景勝が越中をうかがい出陣の様子であり、勝頼は老将達の意見を無視して悪政を続け今諏訪に二万の兵とともにいる。佐々成政が上杉の動きを報らせてきた。

北条氏政が武田と反目し好都合として二月三日には陣布令を行い、諸将は出陣を急いだ。九日には大和郡山城の順慶にも出陣の用意を云ってきたが高野山や吉野の動きに注意し幾許かの兵を残せ、その上での出陣で良いとの事であった。信長の情報網は各前線全域に渡って張り巡らされ些細な大和周辺の事まで知っていたのであるから合戦相手となるともっと細かい情報を知った上で行動していた。

子の信忠の軍五万を先鋒として、木曽路より入り、家康は三万五千を連れ駿河から向かい、金森長近の三千は剣粗な飛騨から静かに潜入し、信長はみずから七万の軍勢を引き連れ伊那口から進み、北条氏政が矢張三万を出して国の境まで出て気勢を揚げた。二月も終わりに近くなって織田、徳川連合軍の勢は益々強くなり武田の兵はその悪政に苦しんでいた所であったので次々に織田方にみずから先を争って進んで下り甲州諏訪の武田勝頼の本隊の中からも主人を捨てて逃亡するものが後をたたず勝頼は新府へ引いた。かねて韮崎に城を築きこれを新府と称した。三月二日ようやく順慶は第一陣を出

発させ、自分は三日の誕生日の祝を済ませてから大和を出た。

三月の一日には高遠城へ迫った織田勢は織田信忠を総大将として大手と搦手から攻め続けた。戦に先立ち城主仁科信盛は妻子を殺して後顧の憂いを絶ち武田に忠を示して戦ったがついに落城し仁科信盛は切腹して果てた。各城が相次いで落城する中でさしもの武田勢も降伏する者や逃亡する者で武田軍の衰弱はおびただしく十一日天目山にのがれ息子信勝とともに悲壮な最後を遂げた。父子を始め最後まで付き従った将兵四十余り、婦女子五十が天目山に屍を曝していた。順慶は最前線に一度も出る事無く危険に会わず従軍しただけであった。信長は常に順慶の体を労わり無理は絶対に避けさせた。十四日息子信忠の功績を賞めて後、箱の蓋を開け、勝頼の頸を見て信長は云った。

《なんじ、狂悖(きょうはい)力を量らずしてみずから覆亡をまねく。争衡の志、今日いかん。》さらに悔しかったらこの扇子に喰い付いて見ろ、信長が罵って扇子を口元へ近づけると、血走った目をクアッ、と見開き、がっぷりと扇子に嚙み付いた。凄まじいばかりの妄念であった。

いずれにしても強国武田は滅び信長は降って来る武田の将等を許さず殺し親族姻族の武田の名族はここに絶えた。

四月に入り織田信忠は恵林寺を囲んでこれを焼き寺中の百余りの僧は全て灰になった。心頭滅却すれば火もまたおのずから涼しい、と名言が残るが火は熱かったと思うのだが。

信長が武田と戦って敗北したと云う噂を流した者がいて越中では土豪が立上り上杉景勝がこの土豪を押し、前田利家、柴田勝家等が十日以上戦っても治まらなかった。

順慶は信長の側にあって四月十日甲府を発ち、二十一日郡山城へ無事帰着した。一兵も損わず、しかし何ら軍功はなく、なんとなく淋しい帰国であった。

本能寺

五月に入り家康がきたりして安土の城は殷賑を極めていた。中国の毛利は織田が武田を破った事で遠征してきている織田の最前線の羽柴秀吉軍を今叩かねば機を逸するとして毛利輝元は動く気配を覗かせた。秀吉はこれを察知してすぐに安土へ通報し信長じきじきの出陣を仰いだ。

《毛利氏みずから来たる。機会を失うべからず、請う、すみやか……》なる援兵をと云ってきた。

《これ天のあたうところ、われみずから往き、一挙にして取るべし。》と返事する一方池田信輝、長岡忠興、高山長房、中川清秀等に備中へ出陣する様信長は命令を出し惟任日向守光秀に備中行きの先鋒をさせる事とした。

享礼いまだおわらずして、また遠役を命ず。翻覆なんぞここにいたる。と怒った光秀は亀山（現亀岡市）へ引き揚げた。

織田信澄、惟住五郎左衛門長秀等は四国を征伐の後で大坂に居り、家康も信長より先に安土城を出て京へ発った。

二十九日僅か百六十を率いて京に着いた信長、信忠父子は本能寺と妙覚寺とに分宿した。

六月二日未明おびただしい兵馬の声、本能寺の周囲は既に光秀の軍勢が十重二十重と囲みこれを知った信長は震怒して云った。

《ああ、奴、なんの恨むるところありて叛するか。他のごとき者ならば、すなわちのがるべし。かの者にありてはまぬがるべからざるなり。》

森長定の弟長隆、長氏、金森長則、高橋虎松、菅屋角蔵等の外宿直（とのい）の近侍、小童、歩卒等は鎧兜を着ける暇もなく手に手に得物をとって健気にも戦ったが多勢に無勢たちまち中門を破られ信長の寝殿に敵が迫った。信長は白綾の単衣を着用し箭を取って群がる敵に一発必中をもって戦ったがたちまち矢は尽き弦絶つ。なおも無念の思いの中で槍をふり回して何人かを倒したものの既に側近の者等は壮烈な姿で死んでおり、変を聞いて駆け着けた者も皆息はなかった。最早これまでと見て火を放ち、無限の夢の中の半ば、四十九にして自殺した。人間五十年、化天のうちを、と歌った歌より一年早く逝き気性の激しかった信長のそれらしい死に方であった。

その日午前筒井順慶は備中へ向う途中、軍を京へ向けて歌姫街道を行軍中、筒井家都の留守居役の遣いから急変を聞いた。軍を直ちに翻し郡山城へ戻った。織田右府様父子都の本能寺に於いて日向守光秀に討たれる、別に郡山城へは二日の午前十時頃には既に知らされている。これを知った家臣達で郡山城は上を下への大騒ぎに成った。狼狽（ろうばい）する将兵には無闇に騒がず城内に出陣の態勢のまま待機させ、然るべき織田の有力武将からの通報を待つ事にして順慶は福住順弘、山田順智、布施左京進、慈明寺順国、箸尾高春等親族に島左近、清興、松倉右近勝重、同重正、森縫殿佐好高等三老を集めて静

かに次の動きを謀った。何故明智殿は叛逆をなされたのか、何故？　と評議が進まない。どう致すべきか、誰が次の織田の御跡を継がれて弔い合戦を遊ばされるのか、織田信長、信忠様父子だけが亡くなり、外には信雄様や神戸信孝様が居られ、どなたにお尋ねすれば、と口々に云うがまだなにも判らず、また場合によっては柴田、羽柴、惟住、滝川、或いは織田の同盟軍の徳川家康殿の動きが、どうなるの、こうなるのと様々の事が動転した者の口からついてでた。

惟任（これとう）とは云わず皆明智殿とか日向殿とかで呼んでいた。大体明智光秀も若い時分から放浪し辛酸をなめた苦労人である上、頭も頗る（すこぶ）切れ者であったから親切な上に義理を幾つも絡ませている。筒井家では取分け随分世話になっていた。筒井家だけではない。長岡藤孝父子等は宮津へ招いて礼を尽した程世話になっている。おまけに光秀の二女は藤孝の子忠興の室であった。君恩か、旧恩か、重臣達の意見は昼夜を徹して翌三日の朝まで続き取り敢えず大和領内の治安の為に奈良、郡山周辺は云うに及ばず、各大寺院や春日神社の杜の警備、奈良街道、吉野口、河内路での道路封鎖、伊賀越え道、西南部の対高野への道路等を固め大和平野内の大安寺、辰市、東九条、法華寺にまとまった将兵を配置し、鎧を脱がずに着の身着のまま緊張した準戦時態勢の中にあった。四囲はまだ治まったばかりで伊賀にしても、高野、雑賀、吉野にしても決して油断は出来ぬ。明智殿は馬鹿な事をしでかした、と云っては見ても出来た事はどうにもならぬ。そんな中で井戸国秋がそっと順慶に許可を貰いに来た。明智殿の援軍としてではなく、見舞いに出させて欲しいと云うのであった。筒井家では順慶と国秋だけしか知らぬ例の豊秋等の事があり、止む無く順慶は許し、弟の井戸若狭守良弘が二万石で宇治槇島城主と

して態度を明らかにせず籠城している事もあって国秋は一手を率いて四日出陣して行った。

逆　賊

(一)

備中高松に在陣していた羽柴秀吉は急拠、毛利と和し軍を率いて惟任日向守光秀と決戦の為三日を経ずに、姫路城へ入り兵に休息を与へ翌日支度を整えると破竹の進撃を続け途中頭を丸めて弔いを行うべく様子を見せて光秀の乱波の目をくらませて欺き進軍をしながら堀久太郎等へ上様の仇討を通告し、西国街道をつっぱしる。光秀の長女は織田信長の甥の子で大阪城代、尼崎の城主の織田七兵衛尉信澄の室であり、在坂の織田諸軍によって既に信澄は主君筋ながら討たれた。

光秀は一方の大将明智左馬介光春、四天王但馬守政孝、村上和泉清国、妻木主計頭（かずえ）範賢、三宅式部秀朝、三宅藤兵衛綱朝、加治石見守総房等三千七百、その他明智治右衛門光忠、藤田伝五郎行政、並河掃部（かもん）守、伊勢与三郎貞仲、松田太郎左衛門政近、諏訪飛騨守盛直、斎藤内蔵助利三、奥田宮内一武、御牧三左衛門兼顕等一万三千の兵を率いて美濃を平定し、長浜、佐和山の各近江の城を屠り、五日には信長の側室等が既に避難して誰もいない安土城に入り勝手知ったる蔵を開けておびただしい財宝を奪い西近江の坂本城へ入った。信長の側室等は蒲生の手のものが一早く近江の日野へ避難させて無事であった。光秀は奪った財宝を都の御所や諸社寺へ贈り、京の民へは地子銭の免税布告を出し、長岡

父子へは勝利の暁には高禄を以ってと援軍助成を、しきりに誘った。
秀吉をどんな事をしてでも都へ入れてはならない。織田の重臣柴田や滝川、前田、惟住等は各所で対陣中で動けない。
都の周囲唐橋、伏見、宇治、山科、八瀬、鞍馬、鷹ヶ嶺等に陣を配して態勢は整ったが、光秀は筒井順慶に参陣の誘いを藤田伝五に遣いさせた。かつて、光秀の子として定頼を筒井家が迎えた経緯もある。
そこへ京から井戸国秋が郡山へ戻ってきた。
秀吉が仇討の合戦に折柄の雨をついで急拠上京中、と報告して事態は逆賊を討つべしとするものと、飽く迄明智に組してとする二派に筒井家は別れたが、取敢えず村田、今中の両名に書面を持たせ秀吉に遣いを出した。山城と北河内の境の丘にある八幡の洞ヶ峠(ほらがとうげ)に光秀の一軍が陣し、山城淀城や勝龍寺城へも配陣して秀吉との決戦に備え風雲急を告げた。洞ヶ峠そのものは大した高さは無いが大和から北へ丘陵が続き河内との国境が続く。石清水八幡宮の鎮座まします台地まで出れば遙か北は比叡山、愛宕山の連峰を望み東は宇治、城陽が手に取るように見え、西北に目を転じれば天王山を仰ぎ、尾根伝に松高き枝も連なる鳩ヶ嶺まで見張りを出せば枚方、高槻方面まで眼下に広がる戦略上重要な連携を保つ地点である。大和の各城を空にして総決起した筒井軍が光秀に加担してくれれば二万余りは固いと踏んで光秀は再三誘ったが筒井家の反応は鈍く、万一大和から富雄川を北上して、枚方を経て淀川の土手にでるか、或は歌姫を越えて山城の下狛、祝園(ほうその)、田辺と軍を進め順慶が秀吉に付いて背後か

ら攻めれば洞ヶ峠の陣は最も危険となり淀城は指呼の間、これが崩れれば桂川を越えて長岡にある勝龍寺城までは時間の問題である。そうなれば山城はすぐ秀吉の手中になる。光秀は洞ヶ峠の陣を払い淀川が細る山崎方面にこの軍の移動を考えた。
京の背後の近江と丹波は光秀の手中にあり、対戦する方面は西からの秀吉勢だけであった。

(二)

斎藤大八郎利次が光秀の末子の乙寿丸を質とし、書簡を携え金子千両、太刀や大量の段子(どんす)やしゅす三十巻と共に合力を頼みにきた。勝利の暁には和泉、紀伊、大和の太守として順慶を迎えると云うのだ。順慶は城下の専念寺に遣いを待たせ家臣等に家運を懸けたこの度の重大事件を謀った。
織田家は今迄数度の功績も認めてくれていないし、この機会に筒井家の繁栄を掴み太守に成れば結構な事とする者が多く、また、義昭を追放した右府様が討たれ将軍家旧臣日向殿が仇討されたと思えば、逆臣の汚名は雪(そそ)がれる。
かつて、織田右府様が松永を大和守護に任じられこれまでどれ程その為に我等は苦労した事か、として日向光秀に援軍を派兵とする者が強力に牛耳ろうとした。
「於縫！　その方はどう思うぞ。」志摩守の子縫殿佐好高に順慶は尋ねた。父にすぐる才智を有すると人から云われ有能であった。
「父者人が居りますれば、多分意思を顕にせずとして、今迄通りしばらくは静観するのが良策かと申

しましょう。如何に日向守とて、逆賊は逆賊、我等が日向殿のお味方をすれば逆賊の片方を担ぎその汚名は末代後世に残りそれを雪ぐ事はできませぬ、と心得まするが。」

「否！　筒井家浮沈に掛る絶好の機会を残しては却って末代に悔いが残る。今迄の織田家は既に滅亡も同様、素性の知れぬ羽柴とは違い日向守様は歴とした源氏の末、情も御厚いぞ。」

「あいやしばらく、如何に過去はどうであろうと叛逆は叛逆、ここで道をあやまてば後世の物笑い……日向殿の事は確かに世話には成ったので無視はできぬが、簡単に動じる分けには参らぬ。縫殿佐の云う通りここはその中、態勢が整い次第八幡山まで軍を進め、と日向殿へご返事をする事がまず第一。」と松倉勝重が云った。順慶は幼少の砌以来大事な時は全て合議を以って臨んできた。万一織田勢諸将が弔い合戦をはじめれば内通する裏切者が出ては危ない。島左近、森縫殿佐、越智、十市、箸尾、小田切、小和泉、井戸等は勝重に賛同した。順慶は斎藤大八郎利次を呼び当座の賞禄を与へ旧交の事は十分判っている。人質や贈り物は勝戦の後、功を立ててから頂く、と彼等を帰らせた。筒井家の態度は臭いと、悟って大八郎利次は帰って行った。

順慶は決断し血走る重臣達を前に断言した。

「一同静まれ、この度の明智殿の反逆の事、容易に決し兼ねたが、敬うお方を敬うのは、物の道理、仇は仇。この度の事。遺憾ながら明智殿のお味方は致さぬ。天下は一時、織田殿の支配下にあってこそ我国の帝を帝として奉り、武家は武家のあるべき忠節を貫く姿がうかがわれた。わしは織田家の大和の守護ではないが推挙せられたのは織田殿である。我等と同じ織田殿の臣でありながら明智殿は事

情はどうであれ、上様を討った。その織田殿が決められた道を継ぐ者が仇を討つとなればその旗の下に結集して仇討をするのが臣下の道。最早や、わしは迷わぬ。もう、如何なる議論も致してはならぬ。例え、明智殿が決戦に勝利を修めてこの大和に攻め入る事となって我れ一人になっても明智殿を討つべしと領解した。よいか、ここに厳しく申し渡す。いざ、合戦の準備を手抜かり無く致せ。」一同は平伏して意義を挟む者は誰一人としていなかった。

「ハハッ」体調の優れぬ順慶は子の藤四郎定次等と郡山に残り、島左近、松倉勝重、飯田三郎、小田切宮内、小和泉四郎、井戸国秋、森縫殿佐等一万余が山城八幡の洞ヶ峠に向けて出て行った。

(三)

陣小屋掛けに着き、光秀方へ森縫殿佐好高が遣いに発った。羽柴等織田勢が合戦場に到着せぬ間に攻められては目も当てられない。島左近は敵状視察と防戦の為に森縫殿佐を使いさせたのであった。光秀方はそれを知らず充血した眼を細目て合力と錯覚し喜び兵糧や酒肴を山程縫殿佐好高に土産として持たせて帰らせた。

この頃ようやく光秀謀叛の事実を知った毛利は却って秀吉の忠節を誉め秀吉が頼み込めば鉄砲五百槍五百おまけに兵三千余りを加勢として小早川隆景は承知して貸した。今の今迄対陣していた相手に隆景は義を見せた。秀吉は尼崎城にあって石田三成、増田仁右衛門、大谷吉隆等に命じて織田諸将へ使いを走らせ光秀との決戦を呼び掛けた。織田神戸信孝、惟住長秀、池田信輝、中川清秀、高山右近、

塩川国盛、堀久太郎、蜂屋頼隆等が集まった。直ちに島左近は秀吉へ光秀との誼は誼、忠は忠として既に主君順慶はお味方申す旨、と遣いして帰ってきた。その日十一日が終り両方の陣は着々と整いつつあった。

秀吉は軍を進め山崎を手前にして諸軍の勢力を見た。

高山右近長房が五百、中川清秀六百、塩川国盛四百、合わせて千五百、ついで堀久太郎千五百、池田父子三千、惟住長秀三千、織田神戸信孝は四千、蜂屋頼隆は千人、後陣は秀吉弟羽柴美濃守秀長、黒田官兵衛、蜂須賀正勝、中村一民、山内一豊、生駒善介、寺沢志摩守、有馬豊氏、堀尾吉晴、青木秀以、杉原五郎左衛門等の外小姓組の加藤虎之助、片桐且元等総動員一万三千余り、山崎を前にした羽柴筑前守秀吉方は合計二万七千余人、他に遊軍筒井勢が凡そ一万が控えていた。惟任日向守光秀等の一万八千余りとの対決であった。

十二日の夜半、光秀は松田太郎左衛門政近を呼び鉄砲隊三百その他足軽四百合わせて七百を率いてあの天王山に上り、合戦が始まれば山を下って秀吉方へ討って出よ、と命じたが秀吉も同じ頃堀尾吉晴に千余りを授け、命じて天王山へ上らせた。山中半にして双方小競り合いがあったが、両方共敵は既に山上にあり、と錯覚しながらも必死で戦い雨模様の空は月を覆い闇夜の中に戦った。たまたま放つ、堀尾方の鉄砲が松田太郎左衛門に当たり敵は静々と密かに下山して要の天王山を明け渡した。

斎藤内蔵助利三は敵状視察の上、弟大八郎利次を遣いにだし光秀にどう見ても戦況は不利、一度亀山に戻り安土城にいる明智光春を呼び戻ししばらくは亀山に籠城の上改めて雌雄を決すべしと説かせ

たが光秀は血迷い鷹揚に笑ってこの策を蹴った。再び心配して利次を遣わしたが光秀は怒り臆病者呼ばわりして罵った。斎藤内蔵助利三は心の底で光秀を見限った。

天王山

(一)

六月十一日に唯成らぬ噂が大和国内を駆け巡っていた。

《筒井順慶大和郡山城に於いて切腹》国中は騒擾し、通路は混乱に乗じて群盗や隣国からの攻め込みを警戒する庶民の荷車がひしめきあい、避難場所を求めて泣き叫ぶ幼子の手を引く親達や牛馬の声等が喧騒で郡山は勿論奈良の市中を賑わした。犠牲になるのは何時も関係の少ない庶民達であった。

混雑する街道を危急を知った数騎の騎馬武者が何組も郡山を目指し泥をはねあげて駆け抜けていく。しかし、それは明智方の放った乱波の噂であり午後にはようやく順慶の健在を知って落ち着いた。

一方、羽柴秀吉は着々と決戦の準備を進めていた。

また、光秀に罵られた斎藤利三は最早明智の命運ここに極まれり、としながらも遊軍二千を割いて大和の動きを封ずべく手を打っていた。

羽柴側高山右近、中川清秀等は山崎街道を完全に抑え明智軍へにらみを利かせ秀吉の到着を待機している。

京の南、下鳥羽に陣取る光秀は京の町の有力者から地子銭免除の礼を受け、この度の一戦に勝てば汝等にも十分の事をしてやると態度は鷹揚であったが、出されたちまきを皮を剝かずに喰った。元は然るべき侍であった町の有力者の一人は光秀の狼狽(うろた)えぶりを見て御大将が斯くの如きであれば、最早勝敗は既に決まったのも同様であると見抜いて腹の底でせせら笑っていた。そこへ火急の遣い番が騎馬のまま、光秀本陣に駈けこみ、天王山で松田政近が討たれて全員下山の知らせを受け、これを聞いた町人の代表等は競って京へ逃げ帰った。都から一里も離れると其所は京ではなかった。

天王山から見降ろせば桂川、淀川、木津川の三川を始め光秀が陣取る下鳥羽、城南宮の辺り、麓の山崎は勿論北河内、乙訓地方一帯、伏見、久我、羽束師、納所、川顔等久御山、八幡、橋本、楠葉、枚方、郡、守口が逐一手に取る様に見え、遥かに大和の生駒山迄見通しが利く。堀尾吉春は敵の動きを秀吉に報告して対戦は極端に有利であった。

既に前哨戦が始まっている。

その日十三日は朝から生憎の雨模様、山崎の天王山を取られた事で光秀は淀へ遣いを出し、八幡付近の軍勢に直ちに移動を命じ彼等は一頻り雨の中をついで木津、宇治川（淀川）、桂川を渡捗(とじょく)した。光秀の配慮が欠けていた。鉄砲隊の腰に着けていた火薬が湿り物の役に立たなくなっている。

折から明智軍の明智十郎左衛門、奥田宮内、同市介、磯野弾正、鳥山主殿等が高山右近、中川清秀等勢と交戦七、八度に及び高山、中川勢等五百余が討たれ、尚も逃げる敵を追って攻めたが山手から羽柴方堀久太郎、浅野弾正、生駒善介、大谷吉隆等が討って出た。逆に並河掃部、妻木忠左衛門、波(は)

伯部(かべ)権頭、酒井孫左衛門、同与太夫等に散々に打ち破られまた三百余人が討たれた。

羽柴方池田、惟住勢も八百余人が手負いになり羽柴方は苦戦している。

早々に引いて休息している所で竹藪の多い八幡でウワーンとうなる藪蚊の大群に悩まされながら待機していた筒井勢は相ついで男山、鳩ヶ峯からの斥候が羽柴苦戦を伝えてきて、筆頭長老の島左近は時こそ熟せり、と八幡から小田切宮内、小和泉四郎、森縫殿佐合計三千余人、また一隊は島左近自身も飯田三郎次郎、井戸十郎等三千余りを指揮して筒井勢は二手に別れ洞ヶ峠から高野街道を走り放生川に添って淀川を目ざす。もう一隊は楠葉から淀川堤へ出て、八幡の北から打って出た。松倉重正、楢原右衛門等は後詰で待機している。

かねてから淀川の堤下に伏兵を置いていた明智勢の柴田、斎藤等二千が筒井勢の小田切、小泉、森らをやり過ごして背後から一度に弓、鉄砲を射込みこれを迎撃し二百余りがたちまち撃たれたが、幸いな事に鉄砲は全て火薬の湿りで不発に近かった。

筒井勢はすぐに気付いて反撃し、そこへ島左近の三千が合流して攻め込んだ。敢えて二手に分れたのは全滅の危険をさけ逐一鳩ヶ峰、男山からの斥候が的確に敵の動きを伝えてきたからであった。斎藤利次等の勢が筒井勢にたちまち五十余り討たれたが、斎藤利次は兄同様今日が最後と決めて必死の戦い振りで激戦となった。

全身傷を負いながら島左近等大物に近づき、刺し違えんと奮戦したが虚しく島左近の大薙刀にかかって明智方斎藤大八利次は果てた。ここ激戦の中を日月の鉢を頂き緑の緘を雨中といえども一際目を

ひく丹波の豪族並河雅歌頭長信は筒井の雑兵を蹴散らせ得意の大長刀を水車の如くふりまわしてつきすすんでやってくる。少しは名の知られた五、六騎の井戸、小田切らの麾下がうたれてつぎつぎに傷つき、雑兵共も浮足だって逃げまわる。これをめざとくみつけた筒井の一騎、長槍をかいこみ、馬上豊かに威丈高に身をそびえさせ十八間四方鬼神の面を頂き緋色の具足も鮮やかにさっそうと並河を目ざしてつきすすむ。飛来る矢弾をものともせず、並河に従う雑兵の先兵をあたるを幸いきらりと槍の穂先一閃すればたちどころに血しぶきが飛散り人馬に踏みあらされた草むらに散る。

「おのれ、猪口才なつわものなにがしぞ」呼ばわればこれこそ森縫殿佐好高。並河雅歌頭の大長刀が縫殿佐の首をねらって一振りすれば、

「応」とこたえて槍をくり出し、雅歌頭の胸元をつく。そうはさせじと水車の如く大長刀がこれをはねかえす。五合、十合と攻守をくりかえすがなかなか勝負はつかぬ。換発を入れず槍の半をねらって一振りすれば縫殿佐の槍はもろくも手許をわずかに残してきれいに切って落されなくなった。あまりのはげしさでき手の爪が空をむき手甲に血がにじみ痛が走ったがものともせず、今こそこの一振りと雅歌頭はすきを与えずさらに迫るを伝来の宇陀の貞宗二尺六寸の陣太刀を素早く抜いた縫殿佐は雅歌頭の大長刀の柄許を打ってこれがまた二つになった。なお力余った縫殿佐の太刀は切先鋭く雅歌頭の肩先に迫り、さければ錣（しころ）をかすめた。あわてた雅歌頭は体を反らしたその切那早くも脇へ貞宗はぐっと喰い込み「ドドド」響をのこして雅歌頭は落馬した。飛下りた縫殿佐はこともなげに雅歌頭の首をあげ、早や愛馬の栗毛にうちまたがると馬をうたせてあらかた失せた敵を尻目にもどってきた。各

所で明智は破れやがて羽柴本軍が鉄砲の筒先を揃えて一斉射撃を繰返し、光秀の前線の一角が崩れた。危ういと見て光秀は勝龍寺城（長岡京市）を目指して本陣を移動させたが日頃訓練を積んでいた鉄砲隊の働きが無く、遂に多大の武将や兵卒を討たれ、敗走に次ぐ敗走を重ね、午後に到る前に大方の決着がついてしまっていた。筒井勢は敗走する敵を追うが逃げる敵は埒（らち）もなく四百余りが討たれ、双方各三千余人合計六千余りの戦死者が出たが、より以上に光秀方が奮戦したのに圧倒的な秀吉勢が数に於て勝っていた。敗残の将兵は八方に逃げ去り長岡から柳谷観音を経て高槻、茨木の山中や国許の亀山を目指した兵等は悉く途中で追手に討たれ、辛うじて光秀等は伏見から間道を経て小栗栖へ入ったが深い竹藪の細道で土豪の群れに襲われその日の夜中に討たれ遂に果敢無くなった。

《逆順無二門　大道徹心源　五十五年夢　覚来帰一元　明窓玄智居士　書》の辞世を残した。

この結果を島左近等はすぐに大和郡山城にいた順慶に急使を出して連絡したが例に依って順慶は胃病の痛みに耐えかね両日は動けなかった。

(二)

筒井順慶が大和から出ずに宿老の大半が出陣していたとは云え、ようやく十五日に醍醐にいる羽柴本陣に参着したが秀吉はなじった。

《貴殿は優劣の見極めで日和見をしておったな》

「いえ決して左様なことはござらぬ。先に村田、今中の両名を参上させ委細は申上げた通り……」

「聞くところによれば、光秀へも使いをさしむけたと申しておったが？」

「それは貴殿ご着到まで我らが攻められれば目もあてられぬところ」

「それもそうじゃが……」と云い乍ら秀吉には既に戦後処理に一人でも自分に有利な条件を呑ませる一流のやり方で順慶を取り込み抑え込んだ。

今更順慶はこの期に及んで弁解は敢えてせず沈黙の中で恥を忍んだ。いや、そうでは御座らぬ。などと云ってみても全羽柴勢は勝利の興奮の中にあり取り合う者等はいない。秀吉の説得力や喧伝の効果的な弁舌は常にうまかった。どんな時にでも最大限言葉を強力な武器として煙に巻き、この後、信長の後継者選びの清洲会議では信忠の子、信長直系の孫三法師君が継ぐべき者として、三法師を抱き抱え上段の間につかつかと上がり織田有力武将を尻目に某が後見役を承り、として実質の織田信長の後継者となった。小栗栖の長兵衛に討たれた光秀にしても実際にはそうではなく、身代わりの者であったとする説がある位である。

形相の変った光秀の死顔など、潰滅させた秀吉がこれは間違い無く光秀也と云えばそれはただちにそうなったからだ。

しかし、いずれにしても順慶は身の不遇をかこつ不利な中にあってその後は一言も云わずにいたため忽、筒井殿は洞ヶ峠で日和見、と各武将達から兵卒に到るまで宣伝されてしまい後世まで云われ無き優柔不断の汚名を着せられた。

「お館様、我等の働きが悪く、日和見の汚名を受けられ残念でございまする。」家来一同は悔しがっ

たが、順慶はその内我等のまことの真価が問われる日もある。悔しがる事は無い。として、冷静であった。

「しかしながら……」まだ家来達は云いかけたが、もう云うなと却って主君になしなめられようやく重臣以下も治った。

「無言は百言にまさる」これが順慶の心情であった。

天下分け目の天王山を取り逆賊光秀を討った事で一躍秀吉の発言権は極端に重みを持った。

第一筒井家一統の所領だけでも五十万石近い物が秀吉の自由になったのと同じであった。順慶は元々穏健にして敢えて争いを好む性格ではなく気の弱い所があった。信長はその良さを好んだが、秀吉はそんな悠長な事では済されない立場にあった。今こそ天下に号令出来るか身の破滅しかなかった。おまけに人の悪口程面白いものはない。人を魚にした上で秀吉は畿内の有力武将順慶の勢力をものにしたのであった。

順慶は第一織田家につながる家柄、それに大人しい割には結束の固い一族老臣が周りを取り巻き敵に隙を見せぬ順慶を秀吉もその実力の程はとっくに知っており清洲会議には順慶を自分の旗下として出席させてとことんまで人を旨く利用しきった。万一あの日順慶自身が万余の軍勢を率いて光秀側に一気に参陣し、羽柴軍に洞ヶ峠から討って出ていたら少なくとも総勢では引けをとらない両軍の衝突になっていた事を思うと秀吉自身も順慶を軽く扱う事は出来なかった筈である。考えれば畿内の大和にある順慶は決して軽い存在ではない。和州諸将軍伝もこの度筒井の働き群を抜きとしている。

さて、安土に頑張っていた左馬介光春も敗北を聞いて丹波衆のみを残し後は全部暇を出して、城に火を放ち、自分等千余は坂本の城へ敵を防ぎつつ、到着したが神戸信孝や惟住長秀、池田信輝等一万一千余りの攻撃を受けて落城し切腹して果てた。光秀の処置が早ければ山崎の敗北だけならまだ亀山城の五百、山城の淀城千余り、勝龍寺城八百余り、近江坂本の八百、長浜に千余り、安土城の五千等を合わせれば万余の将兵が残っていたのに、一戦に負けた位で光秀が弱気になっていて自殺しか考えなかった。光秀に付いた将兵の不運であった。

数日掃討戦が各所であったが、最早大した事はなく、平呑されていった。順慶は掃討戦には参戦せず、大和へ戻ったが清洲会議では大和宇智、宇陀二郡の増加を受け勿論大和一国一円は安堵となったが七月には藤四郎定次を人質に差し出さねばならなかった。

(三)

十月十五日秀吉は京都紫野大徳寺に於て信長父子の葬儀を行い、みずからは三法師信秀の名代となり、前後の輿の中、前の輿に従い信長愛用の不動国行の太刀を持ち、順慶も十五番目に焼香をした。北畠信雄、神戸信孝等織田一族に続く順位であった。秀吉は順慶を高位に扱い、順慶は否応なく羽柴勢の武将となっていった。

十二月に入って秀吉から出陣準備の通知を受取り順慶は木の葉を巻上げ木枯しの吹く奈良市中に地子銭を懸けた。矢銭であった。ふところの寒い者のその上衣をはぐに似て順慶はつらく思ったが敢え

て掛けなければどうしても出陣の費用を算段することは出来なかった。

七日岐阜城にいた織田信雄攻めの出陣でありこれは信雄が相続争いの中で兄の信孝を無視して然るべき相続人たるべきものは自分であると密かに柴田勝家、滝川左近将監一益と手を携え毛利の吉川と結び挟撃して秀吉を討つ、事にあった。第一手元には秀吉が牛耳って立てた三法師秀信がいていくら何でも秀吉はここを攻めはしまいと多寡を括っていたし例え、勢いで秀吉に味方したとは云えまだ定まらぬ織田の有力旧臣達までがまさか一致して、信長の孫を預るこの岐阜城を攻める訳は無い、と考えた。

だが秀吉は北国の柴田が雪で動けぬその好機を逃がすはずがない。九日羽柴勢は旧織田の勢力の惟住長秀、細川忠興、池田紀伊守、蜂屋頼隆、それに筒井順慶も島左近を城の留守代に残し、松倉重正、森縫殿佐、小和泉、楢原等五千余りと共に五万の軍勢の中にいた。秀吉は綿密に作戦を立て美濃の各城を悉く打ち破り金華山の岐阜城を孤立させ、信雄は遂に三法師秀信を秀吉に預け講和を願い出た。二十日を経ずに戦いは終わり二十七日順慶は郡山へ帰ってきた。

秀吉は柴田への対抗上、惟住長秀の子を秀吉の弟羽柴美濃守秀長の養子にしたり石高を増やしたりして機嫌を取りその他の武将達にも如才なく何呉れと無く手を打っていた。

この辺りで最早秀吉を総帥と仰ぐものと柴田や他の織田の子等の勢に従う者と色分けが、大凡はっきりとしてきた。

秀吉は山城の山崎に城を築き、姫路城との往復に要心しながら信長の轍を踏む事は避けた。

秀吉と柴田勝家との双頭の天下争いを象徴するが如く、山城葛野郡に二つ頭の子を生んだ女がいた。希有の事であり人々は気味悪がった。天正十一年二月の事であった。

新支配者

(一)

二月十日秀吉は七万五千の軍勢を率いて近江草津に武将達を終結させ雪中を柴田勝家の妹婿の滝川一益のいる北伊勢へ進軍を開始、筒井順慶はこの度は羽柴美濃守秀長の旗下について参陣した。信長も人使いが荒かったが、秀吉も結構弁舌を振るって督戦し、順慶は伊勢掃部助、氏家左京亮、稲葉伊予守等と土岐羅口から桑名城を目指し滝川軍の追い落としにかかった。猛烈な進撃に滝川は軍勢を纏める余裕もなく狼狽して桑名城へ逃げ込み秀吉は喜んだが流石に織田家中で聞こえた滝川は簡単には落城しなかった。一方で柴田勝家も焦り雪を掻き分け軍勢を進める態勢を急いだが中々はかどらず、秀吉にすれば勝家が動く前に滝川を片付けたかった。

三月三日になってようやく一益は降伏したが、筒井勢が攻めていた峰城は頑強に抵抗し、付城を作って持久戦になった。桑名城や亀山城（伊勢）が落城したのに柴田勝家が来るまではと尚も戦いは続けられ順慶は苦戦し、負傷を負う者が多く、その内、神戸三七信孝が一万余りの軍勢で反羽柴の狼煙を揚げ愈々戦の激しさは増した。

しかし、順慶は四月に入り生温かい日に風邪を引いて体調を崩し、当分の間戦線の離脱を秀吉に願い出た。表向きは将兵の交替で、と云ったが秀吉は全て承知していて快く許した。どうせ持久戦の事であり、胃病でない事で秀吉も安心した。大将が風邪くらいでと思われるが寧ろ最前線で武将が風邪をひいて熱などあると、冷静な判断を狂わせ却ってとんでもない過ちで取り返しの付かない失敗が過去に幾度もあり軍中では深酒の酔いと風邪は最も気をつけねばならない事の一つであった。

三日に郡山に帰って座の温もりを味わう暇も無く八日の夕刻には秀吉から出陣の要請が届き九日払暁軍旅を整え近江の大津まで軍を進めたが敵柴田勝家は毛利が元将軍義昭を奉じて出てくれると期待し動きを見せたものの結局は掛け声ばかりで毛利等は動かず勝家もいま一歩戸惑い、一旦勢の動を止めたので順慶はここで滞留するより大和に在って遊軍として摂津、河内、山城の動きを牽制すべし、とした秀吉の命を受け十四日大和へ引き揚げた。

(二)

秀吉は美濃大垣にあった。二十日各羽柴勢の城は連携して互いに補い陣容を整えていたが、大岩山城のみは攻め方で一番弱点を持っていた。元より見逃す筈も無く大岩山城は囲まれ隣城の高山右近勢が逃げ惑う中、中川清秀は佐久間盛政に討たれた。迅速果敢な秀吉は柴田勢の油断は今、と夜を徹して行軍し近江木の本に陣して賤ヶ岳に迫った。

佐久間玄蕃盛政は清秀攻撃の後に勝家がすぐに軍を引き揚ぐべし、と命じたが、とても直ぐに秀吉

は来るまいとせせら笑っていた。だが、例によって秀吉をよく知る勝家はなおもしつこく伝令を出して直ぐに引き揚げよ、と三度に及ぶ警告を発するも柴田勝家との合流に戻らず、命令を聞かぬ間に羽柴勢は先導のものに道々松明を赤あかと炊かせ、通過する村々の百姓や町人に命じて握り飯を用意しろ、勝利の暁には格別の恩賞を与うべしと布令させた中を全軍疾駆して迫り柴田勢佐久間軍は敗走しこれが柴田勢の総崩れとなった。秀吉は旗下全軍はもとよりお小姓組まで動員して攻めたてた。

二十一日、一番槍の石川兵介は討ち死したが、続いて二番槍加藤虎之助、同孫六、片桐助作、平野権兵衛、糟屋助右衛門、脇坂安治、福嶋市松等が次々に突き進み功名を揚げた。世に云う賤ヶ岳の七本槍の故事の戦いであった。結局柴田勢は敗北し越前北ノ庄へ引き揚げたが、敗北を知った地元では早々と去る者が出て一万余りもいた将兵は秀吉軍との一戦を前に激減し、三千余人が守るばかりであった。勝敗は勢の多寡ではないと、勝家が云っては見たものの最早六万余りの大軍を相手に戦える事ではなかった。

毛受（めんじゅ）庄助家照は身に替えて戦に出る事を勝家に申し出て今更勝利はおぼつきませぬが、ご老体にしてみずから戦う事などお出来にはなりませぬ。ここは某が馬験（うまじるし）を預かり、御兜を頂き羽柴勢に一泡吹かせてご覧に入れまする。と健気にもたった三百を率いて当たるを幸い我こそは鬼柴田と呼ばり毛受兄弟は獅子奮迅の勢を振ったが羽柴方堀久太郎等二万余りの率いる中に柴田勝家只今自害致す、と叫んで馬上で割腹して果てた。日増しに攻撃を強める羽柴勢の為に二十四日落城して柴田勝家等は遂に自殺し滅んだ。

伊賀再攻

(一)

柴田が片付いたのですぐに岐阜へ勢を向け秀吉は三七信孝を囲み順慶は伊賀不穏を鎮静の為南伊賀へ軍を進めた。柴田が滅び順慶は河内で二万石の加増を受け進軍にも張り合いがあった。滝川一益の養子雄利（かつとし）の守る松ヶ崎城攻めである。伊賀者が混じる戦いで筒井勢は度重なる駆け引きに翻弄され、繰返し夜襲や不意を突かれ苦戦した。

伊賀者には敵ながら小気味良い程鮮やかに手玉にとられ物陰に潜んで手筈通りの成り行きを楽しんでいる風にさえ思えた。真面目に戦わず一方で誘い、他方でワナにはめた。筒井家剛勇の士等はその卑怯さに余計苛立ちを覚え敵の策にまんまとひっかかった。伊賀者の狙い通り狩猟を楽しむ如き一種独特の戦法であった。

伊賀者は事前に綿密に計をはかり仮りの砦に潜む勢の動きを十分確かめ間違い無くその数を読んでから虚勢で砦を囲み間道に予め人をきっちり配置して飛び道具で敵を誘い出す。筒井側はすぐに対応して伊賀者の後に迫る。夜行にたけた伊賀者は昼は十分の睡眠をとり体調は自在勝手次第。敵の仕掛けにはまった筒井勢は眠気まなこにおっとり刀で次々に深傷を負い、落命の数も日毎に増えた。勝手知ったるその道を伊賀者は適度の距離を放してつっぱしる。待ち受ける相手があるとも知らず一枚も

二枚も上手の伊賀者の餌食になった。狙い違わず手元に来た所を労せずして射止める。或は忍びを心得た伊賀者が僅か十数名で前衛を駈けぬけるのを持ち口の将校がそれっと兵を率いて追いかければ太縄を張り巡らし仕掛けがあってひっかかり、つまずけば鉄製の菱や逆杭、仕掛け弓が一斉に牙を剝き、落とし穴を仕掛けていた。ようやく立ち上がった所へ手裏剣（しゅりけん）や半弓を木陰から浴びせ命を落とすもの、深傷を負うもの数知れず、雑兵のみならず時には筒井家剛勇の士、島左近、松倉重正、森縫殿佐、その他有力将校等多数が深傷を受け散々であった。攻城や平野での戦い、騎馬武者同志の戦いなら決して引けを取らぬ筈であったが様子が極端に違っていた。伊賀者の遣り口はそれ成りのやり方が決まっていたが、時に巧みに幾分かを変えて敵を欺いた。仕掛けられる度毎に筒井衆が緑野の林間に紅葉の如き血しぶきを吐いて倒れていった。

そんな頃、陣中に大和から急使が到着した。予て成敗した高田当次郎の遺児高田三河守が密かに大和へ戻り反旗を翻す不穏の動きありとの事であった。

「お縫！」順慶は縫殿佐好高を呼び直ぐ様大和へ手筈を授けて帰らせた。

大和へ帰った縫殿佐は郡山から五月十二日順慶の使いとして三河守へ使いを出し帰順の説得に出させて一応の決着を見た。どうせ三河守は何れかに落ち行く事を予測し大和に留まれぬと見た森縫殿佐は各街道に兵を出した。三河守が十津川郷に入った所で筒井家の兵と十津川郷士が囲みこれを討ち取り鎮めた。

(二)

ここ伊賀では負傷者や死者が多く、将兵の交替を含め抑えの将兵を置いて順慶は五月二十日大和へ帰り二十四日全羽柴軍の招集に近江の坂本へ順慶は向かった。

五月の末には信孝等も自殺して秀吉の勢は益々盛んであった。六月に入り信長、信忠父子の一周忌を京紫野大徳寺に於いて執り行いその霊を慰めたが真意は信長の後継者たるべき者としての謂わば示威であった。二日順慶は銀子五十枚を香典として供え回向に参列した。

片方で石山本願寺跡に広大な築城を行い、秀吉の大阪城が出来上がりつつあった。淀川を北の防衛線にして、大和川を中途の今福辺りで堰き止めて中河内を湖水化して外堀にし瀬戸内海を控え海外貿易の堺をにらみ四国をへいげいし、都への距離も近く、信長に倣って船便の利を良く知り後には九州、韓国（からくに）への出兵までも含めた構想の中に秀吉の夢が膨らみつつあった。

各秀吉配下の武将達のど肝を抜かす規模である。大坂の地は唐土、高麗、南蛮の船が出入りし五畿、七道はこの地に集まり、富貴の湊なりとした信長の夢が秀吉に引き継がれた。上町台地一帯の高台に大濠を備え大手口、京橋口、玉造口、青屋口と四つの城門を構え、大手門を潜ると大手口桝形を設（しつ）らえて取り巨石を積み上げ空堀を渡ると二の丸が建ち、桜門を潜るとやはり一つが十五畳にも及ぶ巨石群が見るものをして圧倒する。更に進むと三十六畳もある蛸石が行く手にでんとして座っていた。毎日千を超える船が大坂の川筋を埋め尽くして巨石を運び込んだ。この地は足掛け十二年に渡ったあの手こずった本願寺の跡地、支城五十一を持ち信長が苦心の末落城した跡である。要衝は天下第一であ

った。
　順慶が七月五日所謂順慶町の敷地を拝領した礼に箸尾高春をつれ築城中の大坂城へ入った頃には山里の曲輪や本丸、西の丸の建設途上であった。石垣の上には様々の櫓がそびえたち天主閣は五層八階の天にも届く高さにも、と思われる程高層であった。信長の安土城を遙かに凌ぐ規模であり内部の装飾も金銀蒔絵、螺鈿（らでん）、彫刻は粋を凝らし金万趣味ながら豪華けんらんであり、順慶は息を呑んだ。

越智氏改易

（一）

　打ち続く出陣で遅れ遅れになっていた四月に竣工したばかりの大和郡山城も披露を兼ね八月に入り順慶は天主閣で涼風に吹かれて月見の宴に一族老臣の家来達と十市、箸尾、楢原や高取城の越智玄蕃頭家秀等十余人を招いたが、何故か家秀だけが刻限になっても現われなかった。春日若宮御祭では頭屋を管符衆徒の順慶が努め願主人には家秀が行う等公的な行事も筒井一族を除けば最有力者の家秀を順慶も一応その格式を重んじていて別に争いがある訳では無く不思議に思ったが何か用事が出来たかくらいに片付けた。
　十市、箸尾、楢原等には信長の一国一城の政策で破却され持ち城がなく郡山城下にそれぞれ役宅があるが大和ではこの郡山城と大和の詰城としての高取城だけしかない。

　月見を楽しむ宴も最中になって近頃見て来たばかりの大阪の城の話しなどをして酒を楽しんでいたが、その時高取から急使が到着した。使は口頭で家老羽田長門守等六名が主人家秀は当家の由緒を忘れ大和一国筒井家支配を当然の如く受け入れ骨なしになったとして今宵の宴に出発のため城外に出た所で殺害する。として家秀が城を出る直前にその中の一人がその企てを密告して来て発覚し、残りの五名を捉え上意討ちして後始末の為今宵のお招きは列席出来ずと要旨を島左近へ届け出た。
　越智玄蕃頭家秀は数日して郡山城へ来てお騒がせ致しましたがようやく逆臣共を成敗しご放念願い上げます、と報告してきた。
　所が根はもっと深く、越智一族の者や米田豊後等宿老でさえ筒井の宛飼い扶持に折角手柄を立てても評価を受けずあっちへ行け、こっちへ来いと筒井家に好き勝手にされても文句一つ云えずに加増を受けるのは筒井家ばかりと不満が充満していた。

（二）

　月見の宴から十日余りの二十六日馬好きの家秀が家臣の田中半兵衛に唆され新馬の試乗に城外の馬場へ誘われ馬が暴れた隙を手助けする様に見せ掛けバッサリ家秀を切った。
　虚空を摑んで苦しむ主人の頸を跳ね、越智又太郎家政へ届けたが木桶に入った家秀の頸を見た気の弱い家政は驚いて家来に命じて田中半兵衛を切り、筒井へすぐさま使いを派して事の成り行きを報告した。

順慶はその日は奈良興福寺成身院で茶の湯を楽しんでいて客が帰った後にそれを聞き郡山城へ使いを出し三老に命じて何時でも出陣の出来る支度をさせ郡山城へ戻り大袈裟にも晴天に甲鎧をきらめかせ梅鉢紋と分銅の旗印を風にはためかせ二千の騎兵、千五百の鉄砲隊、八百余りの弓組、千三百の長槍隊等総勢六千余りを率いて翌二十七日高取へ出向き素早く周囲を取り囲み、要所要所を固め城内外は所せましと整列する筒井勢のど真中を蹄を響かせ堂々の入城を行い殿上広間にきら星の如く筒井の家臣が見守る中越智家の重臣を一人ずつ呼んで誓詞を取り三日後大坂の羽柴秀吉からの指示に従い一部の者を除いて全て放逐した。蛇蝎を叩ざる時は却って我が身が滅ぶ。

千五百余人がいたが百余りは筒井家の旗下に身分を落されて随臣し他は浪人となった。後に大坂冬夏の陣の時に徳川家康の大和から河内越えの道案内をした越智某がいるが越智氏の正統はここで絶えた。越智民部少輔家高が家秀の父伊予守家盛と市尾深介に元亀三年九月二十四日に生害された恨みが家秀の代に晴らされた。醜い血族の相続争いの結末であった。

多忙憂情

(一)

折角大和では同国人との争いはもう無いと考えていたのに祖先から数代に渡る戦いの相手ではあったものの越智氏との仲も良くなってから大分経過しているのに筒井順慶はこの度の越智成敗で羽柴秀

吉の命令であり仕方が無いとは云え取りつぶし改易の事は心に重苦しく残った。越智伊予守家盛の子玄蕃頭家秀は荒くれた所も無く人格は温厚で何となく順慶とは馬が合い、同じ家盛の子で家秀の弟又太郎家政や、家信等に比べると桁違いに品もあり教養を持ち冠を冠むせると都の公家の公達にも劣らぬ容貌であり意見を求められても出過ぎず、不足なく何事も弁え筒井家を立てる事を怠らず将来の筒井家に取っては大切に思える好感の持てる男であったのにと悔やまれた。世の中のことはすべて思い通りばかりに行くことは稀であり、慮外のことが頻繁に起こった。

羽柴秀吉から使いが来て順慶に直ぐに大坂へ来いと呼び出しがあったが行ってみると今迄の筒井家三老は既に別格としていま新たに功労のあったその他の者を大名の格式に格上げせよ、と内示があった。人気取りの為の施策であり、対徳川の一環であった。

福須美順弘、松倉弥八郎、同弥二郎、森猪介、中西伊右衛門尉、中坊飛騨守、井上九郎三郎、今中、柏木、小和田、中村等内衆十一名が指名されて大名になった。とは云っても松倉弥八郎は三千石だが、中坊飛騨守はたった八百石であり後の大名とは桁違いであった。

その十一年の暮れの十二月正式に十一名は大名になった。松倉重正は松倉の総家筋として二十九日高取城へ入り越智衆に未練心を起こさせないよう大和南部の守についた。

(二)

天正十二年の正月、順慶は伴揃えも艶やかに二千の将兵を引き連れ大坂城の秀吉に年賀を祝しに出

た。

かつて、松永との長期戦で疲弊していた頃とは打って変わった美々しき装いであり、堂々の入城であった。

だが気分は優れず例の胃脘痛が再発し伺候の挨拶もそこそこに暗峠を越えて大和へ戻ってきた。大坂屋敷の完成間近を控え気になったが律儀な順慶は痛みを堪えながら春日神社へ参詣したが、後は代参として島左近、森縫殿佐が改めて春日神社や興福寺への挨拶等を済ませた。再び半月程大和に居た順慶は二月十一日大坂屋敷に入った。大坂にいる間は毎日大坂城へ登城して秀吉に伺候するのが慣わしになったが、遂に体調の悪さに耐えられず秀吉へ使いを出して登城出来ずと届け出た。

秀吉はすぐに御殿医の本道を屋敷へ遣わし順慶を見舞わせた。外に延寿医院玄朔法印等の薬石効能のお蔭か、快復が早く大坂城へ登城して秀吉に先の礼を述べまた国許の大和へ戻った。順慶が快復した頃又しても出陣の布令が大和へ届けられた。尾張犬山城に居た織田信雄が秀吉の裏工作に乗せられ自分の三家老の伊勢松ヶ島城主の津川玄蕃允義冬を飯田半兵衛が殺し、みずからは星崎城主の岡田長門守重孝を討ち、ついで、刈谷城主の浅井田宮丸長時は森勘解由成之が討って三城は騒然となった。三月三日順慶の誕生日が出陣の日となった。勝手は許されない。幾度この人生で出陣すれば我が使命がこの世で果たせるのか、順慶はこれ程嫌なものはなかった。信長に比べ、虚飾を好む秀吉をなんとなく軽べつしつつ、従軍しなければならなかった。

さて今度はまずいことに二月頃から徳川家康が織田信雄と手を結び三月十三日家康は直接清州で織田信雄と会い、反秀吉の態勢を整えた。順慶は病を押して出陣しようとしたが秀吉から別命が来て定次も連れ七千余りを率いて出陣していった。

結集した羽柴勢は十五万余になった。

小牧長久手の戦い

風雲急を告げ十四日池田信輝は秀吉の命で犬山城を既に落し、秀吉も大坂を発し、三月二十七日みずからも犬山城へ入り養子の秀次を総大将にして四月九日徳川家康と戦ったが元より百戦錬磨の家康相手ではかなわない。秀次は惨敗してしまった。折から紀伊の根来衆、雑賀党、粉川(こかわ)の三万が和泉へ攻め込み岸和田、和泉大津は秀吉の背後を脅かし、これを聞いた秀吉は直ちに真鍋員成を派してこれを撃破した。

順慶は秀吉、同秀勝、蒲生氏郷、織田信包等と松ヶ島城を囲み戦ったが敵の滝川三郎兵衛はたったの五百で奮戦し、おまけに秀吉方の九鬼義隆が率いる水軍が松ヶ島城の海上封鎖をした後引き揚げると滝川方の日置大膳亮が筒井軍を急襲し、筒井軍は酷い目に合わされた。滝川三郎兵衛は遂に降伏したが筒井方椿尾、辰巳は討ち死、白土、菅田、箸尾、万歳等が負傷した。

しかも戦いは猶も続き夏六月に迄及び腹痛を堪えて順慶は旗下の指揮官として最前線にあった。次いで美濃に転戦し、竹ケ鼻城を囲み六月十日ついに主将不破広綱を破りようやく十一日引き揚げ、秀

吉もこの度の小牧長久手の戦いは芳しくなく面白くないままに二十八日大坂へ戻った。

寿命

七月に入ると順慶はまた胃脘痛に悩まされた。

今度は今までとは違い耐えようも無く、顔は土色に変わり重臣達等は心配の度を顕にして静養を進めたがやるべき努めが有ればするのが主と取り合わないのを必至で止めた。飽く迄も真面目な男であった。

小牧長久手の戦いの間に四国では長曽我部元親が暴れ廻り讃岐は元親の物になっていた。そんな事を聞かされると順慶は居ても立っても居られず代わる代わる三老を使いに立て、嫌な戦ではあっても家を思い、立場を考えて自分がしなければならない強い責任感から秀吉の意向を確かめたが三老達も順慶の病状を詳しく届け出て出陣に就いては今後は養子定次が代わって努める旨の了承を得ていた。

順慶不快の報は興福寺に達し、神官、僧侶達は連日祈祷を繰り返した。

《筒井順慶近日以外煩不食云々》、《胃脘痛又頻リニ発(おこ)リ日々疲レ衰……》《為順慶煩祈祷読経興行》大般若経を真読したが、《ソノ験見エガタシ》と大変苦慮をしていた。一族老臣の強い奨めに随い遂に意を決して京都の曲直瀬(まなせ)道三という名医の看たてを受けに京都へ出発した。足利義輝や三好長慶それに松永久秀等も優遇したと云う名医であり著書もある権威は天下第一であった。途中の道中ではつ

いに鎧が重いと云いだし、きらめく兜もついに脱いでしまった。

一方では毎日何処かで《彼坊之衆十二人三ヶ日ニ真読配巻、於蓮成院助読了》と読経が続けられ日増しに心配が募った。だが、仏典も春日神社のご祈祷も、興福寺や他の寺院の真読配巻も医学の最高峰の道三の薬石の効能も利かず八月三日順慶は京を発ち、道中屢々たまらなくなると馬を下り俄かに所の村長の屋敷に入り床をとりうつむいて背中を二人の家来達に天秤棒で押さえて貰った。押さえると気分は幾分楽になり体に悪いと知りながら酒が入るとたちまち痛みはとれじっと目を閉じてしばらく休んだが宇治、奈良とそんな事を繰り返しながら二泊して大和郡山城へ戻って来た。戻ってきても座っている事が出来ず枕辺に母を招き一族老臣を呼び将来を憂えていた。

「ゴホッ……」順慶は咳込みどすぐろい血を吐いた。

「あっ」母や重臣達はびっくりしてうろたえた。白衣の寝衣も敷物も汚なく染った。一同はあってはならぬ事を心に覚え、一同皆顔面をくらくして静かに控えていた。腰元がきて夜具の取替える間も重苦しい時が流れて行く。その順慶の脳裡には今日までの事が走馬灯のようにまぶたの裏に映っては消え、消えては映った。やや小太りで、ずんぐりむっくりだった順慶の体はやせおとろえている。

「母者人、それに皆もよく聞いて於て……」貰いたい、最早余命幾許もなく命数ここに尽きる。定次は武勇才智は人に比べて殊に優れると云えども、酒と女色に関心が強く家を滅ぼす危惧が無いとは云えない。一族世臣の老将が存命ならば猶家を保つ事は出来るかも知れぬが、山田道安も逝き、飯田出羽守も森志摩守も小田切宮内も皆死んだ。十市、箸尾、明山等は定次を快くは思っていない。小和泉

は定次とは厚情ではあるが諫める言葉を知らぬし、出来はしまい。曾祖父の願った皇国の治まりには程遠くあとこの大和がどう変わるのか想像もつかぬ。しかし、どうか呉れぐれも無き跡を宜しく頼む」として行く末を頼んだ。聞いていた島左近、松倉重正等は先代程ではない自分等の力の無さを赤面し、日頃を良く見ていた順慶の言葉に一々尤もなりとして恥じた。その日森縫殿佐は大坂へ使いに出てその事を後で聞かされがくぜんとして泣き悔やんだ。やがて八月十二日生きとし生けるものを生かし給う阿弥陀如来の暖かく柔い荘厳な紫金色に輝く御光に迎えられ、順慶は苦悩に満ちた三十六歳の生涯を未練を残しながらも孤独になることなくその人生を静かにおえた。息を引き取る頃には頬には赤みが射し穏やかな微笑みの中に、一言母者人を頼む……、と洩らしたが後は聞き取れず、ただ、悲しくも生涯戦いの為にだけ生きた様なものだった。

郡山城の空には高く低く不気味な幾千幾万の烏が鳴きながら舞上がり、舞下り哀声は人々の耳鳴（みみなり）をさそい大和一国は陽の光さえ下にはとどかず、かなしみに充ちた。

その日朝から烏の群れのあまりの騒がしさに一人の鉄砲組頭が烏を殉死させる積りで銃を一発放った。

組頭は涙しながら「お館様おさらばでござりまする。」とひきがねをひいた。

弔問の為に折角真っ黒な衣装に身を包んだ烏の群れの一羽に偶然弾が当った。

ギャアーと不気味な尾を引く叫び声を残して天空から一羽が大地に垂直に落下していった。

それを見た烏の一群は相棒の死をむざむざ黙っては見ていなかった。

騒ぎはそれ迄とは数倍大きく不気味さを増して鳴き騒ぎ出し見る見る中にどこから現われたか田の畦にでもいたのかギャアギャアと舞い上がり舞い下り東西春日山や高円山、龍王山から果ては信貴山、二上山、金剛、葛城の連山の山々谷々、南北の峰峯に巣くう烏共は全員集合して郡山城の一角を目指して鉄砲を撃った組頭を正確に狙って急降下し、攻撃を開始した。

こちらも兵（つわもの）烏ごときに臆してはいない。

兵達に命じて鉄砲を素早く交代して打ち続け時ならぬ烏との合戦になった。

敵は無数で無限であった。幾十、幾百、幾千、幾万羽の烏は空を蔽い日輪を曇らせあたりは真っ暗になってしまった。撃っても撃っても烏は攻撃を止めず、これでは兵もたまらない。まさか烏に追われて兵たるものが逃げ出す分けにはゆかぬ。

誰かが遂にこの事を埋葬の事に忙しい重役へ届けに走った。

「愚かものめが」島左近は即座に身仕度を整えると小者に命じて鋤鍬を幾つも用意させ蠟燭と線香の束を持つと駈けだしていった。

「こらっ、鉄砲をやめ、すぐに藁束に火をつけろ、この蠟燭と線香に火を付けて。」

鉄砲の音は止んだが、尚もしつように烏は攻撃を繰返してきたがやがて烏は幾筋も立ち上る線香の煙を見てたちまち攻撃を止めた。数十羽の烏の死骸を集めさせ土を掘って白木に烏塚と墨書し、懇ろに般若心経を唱えると不思議に烏の鳴き声が穏やかになり一度に攻撃は止んだ。家臣達は左近の仕種を奇異に思ったがもう烏は二度と攻撃は仕掛けては来なかった。

「生有るものに滅多な事はしてはならぬぞ、馬鹿もんめ。」左近はきつく叱り付けその組頭を思いきりぶん殴ると招かざる客の襲撃の一件は済んで急いで戻っていったがその幾百万羽の鳥は終日去らずになげき哀しみ、鳴きながら大空を蔽い尽くす苦渋に充ち溢れた陽舜房法印順慶の死は大和一国最悪の日となりこれ以後もこれ程の苦痛の日はなかった。

（完）

〔参考文献〕

『大和郡山市史』大和郡山市。
『新訂 寛政重修諸家譜』続群書類従完成会。
『群書類従』二十二外、続群書類従完成会。
『続群書類従』二十外、続群書類従完成会。
『続々群書類従』第三外、続群書類従完成会。
『断家譜』2、3、続群書類従完成会。
『筒井順慶とその一族』藪景三著、新人物往来社。
『歴史読本』臨時増刊'84-3、新人物往来社。
『織田大名衆』飯田忠彦著、杉山博監修、新人物往来社。
『総合地方史大年表』人物往来社。
『戦国大名系譜人名事典』人物往来社。
『大和志料』奈良県教育会編。
『大阪府の地名』平凡社。
『奈良県の地名』平凡社。
『京都府の地名』平凡社。
『京都市の地名』平凡社。
『日本史辞典』東京創元社。
『新編 東洋史辞典』東京創元社。
『広辞苑』新村出編、岩波書店。
『三郷町史』三郷町。

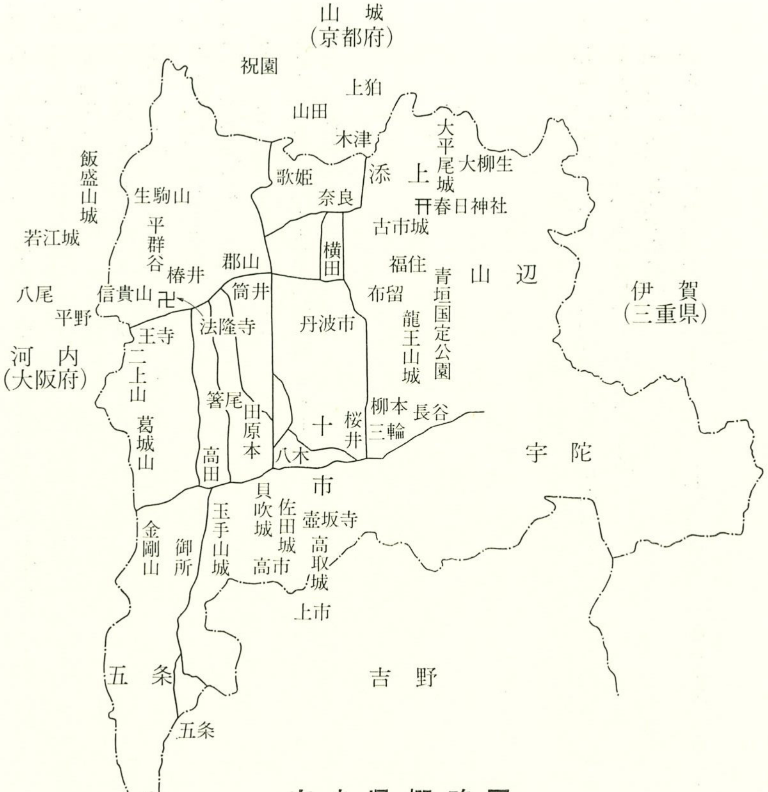
『三国志』吉川英治著、講談社。
『新書 太閤記』吉川英治著、六興出版社。
週間朝日百科 日本の歴史シリーズ、朝日新聞社。
『比叡山』延暦寺編纂。
『城郭と城下町(5)外』小学館。
『戦国武家事典』稲垣史生編、青蛙房。
『戦国史事典』桑田忠親監修、秋田書房。
『戦国人名辞典』高柳・松平著、吉川文庫増訂版。
『姓氏家系大辞典』太田亮著、角川書店。
『奈良県史』名著出版。
『大阪府史』大阪府。
『戦国群雄列伝』富永滋人著、㈱創元社。
『日本武士道史』森川哲郎著、日本文芸社。
『新十八史略』後藤駒田常石著、河出書房新社。
『小説 十八史略』陳舜臣著、毎日新聞社。
『観世流 謡曲本』檜屋書店。
その他 各宗教書外

江戸時代書籍
『和州諸将軍伝』閑士漱石著、書林大坂心斉橋 敦賀屋九兵衛（宝永四丁亥初春五日）奈良県史料刊行会編集、豊住書店。

『和州諸将軍伝』閑士漱石著、大坂書林 河内屋長兵衛（文政六 未年正月）。
『筒井諸記』（家伝、一族）水戸彰考館 コピー分。
『筒井諸記』（井筒硯）水戸彰考館 コピー分。
『筒井諸記』（言次硯）水戸彰考館 コピー分。
『筒井諸記』（和州郷士記）水戸彰考館 コピー分。
『増補 筒井記』㈠㈡㈢、水戸彰考館 コピー分。
『増補 筒井家記』水戸彰考館 コピー分。
『筒井旧領三姓』（全）水戸彰考館 コピー分。
『和州十五郡衆徒神人郷士記』奈良県立図書館 コピー分。
『新編 武家事記』山鹿素行。
その他。

〔記〕

茶道指導 樋崎宗枝先生（八幡市）、竹内郁子先生（大和郡山市）
謡曲指導 森将隆、同千代、前川芳周、谷口澄夫の各師
中国語指導 施美伸小姐、林弘芳小姐外
協力 前原宗男、今江貞善、同富美子先生、小澤いわ鳳、研師 安藤再俊師、森清子、鹿野泰の各氏



奈良県概略図

和州十五郡衆徒神人郷士

一衆徒是ヲ寺家ト云フ南京八家所謂東大寺侍従房野田厳観房赤松則祐師坂田永覚観音房勢至房般若寺本性律師東南院永聖寿也

(異本衆徒元八十八人也天正年間八人トナル又元和五年二十五人ト九定メ給フ)

筒井家　紋ハ分銅又蔦ノ梅鉢

一神護景雲二申年十一月九日河刕
平岡ヨリ移住乃樂（ナラ）○（系譜）左京太夫
（京家此間四十一代）順武　順快
順永（應永六乙酉四月出生享德二酉年
卒ス）順秀（享德六寅年三月三日出生文
明七年二月二十日卒ス）（但シ以下定次ニ至ル
系譜異本ト齟齬ス此書ノ系譜左ノ如シ）

順永隆春房光宣法印 ｜ 明舜房
順政法印 ｜ 良舜房順興法印 ｜
榮舜房順昭法印 ｜ 陽舜房順慶
法印（天正十二申年八月十一日卒ス）
羽柴伊賀守従四位下侍従定次（
慈明寺順國ノ男順慶ノ養子ナリ慶
長二十年卯三月五日伊賀國上野城ニ
於テ切腹ス宗蓮大居士ト號ス）

同　一　族

筒井主殿頭定慶　同紀伊守慶之
同大膳之信　同甚介定信　同次
郎春虎　同三郎順清　同四郎五
郎善廉　同六郎兵衛　同左馬丞
同大藏丞　同千代松　同大炊丞
道成　同甚六郎　同與左衛門
同道見　同覺道　同兵庫貞祐
同祐賀　同豐前光俊　同源清
同八郎善順　同円順　同春智

同円祐　同宗助胤順　同守慶
同円盛　同琳順　同新六政慶
同德円　同宗順　同宗祗　同宗
徹　同淨継　同彥四郎宗慶　同
宗傳　同善宗　同春円　同見春
同祐可　同正依　同德清　同定
次　同虎福丸　同意心　同盛春
同春勝　同順清
筒井親族麾下

一
山田氏 山辺郡二千石 慈明寺 高市郡
三千石 福住氏 山辺郡 飯田氏 添上郡
奈良 十市氏 十市郡 越智氏 高市郡
箸尾氏 廣瀬郡 明山氏 片
岡氏 葛下郡 小田切氏 添下郡郡山
小和泉氏 添下郡 法隆寺普門院
善竟房 信貴山宝蔵院頼多房
菩提山長勤房 多武峯禪観房
同山清浄院光胤 興福寺成身院

三 老臣

森志摩守好之 （森本住天正九巳年二月
十九日筒井ニテ死ス）
嶋左近 慶長五年九月卒ス 行年六十三才
春日楼門前ニ同人献納ノ石燈籠アリ
松倉右近 天正四戌年三月 伊賀国名
張ニテ卒ス 行年六十五才

一
順慶領地初六万石余天正五年松
永久秀ヲ討亡シ領地合併シテ拾

八万石余ヲ領ス内二万石ハ河州ニテ秀吉公ヨリ加増ナリ親族麾下綴合三拾万六千石余順慶養子伊賀侍従定次子息順定大坂籠城浪人ト同心ノ旨御聞ニ達シ其上伊賀国上野城ヘ盗賊入込盗ミ取タル弓矢大坂城中ニ有之定次ト記名有之ニ付父定次ト同ク切腹被仰付右傍臣松浦ヲ寵愛被致家

中不納旁右之通被仰付候依之順武ヨリ五拾代年序八百四十九年ニテ家潰ル

筒井惣麾下

一　楢原清須美ノ二氏葛上郡井戸今井中之坊　奈良三千五百石　楢原周防守俊久　辻子和泉　杉菅政　北市與次郎　與力　今中源内　濵野弥左衛門　法蓮助市　堀内善右ヱ門　喜多孫兵衛

吉兼　柏木日向　異本ニ北帝家ノ与力トアリ
超昇寺奥田左近　赤松作内　北之庄
住與力富池甚左ヱ門　木田左近吉実
天文五年八月卒ス　與力鞆田武蔵　相川
與市　與力森村孫一郎　異本宗包　万貶
布施　小林光之　長井吉村小兵
ヱ　八條相模入道　向井十郎兵
衛　大津三左ヱ門重次　同主膳
好重　芳野又左ヱ門清兼　與力

檜牧主膳、勝山清助　沢蔵人治之　山路大郎兵ヱ
赤埴五右ヱ門　石田監物

添上郡

一　柳生德有齋　慶長年中　同市兵衛
同但馬守　同飛彈守　須川辰巳
之丞　須川山ノ城主　同兵庫　狭川甲
斐守　同新丞　同新左ヱ門助貞
同庄助　福岡助宣　同出雲　上

島金左エ門（狹川）大西喜左エ門（狹
川山ノ城主）山本備後守（南田原）同孫
八郎宗久　同九兵衛　喜多宇右
兵門（奥田原）別所宫内少輔（山田家ノ
與力筒井家ヘ加勢）同兵部少輔　同
清右エ門　水間民部少輔（前同断）
木谷宗慶　木谷作右衛門　高樋
甚兵エ　同薩摩守（元和元年卒ス）
森岡祐賀（天正十一年卒ス）椿尾道泉

山村新入（久米王子山村上田ノ裔孫山村ノ城主
ナリ）窪轉經院宗恩（興福寺）窪之
庄道久（異本順貞）同妙音　山村兵部
池田主殿助　中山加藤次中白入
（白土ニ住ス）北春齊　同淨玄（白土）南
善右エ門　菊田掃部亮（楳本住）同
藤帰　同庄助　同孫大郎　大江
善兵衛　西庄源左エ門　美濃喜
内　小川喜内　辰ノ市宫内　市

川弥右衛門　東九條甚三郎　西
嘉右衛門　中左京亮　大西出雲
守　法華寺飯田出羽守　源頼直知行
七千石　同甚三郎差次　同勘兵衛入
道行心　同春覧入道　同三郎二
郎真宗　同新八　奈良左近　三好家
ニ奉仕シテ本國寺ニテ討死ス　高畠石見　森
縫殿助好方　志摩守子息知行五千石　同傳
助好久　又隼人助トモ云フ　嶋左近友保　異

本平群郡ニ載ス石田三成ニ與力ス　同男左近
友之　同石田ニ與力ス　新吉政勝　友保ノ二男
同新助友勝　同掃部　中ノ坊飛
彈守藤原秀國　奈良町目三千五百石　同
讃岐盛祐　同飛彈守秀行　鹿野園ニ
住　與力超昇寺兵八郎　同帯刀大和田勘解由、川
辺四郎　常福寺市内秋篠内記　稲井治郎
太郎則家　與力　中川、相川、中村、大西
藤原道順　園政與左エ門　同弥

花田康麿呂ノ後胤
花田氏ハ元和年中
九郎　田原　花田圓齋　森本治部
田中兵部　日笠長左ヱ門　嶋田四
郎兵ヱ　名波與左ヱ門　今市孫
十郎 天文年中　大喜多權之助 永禄年中
同杢之祐 天正年中　喜多ノ喜助重長
多田満仲弟満政ノ末孫　喜多亦治郎　同
道三　福田九右ヱ門 狭川　奥ヶ原大
北 慶長年中　同入江之助　丹生文右
ヱ門　邑地藤五郎　同藤一九

吉岡仁右ヱ門　今井力孫　下林孫
助　同仁从　物集女兵太夫　同藤
右ヱ門　同宇右ヱ門　河合喜助
八島齋助　吉田源内之助　同傳右
ヱ門　同又八郎　水間又兵ヱ 天正
小間太兵ヱ 宇麻志間智十二代阿知古ノ
取ノ後　二条内藏之助 中坊與力　法蓮
外記

古市家

清原氏一品舎人親王ノ裔始祖親王
ノ廟所春日山内高山ニ有之和州諸将
軍傳ハ平家ト有之知行七千石紋菊
楓騎兵八百七人雑兵九百七十人永禄十
三年滅亡

一古市安房守胤信 永禄年中 同播磨
守澄胤 永禄十四年 同安房守胤継
同播磨守胤重 同民部少輔胤慶
天文 同九郎兵卫 同丹後守 同

彦三郎 同七郎左衛門 同栖千代
同左近丞景高 天正五年松永ニ組ミ改易
同西坊 三井寺座主 同円満院坊官 同興福
寺発志院善性房法印 同新発意
胤慶直宗 森五平次入道一齋 異
本家老トアリ花田喜太郎 古市五左衛門
同西光院 松永弾正ニ与ミシテ天正五年改易ニ
ナル

古市家老 西村与左エ門 園波弥九郎

中　弥兵卫　花房外記　山本孫八郎
花田喜太郎政光　吉岡仁兵卫　同仁左卫門
邑地源内　小保越中

今井家　紋　梅花　知行千石

一今井掃部佐　同四郎左卫門　同肥
前　同市右卫門　興福寺法輪院寺
勧房　今井久四郎　同久右卫門
與力
神殿内匠　池田主膳　薮田源兵卫　堀内千右卫門

一長井伊豆守　桓武帝十六代長井顕貞ノ末
同西殿　同胤順　同但馬胤舜　房
筒井家　與力　弓場三右卫門
一松倉弥七郎政秀　横田陣屋ニ住ス　天文年
中　政秀男右近藤原勝重　天正十四年
同豊後守重政　勝重ノ長子　代々横田ニ住ス
同重左卫門重宗　同弥五郎　重政ノ
長男　同長門守勝房　寛文十四年切支丹
一揆ノ節切腹ス肥前島原在城　同左近勝房

養子 童政女子 杉子ノ主久右ヱ門ノ室王子大
津主膳ノ室
同一族
和田喜右ヱ門 童政ノ弟 横田治部
天保降臨二十五部ノ内横田物部ノ末 同隼
人久勝 向井信濃 同左門 同
治郎兵衛 同十郎兵衛 同源左
衛門 同左門 同治郎兵ヱ 辰
ノ市

辰ノ市家 紋梅花 大物主ノ後裔
一井戸藤辰 一書井上ニ作ル 同藤虎 同
藤賀 同春辰 永禄年中 同春政
同十郎太夫國祐 得良菴ト称ス 同若
狭守 同左馬助 異本馬祐 同三十
郎 知行三千石 同新右ヱ門 知行二千石
同新助 同惣珠院甚光房 金躰
寺行菴 同童太夫 甲府ニテ知行八
百石 女子二人アリ 牧田九右ヱ門妻 村井作右

卫門妻

家老　中村四郎兵衛　森匠内匠
松沢理兵衛　松岡宗林
三橋重兵衛　下傳兵卫　中傳下
三橋若槻讃岐守　稗田兵藏　光仁
帝ノ末桃香野嘉右卫門　桃香野墨
鹿野園帯刀左卫門義康　同出羽
義友　越智家ノ譜ニ出越智大郎家光九
代ノ裔ナリ

添下郡

一小田切宮内少輔春次　郡山城主　向
井十郎　天正十一年卆　郡山辰之助春
政　永禄年中　麾下　高田又助　小泉助
兵卫　五條左内　大條兵部　尼辻文藏　小
泉四郎左卫門　藤原秀元　天正十五年於伊州卆
小泉麾下　市場　満願寺　都合壱万三
千石
矢田伊豆守　物部大新河四世ノ末　右姓系

ノ文字不相應分惣テ旧書誤字多クシ今訂正ヽ遑ア
ラス
同中村新藏　同信濃守　同
下司三橋氏　菅原平四郎　同右
京亮　寶來春作　同三郎四郎
同甚三郎　引田主計　平松重助
中村伊丹源左ヱ門尉　天文年中　堀内
與左ヱ門　押熊図書　秋篠春藤
同大二権四郎　同内記　超昇寺
左近良助　與力　覚深、賢覚　賢長、浄

安、玄恩
同等教院　小林春賀　同
源左ヱ門　小南甲斐　新木丹後　番
條伊作　同五郎　田中亦治郎　同
善助　同二位　継體天皇之子田中命末又
天津彦根ノ末トモ云フ　万願寺下総　城
忠右ヱ門　高田外記　西川民部　秋篠城
平群郡
一嶋左門　同左近友之　筒井三老臣ノ一之椿
井ニ住ス属ニ石田三成ニ濃州関ケ原ニテ戰死　同持

宝院俊篤坊　同修理亮新吉政勝
萩原加賀守　與力　勝尾小弋治　辻村宗兵卫
小明新七郎　名畑　大門　小瀬　吉川喜藏　松
永ニ同心シテ信貴山ニ篭城　木沢左京亮
吉田内膳　梨本文平　岩井丹後　㯃
原壹岐　椹原金内　椥原太夫坊　和
田宇右卫門　烏見住　福原西加藤治　田
原口出羽守　今中源内　同孫兵卫　田
原口侍従　高山勝法印　天文年中　家老東

四郎右卫門　同四郎兵衛　高山勝三郎
同自性房　同民部宗砌　同主殿佐頼春
松永ニ荷担シ天文五年没落ス　奥田原兵藏
源右卫門　下村右京佐　天文三年　今西藤　同
德　同杢佐宗政　天文四年　安堵甚三郎　天
正年中　今西河西　和田真齊　葛原春勝
小山善四郎　弘治幸太夫　坂堂大學
丹生文右卫門　萩原嘉助　同加賀守　與
力　勝尾小才治　中川伊右卫門　元和　付手惣

三郎 慶長十年 嶋田小四郎兵衛 北帯刀
元和年中多田満仲弟満政四代末田重長末孫
同 正雲 同 竹松 生駒根尾三吉郎 辻
子 和泉守 同 治良左衛門 本間孫四郎
目 安三左衛門 喜多南殿 堀九右衛門
澄田住 安井主水 服部大炊助 馬場新
左衛門 奥留左近 間壁左佐意休 同
圓齊 市村長久 田中孫左衛門 立田
政所 市部宗閑 履中天皇々子市部ノ姓ヲ賜フ

磐坂吉井上野介 立野村塁 稲治主水助藤原
秀保

山邊郡

一
庵治肥前 景行天皇々子龍津彦ノ末 八田主
膳正 足利義清四代八田頼貞 同 勘大 嶋
田勘右衛門 相場又助
筑紫半太夫 物部平琴ノ孫伊呂子竹子ノ孫 稲葉
卒助 物部多治广子卯葉ノ末

一備前伊賀守　上田右馬 上田系譜大江広元ノ末ト
アリ 井川兵庫 横井與力 中村壹岐 三味
田平吉
長柄休 杉本東殿 上総甚助 同甚
三郎 指柳浄光 岩堂川田左ヱ門 田部
小刀祢 宇麻志广治十代物部小前ノ末 田井庄新
藏 物部大嵌ノ末 別所庄司 同監物 奥弥
五郎 平等坊休可 感願寺師 石上井戸
若狭守 何人ノ末トモ云フ古書ニナシ 岸田伯耆 蘐秋

石川麻呂ノ末又寄従秀盛秀吉 天正文禄中 伊賀国
五千石代官職也 兵庫左殿 小路八郎左ヱ門
藤原友則 千五百石 木殿藤内 大條善
右ヱ門 菊岡治郎兵ヱ 永原巽二郎
乙木徳右ヱ門 中山源右ヱ門 福智堂宗
開 竹内河内 佐保庄可人 石田又助
杉本佐渡 三島東右ヱ門 物部布留久留ノ
弟金石ハ三島氏ノ祖之
一布留神人右馬 宇麻志广治ヨリ大新川十市根

ニ物部ノ姓ヲ賜フ三代布留久留ノ末同五世ノ孫物部
烏古子麻呂ニ石上ノ姓ヲ賜フ

一 豊田頼英 天三降命ノ末天安元年染田天神ノ
連歌ニ會 伊勢北畠家ノ旗下 同下野證英 永
正九年 同豊岡 文明年中 同道光 同
春藤 與力 今北、森兵、森田、

一 豊井権之助 同内匠宗英、與力 豊岡
勝山、 内馬場主水正 桃尾喜内 藤井
同慶英 同左兵衛 笠若狭 吉備津弥ノ末

笠井半左衛門 仁興春福丸 同英勝
文明年中 同治郎 永正七年 同英算 延
永廿年 菅原英秀

一 福住岩市丸 應永廿年 同右京宗房 天正
年中 同兵衛順弘入道宗永 慶長七年正月
卒 窓梅院堯春居士
福住主殿佐定慶 筒井定次ノ弟元和卯年切腹
同紀伊守 福須美兵衛尉藤原順
弘 知行二千石

麾下 白石 小山戸 千石 同兵衛尉盛
時 五百石 福須美兵助 同兵エ順
元與力 小篠 鞆田 永谷 白石 合三千石
一山田民部少輔藤原宗重入道道安 天
文三年卒ス 細工ニ妙有テ東大寺大仏殿ノ
頭ヲロクロ細工ニテ[illegible]ツギシ人 同太郎左
エ門順清 麾下 別所氏 乾氏 永間氏
同権右エ門 切支丹論ニテ被召捕 同新
左エ門宗意 元永二年井上松永合戦辰

市ニテ討死

多田家

一多田満仲摂津守九代後胤下野守
高頼ノ男 同下野守経實 建保年中
ヨリ此郷ニ来リ福島佐比山ニ城郭ヲ構ヘ是
ヨリ此地名多田庄ト云フ 満仲公四代多
田蔵人頼高ノ末葉ニノ宮方ニテ
應仁年中伊勢北畠ニ属ス知行千
七百石経實ノ二男出家ス 同下

野守義實 吉野殿ニ仕候ス同應仁年中ヨリ北畠ニ但ニ此辺諸侍ノ棟梁タリ 同寛春 應永六年卒ス 同僧順實 連歌ニ名アリ 同男順實 文明二年 同上野助春守 文明三年 同参河守祐順 同山城守盛實 多田順實ノ傳 若冠ヨリ志厚ノ篤テ天神ヲ信ス貞治元年一奇僧来テ天神宮ノ画像ヲ授テ行方知レス是神筆ナリ夫ヨリ此ノ山内ノ郷士ヲ初宇陀等ノ地侍諸社ノ銘々ヲ請ラヒ毎年連歌ノ會ヲ営ム應永十五年

八月卒ス 同監物政實 同五郎實質 同七郎 同下野守實勝 天正十五年卒ス 同春清 同四郎常胤 同實玄童子 同治郎延實 天正年中伊勢北畠ニ仕ヘ悉ク滅亡ス

一族ノ内山口将監ノ孫多田村ニアリ今山口氏是之森田兵部今白石ノ民家ニアリ菩提所来迎寺トス是近代々ノ廟塔此寺ニ在リ因茲

多田ノ號ヲ賜ハリ多田来迎寺ト
云フ

一族

多田大門左衛門　染田寺法印
安楽寺和尚　大門實崇　家臣與力
山口將監　同権之烝　迎田多田
同春王　西村西堂　加藤治太夫
小山十郎　窪田弥右エ門　簾岡主
水　森田兵部　大門常広　法雲

西堂

小山戸家　北氏トテ今民家ニ在リ廟
塔昔ヨリ今ニ至リ来迎寺ニアリ

一小山戸越中守　小倭ハ都介野ノ本邑之○
神武天皇皇子神八井耳ノ命ノ孫都介眞ハ都
介氏祖清和天皇ノ御宇藤大納言房前六代時
長郡目トシテ此里ニ住ス夫ヨリ藤原ト称ス今ハ水分
ノ神裔貞治年中　榮部春元　同春俊

喜多越中守吉甯　應永十二年　同越中

守實斎　元小山戸氏ナリ伊勢北畠ヨリ北ノ一字ヲ賜フ因
テ此ト云フ山内ノ籏下目代ニ補ス紋菱　北伯耆守實
斎　同巖大德　同主計亮実榮　天
正十四年　同加賀守実弘　天文六年福住麾下
同左近卫門尉吉實
與力　藺生　友田　上深川主殿　竹内少輔
一水涌式部少輔　素盞烏命ノ子太歳ノ神ノ
子羽ニ山神其子孫足麻支神ノ末　同實詮　應
永廿四年　同實春　應永廿年白石ト改ム

白石三河入道泰助　應永末年水ハキヲ白石
ト改新田氏ニ從ヒ西國ニテ討死　同詮實　正長
年中　同實盛　文明年中　同日向守長實
宝德元年　同玄蕃長秀　文明五年　同幸千
代　又ハ達千代文明元年　同三郎左衛門
以上水涌白石氏之
窪能登次郎藤原實泰　白石泰助弟延文
四年九州ニテ討死　窪美作守　同齊次
郎　同久齋　慶長年中　同天祐宗哲

慶長廿年 同幸太夫 法名常賢ト 同東若
松 至徳三年 同藤備 大門左エ門常無
廣 同宗實 迎田実順 同子法
印實正 箒岡主膳殿
一 鞆田藤原童秀 神主童名ノ示 同童快
同武藏守 藤原童達 明應二年 同童
懐 又ハ神主トモ云フ 同新五郎宗童 同
童順 同藤松丸 永禄年中 同四郎
同金平 大野ノ與力慶長十九年大阪籠城

同観信房 伏見墨染ニ住ス女子二人アリ姉タツ北條十
郎妻 妹トク染田氏ノ妻
金平ハ元和元年五月七日摂州平野ニテ討死此家モ
代々多田来迎寺ニ五輪神主等アリ

吐山家

一 吐山南忠助 長谷川 天武帝ノ皇子高市
王ノ子長屋王ハ高階氏ノ祖峯徳ノ子師高在原業平
ノ實子齋宮ノ腹ナリ依之此家ハ参宮不成ト云フ或ハ
大蔵ノ神ノ子羽山戸ノ末トモ民家ニ下リ吐山氏ト云フ今ニアリ

吐山春明院　同勘解由　同飛彈
同勘左エ門　同七郎右エ門　同
甲岡亀壽　吐山家ノ分レ
吐山家ノ臣　村島　脇坊　小平宗兵衛
一　南殿左内　百濟國和尓吉師ノ末　文武天皇ノ朝
和尓吉師論語ヲ将来ス　同藤田定慶　文
明年中　南殿嶋岡金兵衛　文明二年　嶋岡
金兵太夫　丸波浄閑　鹿海治郎
一　相川與市　應安元年安部九郎兼宗ノ末

同彦太郎　同孫四郎宗政　同三河
守宗春
一　小倉政實　清原氏一品舍人親王孫正三位中務卿
原東山内一統背田ノ領邑故應仁ノ乱ニ大内畠山ニ叛キ
松永筒井ニ不従山内一統ニ集會ス　同實定　應
仁中　同榮實　康正年中　同遠江舜入
道政守
與力　加藤兵庫　小原豊後実継
一　針ヶ別所少進　眞野宝壽丸　吉田内勝

小幡小左卫門 景行天皇ノ皇子襲不小幡別ノ末小幡
別ハ三田小幡ノ祖 坂井紀伊 荻村 和
田喜左卫門 深川宗秀 文明十一年 染
田喜右卫門 同右卫門尉 與力小幡
平六 助命伊豫 三ケ谷肥後 箕輪
宗慶 同左卫門 堂前藤兵卫
大西主殿 助命宗政 永禄元年
奥田三河守 同九郎右卫門 同左卫門
天文年中 同四郎兵卫 同三郎右卫門

同三郎兵衛 同八郎右卫門 天和元年四月
廿八日河州片山ニテ大野主馬ト接戦討死 同半兵
衛 同外記 同左京亮 同西恩
院行盛
與力 畑、奥田、吉田、染田、大西
一赤松相模 永禄年中 田村道慶 同宗
休 梶村六右卫門 菅生但馬 守
山ノ邊前 同村松 福廣重左卫門
同與助 氣原長門 下笠間公定

山中宗木　福村久右ヱ門
勝原肥後 永禄年中　濵田左京進　同
祐法印 濵田氏 法隆寺松慈院　勝原清定
寛正年中　同定秀 長禄年中　笠間若狭守
宣藤　同南殿藤原長政　同定詮
寛政四年　笠間春松丸　上笠間玄定
同公寛 文明八年　同定勢 応永廿八年　同定
俊 応永廿五年　同伊豫　同春鶴丸 永正年中
下笠間公定 応永二年　同定行 寛政四年

同大進延定　深野山本道寛　下
司道意　奥善太郎
大西出雲　藤井喜内　吉村好清
嵩村安右ヱ門　乾求馬　田、、和泉
嫩元　峯玄故　烏屋吉十郎 多気国司不花
勝山清助 永禄年中　同平右ヱ門　同太
郎次 天正九年芳野宮内少輔春勝ヨリ感状勝山
家ニアリ異本ニ天正六年多ノ三郎國司北畠具親感状ト
アリ　窪田織部　永室勘内　上山

大郎　異本杉山トアリ　高田土佐　牟山寛

經　異本定經 應永六年　同長實　應永二十年

同春藤丸　永享十二年

宇陀郡

一明山宗冊　紋桐葉 新羅王子天日ノ矛但馬ノ出石ニ来ル八人ノ子アリ秋山下氷氷社春日霞ノ社トモ云フ此明山ハ下氷社ノ末カ　又新羅三郎三男武田氏請其子逸見清見三男遠光其子秋山太郎光朝ノ末新蔵人源光政ノ後トモ云フ

初メ吉野ノ皇居ニ仕候ス應仁中ヨリ伊勢北畠ニ属ス宇陀三將ノ一ナリ

與力　伊谷主水　關戸圖書　黒木　藤内　野人辺兼七

同右近直國　同遠江守　同次郎　慶長十九年冬大野治長ニ組シ大坂ヘ入城

芳野宮内少輔　紋藤丸 松井村ノ塁ニ拠ル春霞社ノ末

澤源六　紋井筒 同三將ノ内　澤甚左エ門

同藏人治之　同正慶　大納言豊臣秀長公ニ仕フ

同兵部大輔藤原朝臣房満

一山邊家

山邊恭綱　嘉吉元年天神連歌千句ノ頭人源三位頼政ノ旧里嫡子伊豆守仲綱次男有綱ハ伊豫守義経ノ聟之文治三年ニ定時ニ白其子山辺ヘ住頼政ノ旗ハ白綾ニ八幡春日ノ水方書下芳葉ヲ書ス系譜一巻備旨一通水分ノ縁起同帰ノ図彦枝山辺村ヘ移ス又三ヲ木ノ模ノ神主大物主ノ子孫トモ云フ

山邊藤次郎廣綱　宝徳三年　同春千代

同源十郎満綱　同源七郎　同兵部少輔　同清菴淨貞　永禄八年丑三月卒

山辺久麿ノ母ハ多田治郎ノ女寛永ノ頃江戸ヘ下リ其子孫寛文年中継嗣絶家ス

與力　三井太郎　成場四郎左エ門　同甚四郎

槙牧松山静秀　永禄十一年　同主殿　永享十一年

同内匠井足日向荻原九門　同左エ門

内牧内記　同外記　赤塡五右エ門　同

長助　大和主ノ神嫡后須勢理

右赤塡ノコト須世理姫叔蜂室ヲ蛇ノ比礼ニテ拂之蜈ノ岩屋蜂ノ比礼ニテ拂之今ノ鬼ヶ城乎矢ヲ放ツヲトキ大

野原ニ落ル姫赤土以テ其ノ口ヲ潰ス依テ赤壊トユウ五百引
ノ石ヲ以テ塞リ今龍穴平
高岡日向與左エ門　継體天皇々子高向武小廣田
中坂田檜隈王ノ子孫也
諸木野弥三郎　日武等ノ子遠見別王ノ末多気ノ御
所ニテ弓術ニ名アリ　同縫殿助　同権左
門　田口将監　吉田伊豫　桃俣三田　曽尓
播摩　今ノ曽尓谷四山八志機八十余師年ヲ限ルトコロ今
ノ鎧ケ嶽是ナリ　野口六助　神末春房　関所ノ

国メ　葛野戈三郎　八咫烏ノ末高塚村ニ八咫烏ノ社アリ
塩野兵助　土矢原織部　炭釜加賀
下角久内　百地丹波守　同左エ門　室生
下司　須勢姫室生山ヲ五百引石ヲ以テ塞リ龍穴アリ此室
生氏ハ事八十ノ神ノ末之　片野宮内　今井
主水　入谷金兵衛　八龍掃部助　八種ノ
蝶トユウ　岡本七兵エ　井戸善太夫　山瀬六兵
エ　野瀬清助　楼山若狭守　蘇我石川麻呂
ノ末　石田備後守　白鳥帯刀　仲哀天皇

御宇白鳥ヲ召ス　大熊孫七郎　松井新助
明智光秀ニ属ス　宇賀志孫兵衛　神武天皇ノ宇
陀ニ御幸ト云　兄宇賀志ハ不順随弟宇ケシハ従御宇
陀ノ水鳥ノ姓ヲ賜フ　穂地和泉　和田平藏
関戸越後　中西伊右衛門　奥源三郎
篠野信濃　野尻左近　源三位頼政ノ末田口ニ住
ス　樋口六兵衛　川合七郎右衛門　頼政ノ末
西新左衛門　吉田豊後　吉野天皇中納言宗
房ノ子藤若丸ノ末　池田有宮　池上トアリ大宝三年

天国ノ太刀ヲ打ツ　下司清三郎　大森彦七　宇陀
ノ大炎ニテ渡辺ノ綱鬼ノ腕ヲ斬ル　堀五郎左衛門
栗原兵庫　雄略天皇皇子白髪部呉人ヲ使フ是之
呉栗ニ誤ル　平尾勘助　極楽寺藤五郎
山岡藤五郎　下竹村ニ住ス　戒場勘右衛門
黒木藤五郎　景行天皇ノ御宇水坂ノ神ヲ祭リ玉フ
安楽　黒本守道ノ　民部　開化天皇ノ皇子建豊
定別王ノ子　大神傳藏　素盞烏道十三代大御食持
命ノ子大友主大神ノ姓ヲ賜ハリ天ノ穂日ノ命ノ末之　小

神氏 宇麻志麻知ヨリ十代多治麻ノ三男小神ノ子
藤井市太夫

廣瀬郡

一 箸尾信濃守藤原為榮 同宮内太輔為政 同兵部太輔時家 服部ノ姓 天文中異本永正トアリ 同勘兵衛砯可 同金兵衛保榮 同服部大炊助時秀 天文年中 同善右衛門 同助右衛門 同宮内少輔忠榮 同又三郎盛秀 天文年中 箸尾宮内少輔高春 箸尾地主知行二万五千石○布施、万歳、南郷、寺田 唐院等麾下合二万五千石都合五万石慶長ノ末大坂方ニ属ル 同九郎兵衛 大坂方ニナル

中村家

一 中村三郎兵衛正榮 大和大納言秀長公ニ仕ヘ知行千石 同庄兵衛忠政 同五郎兵衛正春 同孫太郎正秀 同助太夫 宇智郡ニ住ス後片桐公ニ仕フ 同六兵衛正時 同新右衛門秀親 山辺

郡中村ニ住ス　同兵衛正時　同長助正忠
同四郎兵衛正成　同伊賀守源經實 帰
依ニヨツテ多田来迎寺境内買得シテ寄進ス則寄進帳
納メアリ 神主、石牌等此寺内ニアリ　同藤兵衛
忠茂　同藤九郎 横井ニ住ス　同藤三郎 以上
中村家
大輪田筑前守　同少進　廣瀬左京之照
同蓮藏坊　同重次郎　細井左近照
同五郎右衛門　南郷　松塚 應永年中反

筒井　百濟将監 王仁ノ末裔

十市郡

一 十市家 安寧天皇ノ子磯城津彦根ノ孫十市宿祢中原
十市姓ヲ賜フ 異本ニ清原氏又諸将軍傳ニハ藤原トアリ
十市彈右衛門重則 初メ大内義弘ニ属シ應永年中
之菩提所同郡味間村普巖寺ニアリ
同中原遠勝　同常陸助遠長　同兵部
太輔遠忠 釜口山城主 歌書ニ達ス 知行六万石 天正十

三年酉二月七日卒ス　同備後守　遠忠ノ二男　同春
行　遠忠ノ三男　釜口栄暁房　中原善右
衛門　遠忠子息郡山ニ住ス　十市春藤　同銀兵
衛　白土肥前　同市助　文禄四年山辺郡横地
段ニテ下田ヲ上田ト成ス又ハ打廣メ人民難渋　中原信
同範定　同康久　同康定　白土伯入
同随安　妻ハ遠忠ノ女　中浄玄　北春政
天文年中　麾下　西尾、辰巳、吉田土之
同家老　田中亦二郎家直、　上田九郎右衛門ハ備前

村上田氏ノ祖本国ハ信濃、　菊岡次良兵衛　上田弥七
諸将軍傳ニ麾下　吉備、赤塩、出雲、黒崎　金
屋氏トアリ　十市氏三騎大五輪寺ニテ付髪大垣村ニ
忍居　十市村ニテ病死ス　十市家老後新口村小兵衛
今井笠屋五兵衛　珠数屋権兵衛
保津志摩　竹田周防守　竹田王ノ末日本紀ノ作者
矢部藤内　吉備市助　新賀主殿助
薬王寺備中　飯高紫祐　同祐春　秦楽寺
伊豫守　秦楽寺ハ川勝ノ旧地　葛本惣内　味間

弥九郎 天文九年　同政吉 同年　上品寺
勝齋　多賀左近烝 寛永十二年　安部田
外記　谷市助　田原庄兵蔵 田原庄旧
名坂田外ニ坂手村アリ丑寅ニ小坂アリ辰巳ニ八条村領字
坂殿ト云フ　木原主殿 延喜式作日原　佐味兵
庫　大綱七郎右エ門　新木淡路守
宇麻志間知命ノ後胤　常盤主膳 天児屋根命
十八代黒田大連ノ末　大伴供殿　新川喜内
宇麻志間知命ノ末　忌部社神主　政忠 忌
部ハ天太玉命ノ後　忌部村ニ神社アリ天太玉命拵ノ
手ケ姫奇槃窓豊槃窓以上四柱ヲ祭ル　膳夫正
齋 孝元天皇々子少彦命ノ後膳夫村ニ住ニ飯殿ト唱フ
石アリ右飯殿ノ事万葉集解ニ見エ
桜井掃部亮

高市郡

一 越智八郎 延慶二年叛鎌倉楠正成、被討伊豫
国河野同姓高倉下命十七世苐鹿ノ子孫ト云フ芽庸始テ

尾治田村ノ姓ヲ賜フ越智ノ家譜所載左ノ通リ
仲―頼親―頼房―頼俊―頼風　摂津満
陽明院判官代　頼安　号法華太郎　信實　保元乱
属関白忠実公　―玄實　興福寺法橋保元ノ乱属
上皇　中略
十二代右馬頭親家　元暦元年二月属蒲冠者範
頼屡々有戦功明年平家滅亡宇野園旅賞ヲ極上ケ越智
郡成柿ヽ柏原ニ賜フ其越智ニ住スル者神武廟勅ニヨリテ以
柏ノ葉ヲ家ノ紋ト為ス建久八年壬　八月十七日卒ス南岡

ニ葬ル因テ祠堂ヲ建テ有南明神ト号ス越智村ニ在リ祠
九頭大明神トモ云フ延喜式神名帳所載盤丘明神社ニシテ
手力雄命ナリ
十三代大島冠者親房　文治二年十二月義経雰越
ノ地蔵寺ニ蔵ヒ家人須十郎ヲ以テ多武峯ノ十字坊ニ送ル此
時義経ヨリ贈ル所ノ直衣ニ角華菱八枚ノ紋アリ　又此紋ニ
改ム
十四代家慶　北条泰時ニ属ス承久ノ役宇治ニ於テ鉄月鎚傍
同宿周海去海ヲ虜ニス熊野万部禅師ノ弟子侯達ヲ討取

依テ稲生大和歌室堤三屋越ノ地ヲ賜フ

十五代家胤―家邦―家永―家通―通邦―八郎邦永 幼名ハ九頭王丸 邦永ハ北条高時ノ悪政ヲ憤リ根成柿ノ代官所ヲ破却シ櫓谷小六ヲ殺シ公税ヲ押領シ越智山ヲ堅メ雰越山ヲ塞ヲ篭城セリ

二十代伊豫守邦澄 正和五年父八郎邦永討死ノ時高市郡冷水寺宝光院ニ忍テ成長ス正慶元年旧族ヲ卒テ高取山ノ城ヲ築キ戸野法眼良忠ヲ属シ大塔宮ノ命ヲ受

数度戦功アルニ依ツテ本領ヲ安堵ス

二十一代伊賀守家澄 正平中楠正儀ニ属シ戦功アリ此間越智系譜略ス古系譜ハ越智村嘉平治方ニ傳持ス天正五年根成柿天神社棟札越智玄蕃頭家永トアリ

三十四代玄蕃頭頼秀 天正五年十月信長公洛東ニ鷹狩シ玉フ其鷹フレテ宇智郡ニ飛来ル是ヲ十三箇ノ龍智山ニテ囚テ之ヲ献ス依テ松永弾正ノ旧領岡卿逢阪穴栗ノ地ヲ玉フ後大納言豊臣秀長公ニ属シ家司小川左

馬助越智ヲ掠累スルニ付是ヲ秀長ニ訴ヘ桑山一庵小川ヲ見届ニテ秀長ニ讒言ス處ニ於テ同月羽田長門守同廿六日落城家来庄野荘太郎左ヱ門 八木清三郎 堤三助 同又兵ヱ 越智新十郎 同新五郎 吉岡彦助 下兵助 五常院快養等以下三十余人討死ス

三十五代又太郎家政 頼秀二男慶長五年九月六日吉野山ヲ出テ、美濃国関ヶ原ニ趣キ赤坂ノ御陣ニ駈加ハリ忠勤アルニ依リ五千石ノ采地ヲ賜ワ高取ニ帰リ後修理進ト號ス 光政ト改ム

三十六代玄蕃允家常 家政ノ養子慶長年中吉野山ノ大衆ノ讒言ニヨリ家康公ノ御勘気ヲ蒙リ浪人ス 越智家十勇士 下治郎太輝宣 吉岡新九郎政資、五所植助保氏 室三助一房 石上十郎兵ヱ泰朝 吉川彦助高金、 鳥居右京亮頼房 池田嘉市清通 生駒五郎左ヱ門隆光 稲生新八郎晴勝 八郡清太郎正助 葦井傳三友然

同修理大進宗重 天正十七年高取ニテ死ス 同新五郎盛秀

一族

下藤兵衛　同弥兵衛　若松右兵衛　岸田
四郎左衛門尉　弓場志摩守　陣屋後高
野山ニテ木食トナル
中島主水常門村浄土寺ニ遁ル
越智伊賀守　暦應年中　同民部少輔
同春賀　天文年中　同小重郎利高　信長
公ニ勤仕シ本能寺ニテ討死
高取玄蕃亮利之　天正十六年十月三日卒　同上野助　同
又重郎利政　同太郎利四　同三郎

利秋
家老　奥田嘉右衛門　呉本嘉右衛門　湯志麻
出垣内村ニ住ス
慈明寺土佐守　知行三千石　同左門　呉本左衛門
同左衛門順四　後一念ト称ス　同四郎定次　筒井
順慶養子　妙法寺源内　土橋久次　巨勢
兵庫　武内宿祢小柄ノ末　次男巨勢ノ〃　同孫
助正言　筒井定次ニ奉仕　大久保左内　越
智堂春元　曽我内匠　武内宿祢三男石川麻

呂ノ末　蘇我、、　坊城宗兵ヱ　内出垣内
甚三郎 天正年中　今井兵部房 南御堂　松
山新八
八木宗内 孝徳天皇末裔永禄中筒井家ニ相献
ス　松山甚兵ヱ　根成柿春房　箸尾
秀元　賀留藤兵ヱ 宇間志麻治廿三代長
目ノ末　栗原源之烝　高殿源八　子島
掃部　細川谷源兵ヱ　真弓新藏 高
倉下二十代末　越　與藏　藥水石見

御園伊織　岡安藝守 天武天皇々子高市
ノ末高階ノ姓　八銅但馬 允恭天皇々子八銅日庄
ノ末　鳥屋兵庫　田中亦重郎 孝元天皇
々子建埴安彦ノ末也　小槻兵部　鳥屋下
庄源兵衛 少名彦命ノ末天文年中　阿部山
和泉 孝元天皇々子大彦命ノ子建沼別ノ男倉
梯麿ノ末　坂田八郎 継体天皇皇子田中命ノ末之
久米某 天久米命ノ末或ハ道臣命ノ後トモ云フ

式上郡

一三輪高宮主水正 大神氏大臣貴命十二代大友主ノ裔高宮元神宮ト云フ神ノ字訓ミワ音カウ変シ以テ高ト書シ又高ノ訓ニ憚ル高神音ニ通ス故ニ如此誤之上代神ノ字ミワト訓ハ当国ノ数十代ノ皇居ナリヲ孫ニ三玉ヲ尊崇シ玉フ故之 巨勢文兵衛 同刑部 同虎之助

三輪大明神祭主 武内宿祢ノ末巨勢大納言金岡ノ男朝忠ノ后裔

同近江守脩義 巨勢氏ノ祖 伜越後守吉範

同土屋肥後守 外山南殿 墨跡外山村

戒重甲斐守 戒重氏ハ金丸戒重元池田村ト云村ニ池田座天照御霊神社アリ今春日ト称ス

右甲斐守墨跡ハ元和年中織田氏伏見ヨリ移ル又戒重旧名堅田ト云土屋家代々石牌 栗殿極楽寺ニ在リ

楊本範堯 天文年中　同　彈正忠　同　範宣
永禄年中
楊本氏墨跡ハ元和年中織田氏伏見ヨリ移ル
釜口新助 日本武尊末寳亀見別皇子ハ釜口ノ祖
日本武尊 景行天皇皇子 同郡穴師神社大兵主神
ト云ハ八幡宮ノ祖父之山陵高市郡鳥屋村ニアリ誤
テ宣化天皇ノ陵ト云フ
新堂彦右衛門　同五郎左衛門　長谷川内記
同六左衛門 在原業平三男高階師尚ノ末　出雲

藤若　勝本伊豆　慈恩寺藤五郎
駒伊勢　安田右門　忍坂土佐 景行天
皇ノ皇子永作大雄百抒坂ノ末或ハ忍坂大中姫ノ後
トモ云フ
草川喜内　箸中勘作　大夥越後 檜
原社神主松永ニ附属シテ天正年中亡フ檜原ハ三
輪ノ山内ニテ元笠縫村ノ地天照大神初テ鎮坐磯
城神籬之
岩田左近 天暦ノ末笠縫氏天正年中　同西左

近

同右衛門 家紋四ツ目結 出石田芝村ト改ム一書ニ大神氏又饒速日命ノ末氏井戸御手洗同姓芝村西氏宅跡今在西氏ヲ後世中川ト改ム

小夫小左衛門 同筑後入道寛空 同

休意

與力 小田 窪 和田 北久保

三谷市太郎 小笠兵庫 若林彦吉備津ノ末 萱森棲市太夫 初利土佐 白城峻武藏 今白木ト書新羅皇子天日矛帰化

但馬ノ出石ニ至ル其子白木元新羅城ト云秋山春山但馬毛里

式下郡

一 法貴寺丹波守 馬武者三拾三騎雑兵百三十人此兵数在郡一郡ノ事ニヤ丹後守一家ノ事ニヤ相分リ不申旧書ノ侭ニ記ス

同丹後守 城跡法貴寺村丹波山ニアリ 下永彦六 同六兵衛 同長兵衛 同三郎 小

柳源助　吐田孫太郎　同勝福寺淳誓
天文年中　菅田備前守　物部尾輿ノ末松永ニ
属ス天正五年山中ニ隠レ死ス又横佩右大臣豊成ノ末
或ハ日本守ノ後裔トモ云フ
結崎半藏　富戸權助　鍵金助　但
馬新助　天ノ村雲ヨリ六世建諸隅子但馬守ノ後
其先但馬守常世卿ノ代ニ至リ橘ノ実ヲ覓テ帰
朝ス子孫此但馬村ニ止ル但馬毛利ノ廟アリ
北尾帯刀　異本主膳正トアリ松永ニ属ス松永滅亡

ノ節開城浪人トナル是多ノ聞ノ城代タリ
藏堂長兵卫　石見太兵卫　安井庄左卫門
布留久留ノ末其ノ子大木連ノ孫　西田井則秀
今西代ト書大永年中　遠田源助　吉田善
助　武藏師助　伴堂大炊助　長谷川氏
同大學　天文三年　屏風出羽　中村清兵
卫　同長右卫門盛秀　岡長兵卫正良
同長九郎秀正　同左京進正親　坂手
半藏　伊與堂孫四郎　溜川源藏　今為川

ト云フ　海智播广井上重藏　源頼信三男頼季
ノ子井上　小坂右京進貞頼　頼信六代義遠實
子井上左郎遠光ノ末　后胤義遠　小坂七郎之
八尾帯刀　杜屋右卫門　宮古和泉
黒田主計　黒田ハ天兒屋根命十八代黒田太連ノ
一　末又黒田村ニ人皇七代孝靈天皇ノ廟アリ天皇殯葬
ノ陵法樂寺守護朱印アリ
豊永好入秀朝　元和年中　保田喜兵卫　異本嘉
兵卫　同甚兵卫

小柳主殿　八田勘六　安田八田王ハ欽明帝ノ皇子
八田肥前　八田次郎源頼貞判官代義康次矢田判
官代義清ノ男　廣沢判官代義實ノ男　仁木左郎
實國ノ男又太郎義俊ノ男八田次郎頼直

葛上郡

旧云葛城國後分葛城郡上下トス爲上
三十八騎　雑兵三百八十人

一　米田但馬守　米田郷長柄山城主　同ク亀松丸
同八兵衞　同喜光寺利心　同主殿佐　同

助右エ門　同壹岐守宗堅　同周防守
名柄主馬薫牧　順慶ニ属ス
佐味兵庫教豊　玉手氏　越智與力知行千四百七十
石越智家譜ニアリ玉手宗綱玉翁宗光ト稱ス
周防守俊久　同與助　同右エ門光文　楢原
麾下倶尸羅　監物、佐味兵庫、長柄主馬、五所刑部、
都合弐万石楢原家墓於那山九品寺ノ戌亥ノ隅ニアリ
楢原新重郎　同小太郎　大納言秀長ニ仕後
大阪籠城　同御所新重郎　同刑部

山崎清治郎　十礎勘左エ門　中村
文助　戸梟安房守　同高橋松千代
物部建彦ノ末　松本勘六　本馬数馬　或ハ
高橋松千代ノ末　楪原数馬　應神天皇々子大山守ノ末
藤井安吉　軽村ニ住ス後河內藤井寺ニ移居ス　巨
勢内匠　異本小勢　同少進　同孫助　巨勢
武智丸ノ孫巨勢ノ戸呂ノ后又孝元帝皇子武埴彦ノ孫
巨勢男人ノ末　福西豊後守　柏原村ノ城主娘一人
アリ弓場志摩守ニ嫁ス

忍海郡

馬上十三騎　雜兵百大人

一忍海治兵衛　開化帝皇子建豊足別王ノ后　同民部　同治部　西辻源左衛門

花内式部　芥子九右衛門　柳原勝助　林戸采女　山田治太夫　同喜右衛門　山口数馬　平岡将監

葛下郡

一布施家　應神天皇ノ皇子大山守意富榛ハ布施ノ祖ナリ又平城天皇ノ後大江ノ定基ノ末トニフ

布施出雲守　寺口村城主旧記北条家ノ臣トアリ

同下野守英基　同中務少輔行成　同孫七行四　後安藝守トニフ享保年中　同左衛門治郎　同左京亮行盛　同但馬守運秀　同主水正　同氏来迎院　同新助

重秀 天正年中 同平右衛門 同治郎右衛門 同藤九郎 同太郎左衛門春行 大納言秀長ニ仕ヘ慶長ノ末大坂入城 同治郎八慶春 筒井順慶卒去ノ節追腹ス 同小太郎春次 筒井定次ニ仕ヘ慶長ノ末大阪入城

一族 長尾彌六 太田傳七 道徳角右衛門

家老 今中紋之丞行定 天文年中 池田壹岐

池田弥五郎 曽祢右近 異本左近トアリ

万財家 市場村ノ東二町四方ノ城アリ又二上山ニモアリ

一万財喜太郎 同辨成 大永年中 同右京亮則定 同彦太郎 同備前守友興 慶長ノ末大阪入城 同治良九郎 慶長ノ頃順慶ノ小姓 同太郎友満 筒井定次ニ仕フ慶長ノ末大阪入城

家老 南興 田中 竹村八郎右ヱ門 竹村丹波守

同大郎左ヱ門 慶長年中

図書左兵衛 同七郎右ヱ門 同清雲則

遠　岡崎周防守橋国高 杉原ニ属テ天正五年
没落　兵野因幡守 狐井ノ城主　同周防守
貞齊
家老　野田、橋本、飯田、松本、赤土、山本
上田、入江
逢坂内記　池田主殿　岡主水
大方権右エ門　鐘田藤兵衛 天種子命十六
代々鐘田夫ノ末ト部氏ト称ス　下田孫兵エ
同又治郎友貞 片岡孫太郎ニ属ス　鐘田道

範　染井忠八郎澄長 片岡ニ属ス　當麻
権五郎 開化天皇ノ王子彦坐王ハ當麻坂上両氏ノ祖
之或ハ用明帝皇子麿子ノ末トモ云フ
磯野禅師　同静 源伊豫守義経公ノ妾トナル
同主馬　同能登 慶長元和ノ間　清須美
右兵衛尉盛時 大永年中筒井家ニ仕フ
細井兵助武春 羽柴伊賀守定次ニ仕フ定次没後大
野ニ味方シ大坂ニ籠城ス　竹内右内　竹内下総守
秀勝 異本竹田下総守トアリ　同平三郎冬雪

元亀二年七月辰市ノ接戦筒井ニテ討死ス　吉村小兵卫
秀之　片岡家ニハ、里上里中節村ニ其ノ子孫アリ
同新治郎　片岡系譜ニ同家老トアリ　吉岡小助之敬
筒井定次滅亡ノ後大阪入城　片岡甚右卫門　同新
助藤原春利　同弥五郎　同左門國春
片岡谷下牧ノ城主筒井順慶ニ属シ永禄十二年松永ヨリ攻落
ス　同弥太郎春行　羽柴定次ニ属ス後大坂入城
上里村吉村氏所有　片岡家系譜左ノ通
片岡家系譜

一　片岡新助中臣俊盛　又太夫太郎ト云フ大和地士
四家ノ内之春日祭礼千石千貫文ニテ営ミシコト春日旧記
ニ有之　片岡家頼禰宜ハ梅木民部ト云フ今ノ高井庄兵卫
ト云フ禰宜先祖之　片岡家知行一万千五百石九斗八升　七条村数
二十八ケ村此外河内國山田春日飛鳥大黒玉手卯取但
是ハ本領ニハ無之亦此跡廣瀬郡河合村不残入河合
明神ノ古知三千石有之右社職樋口大夫太郎ト云ハ片
岡家ノ侍之是ヲ以テ河合侍ト云フ新助妻ハ順慶妹ニテ
伊賀守定次ノ実伯母之定次ハ順慶妹聟布施左京二男

松永弾正一旦筒井ニ攻迫ケテ後又片岡ヲ攻ル右軍中ニ
モ春日祭礼無怠相勤ケルカ弘治元年十一月廿七日疱瘡
ニテ卒ス死後右新助後家卒去致スコト隠シ一子弥太郎ヲ守
立十七才ニ相成新助妻死去ト申ス然ルニ新助卒スルコト近隣
ニ相知レ尾城主ト導スルヲ松永久秀聞テ急ニ昼夜ヲ
不分攻討ニ付防棄弥太郎後空九才ノ時夜ニ紛レ城ヲ
出宇陀ノ明山ニ行順慶ヲ頼ミ養育シ生長ノ後譜代ノ
侍久達於寺内両人ヲ松永ニ奉公サセ置キ弥太郎二才ノ
時信忠ノ信貴山攻ニ従フテ大阪一向宗ヘ加勢シ赦ミ使久達

寺内ヲ遣ハシ謀計ヲ以テ自分ノ人数ヲ信貴城中ヘ引入レ
順慶ヘ内通シ功ヲ立ルニ付筒井家ヨリ賞美ニ預リ其
後太閤小田原攻メ朝鮮征伐等ニモ數功アリ秀吉公
ヨリ感状ヲ賜ルコト數通アリ弥太郎妻ハ秀頼公ノ御守
リ新宰殿ノ兄弟ニテ万財藤次ノ娘也此縁ニヨリ大阪篭
城セシカ落城ノ後板倉伊賀守殿ヘ出切腹ス時ニ入道シテ
定阿ト號ス異本宗波トアリ

片岡主膳俊昌

俊盛ノ男幼名清九郎後俊勝ト改ム父ト同
ジク大阪ニ被召出落城ノ後奥州ニ潜居ス大阪浪人御赦免ノ節

古郷ヘ帰ル剃髪シテ蓮齋ト云フ医者トナル伊戸新右卫門加番ノ
節駿府ヘ下リ彼ノ地ニテ万治二年亥八月二日死ス
井戸左馬頭 妻ハ片岡俊昌ノ娘 花岡庄三郎 同
男樋口五助 母ハ片岡俊昌ノ娘 片岡主馬 後左卫門ト
段山 江府ニ下ル 海老名兵衛友清 異本海老谷トアリ
同石見守 松永ニ與ス 異本ニハ吉村ヲ取立テ片岡ニ住ストアリ
同助九郎友永 異本友久 森兵助正友 河内平城
主 同藤五郎 河内狭山城主 下野半蔵
夏村 今里與八郎 八咫烏ノ末又ハ素戔嗚尊ノ末トモイフ

葛野兵卫
一 高田鬼松丸 或ハ鬼松女享保年中 同三河守
天文年中高田ノ町ノ丑寅一町半斗リニ城趾アリ但東城
三河守ト云フ春日社石燈篭ニ書附ケ有之
高田家ノ家老 堀江玄蕃 同甚太郎 中井戸
次郎左卫門 同三河守昊定
高田城趾ハ先八幡ノ社ニ残ル
一 藪内新兵卫 楠同性和田正遠ノ末ト云フ高田町ニアリ異
本和田新左卫門トアリ 越智家系譜ニハ スコリ親王ノ末土庫氏

曲川氏同性ト有リ一書ニ海老名兵エ　同石見守　同九郎森
兵助　同藤五郎以上五人松永ニ従フ片岡、吉岡等討取片
岡ノ城ニ籠ル　然ル處天正五年丑十月織田信長公ヨリ細川
藤高　筒井順慶ニ命シテ攻亡ス　片岡籠城去ル巳年ヨリ
九ケ年目之

一　葛根右近　大嵩身ノ子羽山戸其子冬比葛根金ノ末之
三倉和田新六　榑家同性

宇智郡

一　宇野七郎親治　頼房　頼俊　宇野ニ住ス　多田満仲ニ
男頼親ノ末　保元ノ合戦平家ニ被囚後赦サル
同　齊宮次官太郎有治　親治長男　宇治
次郎盛治　異本宇野成治トアリ　親治三男義治四代ノ
末大盛ト云フ　同　宇川頼行　同義治ノ末　同　入
道道治　同　廣瀬信親　有治三男　同　作
左エ門　同　七郎親基　同　遠江守
同　七郎左エ門　同　榮山寺　同　中助
同　大岡　同　飯田　同　丘　同　三筒　同

奥田　同横野　同二見　同久留野　大
野日向　山辺半助　御山又五郎　瀧藪馬
中村権兵衛　小泉主馬　野原監物　西
河内行雲　峯　川戸　畠山兵庫　畠山義
就ノ孫義豊ノ裔　丘義蔵　川村清兵衛
堀亦右衛門　阿野頼之二十代頼重ノ末後村上帝ノ皇
居トナル今ニ阿野ノ御所トヨフ　今井佐賀弥平治
後村上帝ノ行宮　霊安寺右京　阿陀長門　神武
帝吉野ニ入リ玉フ竿打急取神アリ執見持ノ神ノ末

南阿陀内蔵助　同八郎

吉野郡

一　秋津治部法印淳啓　下市山城主秋津ハ神武
天皇ノ頃ヨリ名則日本ノ総名ナリ　同兵右衛門
上市文兵衛　同兵衛　鬼山住　今木藤
七　物部尾輿三男守屋大連ノ系今木ノ末　飯貝
左吉　岩坪主膳　大石図書　檜垣
本丹波　土田薩摩守　千股勘助　異本勘八

西口左京　柳徹齋　大野孫七郎
小谷肥後　小河小太郎　同次郎時元 小栗栖住
入野多門 宇野元次ノ孫　國栖助五郎 神武天皇此
山中ニ入リ玉フ時出シ神ノ末之　井戸兵衛 神武天皇ノ
時井ノ中ヨリ出シ井光神ノ末此井神ノ出現シ玉フ井戸ハ碇
村ニアリテ今ニ井光ノ井ト云フ其ノ井戸ノ廻リニサラ井塩
出ノ井ナドトテ四五箇アリ　龍宗寺師助　柏木主税
西川兵庫 西ノ宮ニ住ス西国ニテ討死ス　同但馬
和田陸奥守　北山十八郎　木田吉野重秀

源満政七代重賢ノ子孫　横川覺範 異本横川前司
覺範トアリ　相撲小重　川碩法眼　治部
法眼　役井寺飯尾禅師 異本前司　常陸
前司主殿佐　小路藤兵衛　吉水大納言
北角春行　阿知加内匠頭　柏原喜内
平坂喜内　平左吉　平左近進　前木
渥内　大口新六　谷山右馬　瀧村新藏
森本左吉　大峯監物　赤松利助　檜川
内匠　小山田内膳　津越左助　阿野

堀源兵衛 加名生村トモ云フ 後醍醐天皇 後村上
天皇二代ノ皇居ナリ宗光院并ニ春宮此處ニ七年観
應二年光嚴院光明院囚レ居玉フ所之其外摂家門跡
清華公家諸士ノ宅趾アリ 後醍醐天皇ノ御太刀太
塔宮ノ御籏其外南朝ノ遺物アリ

天川十二ヶ郷

一 鈴屋左近清成 野川釆女 三明主膳
平川民部 坂本小刀祢 異本松本 殿野兵衛
中津川軍夾 大股庄治郎左エ門 開化天皇ノ末之

小股土佐 大股ノ弟之 芋瀬庄司赤太郎 野長
瀬平助 湯川庄司 宇護原大學 三浦
小松三郎兵エ 小松中将維盛ノ末之三位維盛窮ニ八島ヲ
出テ熊野ノ沖ヘ入水ト唱エ実ハ此地ヘ潜居ス 宇井兵治
郎 熊野本宮ノ産 鈴木トモ云フ 阿瀬川庄司 中原
式部 上湯川小進 湯原出雲 小原
庄司次郎 多羅原兵七、 真砂瀬庄司八郎
平瀬刑部 野尻伊織 池峯小左衛門
上葛川屋織部 葛川土佐 殿野中務

遠野與市　異本遠入トアリ　玉置甚三郎

四木瀬権太夫　小山手主殿　七色頼母

西野丹波　白川奥太夫　吉瀬大膳

竹筒兵太夫　異本並エトアリ

あとがき

読者の皆様には最後までお読みいただき、ありがとうございました。お読みいただいただけでうれしく思います。

それぞれの人物像にしても大和の風情にしても、もう少し突っ込んで書けと事前にお読みいただいた方々から厳しいご指摘を沢山いただき大それたこの出版を何度か思い止まろうと考えました。しかし、また改めて書きなおすには今のところ最早余力が残っておらず時間もありません。思考は落ちる一方で他方なれないワープロに集中したため目が痛く診察では眼底出血があり、こわいからとドクターストップがありました。

愚妻が云ってくれました。「あなたはプロではないし人様のご批判はご批判として折角自分でここまでしたのだから、お金はかかるし、人様に笑われるかも知れないが子供達に残しておいてやればこんなものが残っていたと思うでしょう。このまま放っておけばただの紙屑になってしまうので勿体無いから……。」良人が良人なら妻も妻、その妻に強く奨められて敢えて愚を冒し無茶な発車になりました。

末尾の和州十五郡衆徒神人郷士記は奈良県立図書館蔵のコピーです。無数の苗字が出てきますがどうぞ皆様のご祖先様や由縁のお名前をさがして下さい。関係がなくとも同名ならなんとなく、なつか

しく思われるのではないでしょうか。記載されている人物の中には勿論あなたがご子孫である場合もありましょう。ルーツ探しをなさってはいかがですか。おすすめしたいと思います。偶然の機会に古書に載るご子孫に出会ったり熱心にやれば楽しい事に出会います。新発見の資料や私共の知らないそのお家の特異な物語などがあればこの本のご批判とともに是非出版社の方へでもお送り下さればうれしく思います。

大和の名家、筒井家の四代で打切りましたが、また万一機会があればもっと時間をかけてこの本にも手を加え改めて続編が出来ればと夢は広がります。

この本の出版に先立ち恩師加来彰俊先生ご夫妻様をはじめ勤務先のカナヨ㈱橋本社長、社員の河上様の温かいご理解とご指導を賜り、奈良伝香寺ご住職の西山先生及び筒井同族会役員の佐々木様からはこれでもよろしいがなとおっしゃいながら、また暇が出来たら手を加え……とご多忙のお所を何度も出版を促して下さりご迷惑をお掛けいたしました。またその他多くの先輩諸兄姉を初め書き出しの段階から東海銀行の松本美恒氏や更に義弟の佐々木徽房画伯、泰宏兄弟には最後の表紙の画やザデインの装丁までを依頼し、ややもすれば挫けそうな私を勇気づけ励ましていただきました。

最後に晃洋書房の上田芳樹社長や三岡千賀子さんには格別懇切なお手伝いを給わり随分ご配慮を頂いた事に感謝し併せて関係者すべての方々に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

昭和六十三年二月二十九日

杜　青甦

《著者略歴》

杜　青甦

昭和15年東京生まれ．京都府八幡市在住
立命館大学卒
㈱石田大成社
旧㈱デルタ自動車教習所
名和産業㈱を経て
現在，カナヨ㈱勤務

新大和軍記――青垣の攻防――

1988年4月10日　初版第1刷発行

＊定価はカバーに表示してあります

著者の了解により検印省略

著　者　杜　青甦
発行者　上田芳樹
印刷者　江戸知一郎

発売元　株式会社　晃洋書房
〒615　京都市右京区西院北矢掛町7番地
電話　075（312）0788番（代）
振替口座／京都4-32280番

©Seikou Mori, 1988

印刷・共同印刷工業（株）
製本・酒本製本所

ISBN4-7710-0398-X